
歌え！シエラ・クロウ

遊佐ひろみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歌え！シエラ・クロウ

【Nコード】

N0293H

【作者名】

遊佐ひろみ

【あらすじ】

シエラ・クロウは、世界でも名高い、メイトリアル教会の聖歌隊へ入りに、長い旅をしてきた。そこで天才歌手、ソフィと運命の出会を果たす。彼女は天使そのもののような歌声の持ち主であるとともに、すさまじい過去の持ち主で、暗く、シエラにも、心を閉ざす。さらにシエラは、メイトリアル教会の聖歌隊の入隊をも断られ、窮地に追い込まれる、、、

汽車を降りる少女

汽車は乗客でぎゅうぎゅうづめだった。

お尻や荷物を押しつけて、やっと窓から顔を出した少女があった。「まあ！ 暗い、暗いと思ったら、ずっと森の中を走っていたんだわ！」

汽車は、広大なメーブルの森をぬけていた。

少女は風をうけて、気持ちよさそうに目をつむった。

たくさんの木の枝や夏草が窓のそとを流れた。

カーブになって、汽車の先頭が森の向こうに見えた。

ブレーキの音がした。

乗客は一ゆすりされた。

汽車は、ラスタルという小さな駅に入った。

ドアがひらいて、乗客たちがどっとプラットホームに流れでた。

押し合いへし合いする人の流れに、まるで記念すべき第1歩をふみ出すような、もったいぶったブーツが一つ、まざっていた。

ブーツをはいていたのは、まあ何とも汚れきった、さきほどの少女だった。

「ああ、ついに来てしまったわ！ もう、逃げることも、あきらめることも、できないんだわ！ だって、わたしはもうラスタルまで来てしまったんだもの！」

少女は泥だらけの顔をあげた。

目は青く、歯が白いほか、あとは泥だらけだった。

黄ばんだポストンバックを抱えなおして、改札にむかった。

改札では、この駅の名物おじさん、トーマス・マクレーンが大きく腕をくんで、さいごの乗客を待っていた。

「おいおいお前さん、そう、そこのお前さんだ。まあなんてひでえ格好だ、こりゃどっからどう見ても乞食だ。ちゃんと切符つてのをもって降りて来たんだらうな？」

少女はツンと鼻さきを上げて、黒ずんだ髪をはじいた。

「あら失礼しちゃうわ。おじさんどこに目をつけてらっしゃるの？
これでもわたしはレディーよ？ それはレディーにかける言葉で
はないわ」

「いつちよまえな口をきくじゃねえか。いいから、切符を見せなっ
たら。最近はおまつちよめでも、キセルをやりやがる」

「ええ、切符なら、ここにこうしてちゃんとあるわ。よく見てちよ
うだい」

切符をうけとったトーマスは、先つちよだけつままで、胸ポケッ
トのルーペを見た。

「まったく泥だらけにしゃがって……………」

ん、ん、これは確かに駅で買ったものだな？ 盗んだものじゃな
いだろうな？」

「あなたはつくづく失礼な人のようね。」

いいわ。疑うならぞんぶんにお疑いなさい。わたしはささいなこ
とで一いち腹を立てないの、だって、その方が腹を立てる人よりも
素敵じゃない？」

「ふん、まあいいだろう。むやみに疑って、お嬢さん、悪かったな。
ところで見かけない顔だ。ここへは初めてかね？ なんとたってわ
しは、ここラスタルの駅で働いて三年。今まで何万という顔をお
がんできたんだ。見ない顔は一ぱつでわかるんだよ。」

お嬢さん、こんなへんぴな駅に、なんのご用でいらした？」

「ああそうだわ！ ねえおじさん、トーマスおじさん、どうか教え
てくださいな！」

少女は急に大人ぶった態度をくずして、トーマスにすがった。

「『メイトリアル教会』っておじさんきつと聞いたことがあるで
しょう？ そこへはどうやって行ったらいいのかしら？」

ひげがピンとあがった。

「メイトリアル教会だってえ？ お嬢さん、あんなへんぴなとこ
ろへいつたい、なんの用があるんだね？」

「あら見てわからないかしら？ わたしこれからメイトリアル教会の、それは世界でも名高い聖歌隊に入れてもらいに行くところよ？」

少女は胸を大きくはった。それを見てトーマスは、駅がかたむくほど笑いこぼした。

「まあ！ なにがおかしいのかしら！ こっちは真剣にお願いしているというのに！」

「お嬢さん、まあーぺん、ヒヒヒヒ、じぶんの身なりを鏡にうつすがいい。お嬢さんがあの格式高いメイトリアル教会に入ったら、教会というやつはびっくりして、お前さんを吐きだすぜきつと」

少女はじぶんの着ている服を見おろした。

砂や、泥にまみれた格好を見て、やっとじぶんが笑われている意味に気がついた。

「まあ、こんなに汚れてしまつて、あまり気にしていなかったわ。だって、それは過酷な旅だったんですもの。木の上で寝たり、川を泳いで渡ったり、ひどい時にはどしゃ降りの中を一日じゅう歩いたわ。ああこれを着ていては、メイトリアル教会に入れないのかしら？」

「そうさな。貴族のお屋敷じゃないんだ、入って入れない事もないだろうが、聖歌隊に入隊できるよう、頼みこむのdarou? だったらずまず身なりをキチンとしな。」

うんそうだ、近くの宿屋で、ざぶんとひとつ風呂、浴びて来た方が賢明かもな。

あとそのボロ服だ。いや待てよ、かえってその姿の方が、シスターの哀れみをかえるかもしれないなあ。

ところでお嬢さん、聖歌隊に入りたいうくらいだから、歌の方は、そりゃあ絶品なんdarou?」

「絶品？」

絶品って、

あらそんな。

わたしの歌は、聞いた人にいわせると、どうも、聞いたものではないらしいわ。つまり、ひどく下手クソなんだそうよ」

これを聞いたトーマスは、ガハガハと柱にしがみついて笑った。

「お嬢さん、わたしはお嬢さんのことがとことん気に入ったよ！ なんだってえ？ 歌がひどく下手クソだってえ？ それなのにあの、天使たちが歌うといわれたメイトリアル教会の聖歌隊に入ろうだってえ？ この世もまんざら捨てたもんじゃあない、なんたってこんなユニークなお嬢さんが、ひよつと汽車から降りて来るんだからねえ！」

少女はだんだん、じぶんがただの笑いものにされていることに気がついた。

顔が赤くなった。

「わたしにはうすうすとしか、わからないけれども、ひどいわ！ どうしてそんなにお笑いになるのかしら！ わたしはただ笑われにはるばるラスタルまで来たのではないのよ！」

「これは失礼、

うむ失礼。どうか気を悪くしないでくれ。ここで毎にち汽車を待っている、なかなか愉快なことにめぐり会えなくってね。つまり、つつい楽しくなって、笑っちゃったのさ。

そうだ、名前はなんというんだ？ わしはこの駅長、トーマス・マクレーンだ」

トーマスにあくしゅを求められて、少女はころんと元気になった。

「わたしはシエラ、

シエラ・クロウよ！

ああ、あなたはわたしがここラスタルに来て初めてお知り合いになれた人よ？ わたしはこう見えてもおしとやかで育ちが良いの。

あら、じぶんからそんなこといってははしたなかったわね。

でも、本当にそうよ。どうして大人の女性って、本当のことをいってはならないのかしらね。わたしはいいたくって、いいたくって、

ウズウズしてくるわ！ だって……………」

そこまで話したところで、シエラの体から、グーうとすてきな音が出た。

その音の大きいことといったら、駅につながれた犬のシューベルトが、寝ていた顔をちよつと持ち上げたほどだった。

「……………」

トーマスはおどろいて、目が丸くなった。

「あ、あの、なにか聞こえなすって？」

まっ赤になったシエラが、うわ目にトーマスを見ると、彼は今にもこらえきれないというふうに、口びるをブルブルふるわせていた。

「ダアーハツハツハツ！ 聞こえなすってときたもんだ！」

「ああ、もうイヤだわ！ レディーが聞いてあきれるわ！ どうして心はおしとやかで育ちが良いのに、おなかの虫だけはこうも我慢がきかないんでしょう！ これではいくらわたしが千人の女たちの中からただ一人のお妃おひめにえらばれたとしても、病弱な王子さまは椅子からひっくりかえって死んでしまっわ！」

トーマスはひげをつねった。

「まあ気に病むことはない、人間、腹がへっちまえば、ぐうと来るもんよ。」

シエラにはまず食い物だな。

よし、ここをまっすぐ行ったところに、ドルニク亭ってえ小さい店がある、汚ないが、ここいらで一ばん安くてたんまり食べる店だ。そこで腹はらごしらえしたら、店主にメイトリアルまでの馬車を頼むといい」

「メイトリアルまで？ まあ、トーマスさんなんて良い人なんでしょう！ 失礼な人だなんていって、悪かったわ」

そういつてシエラがポストンバッグをもちあげると、トーマスは、さも注意ぶかそうにバッグを指さした。

「ああそれからそのバッグ、なにが入っているのかしらんが、気をつけるこった、なにしろそのポストンバッグは、ラスタルではたい

へん盗まれやすいんだ、きのう盗まれたバッグも、そんなポストンバッグだったな。しかも盗られたやつは無銭飲食と間違われてな、まあとにかくかわいそうな子がいたよ」

「あらご心配ありがとうございます。だいじょうぶだわ。このバッグにはわたしのすべてがつまっているの。だからわたし、死んだってこの手を離さないわ」

シエラは大事そうにバッグを抱えて見せながら、トーマスに手をふって別れた。

メイトリアルールのソフィ

大草原の遠くから、1台の馬車がやってきた。

馬車はコトコトと木の車輪を回して、ときに森をぬけ、ときに橋をわたり、チャスタリカ湖にじぶんの姿をうつすなどして、ようよう六マイルほど荷物をゆすった。

ここまで来れば、道のさきに十字架が見える。

十字架は、メイトリアルール教会の十字架だった。

ムチが入った。

馬のいななきが草原に響いた。

馬車は教会のうら庭に入って、かじ棒をおろした。

手綱をひいていたのは、マクラーレンという、教会の小使のじいさんだった。

マクラーレンは馬の世話をし、荷物をほどいた。

荷物はたくさんあった。

汗をふいて、日かげに腰をおろした。

教会から美しい歌声がもれていた。

マクラーレンは、ハンチング帽を胸にしばって、うっとり目を閉じた。

聖堂では、修道服をまとった二人あまりの少女たちが、いっせいに賛美歌を歌っていた。

おだやかなオルガンの音色。

ステンドグラスの七色の神秘。

キーンとクリスタルを打ったような透明なハーモニー。

まさに天使の歌声と呼ぶにふさわしかった。

ふとハーモニーがにごった。

1人の少女が音をまちがえた。

ソフィ・シンクレリアは、冷たい目をしてハイゼル・マーを見た。
「はい、よろしい。」

ヘイゼル、ヘイゼル・マーヤ。

どうしてあなたこれで3回目ですよ。なぜいつも音はずすの？
なぜもつと練習をしておかないの？ いいえ、ごまかそうとして
もムダです。

先生の耳にはね、1つ1つの声に、1人1人の名前が書いてある
ように、はつきりと聴き分けられるのですからね。明日からもう1
度、下のクラスでがんばりなさい」

メアリー・ヒルトン先生は、ヘイゼルの顔さえ見なかった。

メイトリアル教会は、聖歌隊を4等にわけた。

1等のクラスはトップクラスで、教会の顔だった。

みんなこの1等クラスに入りたくて、世界各国から少女たちがあ
つまって来た。

だからヘイゼル・マーのように、伸び悩んだあげくに下のクラス
に落とされることは、彼女たちがもつとも恐れることだった。

「では次のページをひらいて」

ヒルトン先生は鍵盤にゆびをおいた。

かすかに泣き声もれた。

ソフィは美しいゆびで譜面をめくった。

彼女はほかの少女たちのように、ひどく心を動かさしはしなかった。
ソフィ・シンクレリアは、いま世界がもつとも注目する、十五歳
の歌姫だった。

シルバーの髪を背中にゆらし、いつもぼんやりとしたグレーの瞳
は、その美しい色のほかに、どこかもの悲しい色があった。

からだの線がほそく、しなやかに歩くその優雅な姿は、少女たち
の羨望のまなざしを一身にあつめた。

メイトリアル天使は、まさにソフィひとりだった。

いっぽう、天才ソフィの存在が邪魔なのが、いまソフィのうしろ
で歌う、パラメ・ドレイクだった。

パラメはソフィよりも2つ歳うえの十七歳で、すでに聖歌隊のリ
ーダーをつとめていた。

カラスのような黒髪に、馬を思わせる長い顔は、おせじにも美しいとはいえなかった。

しかし歌には熱心で、少女たちをよく使い、メイトリアールの聖歌隊はじぶんにゆだねられたと、自信にあふれていた。

……しかし、パラメの鼻さきにはいつもソフィがいた。

人びとの目は、いつも天才歌姫にばかりそそがれた。

それが気に入らなかった。

なんでよ！　なんでこんな小娘にばかり、先生も、法王さまも、こだわるのよ！　あたしが聖歌隊をまとめているのよ！　こう毎夜ふとんをかんだ。

「……………」と、いうわけで、本日のレッスンはこれまで。以上注意したことを忘れずに、各自で練習をしておきなさい」

ヒルトン先生はオルガンを閉じた

ソフィはもう教会の出口にいた。

そのシルクのように美しいシルバーのうしろ髪に、少女たちは熱いため息を落とした。

『つまらない』こう胸うちをして、ソフィはなるべく教会から離れようとした。

「待ちなさい、ソフィ・シンクレリア！」

教会から呼び声があがった。

ソフィはまぶしそうにふり返った。

3人の少女が腕を組んで立っていた。

手でひさしをつくってよく見ると、パラメ・ドレイク、そのしも

べのエイミー・シュチアート、グレース・ジエネデイが立ってとた。

「ソフィ？　こんやは大切な親善会よ。お忘れじゃなくって？」

パラメは黒髪をかき上げた。

「忘れていないわ」

「では、お買い物をお願いできるかしら？」

「わたしが？」

美しいまゆがあがった。

「そうよ。あなたしかいないのよ。だって、あたしたちはあなたとはちがつて、凡人だもの、これからまだクラスで自主練習をしなければならぬの、つまり、手が空いているのは、天才歌姫のあなただけなのよ。おわかり？」

しもべの2人をふり返つて、ニヤリとやった。

「そう、わかつたわ。ちょうどいいわ。どうせ散歩ついでなもの。買い物を頼まれれば、それでいいのね？」

「賢明ね。じゃあここに買い物のリストとお金が入った袋があるから、親善会が始まる夕方までに、お願いしますわ」

パラメはゆびを鳴らした。

ぎよる目のエイミーが歩いていって、お金の入った布袋と紙を手渡した。

ソフィは書かれた買い物リストを見て、表情が曇った。

「じゃあ、お願いしますわ、われらが天使さん」

馬顔のパラメ、ぎよる目のエイミー、まるっ鼻のグレース、この3人が腕くみしながら立ち去って、ソフィはもう1度、買い物物のリストを見ずにはおれなかった。

パラメから頼まれた、買い物物の数かずは、けっして1人では買えないほど、たくさん書いてあった。

「……………」

紙きれと、おもい布袋を押しつけられたソフィは、広い夏の空の下でしばらく途方にくれた。

親善会とは、敬虔けいけんな信者たちがつどう、大切なもよおし物。

その食料の手配が間に合わなければ、たいへんな騒ぎだ。

走りまわる先生、不愉快そうな信者たち、影でほくそえむパラメ、その光景はソフィでさえ想像したくなかった。

「なんて下らないいやがらせなの？ わたしが失敗して、みんなから非難をうけるのが、そんなに望ましいの？ わたしの歌声に嫉妬して、こんなことまでするなんて、歌がそんなに大切ななの？ わたしには、ちっともわからないわ。歌が上手で、人びとから天使の歌

声だと賞賛されるのが、どうしてそんなに羨ましいのかしら。だっ
たら、あげるわ。誰にでもいい、あのパメラにだっていい、欲しい
なら、この呪われた歌声をあげるわ」

ソフィは胸に十字をきって、修道服をひるがえした。

そして不可能な買い物をするために、ひとり六マイルの長い長い
小道についた。

悲しみのラスタル

気持ちのいい夏空に、白い雲の峰が一つ、大きく風をうけて流れていた。

小道には馬車の轍わだちがつけられ、車輪が通らないまん中には、むらさき色の野花が、ミツバチを乗せてゆれていた。それを足もとに、ソフィはのんびりと小道を進んでいた。

肩から布袋を垂らしながら、もう先ほどの暗い表情はどこかへ抜けていた。

身をくずしながら流れる夏雲を目で追いかけたり、さわさわと風に鳴るモミの木の林をながめたり、くるりと身をひるがえして世界を回してみたり、ともすると鼻歌まじりになりがちだった。

親善会に間に合ってもよし、間に合わなくてもよし、それはわたくしが知ったことか。わたしはただ自由に、どこへでも歩いて行きたいだけ。そんな深呼吸を一つして、ソフィはただただ、自然あふれる六マイルの小道をたどった。

そのうちに小道の向こうから、メイトリアル教会の荷馬車が一台、コトコトと荷物をゆらしながら、走ってきた。

馬をあやつるのが、いつものマクラーレンおじさんではなかった。ソフィはちょっと不思議そうな顔をして、荷馬車に道をゆずった。と、その荷台からひよっこり顔を出したのは、リユーイツヒ・ポールターだった。

「ソフィ！ どうしたのかしら、ひとり？」

リユーイツヒはさもおてんばそうに荷台から飛び降りると、回りこんで行って馬車のおじさんにていねいなおじぎをした。

おじさんは帽子をちょこんとあげて、また馬を走らせた。

「お散歩かしら？」

「いいえ、お買い物かいものを言いったの」

「買い物？ ソフィが？ へんねな話ね、ソフィが買い物をするな

んで、あべこべだわ、そんなのいくらだって下級生がやるものよ。」
美しく結い上げた栗毛色の髪をふって、リユーイツヒは人より時間
の間流れるのが早いように、ペラペラしゃべった。

「そんならどこまで買い物へ行くの？」

「ラスタルよ」

「まあ！ いまあたしラスタルから来たところなのよ、それだって、
買い物なんか、マクラーレンおじさんにくらでも頼めるわ。いつ
たいどうしたことでしょう？」

「知らないわ」

「ま、いいわ。あたしもごーしよするわね、だって、気持ちのいい
午後だもの。こうやって、ソフィと肩をならべて歩けるのも久しぶ
りだし、なにより素敵だわ」

リユーイツヒはソフィと同じ十五歳、しかもちょうど同じ頃にメ
イトリアル教会へひきとられてきたのだから、ちよつと古い仲だ
った。聖歌隊のクラスは一ばん下のクラスで、鳴かず飛ばずもい
いところである。

それなものであるからリユーイツヒは、自分のような芸のない三下と
肩をならべて話してくれる天才少女の存在が、ありがたくもあり、
また誇らしくもあつた。彼女自身、ソフィに強いあこがれを抱く一
人にちがひなつた。

「あたしね、つい先日さんしたに弟が生まれたから、ちよつとおひまをいた
だいていたところなの。だめねあたし、ちつとも家をすてられない
わ、だって家族が大好きなもの」

笑うとえくぼができる愛らしい顔をして、リユーイツヒはふくよ
かにわらつた。

「弟はそれは可愛かつたわ。あたしのゆびを、ほら、このゆびよ、
このゆびをぎゅって、つかまるの。まだ笑つたりできないっていう
のだけど、あたしには笑つたように見えたわ。父さんは自分に似て
凛々しい口もとをしているっていうのだけど、あたしにいわせれば、
母さん似だつたわ、目もとがそう。いつかソフィにも見せてあげた

いわ。名前はヴォックス、まだその名前になじめないけど、いずれ慣れるわね」

彼女の白っぽい顔は、興奮したり、恥ずかしくなったりすると、すぐにバラ色にそまる癖があった。

しばらくリユーイツヒのおしゃべりが続くと、小道の左手にチャスタリカ湖がせまってきた。

キラキラと輝く水の上には、水鳥の進む波が幾すじも伸びている。小舟を浮かべて、釣りを楽しむ人の影も、めずらしくはない。

「来年はきつと、夢に、希望に燃えあがった新しい少女たちが、波のように聖歌隊へ入ってくるでしょうよ。みんなソフィの影響よ。

だって、日曜日に来る少女たちのあなたを見る目の色を見れば、わかるもの」

「そう」

まるで異国の物語を聞くような、上の空の態度で、ソフィは顔をそむけた。

「あなた相変わらずだわ、あの日からずっとそう、でもいいの、あなたの美しさとすばらしさは、いつまでも変わらないのだからね」

小道に木々の影が落ち始めると、もうチャスタリカ湖は遠い輝きに変わっていた。

一ぼん、一ぼんと木は高く暗く伸びはじめ、とうとううす気味の悪いドーンズの森の中へ入っていた。夏でも肌寒く、朽ち木がごろごろと横たわり、どこからかギャギャギャといやらしい野鳥の鳴き声が響き渡った。

リユーイツヒは心細い一心から、ソフィに寄り添うように歩いた。馬車で抜けるには、一瞬のことでもあるし、何とも感じないが、じっさい森の中を通ってみると、三年まえにこの森で殺された、アンソニー・ロウという囚人の亡霊が、骸骨の姿で走り寄ってきてそうで、ついつい無口になりがちだった。

そこへ、うす日のさす小道の先から、二人の青年がやってくるのが目についた。

一人は槍のように背が高い、ピーター・ペンハローで、もう一人はまだあどけなさが残るルドヴィック・スピードだった。

ポケットに手をつっこんで歩いてきたピーターは、目の先にソフィの姿を見るが早いかな、意気ようようと近づいてきた。

「やあソフィ！ おれらこれから教会の方へ行こうと思っていたんだ。用はあるさ、教会のペンキ塗りさ。年ねん老朽化が進んでねあの教会の壁も。それと君はなかなかおれに会ってくれないものだから、こうやって会いにくしか、ないのさ」

そばかすの散った顔をニツと笑わせたピーターは、誇らしげにペンの缶をふり回した。

ピーターはパラメたちと同じ、十七歳の青年で、ルドヴィックは二つ下の、ソフィらと同じ十五歳だった。

「失礼な話だわ。ソフィもいい迷惑よ、あんたみたいなお調子ものにつきまとわれて。ペンキ塗りをしてくれるのはありがたいけど、窓の外からじつとソフィを眺めるのだけは、よして欲しいわ、気味が悪くって」

「いったなりユーイツヒ！ 君みたいなのは、誰も窓の外から眺めてくれる男がいないんで、ずいぶん嫉妬をしているのだろう？

おいルドヴィック、お前も何とかかんとか、言っちゃれ」

ルドヴィックは、その貴公子のような凜々しい鼻さきを、ちょっとそむけた。

「リユーイツヒは、嫉妬なんかしてないさ」

「ほらご覧なさい。まあなんてルドヴィックつたら、男らしいことをおっしゃるのかしら？ あなただけでもどうかしら、これからあたしたち、ラストルへお買い物に行くところだけれども、ごーしよなさらない？」

リユーイツヒは、白っぽい顔にバラの色をさしながら、いった。

「いや、今日はピーターの手伝いだから」

「あらペンキ塗りだなんて、ルドヴィックに似合わないわ」

「おいリユーイツヒどういう意味だい？ おれにはペンキ塗りが似

合つて、こいつにはなにが似合うというんだ？」

ピーターとリユーイッヒは会うたびにこの調子でいがみ合いを始めるのだった。

「よしなさいリユーイッヒ、女性があまり気の強いことをいうものではないわ、さあお二人はこれから忙しいから、わたしたちは先を急ぎましょう？」

「そうね、なんだかこれ以上、ピーターの顔を見ていたら、つい力ツカッしちゃうそうだわ、ほんとうにルドヴィック、ごーしょにとっ？」

ソフィはちらつとルドヴィックを見た。

「いいつたら、教会の壁は、ほんとうにはげているんだ」

少女たちがやおら森を抜けかけると、背後から大きな口笛が鳴った。

「ソフィ！ 日曜日にはきつとまた最前列で君を見ているからな！」

「ピーターにはあきれたわ。あんなしつっこい男はほかにないわね、あんなの愛する人に対する態度じゃないわ！」

リユーイッヒはなん度も振り返りながら、できる限りのしかめっ面をした。

「あまりひどいことを言うものではないわ、彼はそれは働き者よ」

「働き者が聞いてあきれるわ……でもルドヴィックったら、やっぱり素敵ね。男らしくって、いつも紳士的で、どうしてああいう人にかぎって、女性に興味がなさそうなのかしら？」

「リユーイッヒは、ルドヴィックのことが好きなの？」

「こう質問されてみて、リユーイッヒはわが耳をうたがった。というのも、ソフィはこういった話題には一さい見向きもしない少女だったからだ。

「それはつまり、恋人として？」

「ええ」

「どうしてそんなことを聞くの？」

すると今度はソフィがハツとして、答えに困ってしまった。

じぶんは—たいなんてことを言ってしまったのだろう、そんなふうにリユーイツヒから顔をそむけ、一人すたすたと森を抜けて行った。

ラスタルの町にはつねに土ぼこりが舞っていた。

石だたみなどどこにもなく、道は雨が降れば泥だらけになった。

住む人も、商売する人も、どこか土をまぶしたように、うす汚れていた。

あるのは活気ばかりで、どの軒ばからも大声があがっていた。

「さあソフィ、いったい何をかうように言づかってきたの？」

「ええ、この紙に書いてあるわ」

行き交う商人や婦人たちの中で、ソフィはパラメから押しつけられた紙をひらいた。

するとそれを見たリユーイツヒは、悲鳴にも似た声を上げた。

「ソフィ！ これ親善会に必要なものじゃないの！」

「ええそうよ」

「ええそうよじゃないわ！ 親善会に必要なものなら、さっきあたしが乗っていた荷馬車にたくさん積んであったわ、つまりこんなもの、もう必要ないのよ」

「でも、ちゃんとお金まで預かってあるし」

おそろおそろといった手つきでソフィがお金の入った布袋を肩から持ち出すと、リユーイツヒはひったくるようにして開けて中身を地面へ落とした。

布袋の中身はよくできた小石の山だった。

「ああなんてこと！ わたしはなんて馬鹿なんでしょう！」

ぱらりと最後の小石が落ちたとき、ソフィは強いシヨックからめまいを覚えるほどだった。

「いったい誰から買い物を言づかったの？」

「パラメよ」

「あの馬女！」

「ダメよそんなことをいって………もとはといえばわたしが悪い

の、はじめから袋の中身を確かめていれば、きっとこんな子供だましにひっかかりはしなかったわ。そうよ、鼻で笑ってすんだものを……十五歳にもなってこんな恥ずかしいことはないわ」

ソフィは目に涙をこらえるほど悔しかった。くちびるは自分に対する戒めしめの気持ちで細かくふるえていた。

「このことは一おうメアリー・ヒルトン先生に報告しておくわ。パメラも、ちょっと度がすぎるようね……どうしましょうソフィ、このまま帰るといふのはどこか気がひけるわ、そうだ、おしゃれな帽子屋さんにも顔を出していきましようよ?」

「その必要はないわ、帰りましょう」

ソフィの冷たく言いはなった言葉には、まるで言い返す余地がなかった。

すさまじく静かな背中には、リユースヒもただしたがうしかなかった。

そんな頃、そう遠くもない店さきに、怒鳴りちらす声が立ち上ると同時に、周囲に大きなどよめきが起こった。

「なにかしら? きつともめごとよ、さあソフィ、大へんだわ」

リユースヒの野次馬ごころは、こんな時にも燃えあがるのだった。

青い目の少女

「おい小娘！ さつきから聞いてりゃあいい加減なことばかりいやがって、金をもっているのか、いねえのか、どっちだ！」

ふとつちよの料理人が、じぶんの定食屋の看板の下で、大きく腕くみしながら、つき飛ばした相手へ目をおろしていた。

汚れた服を着た少女は、思ったより大きくつき飛ばされたと見えて、痛むお尻をさすりさすり、なんとか言った。

「待ってつたらおじさん、なんでも言っただわ、わたしお金はもっていたの！ でも今になって見てみたら、大切なお金も、ポストンバツグも、丸まるなくなっていたのよ！」

料理人は、大きな顔と、トウモロコシのようなふさふさしたヒゲを、左右にふりながら、

「ただメシ食うやつはみんなそういうんだ！ しかも小娘、その汚いなりはなんだ、金なんかさいしょっから持っていなかったってツラだぜ！」

「ちがうつたら！ お金はちゃんと持っていたのよ！ だけど盗まれてしまったって、言っているの！ わたしどんなに身を落ちぶらせようとも、泥棒のような汚いマネはしないわ！」

「汚いマネはしない？ メシを食って、金がないんじゃないわあ、汚いマネだろっ、ちがうか！」

料理人と少女は、お金がある、ないで大もめにもめていた。

あまりに少女が意地をとおすもので、料理人はいよいよ大声に大声をかさねて、周囲の耳をひくものだから、一人、また一人と道行く人たちは歩みをとめ、あつという間に人だかりができあがった。

「やあねソフィ、流れ者があつまる町って、これだからイヤだわ。

つい昨日だつて、ラスタルのどこかで、犯罪があつたらしいわ。それにあの小娘の態度ときたら、どうかしら、盗人ただけじゃないわ。からありゃしない」

リユーイツヒはとりまきにまざりながら、夕ダ食いの嫌疑をかけられた少女を、さも犯人あつかいの目で見ていた。

「よし小娘、おまえがそうまで意地をはり通すというのなら、いますぐ警察を呼んで、すぐに牢屋へ放りこんでやる。」

……だがな、おれは血も涙もない悪魔じゃない、貧乏人のつらい気もちもよくわかってるつもりだ。しかもおまえはまだ子供も子供、もしもおまえはみなし子で、ほんとうは金なんかもっていない、つましい身分だというのなら、よしメシの一ぱいくらい大目に見てやってもいい。どうだ？」

「そんなことを言ったら」とリユーイツヒはつまらなそうな顔をすのだった。「そんなら誰だってみんなウソをつくに決まっているわ。だってそうでしょう？　じぶんをみなし子だっといういさえすれば、罪を許されるのなものねえ。ソフィ、あなたもそう思わない？」

すると少女は、ワンピースのホコリをはらいはらい、青い目を一そう青くして、いった。

「いいえ。わたしはちゃんとお金をもっていたわ。わたしはみなし子ではないし、こう見えても育ちはいいほうよ。それにラスタル駅のトーマスさんが、わたしのボストンバッグを見て知っているわ、警察をお呼びになるなら、いいわ、呼んで下さいな！」

ふとつちよの料理人は、少女に情けをかけたつもりが、きっぱりつき返されたとあって、トウガラシのようにまっ赤な顔で怒った。

「よしわかった！　今すぐ警察を呼んで、おまえを牢屋へ放り込んでやる。あとでほえ面かいたって、知らないからな！」

少女はなおも、強い、青い目を光らせながら、料理人に胸ぐらをつかまれた、ちょうどそのとき、

「その必要はありません」

という声が、二人のやりとりをさえぎった。

「その子のお金は、わたしがはらいましょう」

今の今まで、リユーイツヒと高見の見物をしていたソフィは、いつかとりまきからひとり抜け出していた。

これにはリユーイツヒも、栗毛色の髪を逆だてて驚いた。

「あ、あんた、ソフィ……………ソフィ・シンクレリアじゃないか？」
毒気をぬかれた料理人は、胸ぐらをつかんでいた少女を、われ知らず放していた。

「おいくらですか？」

ソフィがにつこりとほほ笑みかけると、ふとつちよの料理人はその美しさに急にぼかんとして、問われるまま金額を口にした。

そのお金をソフィがはらい終えてしまうと、あっけなく騒ぎも終わってしまい、一人、また一人と、とりまきは大通りへ消えていった。

「ケツ！ まったくツイている小娘だ、感謝しろよ、この心のお優しい方が、おまえみたいなきなみに子に、慈悲ぶかくも施しほごを下さったんだからな！」

料理人は少女の胸ぐらをつき放し、うしろ髪ひかれる思いで調理場へひき返して行った。

「おおソフィ！ まあなんてマネをしたの！ あたしまったく恐れ入ってしまったわ！ この子は物ごいよ、この汚い身なりを見ればわかるじゃない？」

血相を変えて飛んできたリユーイツヒは、あわててソフィから少女を遠ざけた。

少女はシワになった胸もとを正しながら、きっぱりといった。

「わたしは物ごいなんかではないし、物ごいだとしても、そんな目で見られたくはないわ！」

「まあ生意気な！ 助けてもらっておいでその口のききようはなに？」

少女はとなりでぶんすかいうリユーイツヒをものともせず、パツと笑顔になってソフィの手をとった。

「あなたはわたしの恩人だわ！ わたしはどんなに困っていたことでしょう！ 見知らぬ町で、見知らぬ人たちに囲まれて、心はすっかり泣いていたんですもの、でもほんとうに泣かなくて、良かった。」

たわ。だって、泣いたらみんなわたしのことをもつとみじめな思いで見られるでしょう？ さげすまれるのって、イヤだわ。そんな経験ないかしら？ あら、こんなことを恩人に話すのはおかしいわね、でも、とっても安心したんですもの！ 見知らぬ土地でも、心ある方がいなくたって、わたしほんとうに感激したわ。お金ならちゃんとお返ししますから、心配なさらなくて、いいわ。でもほんとうに困ってしまっているところなの、ポストンバッグよ。きつと盗られてしまったんだわ。あれがないとわたし、ほんとうに困ってしまうところなのよ」

「お金のことなら、べつに」

「ダメよ！」

さらにちから強く手をにぎられて、ソフィは何やらふしぎな力に吸いよせられる気がした。

「なんだろう？」そう自問してみた。

この少女のすさまじい青い目のせいかしら？ はたまたこの大きな言葉づかいのせいかしら？ いいえそもそも、ヘイゼル・マーがウサギ目になったとしてもなんとも思わない、心を失ったようなわたしが、なぜこの少女のことを助けたりしたのかしら？ はじめはただ、リユーイツヒと一しよに、とりまきにまざって高見の見物をしていただけなのに……。

「早くその汚い手をはなさない！」

見かねたリユーイツヒは、ソフィの白く美しい手から、泥の乾いた少女の手をひっこ抜いた。

すると少女は苦労を絵に描いたようなてのひらを見つめて、ポロポロと涙を流しはじめた。

ソフィはリユーイツヒを見、リユーイツヒは小さく首をすくめた。「わたし、シエラ・クロウっていうわ。見ての通りお金をなくしてしまったの。全財産だわ、あれがないとわたし、旅ができなくなってしまうの。もうすこしの旅だったのに。それにね、あれはじぶんのお金じゃないんですもの。大切な人のお金、ああ悲しいわ。こん

な時、立派なレディーなら、どうするのかしら？ きつとこんなふうには泣かないでしょうね、それはわたし泣き虫で、とんでもないの。泣いたって、どうにもならないのは分かりきっているのに、涙のほうで勝手に押しあがってきちゃうのだから、難儀なんぎだわ」

ソフィはふわりと腰をかがめ、シエラと視線を合わせながら、「あなた、ちよつと変わった子だわ、歳はいくつ？ どこから来たの？」

「十三よ。みんなわたしのこと十三には見えないっていわね。きつと大人びて見えるのよ。だって、十三にしては、しっかりしているもの。じぶんでもそう思うの。大ていのことならじぶん一人でできるし、つまりわたしたくましいの。泣いたって、このまま六マイルは歩けるわ。あら、これもじぶんから言ってはならなかったわね」「どこから来たの！」

聞かれたことだけにだけ答えなさい、と言わんばかりに、リユーイツヒは業をにやした。

「バーゲンダーツよ。もう二度と戻ることはないわ。だってもう運命の時は刻みはじめてしまったの」

ソフィとリユーイツヒは、同時に顔を見合わせた。

「たちの悪い冗談だわ。バーゲンダーツといたら、ちよつとやさつとじゃあ行かれな、最果てよ。汽車にゆられたって、何日かわからないわ。ねえソフィ、この子やっぱリウソつきよ」

「ウソじゃないわ、もうかれこれ一ト月は旅してきたもの。なるべくお金がかからないようにして、それでも馬車にのせてもらったときは、人の優しさに感動したわ。ほんとうはもっと、時間がかかるはずだったのに」

「旅を………しているの？」

ソフィはふつふつとわき起こる好奇心を押し殺しながら、そつ気ないふうに聞いた。

そしてシエラのひどい格好をあらためて眺めた。

おさげ髪にした金色の髪は、もう汚れきってさび色に変わってい

た。

白のブラウスは斑に黄ばみ、ほとんど黄色いブラウスで、柄物のギンガムワンピースは、すそがほつれ、肩ひもも無理にぬい合わせであり、リユースヒが物ごいというのも仕方のない話だった。

しかしそれとは対照的に、瞳は大きく青く、宝石のように輝いていたし、まゆ毛はキリツと立ちあがって、持ち主の意志の強さがあらわれていた。

「旅……。ありていに言えばそうよ。わたしはある目的のために、メイトリアル教会をめざしているの。でももうお終いだわ。ここへ来てお金をなくしてしまったら、きつともうたどり着けない気がするの」

ソフィとリユースヒは、同時にまた、お互いの驚いた顔に出会った。

たまらなくなったりリユースヒは、ソフィの手をひいて、シエラを置き去りにするような、ちよつと離れたところへ行った。

「どういふことかしら！ あの子ったらあたしたちの教会をめざして旅をしているっていうじゃないの。ひよつとして、聖歌隊に入りたいって、言い出すんじゃないかしら！」

のこされたシエラが大きくこちらをのぞき込むのを横目に、ソフィは冷静に答えた。

「ありえないことではないわ。ご両親がわが娘を聖歌隊に入りたい一心で、遠くから遙ばるやってくるというのは、よくある話よ。ひよつとしてリユースヒは、あの子がわたしたちの聖歌隊に入るのに、反対なの？」

「大反対よ！ あたりまえじゃない、あんな物ごい。きつとみなし子だわ、食べるものに困って、あたしたちの教会を頼って来たのよ。もしもまちがって、清楚で伝統ぶかいわが聖歌隊に、あんな汚いのが入ったら、イメージが悪いわ。寄付金だって、たんとは集まりはしなくなるだろうし、とにかく、あたしは大反対！」

「あら、わたしたちは僧侶服で歌うのよ。身なりは関係ないんじゃない

なくって？ それにあのシエラって娘、汚れを落としたり、きつときれいになるわ。大人になつたら、見ちがえるタイプね」

リユーイツヒはそうまで言われて、ちょっとシエラのほうをふり返ったが、やはりそこにはうす汚れた少女しかいないと思った。

「メアリー・ヒルトン先生は、きつとあたしと同じ意見をお持ちだわ。先生も、伝統と威厳を重んじる方ですもの」

ソフィはシルバーの髪を泳がせながら、不安そのもののようなシエラのもとへまい戻った。

「シエラ、これからあなたをメイトリアル教会まで連れて行ってあげるわ。わたしはソフィ、ソフィ・シンクレリア。あなたより二つ歳うえの十五歳よ、よろしくね」

「連れて行くって、あなたメイトリアル教会を知ってなさるの？ わたしはメイトリアルにたどり着けるの？ それともこれは夢なの？」

「夢ではないわ。メイトリアル教会はわたしたちの教会なの。いまからわたしたちも教会へ戻るから、シエラも一しよにいらっしやい。あら、こんどはどうしたというの？ 夢じゃないのだから、なにも泣かなくなっただっていいじゃない」

シエラはりょうの手をくみ合わせながら、ボロボロとまた涙を流した。

「嬉しいわ……………ああ、嬉しいのなもの。わたし五回もくじけそうになつたわ。一 回くじけたら、もうきっぱりメイトリアルをあきらめようかとも思っただけれど、一 回もくじけないで良かったわ。あら、いろんな時に涙って、あふれるものなのね……………それに」

「それに……………なに？」

ソフィはもう、じぶんのふしぎな好奇心をおさえはしなかった。

「ソフィって、まあなんて美しい人かしら」

そのときソフィは、じぶんの心の底に、一しずくの水が落ちて、そこから美しい波がみるみる広がってゆく思いがした。

ソフィはじぶんを美しいと思ったことは一度もなかった。かえって呪われたじぶんの心が、見られやすいこの顔をつうじて、人びとに見透かされやしないか、そればかりが気にかかっていた。

じぶんはある人をうらぎった、その罪ぶかい呪いは、今度じぶんが死なないかぎり、消えはしない、そんなまっ黒な呪いをかぶったじぶんと、神聖な響きをもつ「美しい人」という言葉は、決してあいまみれることはなかった。

ただピーターからいたずらに「美しい」とからかわれたり、じぶんの歌声を絶賛した人たちが、やみくもに「美しい」とはやしたてたり、するばかりで、ソフィはその言葉に、なんの感情も立たなかった。

しかし今、この出会ったばかりのシエラに「なんて美しい人かしら」といわれて、なにか懐かしい、気心の知れた人に出会ったような、強い感情が立つのを、ソフィは意識しないではいられなかった。ところがすぐにまた、頭から呪いがかぶされるような、強い嫌悪感が、心の奥底からわき上がってきて、ソフィはまたすぐに今のソフィに、戻されていった。

「カン違いしないで。わたしは美しい人なんかではないわ。心がまっ黒に汚れているの、いまのシエラの服と一しょよ。でも服とちがつて、洗ったつてこの汚れは落ちないのよ。」

さあそんなことはどうにでもいいわ。リユースも変な顔をしていないで、早くメイトリアルへ帰りましょう」

喜びとかんしゃく

夏の夕空は、赤い絹をいくえも折りかさねたように、あざやかな色にあふれていた。

小道のところどころに、並木の影が長くのびて、それが帰り道と
いうのにふさわしい景色だった。

ソフィ、リユーイツヒ、シエラの三人は、夕照に顔をそめながら、
トボトボと六マイルの小道をたどっていた。

シエラは、さきほどリユーイツヒに握手をもとめて、その手をま
んまとき返されたところだった。

「そうよね、こんな汚い手と握手なんかできっこないわね。でも、
過酷な旅をしてきたからこそ、こんな泥まみれに汚れてしまってい
るの。ほんとうはわたし、とつてもきれいな好きなのよ。想像すらで
きないでしょうけど、ほんとうのことよ。こんなに日焼けしていな
ければ、肌の色だってシラカバの樹皮のように、まっ白なの。でも
いまでは、すごい格好だわ。お風呂だつてろくにつかれていないし、
やっと雨がふって、のきばの雨水で顔をあらうのが精いっぱいって
ところだったわ。でも一つ発見もあつたわ。人はとことんまで汚れ
てしまうと、あとはどんなに汚れてしまつたつて、気にならなくな
ってしまうの。わたしだからじつさい、あんまりじぶんのよこれが
気にならないわ。こどもが泥の中で転がりまわつて、笑顔でいる気
持ちがいまはわかるわ」

シエラのおしゃべりは、いつ呼吸をしているのか、ふしぎに思う
ほど、ひっきりなしに続いた。

それは一ト月ぶんのおしゃべりを紙に書きつらねて、丸い紙つづ
ぶにして投げつけられるようないきおいがあつた。

ソフィやリユーイツヒは、その話をときにつまらなく、ときにお
もしろく聞いたりしたけれども、とうとう二人はシエラの口をふさ
がせようとまではしなかった。

「ここはほんとうに緑のたくさんあるところにちがいないわね。素敵だわ。森や山や、小川や小鳥たち、みんな気持ちのいい風になびいて、いつも笑いかけてくるようよ。わたしこのまま靴をぬぎ捨てて、はだしでおどり回りたい気分になったわ。わたしの故郷ときたら雨がふらないものだから、それはゴツゴツした岩やザラザラした赤土がほとんどだもんで、靴をぬいじゃうと痛くて痛くて、まんぞくに歩かれないの。風のある日なんて、土ぼこりがどんどん舞い上がって、目なんてあけられないくらい、世界がかすんじゃうんですもの、ひどい話にちがいないわじっさい」

小道について植わった並木が、一ぱん、一ぱんとまばらになり始めると、キラキラと夕日をうつした湖が、その向こうに輝きだした。「なにか光るものがチラチラすると思ったら、まあなんて大きな湖なの！ ひんやり涼しい風につて、水のいい匂いがするわ！ すいすいと小舟も浮かんでいて、とつても絵になるわ、きつと美しい名前なんでしょうね？」

「チャスタリカ湖よ」

ソフィは鼻うたを歌うようにいった。

「チャスタリカ湖！ いい響きだわ。なにか伝説でもありそうな、神秘的な雰囲気じゃない？ もしも伝説があるのなら、きつと悲しい乙女の伝説がいいわ。いきちがいから犯してしまった罪を、乙女は永遠につぐないながら、来る日も来る日も泣いてすごすの」

このときユーイツヒは、ハツとソフィをふりかえった。ソフィの呪われた過去に、結びつきそうな、悲しい話だったからだ。

しかしソフィはさいわいに、なんとといった顔もせず、しずしずと歩いていた。

「ほら、あそこを水鳥のむれが渡っているわ！ まるで鳥たちは鏡の上を泳いでいるようよ。わたしもあすすい水の上を泳げたらさも愉快だろうなって、いつも思うわ」

「いいわ。とめやしないから、泳いでらっしゃい。そのほうがあんなの汚い体がちよつとはましになるってもんよ」

リユーイツヒが嫌みらしくいうと、なにかいいかげなソフィの目と合った。しかしシエラはなんとも気にかけないで、話から話へと渡っていった。

「愉快的な気持ちになると、人って歌を歌いたくなるものね。ふしぎだわ歌って、愉快だわって思ったときには、自然に歌ってしまっているのだもの、人ってよっぽど歌が好きで動物なようね。でもわたしたちなら、今まで歌について、あまり知らないことがおおすぎたわ。つまりちゃんと歌おうとすると、なんだかちつともうまくいらないのよ。いろいろ先生にも聴いてもらったけれども、みんなピアノの弦を切っちゃうほど驚かれて、にげて行ってしまふの。どうしてかわからなくて、いろいろな人にきいてみたら、それはキミとびつきり歌がヘタだからだって、いわれたわ。でもわたし、歌がヘタって、じつさいどんなものなのか、ちつとも想像がつかないのよ。だってわたしは愉快的な気分であつて歌っているのだもの、それが上手だろうがヘタだろうが、気分よく歌っているわけでしょう？」

リユーイツヒは、まぢがって冷たいお風呂へ入ってしまったときのような、悲鳴にちかい声をあげた。

「まあ！ あんただったらどこまで愚かものなの！ なんですって？ 歌がヘタですって？ それであたしたちの崇高なメイトリアル教会の聖歌隊に入りたいというの？ 冗談もやすみやすみいってほしいわ！ いい？ あたしたちの聖歌隊はお歌のけいこ場ではないの、それは厳しくって厳しくって、あんたの歌を聴いてもらったという先生たちが、あんたを大声で絶賛するようでないよ、入隊なんか絶対に許されないわ、もうお帰りなさい、これ以上あんたの茶番に付き合つてられないわ」

「あらそれは知らなかったわ、歌がヘタでは聖歌隊に入れなから。だとしたら、わたしどうしたらいいの？」

そんな二人に背中を見せながら、ソフィはくすくす笑った。

「シエラったら、あなたほんとうにおもしろい子だわ。ねえ、一つあなたに聞きたいことがあるのだけど、どうしてメイトリアル教

会の聖歌隊にこだわるの？ 歌が好きなのなら、どこでだって歌えるでしょう？ なにも針のむしろのように厳しい、わたしたちの聖歌隊へ入らなくなつて、どこへなりに歌手をめざせるわ？」

するとシエラは、急に目に真剣な色をうかべて、

「約束があるの。この命にかえて守るべき約束があつて、わたしは遠路はるばるバーゲンダーツからやつてきたの、その約束はいまは教えられないけれども、それが重要だつてことは知ってもらいたいわ、それはきつと果たさなければならぬのよ。それにもちろんわたしは歌うのが好き。心の中のものをすべて押し出して歌うと、背中につばさがはえたように、自由になれるわ。もつとも、もつと上手に歌えればいいのだけれども」

「楽しいだけにしときたいのなら、井戸の底でひとり歌っていていればいいわ。あたしたちの歌のレッスンは、のどから血がふきだすほどつらくて、しかもひどくつまらないものよ。おんおん声にだして泣きだす子だっているくらいだわ」

リユーイツヒは、子供の心をくじくように、怖い顔を押しつけていったが、シエラはしれつと返した。

「わたし泣くのは得意よ」

そんなやりとりがあつて、チャスタリカ湖も遠い輝きへ変わった頃、仕事を終えたルドヴィックが一人、教会の方からとぼとぼとこちらへ近づいてきた。

「あらルドヴィックじゃない！ いまお帰り？」

急にこきげんになつたりリユーイツヒは、とんでいって彼を出迎えた。ピーターにこき使われたらしいルドヴィックは、ひどく疲れた表情をして、それでもなんとか笑顔をつくつた。

「うん、やっと帰れるところさ。ピーターったら、僕にペンキ缶二杯ぶんもぬらせたんだ、さすがに腕がしびれたよ」

そういいながらうんざり髪をかきあげるルドヴィックは、しかし鼻が高く、いかにもハンサムらしい顔立で、絵になつた。

「それはかわいそうなルドヴィック。あら？ ピーターの姿が見え

ないようだわ？」

「彼なら一人教会でソフィの帰りを待つんだとき、そのへんも付き合いきれないね」

ソフィはさも困ったふうに小首をかしげ、二人に追いついた。

「いったいなにをしに教会に来るのだから、彼にはほんとうに困りものだわ」

「ねえ、ルドヴィックからもいってあげられない？ ソフィにはまったくその気がないのよ。」

「僕がなにをいってもムダさ。彼はソフィに参ってしまったているのだからね、

……うん？ ソフィ、君のうしろにいるの、誰だい？」

「ああ、この子わたしたちの教会に用があるの。名前は……」とソフィが道をあげると、現れたシエラは元気よく一歩まえに進んで、背伸びするようにルドヴィックへ握手をもとめた。

「わたしはシエラ、シエラ・クロウですわ。どうぞよろしく！ わたしのことをシエラと下の名で呼んでくださっても、ミス・クロウと上の名で呼んでくださっても、どちらでもかまいませんわ。でもこれから長くここにご厄介になるかもしれないから、そうね、シエラって、親しく呼んでくださる方が、なにかと都合がいいようですわ」

身丈の小さいシエラは、ルドヴィックをなかば見あげるふうに、彼とかわいい握手をかわした。

その堂々たる姿勢は、ルドヴィックの目を少なからずおどろかせた。

「僕はルドヴィック、ルドヴィック・スピード。君は、なんたつてそんな汚いなりをしているんだい？ 頭のとっぺんからつま先まで泥だらけじゃないか。これなら僕も泥だらけでいなくっちゃ失礼だなあ、うん、じつに愉快な格好だ！」

シエラはまったくあてが外れた顔をして、しばらくはルドヴィックのおどけた顔をながめていた。

うしろではリユーイッヒがくすくす笑うし、ソフィもいつ吹き出してもおかしくなくらい肩をふるわせていた。

さらにルドヴィックは、シエラのホコリをすりこませたような黒ずんだ髪を手にとって、

「おお、君の髪はまるでモップだね！　ぐるりと地球を掃きまわった美しき色よ！」

りょう手を大きくかざしながら、演劇にでもありそうに叫ぶルドヴィックは、いつか機嫌をとりもどして、疲れた顔など一つもなかった。

ソフィまでこらえきれず腹を抱えた頃、シエラの顔は下から赤く、赤くそまっていった。

「初対面なのに、汚いなりだとか、女性の大切な髪をモップだとかなんとか……あんたなんか大っ嫌い！　大っ嫌いだわ！」

頭から怒ったシエラは、ルドヴィックの革靴を力いっぱい踏みつけた。

「まあ！」

まっ青になつたりリユーイッヒは、痛がるルドヴィックの背中をだきながら、力いっぱいシエラをつき飛ばした。

「あなたじぶんがいま何をしたかわかっているの？　汚いなりをしていながら、それをちよつとからかわれたくらいで、あなたなんて乱暴ものなの！」

「いいんだリユーイッヒ、ちよつと僕はふざけすぎたんだ……」

「いいえ、この子のしたことはけつして許されないわ！　これだからみなし子は信用ならないのよ、ソフィがいうのだからしぶしぶ連れて来てやったけど、なんだってあなたは言うことやることがめっちゃくちゃだわ！」

なんといわれようとシエラは、大つぶの涙をつき落として、つと立っていたが、そのうちになにかするかと思えば、ドツと走りだして、ひとり草原の中へ消えていった。

「ソフィ！　あんな子ほうっておなさいってば、ソフィ！」

あとを走っていくソフィへ叫びながら、リユーイツヒはけれどもルドヴィックのそばを一步も離れようとはしなかった。ルドヴィックと二人きりになれる幸運が、とつ然ふってわいたとあって、リユーイツヒはうんと彼に接近しようと思ったのだ。

しかしルドヴィックはといえば、そんな彼女に目もくれず、興味に輝いた目をあげて、遠く走り去っていくシエラのうしろ姿を見守っていた。

2

息をきらしきらし、やっとの思いでソフィが走り終わると、そこは赤い草原に一ぼん影をのぼした、大きな桜の木の根もとだった。

シエラはその木のみきにつつぶして、一人さめざめと泣いていた。「まったく、あなたは信じられないくらい足が速いのね」

胸に手をあてて一つ一つ呼吸をととのえるソフィは、ゆっくりとシエラの背中に近づいていった。

「……ソフィ？ おお、ごめんなさいね、わたしあなたの友だちになんてひどいことしてしまったのかしら。わたし、はじめからあんなことするつもりじゃなかったの、ほんとうよ？ だけどついカツときちやって、ソフィも経験ない？ とつぜん前後の見境がなくなってしまうの。いやだわ、十三歳にもなって、泣いたり、怒ったり、わあわあ思いきりやって、恥ずかしいったら、ないわね。かんしゃくなんて子供のすること、もうすっかり治ってしまったらとばかり思っていたのだけれど、治るところか、いままでで一番ひどかったわ」

ソフィは僧侶服のすそをまとめながら歩いて、シエラと背中あわせに、木のうら側に背をつけた。

「ルドヴィックはね、ちょっとシエラをからかっただけの、ほんと

うにシエラのことを汚いと思ったら、あなたの髪を手にとったりなんかしないわ、リユーイツヒのように、あなたと握手さえしないでしようね」

「わたしの髪を手にとったって、モップだなんていうのだから、ルドヴィックはわたしをきれいだとは思っていないわ！」

「だってあなた旅をして汚れているのだから、じぶんだってきれいだなんて思っていないでしょう？　そこを言われてどうしてカッカするのかしら？」

するとシエラは涙の顔をあげて抗議した。

「じぶんでわかっていいるのと、人から言われるのでは大ちがいだわ！　しかも初対面のあいさつに、あんな失礼なこと、とにかく紳士ではないわねルドヴィックってのは！　わたしにひざまずいて許しをこうたって、ぜったいに許してあげないわ！」

「ふしぎね、ほんとふしぎ。ルドヴィックは誰にだってあんな口をきいたことがないわ。いつもつまらなそうにしているの、リユーイツヒがいくら誘ったって、なにも聞いていない感じなのよ、とにかく彼の足をふみつけたのは、シエラが初めてだわ」

「ルドヴィックのことなんて、どうでもいいわ、それよりもソフィ、あなたはなんていい人なんでしょう？　わたしの泣き虫にまで付き合ってくれるだもの、大ていはわたし、いつも一人で泣いているわ、だって人が泣いているときって、泣かれてる人はまったく退屈なものでしょう？」

そのときソフィの胸に、とつ然ある少女の泣いている姿が浮かんできた。

泣いて、泣いて、その少女もシエラとまったく同じようなことをいっていた。

「ソフィは、ほんといい人、泣いている人が泣きやむまで待つので、退屈でしょう？」

ソフィはその少女が誰なのだから、わかりすぎるほどわかっていた。「ソフィ？　わたしたち、お友達になれないかしら？　欲をいえば、

親友になりたいの、わたし、そりや良い子だわ。いぜんわたしには心に決めた親友がいたわ、その人がいまどうなったかなんて、いえないしほんとうのところはわたしにもわからないわ、けどいまも心の友よ。あることから、もう会わないって、二人で誓ったの。でも心の友って、さみしいものよ。じっさい会えないのだから、それからのわたし孤独だったわ。ねえ、友達になつてくださらない？ あなたとわたしは、なんだか心がつつじそうだわ」

それを聞いたソフィは、いままでのやわらかい表情をうちにおさめた。

さきほど胸に浮かんだ少女の顔が、いま言ったシエラとかさなつたからだつた。

ソフィはまた、あのいつも冷たい目をした、メイトリアル教会のソフィに戻っていた。

「さあ、あなたはメイトリアル教会に用事があるのでしょう？ わたしからジャーヴィス先生に話をとおしてあげるわ、一しよにいらいっしやい」

そういつてソフィは、ひとりシルバーの髪をひるがえしながら、遠くに見える十字架をめざして歩きはじめた。

シエラのさけび

「それであなた、レッスンの経験は？」

メアリー・ヒルトン先生はひやかやかに、顔さえあげないで聞いた。シエラは、これは気むずかしい先生のおでましたと、かたく口をむすんだ。

ソフィははじめ、シエラをジャーヴィス先生に合わせるつもりだった。

ジャーヴィス先生は、子どもたちの面倒をよくみる、頼もしい先生の一人だからだ。

けれども先生が留守とのことで、シエラは急ぎよヒルトン先生の部屋に案内された。

ヒルトン先生は、子どもたちが逃げだすほどの、いつも凜とした先生だった。

そのとげとげしさは、ヒルトン先生の部屋を見ればすぐにわかった。本、机、棚がちよつとあるだけで、美しい花や、いい匂いの紅茶のセットなど、心をなごます品じなは一切なかった。

ソフィはこのおもしろみのない部屋のドアを背に、先生の机のまえに立った、あわれなシエラをながめていた。

「聞こえましたか？ レッスンの経験はありますか？」

「いいえ！ いいえ、ありません。わたし、お金がなかったもので、レッスンらしいレッスンはいままでに一度もつけた経験がありません。もっとも、どの先生もわたしにレッスンして下さりませんでした。つまりいつも断られてしまっていたのです」

シエラはしおらしく肩を落として、いった。

「レッスンの経験がないのに、うちの聖歌隊に入りたいと？」

「はい。歌は、わたしだんだん上達していくと思いますわ。きちんと教えて下されば、教えて下すつたなりに、だんだん歌えるようになりますわ。わたしもの覚えがいい方ですから」

「だんだんですって？」

ヒルトン先生はそこではじめて顔をあげて、ゆっくりと眼鏡をはずした。

「バーゲンダーツから遙ばる来てもらって、気の毒だけれども、あなたはここへは入れません。とくに近ごろは、だれもかれもが聖歌隊に入りたがってしまって、こちらとしてはまったく困っているところなんです。子どもたちが夢をもつことはいいことですが、歌手になるには、たぐいまれなる素質と努力が必要なのです。ですからあなたのようなレッスンを一度もうけない子どもをうちにひきとることはできません。来年うちへ入る子たちは、幼い頃から優秀な先生について、きびしいレッスンを続けて、この子は！ という推薦すいせんが出されて、やっと入隊を許されるのです。

ほんとうはあなたのような、なんの手続きをもふまない、とび込みの子は、わたしたち教会はうけあわない方針なのです。ところがソフィときたら、どこの馬の骨ともしれないあなたをつれて来てしまったとあって、わたしたちはほんとうに戸惑ったのですよ。ですからしかたなく時間をつくって、あなたに話を聞いたのです。ところが聞けば聞くほど、あなたはわたしをがっかりさせるのです。ソフィ？ これはいつたいたいなんの冗談？」

ソフィはドアに背中をつけたまま、静かに目をあげていた。その目は反抗とも、賛同ともつかい、放心の気配があった。

シエラはたまらず先生の机にしがみついた。

「おお！ お願いですわヒルトン先生！ そうおっしゃらずに、わたしをどうかメイトリアル教会の聖歌隊に入れて下さいな！ そのためだったらわたし、なんでもやります！ ネズミだらけの地下室だって、クモの巣だらけの天井うらだって、どんなところだって我慢します、ただここに入れてもらいさえすれば、わたしはひつしにがんばります！ どうぞ、どうぞわたしをここへ入れてください！」

「大きな声を出すものではありません。どんなにいつても、あなた

はここへは入れません。あなたのその身なり、もしかしてみなし子ですか？」

「いいえ」

「ではまっすぐご両親のもとへお帰りなさい。きつとご心配なさっていると思うわ。もしも帰りのお金がないというのであれば、こちらでなんとかくめんします。まさか文なしの子どもをこのままつきかえすわけにもいきませんからね。ソフィ、マクラーレンさんについて、馬車の用意を」

「いいえ、わたしは帰りませんとも。ここへ入れてもらえるまで、いつまでも外で野宿して待ちます」

「まったく聞きわけのない子どもですね。わたしたちが一回ダメとிட்டたものは、ダメなのですからね。ソフィ？」

するとシエラは涙をいっぱいにして叫んだ。

「わたしはシエラ・クロウなのよ！ これから親友のために、世界に羽ばたいて、大きく歌い続けなければならないの！ 世界のいたるところで困っている人たちのために、わたしは歌い続けなければならないの！ こんなところでモタモタしていられないわ！」

叫び声にびっくりしたヒルトン先生は、大きく胸をおさえて、いきおい言葉を失ってしまった。

これに我に返ったソフィは、まだギャーギャー叫ぶシエラの手をひっぱって、部屋から飛び出して行った。

月は、雲にかくれかくれ、草原いっぱいを照らしていた。

ソフィとシエラは、夜草のしげみに立って、ランプの灯をかこんでいた。

「ほんとうに、マクラーレンさんの馬車に乗らないでいいの？」

ソフィは心ぼそそうにいった。

「乗らないわ。だってわたし、バーゲンダーツには帰らないもの。どうしたって、聖歌隊に入れてもらうまでは、きつとあきらめないわ。そりゃいまのところ形勢はよかないわ。レッスンをうけるのが、そんなに大切だったなんて、わたし知らなかったんですもの。なにかほかにいい手がないか、ちょっと策をねらなければならぬわね」
「ほかにいい手って、シエラ、あなたここをあきらめなければならぬわね。ヒルトン先生のいうことは、冷たいようだけれども、ほんとうのこと。シエラはこの教会のことを知らなすぎるわ。あなたがもしなんらかの手をつかってここへ入れたとしても、無理だわ。わたしたちについてこれやしない、きつと一日ももたないで、泣きながら逃げ出すはめになるわ。だから、ね、このお金はヒルトン先生から預かったの、あなたいまは文なしでしょう？」

ソフィはそういって、旅費の入った封筒をシエラの手ににぎらせた。

「いいえソフィ、これはうけとれないわ。もしもこれをうけとってしまったら、わたしはほんとうに負けたことになってしまうの。どうしたってわたし、もう負けるわけにはいかないのよ」

いいながらシエラはふと、月光に浮き上がる美しいソフィにみとれた。

「ああ、あなたやっぱり美しいわ。きつとソフィは歌が上手なのね、それもうんとね。先生の態度を見ればわかるわ。わたしのような歌がヘタな人の気持ちって、ああ、わからないのでしょうね」

『ソフィにはわからないわ』

そのときソフィの胸にまた、ある少女の泣き顔が浮かんできた。

『ソフィはね、歌がヘタな人の気持ちなんて、わからないのよ、どんなに真剣に歌ったって、誰も見むきもしない、そんな気持ち、わからないでしょう？』

ソフィは苦しそうに首をふった。

『ほらみなさい、ソフィはあたしのこと、親友だっていうけれど、

親友の苦しみが一つもわからないのよ！ さよなら、ソフィ」

ソフィは、のどから黒い水があがってきそうになって、ぎゅっと胸をにぎりつぶした。

「ソフィ？」

「なんでもないわ」

「つまりこれは、うけとれないわ、ヒルトン先生にお返しして下さいらない？」

「……………」

うけとった封筒へ目をおろしながら、けれどもこんどソフィは黙りこくってしまった。

「…………ソフィ、あの、あのねえ、やっぱりお願いをきいて下さらない？ わたし、いまはとりあえず、いったん、かりに、どうしようもなく引き返すけれども、またすぐにもどって来るあいだ、わたしと親友になつてほしいの！ わたしそりやあなたのことが好きになつてしまったんだもの、ピンときたんだわ、あなたはわたしの話をきいて下さるし、親切だし、なによりふしぎな親しさを感じるの！ ふしぎな親しさって、素敵 なひびきだわ。いつか同じ木のうえで、同じりんごをかじって、なかよくお話したいわ、さあ、わたしと親友になると、くびをたてにふってちょうだい」

シエラが熱っぽく見つめる先には、血の色のうちせた、美しいソフィの顔が、ランプの灯に浮かびあがっていた。

「親友なんて、そんなくだらしない言葉をつかうのはやめて。もうたくさんの。わたしはもう誰とも親友になんてならない。」

わたしは呪われているの。知ってる？ わたしのこの歌声が、この恐ろしいほど美しい歌声が、どれほど呪われているか。みんな知ってるわ、リユーイツヒもね。

シエラはチャスタリカ湖の伝説の話をしたわよね、いきちがいから犯してしまった罪、それをつくなう乙女の話。ちょうどわたしはそれだわ。わたしは罪ぶかい歌姫で、毎にち毎にち、この教会にしばられて呪われた歌を歌うの。永遠にね」

シエラはさし出した手をしずかにおろした。

「わかったわソフィ。わたしとあなたは親友にはなれない、ええ、きつとそれはいまのところとうぜんだわ。」

でもねソフィ、聞いて、あなたにどんな暗い過去があるかは知らないけれど、わたしはぜつたいにあきらめないわ。過去は過去のこゝとだもの。もしもつらい過去のことを一生なやまなければならぬのなら、未来つていつたいなんなのかしら？ わたしたちはそれをのり越えることができるの、それって素敵じゃないかしら。なにもソフィだけがつらい過去をもっているんじゃない、わたしだって、みんなだつてもっているわ。でもわたしはのり越えてみせるわ、そのためにはまず、メイトリアル教会の聖歌隊に入らなければならぬの。

ねえ、こうしない？ もしもわたしが、奇跡的にあなたたちの聖歌隊に入れたら、そのときはわたしと親友になつて下さらない？

わたしはきつとあきらめない、どんなことがあつたつて、くじけやしないんだわ！」

ソフィは、このしつこい青い目に、なかばあきれながら、けれどもサラサラと笑い飛ばせない何かを感じとつた。

「いいわ。シエラはぜつたいにここへは入れっこないもの。それでもあなたがもし、世界で名高いメイトリアル教会の聖歌隊に入れたというのなら、わたしはよろこんであなたと親友になるわ。これはおたがい、根くらべというところね」

こうして二人は、約束を確かめあうように、大きなあくしゅをかわして別れた。シエラは月あかりの草原をふみ、ソフィはローソクの火がもれる教会へ、お互い背中をむけた。

「従順に、平静に、おのれの十字架をになう」

誰もいない聖堂にむかつて、こうソフィは祈つた。

ローズマリーの挑戦

大きな馬車が一台、メイトリアル教会をめざして、夜の小道をいそいでいた。

馬車のあるじはミシェル・フィッチという、品の良い夫人だった。フィッチ夫人といえば、いまも世界をまたにかけて活躍する歌い手で、体がふたつにわれんばかりに忙しい生活をおくっていた。海を越え、山を越え、世界の舞台に立って、大いなる拍手をあびていた。

そんなフィッチ夫人は、これからメイトリアル教会の親善会に出席するために、馬車の客室に乗って、夜道をいそいでいた。

「ローズマリー、さあローズマリーおきなさい、もうすぐメイトリアル教会につきますよ。まあこんなに遅くなってしまって、私たちを待っているヒルトンさんに申し訳ないわ」

フィッチ夫人は困り顔で、となりで寝ていたローズマリー・ヨハンソンをゆすりおこした。

ローズマリーは十三歳、まだ化粧も似合わないあどけない少女だった。

「あらフィッチさん、あたしいつ寝てしまったの？ まったくあたた疲れきってしまったわ。だって二日も馬車に乗りっぱなしなもの、おしりが痛くなつたわ」

「ローズマリー、まあなんてむくれつ面をしているの？ これからあなたはこのわたしのように世界中を旅して、たくさん舞台上に立たなければならぬですよ、これしき馬車に乗ったくらいで、ぶーぶーいうのではありません」

「おおいやだ。だったらあたし歌手になんてならないわ。そうだわ、世界中の人びとがあたしの歌をききに集まってくればいいんだわ、そしたらあたし、こんな退屈な長旅をしないですむもの」

「まったくローズマリーときたら、どうしてそういつもぶてぶてし

いことばかりをいうのでしよう。あなたが歌の天才児というのでなかつたら、先生はとづくにあなたから逃げ出しているところですよ」

フィッチ夫人は、化粧をぬった顔をそらして、窓の外をながめた。「今回はあなたにとって、ほんとうにいい機会なのです。あなたはじぶんに歌の才能があるものだから、のぼせあがっているのです。じぶんを負かすほどのライバルというものに、まだあなたは出会ったことがないから、なまけぐせがぬけないのです。そこでこんや、あなたをソフィ・シンクレリアに会わせよう、先生はそう決心したのです。世界は広いのよ。こんやローズマリーは、ほんとうの天才歌手に出会い、心から負けを認めて、一から心をいれなおす、記念すべき日になるでしょう」

ローズマリーは、花のような衣装にうずくまって、高だかど鼻をつきあげた。

「いまいち、先生のいうことは信用できないわ。だって、あたしよりの歌のうまい天才が、どうしてこんなへんぴなところで、せこせこ歌を歌っているのかしら？」

「ローズマリー、口をつつしみなさい。ソフィ・シンクレリアは、メイトリアル教会に身をささげているのです。あなたも、メイトリアル教会の聖歌隊がどれほどのものか、知っていますでしょう？」

「ええ、でも、パツとしないわ。古いのよ、なんていうのかしら、飛ばない感じ？」

「またこの子ときたらすぐに都会的な言葉を使って。いいですかローズマリー、ほんとうに美しい花は、どこに飾られていてもうるわしき香りを放つものです」

「あらあたしウソはいわないわ。美しい花だって、しみつたれた空き家に飾られていたら、だれも香りをほめてくれる人はいないでしょう？ それにソフィだって、きつと大したことないと思うわ。いなかのうわさつてそんなものよ。いつもおおげさなだから。これもウソではないわ。こんやソフィの歌声をきいて、大したことがないなとおもったら、あたしそつちよくにいうわ。あなたの歌はパツ

としないわねって」

ローズマリーは、きれいに巻いた巻き髪をゆびであそびながら、クスクスわらった。

そんなあつかいづらいじぶんの教え子を見ながら、フィッチ夫人は大きなため息を落とした。

「さあさあメイトリアル教会につきましたよ。ローズマリー？
こんやはこの間の舞台のように、みんなのまえで大きな口をたたいて、先生を困らせるではありませんよ。なんたってあなたは、もう大スターの気にいるのですからね、くれぐれも失礼のないようになさい」

2

フィッチ夫人がめざす親善会は、メイトリアル教会のとなりにある、小さなホールでとり行われていた。

いまやホールの中では、華やかな衣装をまとった婦人たちと、修道服をまとった少女たちが、にぎやかな親善会をすごしていた。

テーブルのうえには、アイスクリームやレモネード、プディングなどがならんでいた、とちよūdその一つを手を取ったのが、馬顔のパラメ・ドレイクだった。

「気に入らないわね！」

パラメはぷりぷりして、レモネードを一息に飲みほした。

「聖歌隊のリーダーたるあたしが、なぜこんな屈辱をうけなければならぬのかしらね！ エイミー、グレース、聞いているの？」

ぎよる目のエイミーは、いまいましそうにアイスクリームをほおばりながら、

「きいてますとも！ もとはといえばみんなソフィが悪いのよ！
だのにどうしてあたしたちがこんな目にあわなければならぬのか

しら！」

パラメらがぶんすか怒るのも無理はなかった。というのも彼女らはいまさつきヒルトン先生からこつてりしぼられたばかりである。

ソフィをだましてラスタルまで買物させたイタズラが、どうしてか先生の耳に入ったのだ。

「エイミーなんかまだいい方だわ、グレースを見てみなさいかわいそうに、ちよつと口ごたえしたものだから、あたしよりも五発おおくムチが入ったのよ！」

まるつ鼻のグレースは、痛むおしりをかばいながら、絶妙な歩き方をした。

「いたわ！ ソフィよ、あすこにソフィがいるわ、まあすました顔をしちやつてさ、見てなさいエイミー、グレース、あたしがあんたちの敵をとつてあげるから！」

ソフィは、にぎやかな親善会にありながら、ひと知れずホールの片すみに立っていた。

その顔はいつものように冷たそうで、つまらなそうで、誰からも遠ざかるように、ひとり立っていた。

そこへわけあり顔のパラメたちがやってきたとあつて、ソフィの顔はより一そうくもつた。

「あらあら大スターさん、まあどうしたの？ そんなすみっこで一人さみしくたたずみなすつて、なにか不愉快な思いでもなすつたのかしら？」

パラメは大きく腕くみしながら、ソフィのま正面に立ちはだかつた。

エイミーとおしりをかばったグレースも、ちよつと遅れて左右からソフィをはさみ込んだ。

「あたしは懸命よ、あなたがジョークを本気になすつて、一部始終をヒルトン先生に告げ口なさつたつて、このとおり大いに親善会を楽しんでいるのだもの」

告げ口？ とソフィはこくびを傾げた。

ヒルトン先生に告げ口なんて、ソフィにはまったく身に覚えがなかった。

しかしソフィの頭にはすぐにリユーイッヒの顔が思い浮かんだ。ははんと思っただ。

パラメたちのイタズラを先生に報告したは、リユーイッヒだった。「なんとかいいなすつたら、どう？ 卑怯じゃない、コソコソうらで動くようなマネをして。もっと正々堂々と、あたしたちと渡り合いなさいよ」

「正々堂々？」

ソフィは冷静に、いった。

「ウソの買物頼んで、人を困らせることは、正々堂々かしら？」
パラメのまゆがぴくりと動いた。

「あれはあんまりにもあなたがヒマそうだったから、あたしたちはちよつとからかってあげただけのことよ。それをまあ深刻に考えなすつて、先生にまで告げ口して、あなたやるのがオーバーだわ、そんな波かぜを立てる人が一人でも聖歌隊にいと、あたしらみんな迷惑するわ」

「なら先生にこう伝えて。聖歌隊に波かぜを立てるソフィは、メイトリール教会に不必要ですつて、わたしは結構よ。だれかさんみために、是が非でも聖歌隊の座にしがみつくほど、熱心家でもないのだから」

とうとうパラメは顔をまっ赤にして、怒った。

「おだまりなさい！ あんたなにさまのつもりよこんちくしょう！
いつも不熱心で、いい加減で、どうしてあんたみたいなまけものが聖歌隊のトップにいられるのよ！ あたしたちがどれだけ血の出るほど苦しいレッスンをしていると思ってるのよ！ 土下座でもなんでもして、いま言ったことをあたしたちにあやまりなさい！」

ソフィは、あのパラメが本気で怒ったというので、少なからず驚いてしまった。

にぎやかだったホール内でも、パラメの怒鳴り声に、しばらく興が冷めた様子だった。

「ソフィ？ どこにいるのかしらソフィ？」

ちようどそこへ、じぶんの犬でも探すような、ヒルトン先生の声が聞こえてきた。

「まああなたそんなすみっこでなにをやっているの？ あなたに大せつなお客さまがおいでよ、さあ早くこちらへいらっしやい」

何やらわからないながらもソフィは、ヒルトン先生に手をとられて、その場を去った。

それをゆびをくわえて見ていたパラメは、非常にくやしがつた。

「なによ先生つたら、ふたことめにはソフィソフィって、聖歌隊のリーダーはこのあたしなのよ！ なぜもつとあたしをかまってくれないのよ！ エイミー、グレース、むしゃくしゃするから、あんたたちあっちへいってなさい」

ソフィが連れられていった先では、大きな人だかりができあがっていた。

それというのも、あのフィッチ夫人が親善会に到着したということとだった。

「まあソフィ！ あなた見ちがえたわ！ わたしのこと覚えていますか？」

フィッチ夫人はたったいま到着したばかりの様子で、白のボンネットをはずしながら、ソフィの手をとった。

「まあフィッチ先生……お久しぶりです」

ソフィは古くからフィッチ夫人を知っていた。

ミシエル・フィッチといえば、世界的にも有名な歌手だが、そのまえに、もとメイトリアル教会の先生だった。

それはソフィがまだほんの幼いころの話で、歌のレッスンというよりは、フィッチ先生と一しょに合唱を楽しんだというくらいのものであった。

「ソフィ、ほんとうに立派におなりになって、あの頃はまだまだイ

タズラ好きのあどけない少女だったのですが、もうすっかり大人のおちつきをもって。あなたの名声は、遠い異国にいても、ちゃんとこの耳に届いていますからね」

「名声？ そんな、わたしはメイトリアル教会の聖歌隊の一人にすぎません」

とそのときソフィは、フィッチ夫人の横に立った、ちよつと生意気そうな少女に目がいった。

その少女はソフィの視線に気づき、すぐに手をさしだした。

「はじめましてソフィ、あたしローズマリー、ローズマリー・ヨハンソン。あなた思っていたよりもずっときれいな人で良かったわ。ウソじゃないわ、だってうわさに聞く歌姫の顔がまずいのじゃあ、拍子ぬけじゃない？」

「ローズマリー！ あなたまたなんて失礼なことをいうのです、歌手は顔ではないと、あれほどいつて聞かせたではありませんか！」

「だって先生、先月に観たルーシー・ルーカスなんて、とてもじゃないけれど見ていられなかったわ。デコボコ岩みたいな顔をして、天使の歌声だなんて、あたし天使ってどんなかと思っちゃったわ。ソフィもそう思わない？」

ソフィはなんと答えないで、フィッチ夫人の顔を見た。

「ああ紹介が遅れましたね、この子はわたしの教え子、ローズマリー・ヨハンソンです。かのロタオール音楽祭で、最優秀賞をとったというので、どうもいい気になっているのです」

「まあ！」とヒルトン先生は、おなじく驚いたジャーヴィス先生と顔を見あわせた。

この小さな、こつまんちきな少女が、あのロタオール音楽祭の最優秀賞に？

「大したことじゃないわ、だってそうでしょう？ フィッチ先生だって、受賞したことがあるのだから、あたしだって受賞しなくっちゃ、先生に悪いわ」

ローズマリーは、口をひらくたびにチラチラとソフィを見た。

どうかしら、恐れ入ったかしら、そんな目だった。

ところがソフィは一つも驚いた顔を見せずに、ただヒルトン先生の横に立っていた。

「まあこんな小さな少女が最優秀賞をおとりになるなんて、ちょっとやそつとでは信じられませんか。さすがフィツチ夫人の教え子と聞いたところですね。ロタオール音楽大学の賞といえば、ほんとうにたぐいまれなる才能がなければ、けっして叶いません。それは優秀な音大生にとっても、そうです。そこをこんな小さな少女が最優秀賞だなんて、まああいた口がふさがりませんわ」

ヒルトン先生は、みるからに脱帽といった様子で、いった。

「おやめくださいヒルトンさん。そんな言葉はこの子の鼻を高くするだけのことです。ちょっとよい賞をとったくらいで、足もとが見えなくなっているのですから、こんやはこらしめなくてはならないのです」

「こらしめる？」

ジャーヴィス先生はこくびをかしげた。

「そうです。こんやはローズマリーに、メイトリアル教会のすばらしさ、恐ろしさをいやってほど教え込まなくてはならないのです。それはそれはメイトリアル教会の聖歌隊ほど、わたしの記憶に残っている聖歌隊はありません。そして当時メイトリアル教会の聖歌隊リーダーをなさっておられたヒルトンさんは、わたしに歌とはなにか、お教えくださったのです。ローズマリー？ 歌とはなんですか？」

「あはやだ先生、あたしなんでもいつてるわ、歌とは才能よ」

ローズマリーは何のくつたくもない顔で、答えた。

「ヒルトンさん、このとおりの子なのです。これではむかし、いい気になっていた頃のわたしと変わりませんわ。数年まえ、わたしがここで教えてもらったことを、こんやローズマリーにも、教えたいと思ひまして、つれて参ったのです。」

いかがでしょう、ヒルトン先生、いますぐにも偉大なるメイトリ

アール教会の聖歌隊の歌声を聴かせていただけませんか？

無理は承知です。歌手にとって突ぜん歌えというのは、寝ている小鳥をいきなり夜空へ飛ばたかせるも同じこと、けれどもそこは日頃からきびしいレッスンをうけていらっしやる少女たちのことです、やってやれないことはないとわたしは信じております」

ヒルトン先生とジャーヴィス先生は、このフィッチ夫人の願いにふたつ返事で答えはしなかった。

それよりも大へん困った顔をして、教え子の少女たちの顔を見渡した。

「フィッチさん、あなたのお考えはよくわかりましたが、なにもいまずぐに歌えとおっしゃらなくても、いいじゃありませんか。こんやはたのしい親善会、少女たちもリラックスしていたところですよ、まあ、とにかく冷たい飲み物でも」

ヒルトン先生は、まあまあ、といった調子で、場をやわらげようとつとめた。

「もちろんただ聴かせるとはいいません、さきにローズマリーに歌わせます、それはあなたがたにも良い刺激となるでしょうから」

先生がたは、フィッチ夫人の強引なやり口に、いよいよ困惑をおぼえた。

そのようなつもりでこんや親善会をもよおしたわけではない、それにこれではまるで歌の勝負となりはしないか、という懸念があった。

もしもこのローズマリー・ヨハンソンの歌が絶品で、メイトリアル教会の聖歌隊が称賛にあたいしないとなったら、教会の威信にかかわる、伝統と名誉に大きなキズがつく。大切な後援者たちもおもしろくない、そうかといってフィッチ夫人の申し出を断っては、せつかく遠方からいらしたものを失礼にあたる、これではまるで道場やぶりのようではないかと、先生がたは判断に困った。

「ローズマリー、準備はよろしいですか？」

「いつでもいいわ」

メイトリアールの先生がたがなんとも答えないうちから、二人は壇上にあがって、フィッチ夫人はピアノ、ローズマリーはその横に立ち、発声のポーズをとった。

ソフィのもとに、野次馬らしいリユーイツヒがとんできた。

「ソフィ、これはいったいぜんたい、なにがどうなっているの？」

これからいつたいなにが始まるうとしているの？」

「さあ」

親善会を楽しんでいた婦人たち、聖歌隊の少女たちは、急な話についてゆけず、ただただ奇妙ななりゆきを見守った。

フィッチ夫人のピアノの伴奏が流れ出すと、ローズマリーは小さなからだに大きく息をすい、聖歌のソロパートを歌いはじめた。

その歌声を耳にしたとき、ホールにいる誰しもが、わが耳をうたぐった。

一言でいうと、ローズマリーの歌は変幻自在だった。

導入部はうすい絹のような繊細さ、そこから一気に生命が脈動するような力づよさに変化していった。

気づけばホール中の窓ガラスが、ローズマリーの歌声によって、ビリビリと小刻みに振るえていた。

「すごい」

拍手というよりは、誰の口からもため息がもれた。

そして誰のあたまにも『天才』というふた文字が浮かんで消えなかった。

「さあソフィ、こんどはあなたの番よ！」

ローズマリーは壇上から、まっすぐソフィをゆびさした。

ところがソフィは、なんとということもない顔をして、つと立っていた。

となりのリユーイツヒのように興奮もしないし、ヒルトン先生のように肝を冷やしもしなかった。

ただいつものように、呪われた毎日の、呪われた夜をすごすのみだった。

これから先生が、聖歌隊にまざって歌えというなら、歌うし、歌うなというのならば、歌わない、ただそれだけのことだった。

「わかりましたフィッチさん、あなたのお目にかなうかは存じませんが、こちらも一つ何かお聴かせいたしましょう。なにしろ親善会のプログラムにない、急なカルテットになりますから、どのような醜態をさらすかは、正直わたくしにもわかりません。パラメや、すぐに整列を」

ヒルトン先生のこの一声は、少女たちをたちまち混乱の渦につき落としました。

「なにをぐずぐずしているのです、あなたたちは伝統ぶかいメイトリアル教会の聖歌隊の一員なのです、いついかなるときでも、心に威厳をもちなさい！」

尻をたたかれる思いで、散り散りだった少女たちは、たちまち壇上にかけて上った。

エイミーなどはちょうどアイスクリームをほおばったところで、目を白黒させていた。

みんな一様に心をまどわせ、足が地につかない状態だった。

「いったいどうなっているのよ！ こんな話はきいていないわ！

あの小娘はなにものなの！ あんなぶつとんだ歌を聴かされたあとじゃあ、さすがのパラメ様も正気でなんかいられないわ！」

ずらりとならんだ聖歌隊の面々は、どれも死んだように色をうしなっていた。

あるものは下をむき、あるものはひつしで足のふるえをがまんしていた。

「用意はいいですね？ 今朝やったものを三楽章だけ歌います。それだけですから、なにも気に病むことはありません。あなたたちならば、ちよつとした余興にすぎないでしょう？ おちついてやれば、なんでもありません」

ヒルトン先生はピアノに腰かけて、ゆっくりと鍵盤をゆびでなぞった。

そして歌い出しに来たとき、思いがけない、ひどい和声となって、みんなの緊張の絶頂があらわれた。

ジャーヴィス先生は手で顔をおおってしまうし、ローズマリーはクスクスと肩ふるわせていた。

フィッチ夫人だけは、一人まじめな顔をして、ただソフィだけを見つめていた。

「さあソフィ、あなたの真のちからを見せてちょうだい、あなたはこんな茶番にあっても、じぶんの輝きをけっして失わないはずです」
クリスタルの響きのように神々しいはずの混声四部合唱は、枯れ木の枝が北風に鳴るような、とんでもなく切ない、カルテットとなつた。

少女らの口は、ひとり閉じ、ふたり閉じて、脱落していく悲しさがあつた。

「ほらみなさい、こないなかの聖歌隊なんて、けつきよくはこの程度。先生も人がわるいわ、このローズマリーをわざわざ遠いところまでひっぱってきて、こんな学芸会レベルの合唱を聴かせるなんて」

誰もがメイトリアル教会の聖歌隊に失望を感じはじめたそのとき、なにかしら音の響きに異変が起こつた。

「あら？ おかしいわね、もうメイトリアルの聖歌隊は地におちているはずなのに、ちっとも歌声に死にゆく気配がないじゃないの。なにかしら、この一すじの光のような、かすかな輝きがあるのは？

まさか、ソフィ？ これがソフィなの？」

聖歌隊の死んだ表情の中で、ただ一人だけ、決して色を失わない顔があつた。

その歌声は腐りきつた周囲のハーモニーを浴びながら、みるみるホールいっぱいに響きわたりはじめた。

聖歌隊の少女たちが失つてしまつてから、ソフィのパートだけが、ソフィの歌声だけが、ヒルトン先生のピアノに合わせて、恐ろしい美しさを放つていた。

ただ一つのパートが、ただ一つの歌声が、ひとり歩きし、いつしかソロとなった。

これはフィッチ夫人もローズマリーにしても、思いがけないことだった。

一つのパートが、ここまで完成されて、そのみが芸術となりえようとは、思いもよらなかった。

そればかりか、一つのパートのみの音で、ふしぎと全体のハーモニーが耳に浮かんでくるような、いままでに聴いたことのない、新世界だった。

「ちよつとどういうことよ！　なんでたった一つのパートだけで、こんなにも完成された世界があるの？　どうしてほかのパートは歌っていないのに、勝手に耳の中に聞こえてくる音があるの？　いたいあたしの耳はどうなってしまったているの！」

ローズマリー・ヨハンソンは、このときはじめてソフィ・シンクレリアの真の恐ろしさを知った。

こんな型破りな歌姫を彼女は未だかつて知らなかった。

じぶんがもし、いまのソフィの状況にあつたら、きっと歌うのをやめて、とつと壇上を降りてしまうことだろう。

仲間を馬鹿にして、くそみにいいののしって、ツバのひとつでも吐きかけたかもしれない。

そこをソフィははじめから最後まで、技巧らしい技巧もこらさず、じぶんのパートを歌いきった。

「ブラボー！　ソフィ・シンクレリア、あなたはやはりわたしの見込んだとおりです！」

ピアノの伴奏がやむやいなや、フィッチ夫人はおしめない拍手をソフィにおくった。

ソフィはけれども、これといってなんら感情も変えず、ひとしきり冷たい目をおろしていた。

こんなもので良いのかしら？　こんなもので喜んでもらえるなら良かったけれども、そんな目だった。

とそんな時、ソフィの暗い目がパツと色をもった。

というのも、ホールに並んだ窓の外から、誰かがこちらをのぞきこんでいるのが目についたからだだった。

「シエラ」

ソフィは、それがどうしてもあの青い目をしたシエラ・クロウに見えてしかたがなかった。

あの娘が戻ってきた。

ソフィの胸にぐつとなにかがこみ上げてきた。

無銭飲食の疑いでつきとばされても、まっすぐに立ち上がる勇氣、泣き虫のくせにルドヴィックの足を思い切り踏んづける大かんしゃくもち、いちど決めたらテコでも動かないかたい決意、あきらめの悪い根性、そのすべてが昔のある少女にうり二つだった。

ソフィはハツと口をおおった。

やっと悟ったのだ、なぜじぶんが無銭飲食の嫌疑からシエラを助け、彼女の言葉ひとつひとつに心ひかれたのか、その理由を。

シエラは似ていたのだ、じぶんがうら切り、死なせてしまった親愛なる友、ジヨセフィン・レタスに。

「シエラ！」

ソフィはそう気づくことで、一秒もじっとしていられなくなった。飛ぶように壇上をおり、戸惑う周囲をもともせず、ホールを駆け抜けていった。

「ソフィ！ あなたどこへ行くというの？ まだフィッチさんのあいさつがすんでいませんよ！ ソフィったら！」

扉を蹴破るようにおもてへ飛び出すと、誰かがのぞいていたはずの窓の外には、けれども誰の姿もなかった。

しかしその窓の下には、いくつかの木箱がつまれ、そこをよじ登って誰かがホール内をのぞいていたことだけは確かだった。

「シエラ、やっぱりシエラだったわ、あなたどうせお腹を空かせてもどって来たにちがいないわね、意地っぱりのくせに、まあなんてこどもなのかしら」

ソフィは、月の草原に背のびをするようにして広く見渡しながら、
しばらくはシルバーの髪を夜風になびかせていた。

主なきレセプション

ローズマリーはちょっと怒ったふうに、さつさと馬車に乗り込んでしまった。

それを見たフィッチ夫人はほつと息をついて、いった。

「あのこうまんちきなローズマリー・ヨハンソンは、こんやはつきりとじぶんの負けを認めたのです。それはまったく生まれて初めての経験でしょう。ものごころついた頃から天才少女としてもはやされた彼女が、初めて認めた敗北。その証拠に、あの子はソフィの歌声を一つもけなさなかつたのです。大きな口をたたくせに、ウソを一つもいわないのも、あの子の持ちようですわ。それほどんやソフィの歌声はすば抜けていたということですね。わたしはちょっと恐ろしい気がしましたよ、ソフィはローズマリーをおびやかす存在でありながら、このミシェル・フィッチさえおびやかす存在になってしまったということですね」

フィッチ夫人は、もう少しゆっくりしていかれては？ というヒルトン先生の誘いも聞こえないふうで、とつと馬車に乗り込んでしまった。

それを見送るヒルトン先生とジャーヴィス先生の間で、こんな会話が あつた。

「ヒルトン先生、こんやはどうもありがとうございました。まったく恥ずかしい話ですわ、メイトリアル教会の威信は、くびの皮いち枚でつなぎとめられたのですから。たった一人の少女、ソフィ・シンクレリアによって」

「でも困ったものですねソフィにも。歌は良いのですけれども、あの日くらい、まるで心が死んでしまったようではありませんか。ジョセフィンが死んでしまったあの日くらい。きつと今までですべての不幸がじぶんのせいかのように思いこんでいるのでしょうか」

「ジョセフィンといえば、もう何年まえのことになるでしょう、あ

のときは私まったく悪いことをしましたわ。だって、ちゃんとソフィに事情を説明していれば、まさかジョセフィンがここを去ることもなかったでしょうに。そういう意味では、ソフィは私をもうらんでいることでしょうね」

「いいえジャーヴィス先生、その件にかんしてはすべて、あの汽船会社が悪いのです。ソフィだって、それは承知しているでしょう。ですからソフィは、おのれをのみ、呪って生きているのです。おのれの歌の才能を底の底まで呪っているのです。はてさて、ソフィの呪いはいつとかれることかしらね」

よく日、メイトリアル教会にまた平穏な日々がやってきた。

ひとつだけ変わった出来事があった。

それはちょうど昼下がりに、ルドヴィック・スピードが野花をたずさえながら、教会にやってきたことだった。

「きのうの子、いるかな？ たしかシエラ・クロウってなまえだったかな」

ソフィはちよつと意外な顔をした。

「一ことお詫びをいいたくってね、まさかぼくの冗談をまっ赤になつて怒るとは思わないじゃないか」

ソフィは教会に広がる果てしない草原を見渡しながら、きのうの出来事を話した。

「そうか、シエラはここへは入れなかったのか。それはでも、仕方のないことだね」

ルドヴィックは髪をかきあげながら、ひどくつまらなそうに引き返していった。

その様子を窓から見ていたリユーイッヒは、転げるように外へ飛び出してきた。

「ソフィ！　いまのルドヴィックじゃない？　彼なにしに来たのかしら！」

「シエラにおわびをとって」

「シエラ？　誰それ？　ソフィ！　ルドヴィックが来たのにどうし

てあたしを呼んでくれなかったの！　いまから走って追いかければ彼に追いつけるかしら？」

リューイツヒは顔をバラ色にしながら、まくしたてた。

「追いかけてみるといいわ。まだチャスタリカ湖にも行かないころよ」

ソフィは、どこか冷たい目をしていった。

そうして走り出したリューイツヒの背中をながめながら、ソフィは教会の十字架を背にした。

「リューイツヒはまるで小鳥のように色めきだって飛ぶわ。わたしとは正反対。そもそもわたしはもう人を愛することすら許されない。たとえわたしがルドヴィックに恋していたとしても、それは許されないこと」

それから二日たっても、三日たっても、一週間たっても、シエラは顔も見せなかった。

聖歌隊に入れてもらえるまではあきらめない、そういったシエラの言葉はまるでウソのように月日が流れた。

そしてとうとう夏の草原が秋の紅葉にうつろう頃、ついにソフィにとつて一番つらい日が到来した。

それは年に一度、メイトリアル教会でひらかれるレセプションの日だった。

「ソフィ？　今年もやはりあなたに頼りっきりになりそうだわ。なんだって今回のレセプションには去年にはない、各国から大勢の新聞記者がさつとうするという話なのよ。あさつての新聞にはソフィ、あなたの写真が大きく紙面を飾ることでしょう！」

十字架にいのりを捧げるソフィの背中に立って、ヒルトン先生は熱っぽい声を堂内に響かせた。

「ヒルトン先生は、おわかりのはずでは？　わたしにとって明日はどれほど呪われた日なのか」

ソフィはくびを回して、弱々しい目でいった。

「それはわかっていきますとも」

「でしたらわたし、あすは出なくてもよろしいですか？」

「なりません、なりませんよソフィ。あなたはもはや、メイトリアル教会の顔なの。あすのレセプションには、あなたためあてでたくさんの方々がいらっしやるわ。それはあなただつてわかっているはず。あの天才少女ローズマリー・ヨハンソンは、きのうヨーロッパの舞台で絶賛をあげたあと、あつまってきた記者たちにごう話したの、メイトリアルソフィがいるかぎり、このローズマリーは夜も眠れない。あなたはもう、世界にその名を知られてしまっているのよ。それをいつまでも過去のことでくよくよしてはなりません」

ソフィはけれども、いのりを捧げた手をほごうとしなかった。「なぜでしょうヒルトン先生、なぜ主はこの罪ぶかいわたしをもつともつと歌うように導くのでしょうか。かわいそうな一人の少女を地獄の底へたたき落とした、呪われた歌声を」

ヒルトン先生は決心したように、うしろからソフィの肩を抱いた。「ソフィ、あなたがジョセフィン・レタスにこだわる気持ちは先生にも十分わかるわ。親友の死は、だれにでもつらいもの。けれども人はいつか必ずそれを乗り越えなくてはならないのよ。もしも主があなたに歌えとおっしゃるのなら、それは主があなたに過去を克服しなさいとおっしゃっているでしょう」

するといつも冷たい目をしたソフィの目から、みるみる大つぶの涙があふれてきた。

「わたしはいまでも忘れられないのです！ 親友によってメイトリアル教会を追い出された、ジョセフィンのすりつぶされたような苦しみの顔が！ 先生、わたしは、わたしは、どうすればいいのでしょうか！ どうすればジョセフィンはわたしのことを許してくれるのでしょうか！ どうすれば！ どうすれば！ いつかあの世でジョセフィンは笑うことが叶うのでしょうか！」

ソフィは苦悶にあえぎながら、とうとう石の床につつぶした。それをヒルトン先生は抱き起こすことができなかつた。

メイトリアル教会のレセプションは、過去に例がないほどたくさんの人たちが集まってきた。

ラスタルから教会までの小道は、ひっきりなしに馬車がいきかい、教会にさえ入れなかった人たちは、窓からもれ聴こえる、賛美歌に耳を澄ませるといふ、異例のレセプションとなった。

しかしその歌声の中に、ソフィ・シンクレリアの声は、けっしてまざることはなかった。

大ぜい押しよせた記者たちは、したがってたくさんフィルムを余らせて、もんもんと馬車にのりこんでいった。

彼らには、ソフィ・シンクレリア不在のメイトリアル教会に、なんら価値はなかった。

さらに多くの信者たちも、口々に不平らしい言葉を周囲にばらまいて、帰宅後にさえ、家族に不平をもらした。

「ソフィは思わぬ期待をかけられて、怖くなって逃げだしたって話さ。天才少女ローズマリーを負かしたってのも、ぞんがいあやしい話にちがいないね」

一やく時の人となった、ソフィ・シンクレリアの評判は、この日をさかいにふつりと鳴りを静めた。

メイトリアル教会には、聖歌隊の少女たちが生活をともにする、大きな宿舎があった。

その長い廊下を、いままさに走りぬけていくのは、息をはずませたりユーイツヒだった。

彼女はほかの少女たちをはじき飛ばすいきおいで、ソフィ・シンクレリアの部屋へ飛び込んでいった。

「ソフィ！ ソフィったら、あなたなんてことをしてくれたの！」

リユーイツヒは希望に顔を輝かせながら、叫んぶようにいった。
「まあ、あわただしい小鳥が入って来たわ、いったいどうしたとい
うの」

ソフィは朝の窓に向かつて、たくさんの本を広げていた。

「あわただしいの、あわただしくないので、あなたそんな悠長に
座って。どうしてもつと早くにあたしに教えてくれなかったのかし
ら！ あなた先生になるって、ほんとうの話なの？」

ソフィはやわらかいため息をついて、本をとじた。

「リユーイツヒにはかなわないわ。あなたどうしてそう話が早い
かしら。誰から聞いたの？」

「ジャーヴィス先生と牧師さんの会話を盗み聞きしたのよ。という
ことはソフィ、本当の話なのね！ こんなことってあるかしら、前
代未聞だわ！ だって聖歌隊から先生が生まれるなんて、聞いたこ
とないもの。あなたあたしと同じ十五歳よ？ どこまでぶつとんだ
十五歳なのかしら？」

「リユーイツヒ、そうつぶばしらないで。わたしちゃんとした先生
になるってわけではないの。こここのところヴェウエル先生がお辞め
になったり、スペンサー先生がほかの教会へおもむいたり、いろい
ろ人手が足りないのよ。だからわたしはいつときの先生つていつた
ところ。それもまだ入ったばかりの少女たちを相手に、歌の稽古を
つけるといったところだから、そんな大さわぎするほどではないわ
リユーイツヒは後ろ手にくんで、つくえの教材をながめてまわつ
た。

「先生になるって、こんな難しい本を読まなくてはならないのね。

恋愛小説しか読まないあたしには、無理な話だわ」

「いいえ、これは楽典。もつとも簡単なものよ。けれどもこれらを
あまさず頭につめこんで、ロタールで先生になるテストを受けな
ければならないの。ちょうどそのときの先生はあの、ミシエル・フ
イチさんよ。ついさっきフィッチ先生から手紙がとどいて、よろ
しいぜひいらっしやい、手厳しくお迎えしますわって。先生の免許

がなければ、いくら小さな子供たちとはいえ、勝手にレッスンできないのよ。さいわいピアノの方は、ヒルトン先生がいらっしやるから心づよいわ」

リユーイツヒはひらけた窓の外をながめながら、いった。

「ソフィ、あなたまさかもう歌を歌わない気じゃないでしょうね？」
ソフィはほほえむように、ページをめくった。

「レセプションのときだってそう、なぜあなた歌わなかったのかしら。ピーターなんてイスにふんぞりかえって、ソフィが歌わないならこんな教会、ただの合唱コンクールだって、鼻で笑っていたわ。ルドヴィックだってそう、あなたが歌うのをどれだけ心待ちにしていたことかしら。」

ソフィ・シンクレリア、あなたいったいどうしてしまったの？
もう歌を歌うのがイヤになってしまったの？」

リユーイツヒはおてんばに窓に腰かけ、ソフィの美しいシルバールの髪を見おろした。

「リユーイツヒ？」

「なに」

「あなたおぼえているかしら、数ヶ月まえにここへ来た、シエラ・クロウって泥だらけの娘。たしかラスタルで無銭飲食にまちがわれて」

「ああ、そんなこともあったわね。ルドヴィックの足をふんずけたのだから、おぼえているわ。あたしの恋がたきといたところね、こんど会ったらただじゃおかない」

「そう、そのシエラ・クロウ。泣き虫で、おしゃべりで、とことん頑固。あたしはきつと待っているのよ、そのシエラのことを」

ソフィの目に、あたたかい紅葉の草木がうつりこんだ。

「はあ？ あれがここにまたやってくるのを、ソフィは待っているというの？ もしもそれが冗談でなかったら、あたしちつともおもしろくないわ」

「きつとそうね。そうだと思うわ。ヒルトン先生にも、同じことを

いわれたもの。あなたはどうかしているって。でもねリューイツヒ、わたしは本当に待っているのよ。シエラはわたしに約束したの、じぶんは必ずここへ戻ってきて、つきこそ必ずメイトリアル教会の聖歌隊に入るとね」

「くだらない話だわ。ソフィだってあのとき聞いてあきれたでしょう？ いちどもレツスンを受けたことがない、歌だって下手くそだつて。そんなのがまたここへ戻ってきたって、あのヒルトン先生が、鬼の形相で追い返すにきまっているもの」

「ええ、そうね。そうだと思うわ。わたしもそんな気がするわ。でもね、なにかがどうにかなくなってしまふような、そんなふしぎな気も、わたしにはするの。あの子はむちゃくちゃだけれども、わたしたちにはない、ふしぎな力がある気がして、ならないの。とくにわたしのような、教会の影のようにはばられた人間には、シエラのような自由にはばたく人間が、夢そのものようだわ」

リューイツヒは、なにかひどくつまらない気がして、窓から草原にとび降りた。

「ソフィ、あなたへんだわ。まえみたいにひどく落ち込んでいるのもイヤなものだけど、いまみたいに馬鹿げた話に夢中になるのも、あたしイヤだわ。ローズマリー・ヨハンソンって天才少女もへんなやつだったけど、ソフィも天才になってしまつと、へんになつちゃうものなのかしらね」

「そうかもしれないわね」

ソフィはべつに気にしないふうで、ふたたび譜面の手直しにもどった。

リリーの闘争

メイトリアル教会に雪がふった。

一めん枯れ草だった草原に、白い、美しいものがチラついたとあって、少女たちは大はしゃぎで雪のなかを歩いた。

リリー・ハーモンドは、けれども部屋に引きこもったまま、ぼんやり窓の雪をながめていた。

「リリー、あんた最近ちよつとへんだわ、ため息ばかりついちゃって。だれかに恋でもしているの？」

ルームメイトのアラン・シルヴァンは、ふつくらした体をベッドに横たえて、いった。

「恋？ あらそんなんじゃないわ。ちよつと考えごとをしていただけ。」

でもアランの目に、いまのあたしが恋をしているように見えるのなら、あたしほんとうに恋でもしているのかもしれないわ」

リリーは小さい小さい体を窓辺において、恥ずかしそうに笑った。「ソフィ・シンクレリアでしょう？ じっさいリリーはソフィにぞ

っこんだもの。毎日あなたの熱っぽいため息を聞かされる身にもなってみなさい、こつちまでなんだかけだるくなるわ」

アランは髪どめをくわえながら、大きく黒髪をまとめはじめた。

「アランだって知っているでしょう？ あたしはソフィさまにここがれてここへ入ったの。小さい頃からソフィさまの歌う神々しい姿に胸をこがして育った少女の一人よ。あたしにとってソフィ・シンクレリアはすべてだわ。その姿はまるで女神のようだし、美しい歌のしらべは人びとの心をやすらぎに導くの。それってほんとうにすてきよね、誰をもよせつけない孤高の歌姫。ああ、思っただけで胸が熱くなるわ。あたしけつしてソフィさまのようにはなれないけれども、すこしでも、すこしでもお近づきになりたいわ。だのに……」

リリーは急に色をうしなつて、せつないため息になった。

「だのにあたしときたら、メイトリアル教会に入ってからただの一度も、ソフィさまと口すらきいたことないの」

「それなら安心なさい、あたしもないわ。ここの少女たちのほとんどは、一言だつてソフィと話したことないと思うわ。」

だつて、ソフィは人嫌いだつてうわさじゃない。いつも一人つきりでいるし、やっとその姿を見かけたかと思えば、フィツとどこかへ消えてしまう。誰をもよせつけないあの冷たい目も、とつつきづらいわ。まあリユース・ポルターって人は、あんな性格だし、ソフィとは同期だから、一方的にソフィにまとわりついているけど、それをのぞいたら、ソフィに近づける人なんかいないわね。気むずかしそうで、あたしも用があつたつて、ちよつとやそつとじゃあ話しかけられないわ。とくにあんたみたいな下級生で、イジイジしている子には、無理だわね」

「はあ、なにかソフィさまとお話ができるいいチャンスはないものかしら。ソフィさま、ヒルトン先生がお呼びですよ、つてだけでも良いわ。そうしてあたしの、リレイ・ハーモンドという名をおぼえて下されば、なお良いわ。ねえアラン、あなたもなにか良い案を考えてちょうだい」

アランはつまらなそうに、ブーツのヒモをむすび始めた。

「あたしそとで雪でも見てくるわ。リレイといるとあたしまで、ソフィさま、だなんて言っちゃいそうなもの。」

あ、そういえば、ソフィ・シンクレリアって先生になるらしいわね。あたし詳しいことは知らないけど、ついこの間、ロタオールへ行つたのも、先生になるためのテストを受けたらしいつて、うわさよ

「まあ！ それはほんとう？ ソフィさまが、ソフィ先生になるわけ？ すてきだわ！ そしたら、どのクラスをお教えになるのかしら？」

「さあね、いくらソフィでも新米教師になるわけでしょう？ 一ばん下の四等クラスじゃないかしら」

「じゃあ、あたしたち三等のクラスは、いまのままジャーヴィス先生つてこと？ いやだわあたし、ぜひともソフィ先生にレッスンしてほしいわ」

「リリイ、あんたまさかソフィにレッスンしてほしいただそれだけのために、四等のクラスへ落ちようだなんて考えてないでしょうね」
「……………」

「リリイ？」

「まさか。あたしだって死ぬ思いをして、やっと三等のクラスまで来たのだから」

とはいうものの、この日よりリリイは、ソフィ・シンクレリアにレッスンを受けることを夢みるようになった。

それから数日後、リリイはいつものように教会にやって来ては、聖堂のそうじに精を出していた。

雪が降るこの頃はとにかく冷え、ぞうきんをしぼるだけで悲鳴が出そうになる。

リリイはそれでも、三等クラスのレッスンはすんで、誰もいなくなった教会に一人あらわれては、せつせとぞうきんをしぼり続けた。すると教会のとびらがあいて、誰かが雪を払いながら入ってきた。窓の外はすっかり暗くって、明かりといえば、しょく台に灯されたロウソクの火が揺れるばかりだった。

したがってこんな遅くに教会におとずれるのは、変わり者のマクラーレンおじさんか、見まわりの先生くらいだった。

リリイはふりかえって、入ってきた人物を確かめると、思わずぞうきんを落としてしまった。

「ソフィさま」

こんなおそい時間に、ソフィがひとりで教会へやってくるとは、さすがのリリイも想像しなかった。

ソフィはけれども、そんなリリイのすがたに驚いた表情も見せず、しずしずと靴音を立てながら、大きな十字架をまえにひざまずいた。ソフィはひとみを閉じ、胸のペンダントをにぎりしめながら、ふ

かい祈りをささげていた。

その時間は長く、神聖なけしきだった。

リリイはそうしたときを、そうじも忘れ、おのれをも忘れ、ただただソフィの美しいうしろ姿に見とれていた。

『ああ、憧れのソフィさまが、いまあたしのすぐ近くにいるのね。こんなにおそばにいられて、こんやあたしは最高だわ。』

けれどもソフィさまはいつたい、なにをそんなに真剣にお祈りなさっているのかしら？ こんな冷えた雪の夜に、じっとみじろぎもせずにお祈りできるなんて、あたし無理だわ。きつとなにか、強い御意志がおりなのだわ」

その時また、べつに教会に入ってきたものがあつた。

思わずリリイは、イスとイスの小さいすき間に、身をひそめた。

「あらあら、こんなそこ冷えする夜に、何をお祈りかしら？ メイトリアルルの天才歌姫さん」

リリイは、このいやらしい声をきいて、誰が教会に入ってきたのか、すぐにわかった。

パラメ・ドレイクは、リリイもしかめっ面をするくらい、大きらいな先輩だった。

「まったくあなたいいご身分だわ、いまメイトリアルル教会がどんなことになっているのか、ご存じないの？ エイミー、グレース、早くとびらを閉めなさい、寒いじゃないの！」

ぎよる目のエイミー、まるっ鼻のグレースも一しよに、雪を払いながら入ってきた。

ソフィは閉じていたひとみをひらいた。

「レセプションは欠席する、レッスンは満足に顔も出さない、あなたいったいどういうつもり？ このパラメさまが指導者の立場だったら、あなたみたいな不良少女、四等クラスまでたたき落としてあげるところだわ。それをあなた、さかしまに先生になって四等のクラスを教えるというのだから、ヒルトン先生もなにをお考えなのかしら」

リリイはイスのかけに息を殺しながら、ソフィが先生になるというアランの話がほんとうだったと知った。

「あらいけないわ、ソフィ先生とお呼びしなくってはならなかったわね。エイミー、グレース、これからはあなたたちも、この方をソフィ先生とお呼びなさい」

ソフィは背すじをのばして立ち上がったが、何とも答えなかった。「ああそうだったわ先生、いまちようどメイトリアル教会が大へんなことになってるから、一つあたしたち生徒を助けていただけないかしら？ エイミー、ちゃんと説明してさしあげなさい」

エイミーはぎよる目をあげながら、大きく口びるをなめた。

「ソフィ先生生きてくださいな、メイトリアル教会にとつぜん大雪がふつてこの寒さでしょう？ みんな凍えきつて声も出ないしまつなのよ。それというのも、暖炉に使うまきが底をついてしまったの。なんとたつとつぜんの大雪だものね。いつもならマクラーレンのおじさんが運んできてくれるのだけれど、家族に不幸がありとかで、来週まで戻らないって話だし、ソフィ先生、墓地の小屋からたくさんまきを運んできて下さらないかしら？」

ソフィの美しいまゆがぴくりと動いた。

「わたしが？」

「そうよ。生徒たちがレッスンにせんねんできる環境をつくるのも、先生のお役目でしょう？」

グレースはまるっ鼻をかきながら、きたない笑いを見せた。

はからずも、これをぬすみ聞きしてしまったリリイは、思わずその場に立ち上がりそうになった。

『なんですって！ なぜそんな野良仕事をソフィさまに押しつけるのかしら！ しかも理不尽な理由をつけて、言いがかりにもほどがあるわ！』

リリイは胸中で叫んだ。

「ソフィ先生、聞こえたかしら？ こんやはとくに冷えそうだから、なるべく早くに、たくさんまきをここへ運んでくださいな。」

そらエイミー、グレース、これでソフィ先生は、ひと晩のうちに、山のようなまきを宿舎に運んでくださるにちがないわ、さ、あたしたちはほかに仕事があるから、こんなところで油をうつていられないわ、行くわよ」

「はい、パラメさま」

ふてきな笑みを残して、パラメら三人は雪のなかへ消えた。

ソフィはしばらく祈りも忘れ、しつこいパラメの嫌がらせにあてられていた。そのうちに、亡霊のようなものうい目をさげて、教会を後にしていった。

臆病もののリリイは、ここでもなに一つ、大切な人のちからにならない自分の小ささを知った。

と同時にリリイは、ソフィに因縁をつけるパラメらのあくどさをも知った。

それは少女の小さな心に火をつけた。

『どうやらパラメの悪いうわさは本当だったようね。ソフィさまの名誉に嫉妬するあまり、こんな嫌がらせをするなんて、メイトリアル教会のリーダーも落ちたものだわ。あの馬女め！ 頭にきたわ、こうなったらあたしがなんでもして、ソフィさまをお助けしなければならぬわ！』

2

その夜、雪はしんしんとふって、メイトリアル教会を白くそめていた。

そんな中、リユースはいつものように、ソフィの部屋へやってきては、とりとめのないおしゃべりに身を入れていた。

「まいったわソフィ、こう冷えるんじゃあ、部屋にじつとしているのでさえ、苦痛だわ。どこか暖をとれる部屋はないかしら」

リユーイツヒはへやの中にもかかわらず、頭に毛糸の帽子、肩にマントをゆすりながら、ものものしい姿でうろついた。

「食堂は？」

「ついさつき、最後のまきの火が消えてしまったわ。みんなぶるぶる震えながら、じぶんの部屋へ引き返していったわ。ふとんの中へ入ったほうがましみたい。とうとうメイトリアル教会の暖炉という暖炉から、火の気が失せてしまったわ」

「じゃあパラメの話は、あながちウソではなかったようね」

「パラメ？　パラメまたなにかいつてきたの？　なにになにいったいどんな話？」

ソフィはつくえの譜面をあつめながら、てみじかに事情を話した。
「まったくパラメのしつこさは天下一品ね、こないだヒルトン先生にこっぴどく叱られたばかりだというのに、しょうこりもない。ソフィ、あんな馬女の話に耳をかしちゃダメよ」

「わかっていきますとも。でも、大切なまきがなくなつて、みんな困っているのにはちがいないわね」

そういつてソフィは、ひっきりなしにふりそそぐ窓の雪をながめた。

「あさつてには、マクラーレンおじさんが帰ってくるそうだから、それまでのしんぼうつてところね」

「ここから墓地の小屋つて、どのくらいでたどり着けるかしら？」

リユーイツヒは眉間にしわをよせて、かぶりをふった。

「まさかソフィ！　あなたいまから墓地の小屋へ行こうつて、そう思つてない？　草をふんで行くのとちがつて、雪をけて行くのよ？　お願いだから馬鹿な考えはやめてちょうだい。そもそも小屋までたどり着いたとしても、あれだけたくさんまきをどうやってここまで運ぶというの」

「そうね」

「大きな馬車でもなかったら、まきなんて女のちからではとても運んでこられないんだから、あたしたちはおとなしくしていて、マク

ラーレンおじさんが帰ってくるのを待つしかほかないの」

リユーイツヒはしゃべるだけしゃべると、あとはあくびをかみ殺して退室していった。

それとちょうど同じ頃、この雪のしたを歩く、一人の少女があった。

それは厚い敷布のようなオーバーを着こんだ、リリイ・ハーモンドだった。

「やっと体が温まってきたわ。はじめはこの寒さが慣れないんで、なんども引き返そうと思ったけれど、いまでは歩き通してひたいに汗がにじむくらいね。墓地の小屋は、あれかしら？」

リリイは一時間も雪のなかを歩きつづけ、やっとの思いで墓地の小屋を見つけた。

農機具だらけの小屋に入るとリリイは、頭にもった雪をはらいながら、山と積まれたまきを見あげた。

「さあここからが問題だね。ほんとうはこのまきをぜんぶ教会へ運びたいものだけど、こんな小さなあたしが一回に運べるとしたら、せいぜいふた抱えが限度つてところね」

リリイはためしに一つ、一抱えのまきを持ち上げてみて、その重さに頭を悩ませた。

「一回に一抱えのまきを運んで往復2時間、朝までかかったってたつた四束のまきしか運べないわ、ソフィさまを助きたい一心で飛びだしてきてしまったけれど、あたし馬鹿だったわ」

たくさんのまきを前に、すっかりリリイが途方にくれていると、遠くから馬のいななきが聞こえてきた。

「あら？ この寒さにあてられて、あたし幻聴が聞こえはじめたのかしら」

リリイが小屋のおもてに出ると、一台の馬ぞりがもう間近にせまっていた。

その馬ぞりに乗った男は、リリイの姿に気がついて、ちょっと意外な顔をして、手綱をひいた。

「こんな夜おそくに誰だい？ 君は、メイトリアルの子かい？」
リリイはすぐに、この男がルドヴィック・スピードだということ
がわかった。

ルドヴィックは毛皮のぼうしを脱いで、大きく髪をかきあげた。

「メイトリアルの子だろう？」

「はい」

「こんな真夜中に、しかもこんな雪の中で、どうして君は墓地の小
屋にいるんだい？ まさか教会から歩いて来たのかい？」

「はい、えっと、まきを」

リリイはまつ赤になって、ごにごによごによ口ごもった。

「ああ、君もこの小屋へまきを取りに来たくちか。しかし驚いたな、
なんだって君、たった一人でよく教会からこんな遠いところまで来
たもんだ。それに、君一人でどうやってまきを運ぶというんだい？」

リリイは、なじみのない若い男にはにかみながらも、これはきつ
と神の助けにちがいないとばかりに、勇気をふりしぼって事のしだ
いを話した。

ルドヴィックはそれを聞きながら、だんだん顔を曇らせ、リリイ
の話に大きく相づちをうった。

「そうか。そんなことがあったのか。ソフィがあのパラメにいじめ
をうけているというのは、ほんとうだったんだね。確かに僕もそん
な良からぬうわさは耳にしていたんだ。ソフィはいまや世界的な歌
姫になってしまって、なにもかも完璧に見えてしまっけれど、そこ
はやっぱりふつうの少女なんだ。パラメにいじめられて、平気でい
るはずはない。

よし！ 君、名はなんといったね？ リリイ・ハーモンド？ で
はリリイ、僕は君のちからになるう。そしてソフィのちからになる
う。ちょうど僕も家のまきが不足してね、今夜ここへまきを取りに
来たのが具合よかったようだ」

リリイは何もかもがホツとした気持ちになって、あとは勇ましい
ルドヴィックに一切まかせることにした。

それからちよつと後のこと。

メイトリアル教会の玄関さきでは、厚手のコートを身にまとつたソフィが、雪の空を見あげていた。

ソフィはいつになく真剣な顔をして、いった。

「たとえたくさんのまきを運んでこられなくなつて、一抱えくらいなら、わたしなんとか担げるかもしれないわ。いいえパラメにいわれたからではないわ、これはじぶんの意志でゆく、わたしはこれから先生になるのだから、みんなが困っているときに、なにもしないなんて、そんなわけにゆかないわ」

えいやとソフィが雪の中へ入ると、後ろのドアが音を立てて閉まった。

ふりかえるとちよつと、パラメたちの笑い声が聞こえた。

「パラメ？」

ソフィがいくらドアノブを回しても、鍵のかかったドアはびくともしなかった。

「あらソフィ先生、早くまきを取ってきてくださいな。早くしないとあたしたち、ほんとうに凍え死んでしまうわ。それともまさか、ここまで来てひきかえそうだなんて、お思いではないでしょうね？」

さすがのソフィも、わが耳をうたぐった。

「なんてこと」

ソフィはコートのえりを深くかきあわせて、ほかに入口はないか、教会のぐるりを一周した。

ところが嫌がらせには抜け目のないパラメたちは、ドアというドア、窓という窓にしっかりと施錠をほどこし、ソフィはまったく教会から閉め出されてしまった。

「どうしたものかしら。まきを取りにゆく話が、いまやメイトリアル教会から閉め出されてしまったわ。このままわたしは、朝には凍え死んでしまっているかしら」

ずるずるとソフィは、玄関の雪にへたり込んで、途方にくれてしまった。

ちょうどその時、雪原のかなたから馬ぞりが一台、山のようにまきを積んで、雪の上を滑ってきた。

その音にソフィは、ハッと顔をあげ、夢でも見ているような気になった。

「どうしたのかしら、わたし頭がへんになってしまったのかしら、たくさんまきが馬ぞりに乗って、向からやってくるなんて、まるでおとぎ話にでもできそうだわ」

馬ぞりはやがて、ソフィの目のまえで速度を落とし、続いて聞き覚えのある声がした。

「やあソフィ、こんな雪の夜にそとでなにをしているんだい？ 君が頼んだまきならほら、ここにたくさん持ってきたよ」

「ルドヴィック？ あなたどうしてここへ？ それにこのまきの山は？」

そのとき背後でドアの鍵のとかれる音がし、元気のいいリユーイツヒが飛び出して来た。

「まあルドヴィック！ 部屋にいたらあなたの声が聞こえてきたから、あたし一も二もなく飛んできたわ、いったいこんな夜ふけにどうしたというの？」

「やありユーイツヒ、見てごらんよこのまきの山、これはすべてソフィがみんなのために運んで来たのさ」

ルドヴィックはちよつと大げさに、周囲に大きな声をあげた。

「まあまあいったいなんの騒ぎかしら、もうみんな消灯のじかんよ、あらソフィ、そんな雪の中にいたんじゃあ、風邪をひくわ」

消灯のみまわりで、玄関を通りかかったヒルトン先生、その腕をリユーイツヒはひっぱってきて、いった。

「ヒルトン先生、まあヒルトン先生きて下さいな！ ソフィが、あたしのソフィがみんなのためにあんなにまきを運んできてくれたんですって！ 墓地の小屋からですよ！ これでみんな、寒い日々を凍えないですむわ！ ねえヒルトン先生、ソフィって、すてきな先生にちがいないわね！」

ヒルトン先生の驚きは言うまでもなかった。

けれどもソフィは、もり上がる周囲をよそに、ただただふしぎな顔をして立っていた。

その山のようなまきの後ろに、リリイは身をかくしかくし、こう胸をなでおろした。

「これで良いわ。これであたしはちょっとでもソフィさまのお役に立てたわ。なんでもあたし、考えなしに夜の雪の中へ飛び出してきたちゃって、いち時はどうなることかと思ったけれど、もう安心だわ。パラメもきつと、ソフィさまがこんなにまきを運んできたと聞いて、目を丸くするでしょうね」

3

次の日、このすばらしいソフィの働きは、メイトリアルルの少女たちや先生がたの間でもちきりとなった。

『あの冷たいソフィが、みんなのためにひと肌ぬいだってさ』

ソフィが廊下を歩くだけで、たくさんの少女たちがお礼をいいたくって、人がきをつかった。

そのたびにソフィは、困ったような顔をして、その場をしのいだ。わたしは何もしていない、これはなにかの間違いだ、こう言わんとしても、少女らの輝いた目は、それをゆるさなかった。

それから数日後、リリイはいつものように、誰もいなくなったあの教会で、ゆび先を冷やし冷やし、ぞうきんをしぼっていた。

そこへいつかソフィが姿をあらわして、十字架のまえにひざを折った。

リリイは顔を赤くして、これ以上ない憧れのまなざしを、美しいシルバーの髪へそそいでいた。

「リリイ？」

と、そこへ急にじぶんの名を呼ばれたとあって、リリイは飛び上がって驚いた。

「はい！」

ソフィは、祈る背中で続けた。

「あの雪のなか、たくさんのまきを運んできたのは、あなたでしょう？ リリイ」

リリイは緊張と興奮から、なんとも答えられなかった。

「ルドヴィックからすべて聞いたわ。あなたたった一人で、遠い墓地の小屋まで行って、まきを運ぼうとしたそうね？」

「……………」

「どうして？」

冷静な声だった。

「それは……………その」

するとソフィは、すっと立ち上がって、美しい顔をリリイへ返した。

「どうして？ わたしにはそこがわからない。ちょっと気がむいただけでは、あまりにも過酷で、命がけ。それにそんな大仕事をしたあとで、なぜわたしがやったふうに、ルドヴィックと口づらを合わせたの？」

リリイは問いつめられて、おびえたりスのように、からだを小さくした。

けれども意を決して、かたく目をつぶりながら、いった。

「ソフィさま。あたし、がまんならなかつたんです、パラメの嫌がらせをぐうぜん目撃してしまって、あたしソフィさまに負けてほしくなかつたんです。あたしこんな歌が下手で、臆病ものですけど、なんでもいいから、なんでもいいからソフィさまのお役に立ちたかつたんです。あたしにとってソフィさまはすべてなんです。希望そのものなんです。ですから少しでもお役に立ちたい一心で、あんな無茶なまねを……………」

それを聞いてソフィは、冷たい目をおろした。

「リリイ、わたしはパラメに嫌がらせをうけようとも、いつかこの教会を追い出されようとも、かまわないの。わたしはリリイの思うような希望ではない。わたしは呪われているの。」

リリイ？ なぜわたしがここでこうして、長いあいだ祈りを捧げているのか、わかるかしら？

これは祈りではない、懺悔なの。わかるかしら、わたしは人をうらぎり、死なせてしまった、それを一生つくなって生きていかなければならないの」

リリイは、そんなソフィのうわさを聞いて知っていた。

ソフィは呪われた歌姫、そう良からぬ連中が話し合っていた。翼の折れた天使、人殺しソフィ、心を亡くした天才歌手。

けれどもリリイは、それを聞いた後にも、ソフィへの憧れの気持ちは変わらなかった。

むしろ悲劇は孤高の歌姫となり、リリイの憧れはいつそう高まった。

「ソフィさまは先生におなりになったんですよね？ なぜですか？」

ソフィは意外な顔をした。

「ソフィさまは、迷っていらっしやるではありませんか？ ほんとうは何か、変化をお求めなのではありませんか？ 深い懺悔のお心があつて、そのつぐないに一生をささげるのであれば、すすんで先生などおなりにならないと思うのです」

リリイは、じぶんでも大胆すぎると思いつながら、けれども思った心は口をついて出てきた。

「わたしが先生になったのは、そうなることでいずれメイトリアル教会の聖歌隊から身を引こうと思ったからよ。パラメがいったでしょう？ わたしのようなふまじめで、レセプションにも顔を出さない人間は、もう歌手失格」

そしてソフィは、シルバーの髪を美しく残すように去っていった。けれどもさいごの足をぴたりととどめて、

「従順に、平静に、おのれの十字架をになう、これはいまのわたし。」

けれどもあなたの言うとおりかも知れないわ。わたしは何か、変わるうとしているのかもしれない。

すべて求むるものは得たずねぬる者は見出し、門をたたく者は開かるるなり。

それからネリイ、あなたがしてくれたこと、わたしちよつとうれしくも思つたわ」

これを聞いたネリイは、ぞうきんを胸に、ぱあツと笑顔になった。

ジャネット・ガードナー夫人と二人の教え子

メイトリアル教会に雪どけの季節がやってきた。

朝と夜はストーブを焚き、晴れた、小鳥の鳴くような日には、ちよつと歩くだけで上着をぬぎたくなるような季節だった。

春の暖かい風が吹くたびに、草原の雪はまばらになって、しめつた枯草が、ぽつり、ぽつり、あらわれ始めた。

そんな景色を窓にうつし、あさからソフィは先生室の机に向かっていた。

ほかにジャーヴィス先生、ヒルトン先生など四人の先生がたが、やはり同じように机に向かつて、すらすらとペンを動かしていた。

ときおり香ばしい珈琲のかおりが漂うような、のどかな昼下がりであった。

「ここを卒業したアンドルー・メトカーフって、ふつくらした生徒さんをおぼえていますか？」

メイトリアル少女たちに読み書きを教える、スタンレー・リース先生が、だれ彼なしにきいた。

「ええ、おぼえてますわ。たいそう頭の良い子でしたわね」

ヒルトン先生はそれに答えながら、めがねをとって、ペンを休めた。

続いて少女たちに算数を教え、この教会の寄付金を管理する、クララ・ウィルソン先生が、中年女性らしい低い声で、いった。

「あの子は本当にかしこい子でしたよ。ちよつと難しい計算をさせても、一つも間違いなしで笑ってましたっけ。メイトリアル教会から、アメリカの大学へ進学したのだから、けしてまぐれではなかったはずよ」

「ええ、三日まえにアンドルーから手紙が届きまして、読んでみましたところ、なんでも彼女、いまは大学で教授をなさっているんですって」

リース先生の言葉に、先生がたは顔をあげた。

「まあ、教授ですって？ このメイトリアル教会から、教授が誕生したのですね？ これはほんとうに快挙ですわ！」

ジャーヴィス先生は目を輝かせて、いった。

リース先生は二枚目の手紙をひらきながら、

「アンドルーの手紙には、さらにこう書かれています、大学時代に知り合った声楽部の友人にジャネット・ダグラスという人があって、いまでも深い交友がある、ジャネットは学生時代から大いに歌に才能があつて、かずかずの賞を受けていた、優秀な歌手だったが、結婚してすぐに歌の指導者にまわった、それが最近になってメイトリアル教会の近くのラウスハットに引越したらしい、いまのメイトリアル教会の先生不足をきいて、もしかしたらジャネットがこの助けになるかと思つて手紙を出した、今は名字がかわつて、ジヤネット・ガードナーさんになつた、だそつです。ありがたい話ではありませんか？」

これを聞いたソフィは、不安な顔をして、思わず立ち上がった。

ジャネットさんがここへ赴任してきたら、先生としてのじぶんの役目は終わつてしまうのではと、心ぼそく思つたからだ。

しかし、そんなソフィのハラハラした様子に、ヒルトン先生はおかしそうな顔をした。

「あらソフィ、そんな心ぼそい顔をしなくつてもいいんですよ。ガードナーさんはご結婚なすつているのですからね、私どものように教会に住み込みで、とはいきません。もしもガードナーさんがこの先生を引き受けてくださつても、なにからなにまでとはゆかないでしょう、ときどき教えに来てもらうのがせいぜいだと思ひますわ。だからソフィはいまのまま、四等クラスを教えてもらいますからね」

ソフィはホツと息をついて、イスにすわつた。

そしてじぶんが先生でなくなつてしまふ日に、ちよつとでも不安を感じたじぶんをまた、ふしぎに思つた。

『ソフィさまは先生におなりになつたんですよね？ なぜですか？』

ソフィは、いつかりリイにいわれた言葉を思い出した。

『ふかい懺悔のお心があつて、そのつぐないに一生をささげるのであらば、すすんで先生になどおなりにならないと思うのです』

いまのソフィには、この言葉に返す言葉がなかった。

「わたしはすすんで先生になりたいのかしら？」

そんなソフィの戸惑いをよそに、話はそれからそれへと続いていった。

「それにしてもソフィの呼び声は高いわ。まだ四等のクラスを教え始めたばかりだというのに、教え子たちの熱心さったら、ああいうのは見たことがないわ、ね、リース先生」

ウィルソン先生は年配らしく、大きく感心しながら、リース先生の顔を見た。

歳が若く、気の強いリース先生は、じぶんのレッスンの少女たちにつけていないのを知っていたので、舌うちをするように、いった。

「あらあら、楽しいばかりがレッスンではありません。あたしがいくら少女たちに嫌われていようと、少女たちが満足に読み書きさえできるようになれば、あたしの役目は大いに果たしているのです。

そりゃあたしは大声を出しますよ、なんたってダイアナ・ライトなんて、まあ小生意気な少女で、レッスンにウサギを持ち込むんですからね、すぐに外へ放しなさいって注意をすれば、ウサギだって本を読みたがっていますだなんて、口答えするもんですから」

「まあダイアナがそんなこと！ あの子わたしのレッスンでは一番おとなしい子なんです、クラスでいちばん熱心で、行儀が良いのですけれど」

ソフィが意外な顔をしていると、ジャーヴィス先生はおかしそうに口をはさんだ。

「あれだわね、きつとダイアナはソフィの崇拝者なのでしょう。うちのクラスのリリイなんて、やつぱりその口で、ちよつとソフィが窓の外を横切るうものなら、なんと注意するかわからないわ」

リース先生は、さらに気に入らない顔をして、話をジャネット・

ガードナー夫人へ戻した。

「ガードナーさんの件ですけど、あたしきのう直接お会いしまして、話を聞いてきました。感じの良い方で、こちらの事情をお話すると、ふたつ返事で承諾してくださりました。条件つきで」

「条件？」

ヒルトン先生は、めがねをふきながら、目をあげた。

「ええ、ガードナーさんは、いまはご自分の自宅で歌の教室をひらいてまして、自分がメイトリアル教会で教えるのであれば、その生徒さんを……二人ほどこちらメイトリアル教会へ一しょに移したいとのことでした。どういたしましょう？」

「よろしいじゃありませんか。ガードナー夫人の生徒さんといったら、きつと優秀な子でしょう。うちにも良い刺激になりますよ」

まるで世の中すべてがうまくいっているような笑顔を見せて、ジャーヴィス先生はいった。

ソフィは、この話とじぶんとの間に、どのような深い関係があるか、知るよしもなく、ふたたび手にしたペンを動かし始めた。

2

草原のうえを夏らしい風がそよぐようになった。

遠く、まばらに立つ木々は、キラキラと葉のうらを見せて、日ざしに輝いた。

シエラ・クロウがこの教会にやってきた夏から、もう一年がすぎようとしていた。

けれどもシエラの消息は、あの日いらいまったくわからないままだった。

あるときルドヴィックが、ソフィのもとへやってきて、こういった。

「この冬に、ぼくとはバーゲンダーツに行つたんだ」

ルドヴィックは、ソフィからシエラの故郷について聞いて、長い汽車の旅に出たのだった。

「ソフィも気にしているだろう？ あれっきりシエラは姿も見せない、故郷へ帰るお金ももっていない、いったいあの子はどうしてしまったのだろうかと。だからぼくは行ってきたのさ」

ソフィは真剣なまなざしで、ルドヴィックの話をきいていた。

「バーゲンダーツは、まあ貧しい工場町だったね。砂ぼこりがひどくって、風の日はまんぞくに外を歩けなかったよ。だが、そう広い町でもない、ぼくはあちこちシエラについて聞いてまわつたけど、だれもシエラ・クロウなんて、知る人はなかったね」

「そう」

「まあまだわからないさ、シエラあの貧しい格好を見れば、もともと家なんてもたない生活かもしれない、なんたつてバーゲンダーツは、路地うらに暮らす、スラムだつてあるんだ、ぼくはそこまでは調べられなかったからね」

ソフィは暗い顔をして、遠い空を見つめていた。

「わたしあの時、無理にでもシエラに帰りのお金をわたししておけば良かったわ」

「受け取らなかつたんだろ？ だつたら同じことさ。ぼくはねソフィ、シエラはまだ、このあたりにいると思うんだ。きつとそのうちに、ひよっこり顔をみせるにちがいない、ソフィの話聞く限りでは、そうとうあきらめの悪い少女らしいからね」

ルドヴィックは馬にまたがって、夕空のしたでソフィと別れた。

それからひと月がたった。

ソフィはメイトリアル教会から出てきて、少し窪地へ入つたところを歩いていた。

ミツバチは野花をゆらし、一すじに流れる小川は、夏色につやめいていた。

古い木の橋をわたり、美しいシルバーの髪を揺らしながら、ソフ

イはツタのはった、白い小屋の中へと入った。

「ソフィ先生！」

そこでは元気いっぱい四等クラスの少女たちが、ソフィの来るのを今か今かとこころ待ちにしていたのだった。

ソフィはピアノにむかつて、さっそく譜面をひらいた。

少女たちの目は熱心そのもので、午前のレッスンは、私語も雑談もなく、あつという間に終わってしまった。

「まああなたたちときたら、なんて優秀なのかしら？ 今やったところは、来月の親善会にもよおす、課題曲のすべてよ？ それをもう完璧に歌い終えてしまつて、先生こまつてしまつわ」

ドーラ・シャープは、ソフィ先生のお褒めの言葉に、胸を高鳴らせた。

ドーラはじぶんたち四等クラスを誇りに思っていた。

ドーラだけではない、ほかの少女たちも、同じくソフィ先生にレッスンを受けることを、この上なく思っていた。

「すべてはソフィ先生のために」

これが少女たちの合い言葉になっていた。

「三等クラスなんて、可哀想だわ、だつてジャーヴィス先生のレッスンなんて、つまらなくつて、バタバタ人が倒れるつて話よ。あたしたちはほんと、幸せだわ」

ドーラは大きなひたいを出して、ことあるごとにいった。

「ほら、あなたたちが優秀なものだから、お昼まで時間があまつてしまつたわ。どうしましょう？ そうね、じゃあ、休みたい人は休んでいいわ、もっと歌いたい人だけ、のこつてやりましょう」

ソフィは譜面をたたみ、ピアノを立った。

わあつと少女たちに歓声が上がリ、けれども教室を出て行く少女は、ひとりもなかった。

「ソフィ先生！ 質問してもいいですか？」

レベッカ・ハミルトンがいち早く、ソフィをつかまえた。

それ続けとばかりに、次から次へと少女たちはソフィをうばいあ

った。

「質問？ なにかしら」

「ソフィ先生は天才だって聞いたけれど、ほんとうなの？ あたし知りたいわ」

レベツカは大きく鼻にかかった声で、きいた。

「あら、誰がそんなことをいったの？」

「うちのお父さんがいつていたわ、それにべっぴんさんだって少女たちはいつせいに笑った。」

「まあ」

ソフィはくすぐられたように、

「わたしは天才なんかじゃあないわ。世の中にはね、もっともっと歌の上手な人がいるのよ？」

「ソフィ先生よりも？」

「そうよ」

ひたいを出したドーラが、レベツカを押しつけるように、顔をつき出してきた。

「でも、でも、あたしのお母さんがいつていたわ、ソフィ先生は、歌がとっても上手だから、いつか先生をやめて、ロタオール音楽大へ行ってしまっただって、先生それほんとう？」

「ドーラのお母さんは、まあなんてことをおっしゃるの？ わたしはロタオールなんて、ゆかないわ。ずっとあなたたちと一緒によ」

「ほんとう？」

「ええ。でもあなたたちは優秀だから、きっとこの中から、ロタオールへゆく人が出てくるわ、先生はそれが楽しみね」

ソフィをとりまく少女たちの輪から、少しはなれたところで、前歯がとれて、ひょうきんな顔になったキャサリン・ブューグルが、なにやら真剣に入口の戸にすき間をつくっていた。

その変わった様子にソフィは、おやと気がついた。

「キャサリンどうしたの？ 休みたいなら、もう教室を出てもいいのよ」

「ちがうの先生、知らない顔だわ、あたしここの人の顔ならぜんぶ知っているわ。でもあんな顔、見たことないわ」

キャサリンは真剣そのもので、戸のすき間から廊下を見ていた。動きやすい少女たちの興味は、こんどキャサリンへむかい、どつと入口の戸に人の輪ができあがった。

「ほんとう！ 誰なのあれ」

「新しく入った子かなあ」

「あたしたちと同じ服だもの、きっとそうよ」

こどもたちの遊びにつきあうように、ソフィはゆっくりと入口へ歩いていった。

そうして少女たちよりも高いところから廊下をのぞき込むと、そこには思いもよらない少女が立っていた。

「シエラ？ あなた、まさかあの、シエラ・クロウなの？」

一年も見ないうちに背が伸び、くすんでいた髪も輝く金色にかわっても、ソフィの目にはそれが一目でシエラ・クロウのものと同か
った。

ソフィは高ぶるあまり、教え子たちをも忘れ、大きく戸をあけながら、「おお神様！」と連呼した。

シエラはメイトリアル教会の修道服をまとい、また、栄光のメイトリアル教会のバッチを胸に、蒼い目を輝かせて立っていた。

「ソフィ！ わたしついにメイトリアル教会に入ることが叶ったわ！ まあなんて壮絶な一年だったでしょう、でもここにこうしてソフィのまえに立っていられるのだから、すばらしい一年だったにちがいないわね？」

シエラはあこがれの修道服をくるりとまわして、ソフィに笑いかけた。

小さな逃亡者

「わたし、こんな早くにメイトリアル教会へ入れるとは思ってなかったわ、なんたってこれは、ぐう然にぐう然がかさなった結果なのよ。」

ジャネット先生のもとに、メイトリアル先生の先生になる話が舞い込まなかつたら、わたしいまもホースウエストの山を歩き来していたにちがいないわ。ホースウエストって、それはよじ登るような急な山だったわ。

ああいま思い出しただけでも、あの子のわたし、つまりメイトリアル教会に入れなかつた夜のわたしは、それはみじめだったわ。ちよつとやそつとでは立ち直れないくらい、ひどい滅亡をあじわったのよ。それにソフィは友達になつてくれなかつたものだから、そうね、あのときの悲しさを例えるなら、雨は一人だけに降りそそぐわけではないってあげましの言葉があるけど、じっさいはわたしひとりだけに雨が降っている気分だったわ。

まあ！ そのときの話をもつと聞きたいですって？ 一年まえにたつた一度だけ会っただけなのに、ソフィったら、なんてわたしのことをよく覚えているのかしら？ ジャネット先生がよくいいなすつたわ、たつた一度あつたくらいであのソフィ・シンクレリアがあんなのことを覚えてはいるはずはないって、だけどこうしてちゃんとソフィはわたしの顔を覚えていてくれたのだから、わたし信じていたかいがあつたわ。

いいわ。でもソフィはわたしのこの一年を大笑いして聞くでしょうね。なんたつてわたし、この一年はちつともスマートにすごせなかつたもの。ドジで失敗だらけで、泣いたり笑ったり、ちつともソフィのように上品とはゆかなかつたわ」

シエラ・クロウの話は、彼女がメイトリアル教会に入れず、ソフィと親友にもなかつた、悲しみの一年まえにさかのぼった。

あのときシエラは、着ている服をはぎとられたような屈辱をあげ
わいながら、ひとり夜の草原を歩いていた。

ソフィのまえでは強がっていても、一人になってしまえば、こら
えきれない涙が、どつとあふれてきた。

「もうダメよ。あんなにいきがってみたって、このザマだわ。わた
しなんて天才でもなんでもない、ただの落ちこぼれなんだわ、そう、
この小岩のようにみんなとはぐれた、悲劇のヒロインね。」

小岩さん、あなたとは気が合いそうだわ。さっきまでのわたしだ
ったらあなたに見向きもしなかったでしょうけど、いまでは友だち
くらいにはなれそうよ」

大草原に転がった一つの小岩にすわって、あたかも美しい女優が
悲劇のワンシーンを演じるふうに、シエラはいった。

「でも、これからわたし一体どうしたらいいのかしら……このま
ま帰るわけにもゆかないし、小岩さんと一しよに朝をむかえてもい
いのだけれども、こんなに風通しがよくっては、からだを冷やして
しまうわ。そうして風邪をひいてしまえば、また二日も寝こまなけ
ればならない、おお、それだけはイヤだわ」

バーゲンダーツからの長旅で、シエラは一ど病にかかって、まる
二日間のたうち回った、つらい記憶があった。

「すこしでもお金があれば、どうにかなったものを、意地をはって
せっかくの旅費を突き返すのではなかったわね。」

でも、あんなもの受け取れないわ。あれはヒルトン先生がわたし
のことをあわれに思いなすってしたこと、わたしはあわれみやお恵
みなんて、いらないわ。あわれみなんて……まあ！ あなた顔に
なんていやらしいものを乗せているの！」

シエラはしりを叩かれたように飛び上がって、小岩から離れた。

小岩のうえには、大きなヒキガエルが一ぴき、のどをふくらませ
ていた。

「それはわたし、カエルが大嫌いなものよ！ 又メ又メして、冷たく
って、ほんとうに気色わるい生き物だわ！ それにこのカエルはな

んで大きいのかしら、おお、そんな汚い目でわたしを見ないでちょうだい！ きつとお前は、じぶんの欲のために仲間を売って、罰として神様はお前をそのような姿になすったんだわ！ 小岩さん、あなたとはもう友だちではいられないわ、どうぞそのカエルと仲良くしてらっしゃい、さようなら」

ヒキガエルがじぶんの後を八ネて来ないか注意しながら、シエラはそそくさと草原をあるき出した。

シエラは一度、ラスタルの方角へ足を向けた。

が、朽ち木のゴロゴロした、うす気味わるいドーンズの森を思いだして、身ぶるいしながらまたひき返した。

そうかといってシエラにはほかに行くあてがなかった。

近くに村でも町でもあれば、寝床のくめんも考えられたが、メイトリアル教会は広い草原のただ中にあるので、どこまで行っても草木のほか、焚き火の明かりさえ見えなかった。

あつちをふらふら、こつちをふらふら、シエラは足を棒のように引きずって、ようやくたどり着いたさきといえば、なんてことはない、今夜とび出したばかりのメイトリアル教会だった。

シエラは泥棒のように教会のぐるりを見てまわり、教会のとなり、小さなホール窓のあたりを見つけた。

「なにやら歌声が聞けるわ、きつとメイトリアル教会の聖歌隊ね。ちよつと中をのぞいてみましょう」

背が低いシエラは、周囲に散らばった木箱を取りあつめ、だんだんに積みあげると、それを踏み台にして高い窓のなかをのぞき込んだ。

「まあ！ テーブルのうえには大へんなごちそうがあるわ！ 華やかに着かざった人たちもいるし、賛美歌も流れるし、何かもよおしでもあるのかしら？ それにしても美味しそうね」

シエラは、お金をぬすまれたドルニク亭でおそい昼食を食べて以来、まだ何も口にしていなかった。

それなものだから、テーブルを飾ったスパゲティやアイスクリー

ムなど、よだれを垂らしながらがめた。

「はあ、お腹がすいたわ。あの料理の一つでも、食べることを許されないかしら……ほんとうにわたし、乞じきにでもなった気分だわ」

ちょうどその時、かすかに流れ聞こえていた歌声が、ふつりとやんだ。

「ブラボー！ ソフィ・シンクレリア、あなたはやはりわたしが見込んだとおりです！」

激しい拍手につられて、シエラは食べ物からホールのなかの変わった様子に目をうばわれた。

そうして奥のステージに立った、ソフィ・シンクレリアとはつきり視線がぶつかった。

「ソフィ！」

シエラはしまったと思った。

と同時に、がらがらと音をたてて、木箱をつき崩しながら、地面に尻もちをついた。

「なんてこと！ これは人生最大の汚点をさらしてしまったわ！

こんなみじめな姿を、いちばん見られたくない人に見つかってしまったわ。恥ずかしいったら、ないわ！ きつとソフィはそら見たことかとお笑いになるにちがいない！」

シエラはぶつけたお尻をさすりさすり、こんどは迷うヒマなくラスタル目ざして逃げ出していった。

シエラは小道について、後ろをふり返りふり返り、早足で歩いた。その夜空は一めん、宝石をちりばめたような星たちが輝いていた。「あらおかしいわ。どこまで歩いて、チャスタリカ湖が見えてこ

ないもの。もうとつくに、右手に広がっていい頃だのに」

シエラはラスタルに向かって歩いていくつもりだった。

だから目のまえに大きな森があらわれて、これがドーンズの森と思っただ。

「ついにこの森を越えれば、ラスタルにゆけるのにちがいないわね。でもこの森ったら、茂みがふかくって、オオカミにでも会いそうで怖いわ。あらでも、こんなに木がまばらだったかしら？」

シエラという通りこの森は、森というには木が少なく、葉もまばら、奥に入っても地面に月明かりがさしていた。

小道は森に入って、自然と消えてしまった。

シエラは木をよけながら、これといって恐ろしい気もなく、ずんずんと奥へすすんだ。

「あら？ これは柵……かしら」

シエラのゆく先に、ふとい木を組んだ、囲いのようなものが、西から東へと続いていく。

家畜の囲いかとも思われたが、そのちょうど一角に、木がへし折れ、ひと一人くぐって通れる、入口ができていた。

もうシエラは、ラスタルへの道をまちがえて来てしまっているのが歴然だった。

ところが手で木をよけながら、彼女はトコトコと柵のなかへ入っていった。

「ああ、こうやってまた逃げてきてしまったけれど、ちつともメイトリアルに入る手だてが見つからないわ。今夜はどこか静かなところで休んで、あしたもう一度、ヒルトン先生のところへ頼みにゆこうかしら。でもきつと今日みたい、とりつく島もないありさまでしょうね」

考え、考え、歩くシエラは、いまじぶんのふんでいる土が、急にやわらかくなつたのに気がついた。

いつか彼女は、畑のたがやされた土のうえを歩いていた。

「畑だわ。それも大きな畑よ。こんなさみしい森のなかに、いった

「誰が野菜をつくるのかしら？」

「ふしぎそうな顔をしてシエラは、月あかりを頼みに広い畑の様子を見てまわった。

「ちょうどその時、すこし先の闇から、ランプの灯りがあがった。

「とうとう見つけたよ、この野菜泥棒め！ さあ観念をし！ このジエニファー・ロードの目の黒いうちは、山賊だって、ジプシーだって、畑のものに指いっばん触れさせないからね！」

「暗がりから突然、老婆が大声をあげたというので、シエラは前後を忘れて立ち止まった。

「なんとかいつたらどいだい！ あんたのせいで今年の野菜はみんなダメさね！ ハワードのバカ息子は、動物のしわざだといったが、ほらみたことか、あたしの思ったとおり泥棒のしわざだったんだよ！」

「泥棒？」

「ランプの灯を押しつけられながら、シエラはだんだんと事の次第が知れてきた。

「おやおや、シラを切ろうって、腹かい？ 見たところ小娘のようだけど、あたしは子供だろうが仔犬だろうが、情け容赦なしだからね！」

「ちよつと待つてくださいいな！ わたしは泥棒なんかではないわ！ ただこの森をぬけて、ラストルへ向かっているんですの！」

「ラストルだってえ？ どうせつくならもつとまともなウソにしてくれないかね？ ここはラウスハットさね、ラストルと間違えるには、一〇マイルも必要だよ」

「ラウスハット！」とシエラは驚いているのだった。

「ラウスハットなんて、わたし聞いたこともないわ、やだ、どこで道をまちがえたのかしら？」

「演技に見えないシエラの驚きを見て、老婆はまゆの位置を変えた。「じゃあいつたい、あんたはどこからやって来たというんだい？」

「この土地の人間ではないのかい？ いいえ、あんたの疑いは晴れ

たわけじゃないんだよ」

そうみずからに言い聞かすように、老婆はいった。

シエラは、しぶりしぶり答えた。

「バーゲンダーツだわ。わたしメイトリアル教会の聖歌隊に入れてもらいに、遠路はるばるやって来たの。だけどまったく取り合ってもらえなかったわ。わたしまさか断られるだなんて思いもしなかったものだから、これからどうしたら良いかなんて、見当もつかないのよ」

老婆はさらにまゆの位置を変えた。

「バーゲンダーツだってえ？ それじゃあまるつきりよそ者じゃあないかね。そのうえメイトリアル教会に相手にされないんじゃない？ あんたどこまで落ちぶれた小娘なんだい？」

「ああ、それをいわないでくださいな、それはわたしだってわかりすぎるくらいわかってるんですもの。いい返そうにも、いい返す材料がないなんて、悲しすぎるわ」

みるみる気を落としてゆくシエラを見ると、老婆はため息をついて、しだいに語気を弱めた。

「あんたのかわいそうな事情は理解できたよ。でもあんたのしたことはどうだい？ あんたはあたしの庭をかこう柵をこしてきた、あんたはよそさまの土地に勝手に入ってきた、ちがうかい？ あんたはひとの野菜に手をつけたんだよ、それは悪いことではないかい？」

「あら、柵ならすつかりこわれていたわ。ひどい壊れ方ですよ？ だからここがおばあさんの庭だとは思わなかったんです、こんな森のなかに、まさかひと様の畑があるとは思われないじゃない？ それにおばあさんの畑をあらしているのはわたしじゃなくって、おばあさんの背中で野菜をたべている、その豚じゃなくって？」

老婆はそれを聞いてハッとふり返った。

そこにはふくぶくと太った豚が一ぴき、いまかじったばかりの野菜をふりおとしながら、耳をふっていた。

「んまあ！ いつの間にか！ 野生の豚とは恐れ入ったよまったく！」

老婆は興奮して、豚を叩くの叩かないのと、色いろに飛び回った。けれどもドツシリした豚のほうでは、てんで気にもせず、八エでも飛び回っているくらいにしか思わなかった。

「この太った悪魔め！ どうしたらこのうす汚いのをあたしの畑から追い出せるかね！」

老婆のムダなあがきを眺めるだけ眺めると、シエラはゆっくり老婆のうしろへ回りこみ、遠慮がちにいった。

「あの、わたし手伝いましょうか？ そのような手ぬるいやり口では、ず太い豚はびくともしないんです」

「手ぬるいだって？ ほかにどんなやり口があるというんだい？」

豚を追い回し、汗だくになった老婆は、イラだたしげに顔をあげた。

「あの、ロープを二ほん、貸していただけませんか？」

ジェニファー老婦

豚は、まえ足、うしろ足をロープで縛られ、畑にごろんと倒れた。シエラは土のついた手を叩き、さも一ちょう上がりといった顔をした。

「驚いたね、あんたいったいどんな魔法をつかったんだい？」

シエラは、ジェニファー老婦から受け取った二ほんのロープを使って、土のうえにしかけをつくった。

そしてまんまと通りがかった豚の足を、一瞬にしてからめとったのだった。

「このロープのしかけは、幼いころ父に教わったものです。久しぶりだったから、うまくいくか自信はなかったんですけど」

「そうかい、そうかい、いやあ、あんたを泥棒とかん違いして、すまなかったねえ。あんたのおかげで、もう畑をあらすやからはいなくなっちゃよ」

態度を急にあらためながら、ジェニファー老婦はニコやかにいった。

「この豚さん、これからどうなさいますの？」

「そうさね、明日にでもフィツチャーさんに来てもらって、肉屋に売ってきてもらおうかね。畑の野菜が、豚の肉にかわるのさ」

それを聞いてシエラは黙った。

というのもこの畑の野菜をむさぼった宿なし豚が、じぶんと境遇が似ていたからだだった。

おお、かわいそうに！ まるでいまのわたしとそう変わらないじゃない、きつと明日にでもきれいにスライスされて、値札をはられるのね。

「名前をまだ聞いてなかったね、なんて名だい？」

「わたし、この豚のことはよくわからないわ」

「あんたの名だよ」

「シエラ・ク로우っていいますわ」

シエラは気をかえて、こんどは元気よく老婦とあくしゅを交わした。

「あたしはジエニファー・ロード。こう見えても女主人でね、このロード邸をひとりですべて守っているのさ。まあまああなたの身なりときたら、頭のとっぺんから足のつま先まで、泥まみれじゃないか、湯をわかすから、これからうちのお風呂につかりなさい」

「あら、会ったばかりですまないわ」

「会ったばかりでお風呂に入れてはならないって、聖書にあるかい？ それに豚を退治してもらったお礼もしなくてはならないじゃないか」

シエラは倒れている豚よりも汚れた、じぶんのみじめな姿を見おろした。

2

シエラは、さいごに入ったお風呂がいつだったか、考え考え、バスタブに身をしずめた。

「きょうだって、お風呂に入るまえにお金をぬすまれてしまったのだから、一ト月もお風呂に入っていないのね。おお考えただけで、恐ろしいわ」

シエラは頭を洗った。

髪を流れる水が泥水になって、いつまでも透明にならなかった。

「それにしても、立派なお家だわ。いいえ、こういうのはお屋敷とどののかしら？ ジエニファーさんって、お金もちだったのね」

まっ白に光る浴室は、立って走れるほど広く、金のデコレーションがほどこされていた。

ゆぶねにはかぐわしいバラの花びらが、シエラの鼻さきに浮かん

でいた。

「まあいい香り。こんな贅沢なお風呂につかったことなんて、今まで一度もないわ。なにやらお手伝いさんのような人たちもいたし、わたしなんかのために、新しい寝まきまで用意してあって、なんだかわたし、とっぜんお姫さまにでもなった気分だわ」

ついさっきまでのたれ死にしそうだったシエラは、いまこんな幸福の中にあって、ちょっとふしぎな気がした。

シエラは浴室を出て、用意された、かわいいフリルのたくさん縫いつけてある寝まきに着替えた。

そうしてジェニファー老婦が待つ、一階へと下りていった。

ところがシエラは、広い階段の途中で、わが目を疑う美しい光景の広がりに出会って、自然に歩みをゆるめてしまった。

「まあ！ まあ！ これはまるで、宮殿みたいじゃないかしら！」

シエラのいうとおり、大きな天井にはシャンデリアが輝き、その下には赤いカーペット敷きの、貴族たちが歌って踊れるダンスフロアーになっていた。

パルテノン神殿にあるような円柱、十字軍が列をなした甲冑の数々、など、シエラはまさしく宮殿に迷い込んだような、ふしぎな錯覚をおぼえた。

「どうだい、世界中の汚れを落とした気分は？ おやまあ、泥が落ちてみればあんたさうとう愛らしい顔をしているじゃあなかね！

もつとよく見せておくれ、はじめて見たときは、まあなんて不格好な娘かと思っただがね」

ジェニファー老婦のいう通りだった。

汚れの落ちた後のシエラの顔たちは、目を見るもがあった。

切れ上がった眉、青い目の輝き、なで下ろしたような色つやの良いほお、その中でもとりわけ目をひいたのが、泥だらけだった髪の色が、輝く黄金の髪つやへ変わっていたことだった。

「それよりもわたし、あんまりに驚いてしまって、声も出ませんの。ジェニファーさんがこんなに、こんなにお金もちだったなんて」

「そうさね」

「だのにどうして？ これだけお金をおもちになって、畑の野菜にめくじらを立てるのかしら？」

金銀をあしらったソファーに、大きく背中をもたせながら、老婦はふたたび読みかけの本をひらいた。

「道楽さね」

「道楽？ ジェニファーさんは、道楽で畑をなすっているの？」

「そうさ。野菜が売れようが、売れまいが、金のことは知ったことじゃあない、じぶんが世話した野菜の育つのが楽しいんだよ」

ほんの一瞬だけ悲しそうな目をしたジェニファー老婦は、ちりぢりの白髪をボールのようにたばね、あごにかけて鋭い顔の輪郭を見せた。

「そんなことよりも、あんたはひどく愉快的な娘のようだ。どうかあたしの隣りに腰をかけて、あんたのことを一から十まで話しておくれ」

するとシエラは顔をくもらせて、いった。

「愉快というものは、大てい話し手には苦痛なものだわ。」

わたしは歌手にならなければならないの、でも、さっきいったように、わたしは歌の名門、メイトリアル教会を追い出されて、路頭に迷ってしまったのよ。

それに親切になさってくれた、メイトリアル教会の人と友達になつてほしいって頼んだのに、その人は急にふきげんになって、断られてしまったわ。わたしはまだ恋なんてしたことないけれど、もしも恋に落ちて失恋したら、きっとこんな切ない気持ちだろうと思うの」

「メイトリアル教会なら、あたしだって知っているさね、あそこの娘らは、たいそう歌が上手だそうだね。そこを追い出されたってことは、シエラは歌が上手ではないのかね？」

「わたし歌が上手とか上手でないとかってよりも、歌は下手くそなの」

するとジェニファアは、広い天井に響きわたるくらい、高だかと笑った。

「ほら、愉快というものは、話し手にとってちっとも愉快ではないわ。ラスタル駅のおじさんもそうだったけれど、歌が下手くそなのが、それほどおかしいのかしら？」

「大笑いして、すまなかつたねえ。だってあんた、歌が下手くそじやあ、歌の名門メイトリアル教会に入れっこないじゃないか、そうだろう？」

「ええ、きつとそうですわ。でも下手くそがメイトリアル教会に入れないなんて、断られてから知ったんですもの。困ったわ。わたしどうにかしてでも、メイトリアル教会の聖歌隊に入らなければならぬんです」

「シエラはとことん変わった娘だねえ。それであんた、メイトリアル教会はあきらめないのかい？」

「あきらめませんとも！ それは少しはこたえたわ。思っていたほどうまくゆかないんですもの。でもきつと、明日にはなにかよい手が見つかるに違いないわ」

シエラは大いなる希望を胸に、みるみる青い瞳を輝かせていった。そんな夢いっぱいの少女をまえに、ジェニファアはうれしさとも、かなしさともつかない、ふしぎな目をして、話を変えた。

「おなかは空いてないかね？ さつきからあんたのおなかの虫が鳴っているの、ここからでも聞こえていたんだがね」

「まあ！」とシエラは顔を赤くした。

「わたしだったら、ほんとうにいけないわ！ いつまでたっても子供なんですもの。こんな恥ずかしいことでは、一人前の女性になるなんて、夢のまた夢だわ」

「一人前の女だって、おなかくらい鳴るさね。さあ食堂に食べ物を用意させておいたよ、冷めないうちに、おあがり」

「あらいけないわ！ これ以上よくしてくださっても、わたしなにもお返しできないの！」

「なにを生意気なことをいつているんだい、子供はお返しなんてしないものと、あたしはいつも思っているんだよ。」

それにねえ、あたしは見てのとおり、孤独な婆さんさ。手塩にかけて育てた子供たちはみんな都会へ行ってしまうし、主人なんてお金ばかり残して死んでしまっし、この広い屋敷にとり残されたのは、あたしばかりさね。だからあんたみたいな愉快な娘と話をしているだけで、あすこの、値打ちものの日本の壺をわったって、かまわないくらいだね」

いかにも高価そうな日本の壺をふり返り、シエラはあわててかぶりをふった。

「まあ日本の壺はわってはないわ、わたしジェニファーさんとたんとお話するから」

月の光

ジェニファー老婦が用意したごちそうは、シエラの想像をはるかにしのいだ。

ジェニファーは地中海の料理だといった。

イカ、貝、エビなど、シエラは食したことはないごちそうに、思わず舌鼓したじつみをうった。

次から次から空になってゆく皿をながめるジェニファーは、うれしそうにワインをなめた。

「これはまるで夢のようだわ。さっきまでのわたしときたら、食べるものにも困る身分だったんだもの。それをこんなごちそうにあずかって、わたしジェニファーさんにはなんてお礼をいっていいやら」

「礼にはおよばないね。シエラの食べっぷりを見ているだけで、なんだかあたしも気分がいいからね。そら、ワインでもどうかね」

シエラは食べものをのどにつまらせた。

「いけないわ。こどもがお酒をのむと、大ていともないことをしでかすの。わたし一度だけお酒をレモネードと間違えてのんでしまったことがあるの、そしたら母が、この次からお酒は、キッチンにおかなくなつたわ。つまりわたしそのときになにをしでかしたか覚えていないの。ただとんでもないことをしでかしたことだけは確かだわ」

シエラが小さなおくびを出すころ、ふたりは寢室のなんだ三階へあがった。

三階はまるで美術館を歩くように、絵画でうめつくされていた。そこでふたりは寝るまでの間、ソファーにくつろいで語らった。

「親はいるのかね？」

ジェニファー老婦はほろ酔いだった。

「もちろんいますとも。ジュリア・ク로우とウィリアム・ク로우ですわ。ふたりはとても仲がわるかったわ、だからわたし、家出のよ

うにメイトリアル教会へやってきたの」

「じゃあふたりに内緒でここへ？」

「いいえ、知っているわ。つまりわたし、ずいぶん勝手な行動をとったの」

ジェニファーは、まるで孫娘にでもたずねるように、きいた。

「こらからどうするかね？」

「わからないわ。わたしラウスハットすら知らないんですもの。どこか歌の教室を探すしかないわね」

漠然とした未来に出会って、シエラは心ぼそそうにほほ笑んだ。

「あたしやこのへんにそんな浮ついたものがあるなんて聞いたことないがね。なんならその歌の先生とらやをここへ呼ぼうかね？」

「それはいけないわ。なんでもかんでもジェニファーさんに甘えるわけにはゆきませんもの。じぶんでもわかるの、一度あまえてしまえばいつか手に負えなくなるって」

「歳はいくつだい？」

「十三です」

「あなたは十三にしては大人さね。いや、こればかりはいくら歳をかさねても、わからないやからはわからないがね。じぶんという船を知ってこそ、人生の航海は渡りきることができるといえるからね。さあ、おやすみ。この先のこととは明日にでもゆっくり考えろといえ」

「ええ、本当に感謝しますわ、ジェニファーさん」

そういつてシエラは、ジェニファー老婦に一つ抱きついて、寝室へ入った。

その寝室は、少女の胸をときめかせた。

ベッドは天がいベッドで、美しい霞かすみのようなレースが寝具をおおっていた。

中に入るとシエラは、あまりの夢見心地に、眠るのさえもつたない気がした。

そのうちにシエラは、窓からさし込む月の光に誘われて、窓辺に立った。

窓をあけると、星たちの輝きがこぼれ落ちてきそうになった。

「ソフィ……………」

シエラは恋しそうに、その名を口ずさんだ。

なぜ親友になってくれなかったのか、なぜ急にあんなにも冷たい態度をとったのか、シエラにはその理由がわからなかった。

けれどもシエラは、やさしい、めんどろ見のいい頃のソフィが忘れられなかった。

彼こそがソフィの真の姿だと、ひとつも疑うことができなかった。

「ソフィもきつと、この月を見ている、そんな気がするわ」

ソフィの湖

「おはようございます、お嬢さま」
いきおいよくカーテンはひらかれた。

部屋にあさの光がさし込み、まぶしさにシエラはあえぐように目をあけた。

「あなたはだあれ？」

メイド服を着た女性が、てきぱきと窓をあけてまわった。

「わたしはこのメイドですわ」

「メイドさん？」

「ええ、ここロード邸でお世話をしているものです。さあさあ、下でジェニファーさまがお待ちかねですから、はやくお着替えなすつてください」

シエラが着替えをすませ、一階に降りると、昨夜ごちそうを食べた食堂で、ジェニファーが待ちわび顔をしていた。

「おはよう、シエラ」

「あらジェニファーさん、おはようございます。まあ、なんてすてきな朝かしら。いつだって朝は、新しい気がするものだよ」

輝くようなシエラ的笑顔に会って、ジェニファーはすこし、頭を抱えた。

「あたしゃ低血圧だからね、朝は気が重いよさね、いつでも元気なあんたがうらやましいね」

「それでもきつと感ずることはできるわ、きょうは何か良いことがおとずれるのよ」

「悪いこともね」

「ああ、そう考えるだけで、わたしでも立つてもいられないわ。きょうは朝からラウスハットを歩きまわってみることにするわ。もしかしたら何か、メイトリアル教会への道がひらけるかもしれないもの」

ジェニファーは手もとにあったコーヒーを一口のみ、何とも答えなかった。

彼女はいま、表情をムツとさせているが、こんなにぎやかで、フレッシュな朝は何年ぶりか、いや何十年ぶりかと考えていた。

それは自分だけの素敵な隠れ家が見つかり、次に来てみてやはりそこにあつたといううれしい気分だった。

「まあ、このコーヒータら香りがいいわ。運んでくださつてありがとうございます」

シエラは、朝食をはこぶメイドの一人にそう笑いかけた。

するとめつたなことにメイドは、少しはにかんだ顔をして下がっていった。

「そんなことは一いち言わないでいいんだよ。彼女たちはこれが仕事なんだからね」

「でも、仕事も人ととのふれ合いに変わりはないわ。だったら楽しい方がよくなって？」

ジェニファーは黙って、ふた口目のコーヒーを飲んだ。

「こんなお天気の良い日には、ジェニファーさんも、わたしと一しよにお外を歩きますか？ ラウスハットのあちこちを案内してもらえると、わたしなおうれしいわ」

「あたしや勘弁してもらおうよ」

「どうして？」

「どうしてもさ。それからねシエラ、いまからラウスハットを歩きまわるのなら、ここロード邸に寝泊まりしていることは、誰にもいってはならないよ」

「なぜ？」

「なぜでもさ。あたしやね、このラウスハットの人たちに嫌われているのさね。ケチで意地悪だつて、評判なのさ」

このときジェニファーは、牢屋の中でひとり笑うような顔をした。「どうしてわたし信じられないわ。ジェニファーさんは気まえがよくて、陽気だわ。いまはちょっと眠たいだけ。それだつてじきに

機嫌が良くなるわ」

「ふはははは。あんたは良いねえ、世の中あんたみたいなのばかりだったら、あたしもこうはならなかつただろうに。」

まあとにかく忘れなさんな、ここに泊まっていることを、くれぐれもラウスハットの連中に黙っておくのだよ」

それには答えないで、シエラは朝食を食べた。わざとか、聞こえなかつたのか、そこらへんはジェニファーにもわからなかつた。

「ひよつとして、思ったのだけれど、まさか昨夜わたしが迷つたあの森も、ぜんぶがジェニファーさんの持ちものではないでしょうね？」

するとジェニファーは三くち目のコーヒをのんで、ぶきみに笑つた。

「森だつて？ ははん。シエラはラウスハットを歩くまえに、まずはここロード邸の庭を歩く必要があるそうだね。なんとつて昨夜は、ロード邸のうらのうら口から、シエラはやって来たのだからね」

2

「まあ！ なんてこと！」

ロード邸の入口は、サーカス団がゾウに乗って入って来られるくらい、大きな扉をもっていた。

そのギリギリと重い音を立てて、ひらく扉をまともにつけて、シエラは腰をぬかした。

「これがロード邸の入口さね。立派なものだろう？」

「立派なんてものじゃないわ、こんな王様が通るような玄関をおもちになるつて、ジェニファーさんはいったい、どれくらいお金持ちなのかしら！」

とびらがひらき切ると、はるか遠くに城門が見えた。

それまでの道のりも大がかりだった。

美しい女神のふん水あり、緑あざやかな庭園あり、左右には葉をきらきらと輝かせた木々が、いたたみ翳に影をなげていた。

「まるでお城だわ」

「そうさ、ここはお城さ。元ジム・ウィルコックス公爵のお城、彼ら一族は時代とともに身を落としてね、あたしたちにこの城を売り飛ばしたのさ。城といっても住んでみれば不自由なことが多くってね、とくにあたしみたいな老婆には一いち広すぎるのさ」

「でも素敵だわ！ これこそ淑女にふさわしいゴージャスな住まいだわ。わたしが想像をふくらませる夢の生活には、こんなお城が不可欠なの。お姫さまになって、ハンサムな王子さまの帰りを、ここで静かに待つの」

手を組みあわし、夢をふくらせているシエラをながめながら、ジエニファアはスタスタと歩き出した。

「ここで待ったって誰もきやしないよ」

ジエニファアは馬車をかりだし、庭園の花のなかを立ったり座ったりしていたシエラをひろうと、どこまでも続く森のむこうへ馬を走らせた。

シエラはまさか、庭の中を馬車で移動するなどと、想像すらできなかった。

「まったく世の中は皮肉なものさね。この城だって、むかしは大がかりだったろうに、いまでは二そく三文の値打ちさ。それほど時代というのは残酷なほど影響力があるんだよ。いくらあの恐ろしいアレクサンダーだって、いまはあたしに槍いっぱん投げられないのだからね」

「でも、むかしから変わらないものもあるわ」

栗毛の馬にひかれながら、シエラはうつとりとした目で、いった。「それはまあ、そうさね。それがあんだのいうところならね。」

……ほら見えてきた、あれもうちの庭のうちだよ。あたしや見なれて、なんとも思わないが、あんだみたいに夢見がちな少女にと

つては、うれしいんじゃないかね」

馬車にかかるような木のしだれをよけながら、そのむこうに見える
てきた景色に、シエラは驚くの驚かないの話ではなかった。

「まあ！ まあ！ 湖じゃないの！ こんなことってあるかしら！
まさかあれもジエニファーさんのものだなんて、いうんじゃない
わよね？」

「あたしの庭にあるのだから、あたしのものさね」

美しいコバルトブルーの湖は、木々のすき間を輝きながら、いよ
いよ馬車の近くに広がりはじめた。

急に風が吹きとおり、水の香りと、やさしい波の音が、すぐ近く
に感じられた。

「素敵ね、ほんと素敵だわ。湖って、わたし海よりも好きよ。こん
な森の中にある湖は、とくに好き」

顔が青く光るくらい、湖に近づくと、シエラは急に静かになった。

シエラは幻想の世界にひたりながら、

「いったいジエニファーさんは、なにをもっていないのかしら？」

「シエラのもっているものさね」

「わたし？ あら、わたしはなにも持たないわ」

ジエニファーはたずなをひきながら、まっすぐ前をむいて、いつ
た。

「そういうことをいつているんじゃないよ。

もちろん人間の若さにあこがれていつているんじゃない。あたし
は若さにさげすむ年寄りにだけはなりたくないからね。

こんな不幸なあたしだって、どんなに幸福な人生をおくった人間
だって、みんな同じように年老いていくんだからね。素敵な平等じ
ゃないか」

「あら、ジエニファーさんは不幸かしら？」

シエラは湖から顔を戻して、いつた。

「不幸さね。さみしさほど、人の心を凍えさせるものはないね」

ジエニファーはそういつて、馬をとめた。

「それはちがうわジェニファーさん。じぶんのことを不幸と思うことが不幸のはじまりよ。わたしはまだ十三歳だけど、これまでにじぶんが不幸だと思ったことは一度もないもの。お金はないし、つらいことも悲しいこともあるわ。明日になれば、泊まるどころすらないかもしれないもの。」

でも、不幸だなんて思うひまがないの。それよりも希望の光りがいまわたしにとってまぶしすぎるのよ」

ジェニファーは、この生意気ざかりな少女を笑いたい気持ちになった。

こんな娘はまだ人生というものをなにも知らない。いまのじぶんのすさまじい気持ちなど、ひと握の砂ほども知らないのだ。

けれどもジェニファーはこうも思った。

なぜだろうか、いま自分はシエラのことを笑ってはいない。それどころかちよつと真剣に、シエラの声に耳を傾けている。それはシエラのいまいった言葉のなかに、何かひっかかるふしがあるからだ。「わたし、ジェニファーさんには幸福な日々であってほしいわ」

シエラはそういって、ジェニファーにほほ笑みかけた。

3

「名前は………なんていうのかしら？」

湖のあらい砂のうえを、はだしになって遊ぶシエラは、いま思いついたようにきいた。

「名前だつて？ 湖でいいじゃないかね」

ひとり馬車に残り、カーディガンを羽織ったジェニファーは、読みかけの本から顔をあげた。

「いけないわ。名前がないなんて、湖がかわいそうなもの。それにこの湖のことを後から考えたときに、もの足らない気分だわ。まだ

名前をきめていないのなら、どうかしら、わたしが名づけていいかしら？」

「勝手にしたらいいよ、どうせ地図にも載らない小さな湖のことだからね」

それを聞いてシエラは小おどりして喜んだ。

けれどもいざ湖の名前を考えはじめると、彼女は急に真剣な面もちになった。

「あら、わりとむづかしいのね」

どれくらい時が過ぎただろう。ジェニファーが目で文字を追うのにも疲れを感じはじめた頃、あまりに静かになったシエラを心配に思って、顔をあげた。

「どうしたんだらうね、やけに静かじゃないかね？」

ジェニファーは馬車を降り、水ぎわにうずくまったシエラに顔を出した。

「ま、なんだいこれは！」

ジェニファーが驚いたのは、シエラのまわりにゆびで書いた、おびただしい砂の文字だった。

「あら、見てのとおり、この湖の名前よ。たくさんあって、わたし決めかねているの。誓いの湖、嵐超の湖、いざないの湖、ケネス湖、弔いの湖、どれもいい名の気がするけれど、いつまでも呼んでゆくには、どうも飽きてしまう気がするわ」

「弔いの、のだけはよしてほしいものだね」

シエラはとつ然ひらめきを覚えて、近くの小枝を手にした。

砂にたくさんなぞった名前のおえに棒を立てて、風に倒れた、小枝のさした名前に決めようと、そう思いついたのだ。

「さあ、いくわ」

ジェニファーはこれを、こどもの遊びと馬鹿にしながらも、ちょっと気をひかれる思いで、立っていた。

とそのとき、いままで穏やかだった湖の波が、気まぐれの大波に変わり、広く砂のおえをはい出した。

そしてそれが、シエラのなぞった湖の名前を次つぎに押しつぶしていった。

「まあ！ 湖の名前が台なしだわ！」

ジェニファアは、こどもの嘆きを笑ってなだめようとしたが、その中でシエラは、宝石でも見つけたような歓喜をあげた。

「ジェニファアさん！ これを見てちょうだい！ この名前だけが波を逃れて残っているのよ、わたし自分で書いておいてすっかり忘れていた名前だったのだけれど、ふしぎじゃない？ わたし決めたわ、これは何かの縁だもの！」

ちよつと興味をひかれて、ジェニファアはシエラの頭上から砂をのぞき込んだ。

するとそこには『ソフィの湖』となぞられた名前だけが、確かに残されていた。

「ソフィ？ ソフィって、あのソフィ・シンクレリアのことかね？」

「ええそうよ。まあ、ジェニファアさんもソフィのことご存じだったのね」

「ご存じもなにも、ここいらではその名を知らぬものがないくらい、ポピュラーな娘だからね。なんでも法王様でさえ、その歌声を絶賛したとかなんとか」

「そんなにすごい人でしたの？ わたししたらそんなことも知らないで、お世話してもらったなんて、光栄だわ」

瞳をきらきら輝かせるシエラを見て、ジェニファアは急に暗い声をもち出した。

「まさかあなた、昨夜いつていた、メイトリアルで友になれなかったという娘は？」

「ソフィよ。これじゃあ歌が下手クソなわたしなんかでは、親友になれなくて当然だわ」

そんなけなげなシエラをまえに、ジェニファアは苦虫をかんだような顔で、いった。

「そうかい、そうかい、それは良かったよ。この娘は良くないウワ

サばかりが聞こえてね、そんな呪われた娘とシエラが近づきにならなくて、あたしや良かったよ」

「良くないウワサ？ あんな親切でやさしい人の、どんなウワサですの？ それはちょっと急に不機嫌になることもあったけれど」

「親切でやさしい？ はあん、それじゃあソフィの良くないウワサを教えてやるよ。」

ソフィ・シンクレリアはね、ちよつと昔に、人をうらぎって殺しちゃったのさ」

「まあ！」

シエラは大きな口をあけて驚いた。

「いまやほとんどの人たちが、このソフィのウワサを知っているよ。ソフィは親友をうらぎってそれで、いまはメイトリアル教会の顔になっているのさね」

「それ、本当の話なの？ そんな、わたしが見たソフィはやさしくて、よく世話をやいてくれたわ、ちつともそんな卑劣な人には見えなかったもの、もう一人のリューイツヒって人のほうは、そんな感じだったけれども」

シエラはさすがに、ソフィに対してつよい戸惑いを感じた。

「……………でも、この湖の名前は、ソフィの湖にさせてくださらない？」

「この後におよんでなにを言い出すんだい。そんな不名誉な娘の名を、この湖につけておくれでないよ」

ジェニファーは、その申し出をびしやりと断った。

するとシエラは、青い目をぎらぎらと光らせながら、抗議した。

「不名誉かどうかなんて、わかったものでもないわ！ わたしがこの目で見たソフィは、すばらしい人だった、わたしはソフィを信じたいの！」

「信じるが聞いてあきれよ」

「ジェニファーさん！ ジェニファーさんのほうが、人のウワサがちつともあてにならないことをよくご存じでなくって？ ラウスハ

ツトの人たちがいうように、ジェニファーさんはケチで意地悪な人かしら？ それはご自身がよくご存じのはずですわ」

ジェニファーは驚いた。

こんな小娘に返す言葉を失うとは、思ってもないことだった。

「シエラには負けたよ。そうさ、確かに人のウワサは信用ならない。それはあたしがよおつく知っているところだよ。いいさ、そこまでシエラがいうのなら、この名のない湖を『ソフィの湖』と呼ぼうじゃないか。これでいいかね」

「おお、憎たらしいこといって、許してちょうだいね。べつにジェニファーさんのことをケチで意地悪だなんて、いったのではないのよ？ さあ、もともとおり仲良しに戻りましょうね」

こうして二人は、その日いっぱいソフィの湖ですごした。

ジェニファー老婦は、シエラと一こと一こと言葉をかわすごとに、発見があった。

思ってもみない言葉が返ってきた。

それが愉快だった。

死んだように流れていたジェニファーの時間は、ここへきて快活な流れを取り戻しはじめていた。

サイラ・クーパーの看護

シエラはすぐにでも、ラウスハットの街を見てまわりたかった。そんな好奇心のかたまりは、けれども風邪をひいてしまい、2、3日はベッドの中に閉じこめられてしまった。

「ああ、窓の外はなんて青空が広がっているのでしょうか？ それにひきかえこの部屋ときたら、ときが止まってしまったかのように、暗いわ。わたし、体のじょうぶさだけがとりえだったのに、こんなことになってしまって、まったく情けないわ。」

「いいえ、これはきつとロード邸で贅沢な思いをした罰なのだから」
一人つまらなそうに窓をながめるシエラの部屋に、サイラ・クーパーがトレイに薬湯をのせて入ってきた。

「おお、サイラ、わたし一人でさみしかったわ。お薬なんて放つておいて、わたしの話し相手になってちょうだい」
病のせいもあり、生気の抜けたようなシエラは、五つ年上のサイラにりょう手をのばした。

「はいはい、お薬をのんでからね。シエラはじぶんの体に自信があるようだけれども、風邪をあまく見すぎよ」

サイラは愛らしいえくぼをつくって、シエラにのみ薬をのませた。彼女は肌がまっ白で、そのせいか赤毛が燃えるように赤く見えた。
「サイラ、あなたラウスハットにくわしくて？」

シエラは薬をのんで苦い顔をすると、すぐに聞いた。

「しょうじきいうと、あまりくわしくはないわ。あたしは遠い故郷から出てきて、ここにすみ込みで働いているの。だからラウスハットは買物にゆく、イーストスレッジタウンくらいしか、知らないわ」

「休日には？」

「あまり出ないもの。ちゃんとした休みの日もないし、暇なときには、部屋で裁縫さいほうしているわ」

「まあ！ そとに出ないなんて、どうして我慢できるのかしら！ わたしだったら、この窓ぶちやぶつでも、そとへ飛び出すわ。裁縫って、なにを縫うのかしら？ わたしなにも縫えないわ」

「縫うといつても、帽子くらいね。あたし可愛い帽子が好きなの」「わたしも帽子は好きだわ。ねえサイラ、あなたの身の上を話してください？ ここで働いているけど、ゆくゆくはどうするつもり？」

サイラはイスをひいてきて、シエラのとなりに腰かけた。

「まあシエラったら、あなたなんでもかんでも聞くのね。」

あたしはべつに、ゆくゆくとかこの先とか、深くは考えてないわ。ここはほかのお屋敷で働くよりも、ずっとお金がいいの」

「とりあえず、ここにいてるってわけね」

シエラはいたずらっぽく笑った。

「ありていにいえば、そうよ。だってここ、とっても居心地が良いもの。仕事だつてつらくないし、ジェニファーさまだって、朝の機嫌のわるさを除けば、必要以上にあたしたちを困らせることはないわ。あたしはシエラのお世話をいつかっているけれども、あなたまったく手がからないわ。」

以前、クラウディ邸で働いていたときなんて、その坊ちゃんのお世話をいつかっていたのだけれど、まあわがままで、わがままで、ほとほと困ったわ。じぶんでじぶんの靴を隠しておきながら、なくしたからあたしに探せだなんて、それをすぐに探せないと、ご主人様に叱られるの。あげくの果てには、なにかおもしろいことをして、ぼくを大笑いさせるだなんて、あたしこればかりには、恐れ入ったわ」

「サイラはそれで、おもしろいことをやったの？」

「いいえ、あたしあまりに腹が立ったから、ある晩にこつそり、クラウディ邸の恐ろしい幽霊の話をしてあげたわ。そうしたらどうでしょう、寝るのが怖いから、じぶんと一しょに朝まで起きていますって。」

その日から坊ちゃんは、クラウディ邸に幽霊がいると、ほんとうに信じてしまったわ」

「サイラったら、わるい人だわ」

クスクスと笑いながらサイラは、シエラの髪を手にとった。

「ねえ、シエラの髪、あたしに結わせてくれない？ 店の人から流はり行の結い方を教わったの」

「わたし髪の毛なんていままでちゃんと結ったことないわ」

「なら見てらっしゃい、あなたを都会的な娘にかえてあげるから」

シエラはサイラに背中を見せるように、すわりなおした。

そうしてシエラの髪をブラシでとかし、おもしろく結っていくサイラは、急に思い出して、いった。

「あなた、歌手をめざしているのね？」

「ええそうよ。でも、なかなかうまくはゆかないわ。歌手になるには、歌のレッスンをうけなければならぬらしいの。どこかに歌のレッスンをしてくれる、歌の先生はいないかしら」

するとサイラは、心あたりのある顔をして、いった。

「それならあたし、知らないでもないわ。なんでもここ最近、ラウスハットのどこかに、歌の先生が越していらしたって、耳にしたことがあるの。でも、ウワサ話よ？ ハッキリとしたことはわからないわ」

それを聞いたシエラは、ぴかりと目が光った。

「それほんとう？」

「だから、ウワサ話よ。ほんとうかどうかなんて、知らないわ。シエラがあたしのお話を信じて、ラウスハットを探しまわったあげく、もしもその歌の先生が見つからなかったら、あたし責任を感じるわ」
「いいえ、どのみちよ。わたしこのままじつとなんてしていられないもの、同じことだわ。見えてきたわ、わたしどうしてもその歌の先生を見つけたすわ！」

野心に燃えるシエラの背後で、また思い出したように、サイラはいった。

「ウワサといえばもう一つ、あなたソフィ・シンクレリアと話したんですって？」

「ええ」

シエラは胸をはって、答えた。

「つめたくされなかった？ あたし、きよねん教会で彼女を見たとき、ひどくつめたい目をした人だなんて、そう思ったわ。だってたくさんの拍手をあびながら、にこりもしないで、ステージを去ってしまうのだから」

「ソフィはやさしい人よ。わたしがルドヴィックの足をふんづけて泣いてしまったときにも、ソフィったらわたしを追いかけてきてくれたもの」

「ルドヴィックですって！」

サイラはびっくりして、シエラの肩をつかんだ。

「あら？ わたしまた飛んでもないことをいつてしまったかしら、わたし鈍感だからわからないわ」

「あなたルドヴィックの、ルドヴィック・スピードの足をふんづけたの？」

「ええそうよ。思いつきりやってやったわ。あんなの紳士じゃないわ」

シエラはいま思い出しただけでもムカムカくるような口ぶりです。いった。

「あなた飛んでもないわ！ ルドヴィック・スピードといったら、ラウスハットでもゆうめいな男性よ？ あの眉ひげくしゅつれい目秀麗な顔だちで、騎馬隊の訓練姿を見たら、もうあたしなんて胸がドキドキしたわ。あたしだけじゃない、ここの娘たちはみんな、ルドヴィックの写真を肌身はなさず、大切にもっているわ。それをあなたったら、足をふんづけただなんて」

「むこうが悪いわ！ わたしのことからかったんだもの、わたしの髪の毛を、まあそのときは汚れ放題だったけれども、ひどくいつて笑ったんだわ、いまでも許せない、あんな男！」

そんなつまらない事で腹を立てるシエラを見て、サイラは心の中で、なんだかんだいってもまだ子供だわとつくづく思った。

「シエラの初恋は、いつくるのかしらね」

ジェニファアの約束

シエラは風邪をひいた。

風邪は、サイラの看病のおかげで、すっかり良くなった。

しかし、こんどは夏の雨が続いた。

長い雨のせいでシエラは、なん週間もラウスハットの街に出られなかった。

気づいてみたら、まどの草木はすっかり夏の色を失い、はらはらと枯れ葉が舞う秋の季節に変わっていた。

シエラがロード邸に来てから、すでにひと月が過ぎようとしていた。

ジェニファア老婦は、シエラのうるさいおしゃべりのおかげで、明るい毎にちを送った。

シエラは廊下を通りかかるメイドたちに声をかけて、たちまちのうちに懇意こんいになった。

あつちで笑い声があがり、こつちで驚き声があがり、するうちにシエラはいよいよロード邸にうちとけていった。

しかしそんなシエラにも、まったくうちとれられない使用人がいた。

それはエスタ・スイートとマミー・グレイだった。

エスタ・スイートは、ロード邸のお金を管理する老女で、几帳面な性格の持ち主だった。

いくらシエラが廊下で話しかけても、冷酷な目をおろすばかりで、すぐに廊下のさきへ消えてしまった。

もうひとりマミー・グレイは、ロード邸のメイドのひとりで、いつも物かげにいて、遠くからシエラのことを見ていた。

シエラの方から話しかけようと近づいても、遠くから遠へと姿を隠すので、シエラはなにやらこのメイドに陰険な印象をもった。

やがて雨があがって、青空が出た。

「ジェニファーさん、今日こそいくわ。わたしこんなにキレイに晴れた日は、もう二度と来ない気がするもの。ああ本当に、雨のうらめしかったこととまったくならなかったわ」

シエラは元気よく朝食にあらわれた。

ジェニファーは口数すくなに、いった。

「確かに。ここのところずっと雨だったからね、あたしの畑はめためただよ」

「あら、雨がふるって、畑の野菜たちには良くなかった?」

「なんでもほどほどさね。日が射さないんじゃないあ、キャベツもしなびちまうよ」

シエラはフォークにさしたサラダを見つめた。

「難儀ねえ。ひとの心も同じだわ、こう日が射さないんじゃないあ、わたしの心もはりあいがいいもの」

「あんたはいつだって元気だったじゃないかね? よくもまあ、毎日にち毎にちべらべらしゃべっていられるよ」

シエラはパンにバターをぬりながら、ちょっと横を通ったサイラと笑いあった。

「シエラや、もしきょうラウスハットに出るのなら、いぜんあたしがいったことをちゃんと守るんだよ」

「あら、なんでしたかしら?」

ジェニファーはくちコーヒーをのんだ後、じろりとシエラを見た。

「とぼけるんじゃないよ、あんたがここで寝泊まりしていることだよ、これをラウスハットの人間にぜったいしゃべるんじゃないよ、いいかい?」

「ええわかったわ。でも、もしかしてラウスハットですばらしい友にめぐり会えたら、そしたらわたし、ぽろっところの事を話してしまうかも知れないわ。」

だってロード邸での生活といたら、本当にすてきなんだもの。みんな良い人ばかりで、ジェニファーさんのことだって、きつとみ

んな陽気な人だと思うわ」

ジェニファーは頭をかかえて、声をはり上げた。

「いい加減におし！ この事は誰にも話すなど、あたしはいつて
いるのさね、わかったかいシエラ！」

「ええ」

シエラはびっくりして、すぐに返事をした。

山の上のサウスヒル

山の上のサウスヒル

サイラはシエラのために、ラウスハットの地図を描いた。

シエラは、ラスタルやメイトリアル教会までしるされた、大きな地図をひらいてはじめて、じぶんのいまいる場所を知るようなものだった。

「わたしがメイトリアルを後にした夜、ずっとラスタルへ歩いているつもりが、まったく方角ちがいを歩いていたのね。この地図で見れば、メイトリアル教会から東へゆくとラスタルだったのに、わたしたったら草原を南下して、ロード邸の森に入っていたのだから、でも、シエラが方向おんちで、ラッキーだったわね、そう思わない？」

サイラはえくぼをみせた。

「そうね、わたしあの夜、ラスタルへたどり着いたとしても、きっとどうしようもなかったもの。お金もないし、頼る人もないし、きつと野宿だわ、ジエニファーさんにも、サイラにも、出会うことがなかったでしょう」

シエラがロード邸の城門をくぐって、おもてを歩くのは、これからはじめてだった。

城門の外には、水草の美しい小川があり、ちょっとしたつり橋をわたって小道に出た。

小道のうえには落ち葉がたくさん降りつもって、ずっと森の中をゆくような、静かな道だった。

「ああ、今日じゅうに歌の先生を見つけられればいいのだけれども」

シエラは小道をゆきながら、不安そうに地図をひらいた。

ラウスハットにはたくさん村があった。その中にサニーエンドという小さな村があり、そのはずれにロード邸があった。いまシエラが歩いている場所は、つまりラウスハットでいえばいちばん東のはずれにあたった。

「あの、いま見えている大きな山は、この地図でいう、ホースウエストの山ね。それにしても大きな山だわ、ちらほら見えるのは、あれは果樹園かしらね。けれどもどうして『馬のくびれ』って名なのかしら？」

ホースウエストの山はラウスハットのまん中にそびえていた。いわばこの山のふもとにすべてのラウスハットの村むらが広がっていた。

シエラはあちこちの森の紅葉を楽しみながら、小道を一、二時間は歩いた。すると、いままで見られなかった家の屋根が、あそこに一軒、こちらに一軒といったぐあいに、だんだん目をひき始めた。「さっきの川が、ホースウエストの山から流れるテリー川だから、もうサニーエンドは終わったのね、するといまわたしが歩いているところは、イーストスレッジタウンのはずれだわ。」

つまりホースウエストの山を時計の中心と考えると、3時の方角から6時の方角へ、時計まわりに歩いて来たのね。イーストスレッジタウンといえば、サイラがよく買い物をする街だわ」

この頃からシエラは、よく荷馬車とすれちがった。荷馬車にはたくさんの食料や、畑の肥料らしい大きな荷が積まれていた。

「あれはきつと、イーストスレッジタウンで売り買いたしたものに違いないわ。きつと大きな街なのねえ」

長い雨のせいで、小道は泥のわだちになっていた。シエラは靴を汚さないように、良い土をえらんで歩いた。

けれどもそれもきつと石のみちが変わって、気がねなく歩けるようになった頃、シエラはすでにイーストスレッジタウンの繁華街に入っていた。

「まあ、ちよつと道を折れただけで、どうしてこんなに人が歩いているのかしら？ それに道ばたにはすき間がないくらいお店がならんでいるし、頭上の看板だって、空が見えないほど、たくさんかかっているわ」

イーストスレッジタウンの街なみは、ホースウエストの山にむかうように、のびていた。

パン屋に肉屋、鍛冶屋に小間物屋など、空き地がないほど商売はさかんで、肩をぶつけあう人通りのおおさだった。

そんななかシエラは、人びとの背中について、一まい一まい看板の文字を読んで歩いた。

「困ったわ。パンが欲しければパン屋に入ればいいのだけれど、歌の先生が欲しいばあい、どのお店に入ればいいのかしら？ そのような看板は一枚だって、つるされてないもの」

シエラは色とりどりの看板から目をおろし、ちよつと肉屋のまえで買い物をしている一人の婦人に声をかけた。

「あのすいません、ここらで歌のレッスンをしている家はありませんか？」

「はあ？」

婦人は肉の入った紙袋をうけ取りながら、まゆをつり上げた。

「あの、わたしメイトリアル教会に入るために、歌のレッスンをうけなければならぬんです、ですから歌の先生をさがしているのですけれど、そんな店ちつともないもので、困っているんです、どうか歌の先生をご存じないかしら？」

「あんななに寝ごといつてるんだい、歌の先生なあ？ そんなこまっしょくれた先生、このイーストスレッジタウンになんているわけないじゃないか、くだらない先生なんてどうにかして、はやく家にかえって母親の手伝いをしな！」

婦人はぴしゃりといい放って、人ごみの中に消えた。

「まあ、恐ろしい人だったわ、ちよつと歌の先生をたずねただけで、ここの人たちはみんなあなのかしら？」

すると、店内でぶた肉を切りわけていたふとつちよの店主が、いまいったことを聞いていた。

「お嬢ちゃん、歌の先生をさがしているのかい？」

「ええ、最近ここらに越してきた歌の先生がいるって聞いたものですから」

肉屋はじょうずに包丁を使いながら、ちよつと考えるそぶりをした。

「だったら、サウスヒルに行ってみるってもんだな」

「サウスヒル？」

シエラはその場で地図をひらいた。その名はサイラの描いた地図にのっていた。

「あつたわサウスヒル、ちよつどこの先の、ホースウエストの山の中だわ。肉屋のおじさん、そこに歌の先生がいらっしやるのかしら？」

「さてね、おいら、歌の先生なんて、聞いたこともないがね」

「？」

「だけど、サウスヒルなら、画家だの、作家だの、音楽家だのって、風変わりな人間ばかりが住みついているから、歌の先生だって、いないとはかぎらない」

店主は切り終えた肉を棚におきながら、いった。

「おじさん、ありがとう、きつとおじさんのいう通りだわ。お礼にわたし、ぶた肉の一切れでも買ってさしあげたいのだけれと、わたしいまお金がないの、いつかたんと買ってくるわね」

シエラは肉屋にお礼をいって、またイーストスレッジタウンの街道についた。

そしてふたたび希望を胸に、頭上のホースウエストの山をめざして、ずんずん坂道をのぼっていった。

シエラ、樹の上で歌う

シエラ、樹の上で歌う

シエラはイーストスレッジタウンをぬけて、ホースウエストの山みちを登った。

山みちは岩ばこだらけで、森がなく、もちろん家など一軒も見あたらなかった。ただただ大きな斜面が山頂へ向かって続くばかりで、シエラはすぐに息がきれた。

「道はあるのだけれど、岩がおおくって、これではまるで歌の先生を探すよりも登山に来た気分だね。見たところ馬だつて通られやしないし、こんな登るに困難な山のうえに、ほんとうにサウスヒルという村があるのかしら？」

シエラは疲れた足を休めるために、大きな岩のうえに腰かけた。目下には、イーストスレッジタウンの細長い街なみが、手のひらにながめるように、一望できた。

「イーストスレッジタウンがあんなに小さく見えるなんて、わたしずいぶんとホースウエストの山をのぼったのね。けれども山の峰はちつとも近づかないわ。まるでこちらが一步登るたびに、むこうも一步遠ざかるようだわ」

汗をぬぐうシエラのお尻には、美しいエーデルワイスの花が風にゆれていた。

そこから『サウスヒル入口』と書かれた、丸太の立て札の高台まで、あとちよつとのところだった。

「おお、サウスヒルなんて本当はないのかもって、わたし不安だっ

たのよ、うれしいわ」

立て札の高台から先は、山を横にして歩くやさしい道のりで、シエラに山の風景を楽しむ余裕がうまれた。

「まあ、なんて見晴らしが良いのかしら！　ここから故郷のバーゲンダーツまで見えてしまいそうね。あら、あれはロード邸よ！　大きな城なものだから、一目で知れるわ、そしてその向こうがソフィの湖」

サウスヒルに向かうにつれて、だんだん緑がふえてきた。

深い森の中を通ったり、果樹園のあいだをぬけたり、しながら、シエラはいつぽんの登りやすい樹の上に立って、思わず歌を歌いはじめた。

「とつてもいい気分だわ！　これはわたしだけのステージよ、わたしはいま、世界にむかって歌っているの！」

その歌は、ジェニファー老婦がもっていたレコードの一枚、ソプラノ歌手の一曲だった。シエラはこれを何度も聴くうちに、空で歌えるまでに、おぼえてしまっていた。

シエラの歌声は大きく、山の方々へ響きわたったが、途中でぴたりとやんでしまった。

というのも、シエラの立っている樹の下かげから、ふつくらとした一人の婦人が身を起こしたからだった。

「まあ！　どうしましょう、だれかが下にいたなんて、わたし知らなかったわ！　それなのに大声で歌を歌ってしまって、まあばつが悪い！」

シエラは顔から火が出るほど恥ずかしかった。

「あんたかい、いま歌を歌っていたのは」

婦人はふゆかいそうに樹の上を見あげて、いった。

「ええそうよ。ほんとうは違うといたいたいところだけれど、まさか小鳥のせいにするわけにもゆかないわ」

婦人は立って、ゆつくりと草むらを抜けてきた。

「小鳥がきいてあきれるよ。あんたは歌が下手クソだよ」

「おお、くやしいわ！」

といてシエラは樹の上から飛び降りた。

「わたし何度も歌が下手クソといわれてきたけれど、あなたほどきっぱりとおっしゃった人はなくてよ！ 初対面なのに、失礼なあいさつだわ！」

「下手クソを下手クソといて、なにが悪いのさ。こっちこそ気持ちよく昼寝しているところを、まったく耳障りな歌で起こされてしまったのさ」

「まあ耳障りですって！」

シエラはふとつちよの婦人といがみ合うかたちで、小さな胸をはった。

「あなたの方こそ、お昼寝にはまだちょっと早くなくって？ あんまり寝てばかりいると牛になってしまっって、聞いたことあるわ」

「それをいうなら、食べてすぐに寝るとじゃないかね？ あたしはまだ何も口にしていないよ」

婦人は大きな口をもっていた。しゃべるのにも腹の底から響くような、大きな声だった。

「いいわ、わたし歌がわからない人のいうことなど、一つも気にしないの。ソフィに下手クソっていわれたのなら、わたし正直に認めるところだけれどもね」

「ソフィ？ ソフィ・シンクレリアのことかね」

「ええそうよ。わたしメイトリアル教会に入るために、これから歌の先生をさがさなくてはならないの、だからこんなところで道くさくってはいられないわ。おばさんのお昼寝をじゃまをしてみました、悪かったわ、さようなら」

シエラはぶんすか怒って、サウスヒルにつづく道をすたすたと歩いていった。

これを見おくる婦人は、大きく腕をくんで、いった。

「歌がわからない人、ねえ」

やる気のない先生

やる気のない先生

サウスヒルは花咲きほこる村だった。

ラスタルはすれっからしの印象だったし、メイトリアルは規則のイメージ、イーストスレッジタウンはきそい合いの感じだった。

けれどもサウスヒルは花を育て、絵画を楽しみ、詩を歌うような心ゆたかな村だった。

シエラは、このサウスヒルのすてきな雰囲気につれて、目を大きく輝かせた。

「まあ！　なんて想像力の豊かな村なのかしら！　小道には色とりどりの花園がつくられているし、どの家もおしゃれなログハウスで、庭なんて、ほんとうに手入れがなされているわ。バラだの、チューリップだの、フリージアだの、ヨーロッパの絵画のように、美しく風にゆれているわ」

標高の高い森をきり拓いてつくった村だけに、遊牧民のような素朴な美しさがあった。

シエラはエデンの園を歩くような気分で、サウスヒルの家いえを楽しんでまわった。

「そうだわ、わたし歌の先生を探しにここへ来たのだったわ。あまりにこの村がすてきなもので、そんなことすっかり忘れていたわ」

気をとり直してシエラは、コスモス畑の中を歩く一人の老人に、歌の先生のことをたずねた。

「歌の先生？　ああ、そらあきつとガードナーさんの事じゃな。ジヤネット・ガードナーさん、まあゆづめいな歌手じゃよって」

老人はていねいにも、ガードナー家までの道順まで教えてくれた。「こんなに早く歌の先生が見つかってしまつて、わたしなんだか拍子ぬけだわ。なにもかもすんなりゆきすぎね。まあいいわ、歌の先生が見つかるに越したことないもの」

教えられた通りに小道をゆくと、そこにはジャネット・ガードナーの大きな家があつた。

ガードナー家のドアには、赤い大きな花のブーケがかけられていた。階段つづきの玄関は、大きなアカシアのかげになっていて、落ち葉がふりそそぐ下に、犬小屋が見えた。

「ジャネットさんは、ここで歌の教室をひらいてらっしゃるのかしら？　ならなおいいわ。こんなおしゃれなおうちなら、わたし毎日でも通えるもの」

犬小屋から顔を出した、大きなジャーマンシェパードに吠えられながら、シエラは壁づたいに玄関の前まですすんだ。

そうして大きく息を吸い込んでから、小さいノックではレッスンを断られそうに思ったので、大きくドアをノックした。

「ああ、もうわたしには後がないのよ。ここで歌のレッスンを断られたらわたし、尼になるわ。そして毎にち神さまに懺悔して、死ぬわ。でも懺悔ってどうやるのかしら？」

まもなくドアがひらかれ、そこに見覚えのある婦人が顔をつき出した。その顔を見た瞬間、シエラの心は悲鳴をあげながら地獄の底まで落ちていった。

「なんだい、さっきのあんたじゃないか。あたしの家に何か用かい？」

客を迎えるにしては、あまりにすげない態度で、婦人はいった。

この婦人こそサイラがいつていた歌の先生、ジャネット・ガードナーであり、さっきシエラの歌をきいていの一番に下手クソといった婦人だった。

シエラは、さっきじぶんがこの婦人にいった、牛がどうのという憎まれ口を思い出して、気まずさをおぼえた。

「あ、あのう、ジャネット・ガードナーさんは、いらっしゃいますか？」

「あたしだよ」

この返事は、何かのまちがえであつて欲しいと願うシエラをあざ笑うかのようだった。

シエラはこれからどうしたらいいのかすぐにはわからず、途方にくれた。

こんな、人を平気で下手クソ呼ばわりする胸が悪い人に、わたしは歌のレッスンを頼まなければならなかの、どうか、シエラは本気で迷った。

「どうしたんだい、さっきから黙りこくって。あたしに用があるのか、ないのか、はっきりしなよ」

「あ、あのう」

「なんだい」

「そのう」

「だからなんだい」

シエラは怖じ気そうな心をふみとどまり、ありつたけの勇気をふりしぼつて、いった。

「わたしに歌のレッスンをしてください！」

ジャネットはしばらく口をばかんとあけて、その後になにか雨のように笑い出した。

「冗談はよしとくれよ、なにを言い出すかと思えば、あたしに歌のレッスンをしてくれろだつてえ？」

「本気よ！ わたし歌がうまくなりたいの、もう頼みのつなはジャネットさんしかいないのよ！」

ジャネットはひと通り笑い終わると、こんどは急にまじめな顔をした。

「歌がうまくなってどうするんだい？」

「わたしメイトリアル教会の聖歌隊に入らなければならないのよ。さっきのわたしの態度がお気にさわったのなら、あやまります、でもどうか、わたしに歌のレッスンをして下さい」

「メイトリアルだってえ？」

ジャネットは、いぶかしい顔でシエラを見た。

「あなた、なんだってあんな、メイトリアル教会に入りたがるんだい？ そりゃあメイトリアル教会といえば、世界でも名高い聖歌隊があるがね」

「メイトリアルはわたしにとって通過点ですよ」

シエラは大まじめな顔をして、いった。

「こりゃあ傑作だ！ 泣く子も黙る、かのメイトリアル教会の聖歌隊が通過点だってえ？」

「冗談ではないわ」

「だれも冗談だなんていってないさ。あたしが聞きたいのは、どうしてそんな無茶をしてまで、あんな所に入りたがるかってことだよ」

「それは言えないわ。そういう約束だもの。ジャネットさんは、親友と一生の約束をして、それをやぶって人に言うことがあって？」

「ないさ」

「そうなのよ、だからわたしも、どうしてメイトリアル教会に入らなければならないのか、それは言えないの、でも、メイトリアルに入らなければならないことは、入らなければならないの。理由になってないかしら？」

ジャネットはシエラの見ているまえで大きく腕をくんで、しばらくは口をとぎした。

「あなたの願いはわかったよ。でもあたしはもう、歌の先生をやっていないんだよ。ちょっと以前に、それこそゆづめいな音楽大学で、あたしは歌の先生をやっていたんだけどね、やめたのさ。だからこ

んな田舎に越して来たんだよ」

「まあ！ 歌の先生をやめてはならないわ！」

「そんなに簡単にいつてくれるなって。あたしだって、やめたくてやめたんじゃない、大学でちょっとしたトラブルに巻き込まれてね、まあこんなことあんたみたいなお子供に話したって仕方ないがね」

ちょうどその時、犬小屋から顔を出したジャーマンシェパードが大きくほえ始めた。ふるかえれば、シエラと同じくらいのときは少女が、まっすぐこちらへ歩いて来るところだった。

「そら、おいでなすった」

少女は上品な顔だちをしていて、着ている服もまた、清楚だった。シエラをちらり見るその仕草は、いかにもすました感じだった。

「こんにちは、ガードナー先生」

「また来たのかい、ドーラ」

ジャネットはふくみ笑いをしながら、ドーラ・ブライスを迎えた。

「今日こそ良いお返事をいただきに参りました」

「それは残念だったね。あたしは先生になるつもりはないよ」

にんまりと笑って、ジャネットがにべもない返事をして、ドーラは顔色ひとつ変えなかった。

「そうですか。ではまた、お心変わりのする頃に参ります、ごきげんよう」

いんぎんに頭を下げて立ち去ろうとするドーラは、つんと鼻さきをあげて、シエラの横を素通りした。これを見たシエラは、好奇心いっぱい目を輝かせた。

なんなのかしらこの人！ わたしと同じくらいな歳ね、ジャネットさんのことをガードナー先生っていつていたわ、良い返事ってなにかしら？ ああ、これはぜったい話してみたいものだわ！

「ほらほら、あんたもさっさと帰んな！ あたしは歌の先生をするつもりはないんだよ。ああ、まだあんたの名前をきいてなかったね」

ジャネットは、いまにも走り出しそうなシエラにむかって、きいた。

「シエラ！ シエラ・ク로우よ！ ジャネットさん、わたしまた来るわ！」

元気いっぱいにドーラを追いかけてゆく、そのシエラの姿をいつまでも目で追いながら、ジャネットはまた腕をくみ直した。

「シエラ・ク로우か……さて、あの歌声をどうしたものかねえ」

ドーラ・ブライス

ドーラ・ブライス

「待つて！ ねえ待つてつたら！」

シエラはひっしに走って、ドーラの遠い背中を追いかけた。するといままで早足だったドーラの足は、急にあきらめたように、ゆるやかにになった。

「ああ、やっと追いついたわ、なぜあれだけ呼んだのに、足をとめてくださらなかったの？」

「呼んだ？ わたし、ちっとも気がつかなかったわ」

ドーラは貴族の娘のように、気取った横顔を見せた。

あれだけシエラが呼んだものを、まさかドーラが気がつかないわけがない。シエラはドーラにすっかり無視されていた。けれどもそんな大人の真似ににぶいシエラは、どこまでもドーラについて歩いた。

「ねえ、あなたもジャネットさんに歌のレッスンを頼みに来たの？」

「……………」

「断られていたわね？」

「……………」

「どうしてジャネットさんは、歌のレッスンをしてくれないのかしらっ。」

ドーラは無言で、サウスヒルからイーストスレッジタウンへぬける道を歩いた。

その道はシエラの知らない道で、森の中をずんずんくだつてゆく密やか道だった。

シエラはひとりで話しつづけた。

「わたし、歌の先生をさがしていたのよ。メイトリアール教会の聖歌隊に入るには、歌のレツスンが必要ってきいて、わたしどうして歌の先生をみつけなければならなかったの。」

そしたらサイラが、ラウスハットに歌の先生が一人いらっしやるのを聞いたことあるっていうの。だからわたし、こんな山の上まで先生をさがしに来たの。それは心ぼそかったわ。だってまさかこんな高い山のうえに人が住んでいるなんて思わないじゃない？

だからジャネットさんの家を見つけてわたし、やった！ て思ったわ。もう半ぶん夢が叶った気でいたわ。だって、歌の先生は、とうぜん歌を教えてくださいださるものでしょう？

それなのにジャネットさんったら、もう歌の先生はやっていないだなんて、きつぱりいいなさるものだからわたし、困ってしまったのよ。とうぜんだわ、やっと見つけた歌の先生が、もうレツスンをつけてくださらないのももの。

でも、ジャネットさんはゆうめいな歌の先生だったらいいのね。

わたし歌の先生なら誰でもいいつもりでさがしていたけれど、まさか音楽大学で先生をなすっていた人だったなんて、わたしびっくりしたわ」

ドーラは本を胸に抱きしめながら、ちょっとため息をつくようにいった。

「あなたガードナー先生のことなにも知らないようね」

「ええちつとも。はじめジャネットさんを見たとき、なんて嫌みなご婦人かと思っただわ。だってわたしの歌をきいたかと思うと、いきなり下手クソだなんて、ひどくおっしやるんだもの」

ドーラはクスクスと失笑しながら、ちよつと足をとどめた。

樹々のこずえから、テリー川の流れが見えた。

「じゃあ、ローズマリー・ヨハンソンなんて、もつと知らないでしょうね」

「ローズマリー？ わたしそんなまえは聞いたこともないわ。」

ねえ！ あなたわたしの知らないことたくさん知っているよね。ジャネットさんはどうして歌の先生をしてくだらないの？ ローズマリーって誰かしら、どうか教えてくだらない？」

ドーラはまた、気取ったように坂道をくだり始めた。

「そうだわ、わたしまだ名前をなのっていなかったわ、わたしシエラ、シエラ・クロウっていうわ。あなたはなんてお名前かしら？ ジャネットさんはドーラって呼んでなすったわ」

ドーラはあいてに背中をむけたまま、

「ドーラ・ブライス」

「良い響きだわ。ブライスっていうのは、気高い響きがあるわ。歳はわたし同じかしら、わたしは十三よ、ひよっとしてドーラも？」

「ええ、奇遇ね」

この二人のやりとりを見てみると、滑稽の一文字につきた。

シエラはもう、ドーラと仲良しになったつもりで話していたが、一ぼうドーラの方はといえば、着いてこないでよなれなれしい奴ねといわんばかりだった。

その後もシエラの一方的な会話はつづき、ふたりはほどなくイーストスレッジタウンのはずれに出た。

「ねえ？ ドーラはなぜジャネットさんに歌のレッスンを願うの？ もしかしてあなたもメイトリアル教会にお入りになりたいたか？」

「メイトリアルですって？」

ドーラは少し怒ったように、麦畑の道をひだりに曲がった。そしてシエラのことをはじめてふりかえったかと思うと、いった。

「あなた、どこまでついて来るつもり？ このさきはわたしのお家しかないわ。なれなれしいまでは許すけれど、これ以上はついてこないでちょうだい」

シエラはびっくりして、大きな門をこえて帰宅するドーラの背中を見送った。

シエラの憂鬱

シエラの憂鬱

サイラはしのび込むように、シエラの部屋に入って来た。そして悪戯でもたくらむようにシエラの背後にしまった。

けれどもそこに思いがけない悲しい顔があったというので、サイラはちょっと驚いて、いった。

「まあ、どうしたのシエラ、窓の外なんか見つめちゃって」

「ああ、サイラ………聞いてちょうだいよ、きょうも断られてきたわ」

窓の近くに椅子をかたよせて、シエラは感慨ぶかげに頬づえをついた。

「ガードナー先生ね？ シエラはもう2週間もかよっているものね、きょうはどうやって断られてきたの？」

「あんたはすじ金入りの下手クソさね、あたしは先生なんてやらないよ、やるもんかね、明日にはどうなるか知らないけれどね、だって。ニコニコしながらこういうのよ？ わたしがつぎになにかいおうとする間もなく、ぱたりとドアをしめておしまいになるのだもの」

おなかを抱えて笑うサイラは、花がらのクッションをだき、近くのソファアーに飛び込んですわった。

「おお、笑いごとではないわ」

サイラはシエラのものまねがいたく気に入っていた。それもそのはずで、シエラはすぐに人の真似をくわだてて、サイラをえくぼをうばっていたのだ。

「あらごめんなさいね、あたしシエラのものまねで笑わなかったこ

とが一度もないの。だいじょうぶよ、ガードナー先生はいまにシエラに歌のレッスンをしてくださるわ。だってほんとうに歌の先生をおやめになったのなら、もう来るなって、ぴしゃりとおっしゃるわ」「そうね」

シエラはほほ笑んだつもりが、不安そうな顔は変わらなかった。

「ドローって娘と仲よくなれて？」

サイラはこくびをかしげて、きいた。

「ダメね、たまにジャネットさんの家のまえですれ違うけれど、くちをきくどころか、わたしのことを見ようもしないもの」

「まあ、気に入くない娘ね。シエラもしかえしに、無視してあげればいいのよ」

「ええ、そうできたら良いのだけれど、なぜかわたし、ドローを見ているとそんな気がおこらないのよね。魅力があるのよ。顔なんてとつてもキュートだし、清楚で、おしとやかで、ドローはわたしがもっていないものをみんなもっているわ」

「シエラもじゅうぶん可愛いわ」

「わたしはダメ。可愛いというには、まゆげがっり上がりすぎだもの。ひたいも広いし、ああドローみたいにフランス人形のような顔だちだったらしいのね。それにわたしおしゃべりだわ。美しい女性というものは、キスするときと、美しさをほめられたときだけ、口をひらくものよ」

「あら、じゃあどうやって食事をするの？」

サイラは笑いをこらえながら、夢みるシエラをまじまじと見つめた。

「食べないの。ほんとうに美しい女性は、食事なんていらぬのよ。まわりの男性から、ただその美しさをほめられて生きてゆく、ああすてきだわ」

「大きく出たわね。ではシエラのいう美しい女性とは、みんな食がほそくって、ガリガリのからだをしているのね」

とことんサイラにからかわれて、シエラは現実にひきもどされる

思いだった。

「とにかくわたしは可愛くないわ。ルドヴィックにからかわれたって、とうぜんだわ。」

ところでマミー・グレイってひと、どんなひとなのかしら？」

サイラはびっくりして、急に言葉すくなになった。

「マミーがどうして？」

「気味がわるいのよ。気がつくといつも、遠いものかげからこちらを見ているの、わたしなにかいけないことでもしたのかしら？ サイラはなにか知っていない？」

聞かれたサイラは、戸惑いをおぼえながら、うやむやな返事をした。

「そうね、マミーは変わった娘だわ。たしかシエラより一つ年上なはずよ」

「そう。わたしもできれば仲よくしたいのだけれど、話しかけようにも、ささつと逃げていってしまうの。これではきりがないわ。サイラからもいってくださいさらない？ マミーさえ良かったら、わたしは仲よくしたいって」

サイラはちよつと視線をおよがせた。

「誤解のないように、伝えるわ」

「誤解？」

「ううん、なんでもないわ」

サイラは結局、マミー・グレイのほんとうのことを口にしなかった。

それはマミーを放っておいても、まさか間違いはおこるまいと、ことを簡単に考えたからだった。

シエラ、ローズマリーを知る

シエラはソフィの湖に来ていた。

ちよつと離れたところに馬車の屋根が見える、そのなかでジェニファーは、ゆつくりと聖書をめくった。

夏に来たときよりも湖はんの風はつめたかった。

すつきりした秋の空の下で、湖水は黒ぐろと澄みきっていた。

「はあ、どうにもこうにも、うまくゆかないわね」

シエラは赤いマフラーにあごをさし込みながら、水のすれすれにしゃがみ込んだ。

「もう一ト月もジャネットさんのところへ通っているのに、てんで相手にしてもらえないのだから、ほんとうにジャネットさんは、歌の先生をおやめになってしまったのかしら？」

シエラは砂のうえにゆびを置くと、下手くそシエラとなぞって水にさらわせた。

シエラのガードナー家がよいはあれから毎日のように続いた。

ドーラを追いかけて一しょに帰ったおかげで、シエラは森の抜け道からサウスヒルまでの近道を知った。さらにロード邸からテリー川にそって歩けばサウスヒルまであんがい近いことも知った。

シエラは朝いちばんにガードナー家へおもむいて行って、昼まえにはジャネットに歌のレッスンを断られて帰ってくる、という日々をくりかえした。

「毎にち毎にちジャネットさんから、あんたは下手クソだよ、て言われるものだから、わたしもう下手クソがじぶんの名前のように、なんとも思えなくなってきたわ。もし今、背中から下手クソって叫ばれたら、わたし気がねなく返事をしてしまおうわきつと」

馬車の馬が急に顔をあげて、白い鼻息をふきあげた。

「シエラや、もういいかえ？ 子供は風の子といたって、こう冷えるんじゃないあ、また風邪をひいてしまうよ」

ジェニファーは、しぼんだ様子で馬車へ乗り込んで来るシエラを見て、いった。

「どうしたんだねシエラ、最近めっきり元気がないじゃないか。あたしにできることはないかね？」

「いいえ、ジェニファーさんはいつもわたしに良くしてくださいわ。わたしはだいじょうぶ、きつとなにもかもがうまくゆくわ。いまはただじつと待つことが必要なの。ひよつとしたら明日にでも、ジャネットさんは歌のレッスンをつけてくださるかもしれないもの」

そうちからなく笑ったシエラは、あつと声をだしながら、そばにあった新聞を手にとった。

「どうしたんだいシエラ？」

「ジェニファーさん、これはいつの新聞かしら！」

シエラはジェニファーに身を押しつけて、興奮したようにいった。
「天才少女ローズマリー・ヨハンソン、メイトリアルソフィに会って書いてあるの！」

「それは先月の新聞さね。あたしは大きな記事しか読まないからね、そうかね、こんな奥地の、メイトリアル教会の記事なんて載っていたのかね」

シエラは顔を上気させながら、新聞の記事に食い入った。

「まあ！ まあ！ ローズマリー・ヨハンソンだなんて、わたし最近きいた記憶があるわ。それはええと、あれよ、ジャネットさん家の帰り道で、ドーラがさらっと口にした名だわ。ドーラはきつとこのことを言いたかったのじゃないかしら？」

記事にはこう書かれているわ……………。

本年度ロタオール音楽祭の最優秀賞受賞した天才少女、ローズマリー・ヨハンソンは十二日、メイトリアル教会へお忍びで訪問、天才歌姫ソフィ・シンクレリアと対面を果たした。

はじめにローズマリーが天性の歌声を披露し、会場に集まったこ

婦人らを圧倒した。

その後、メアリー・ヒルトンの指揮のもと、教会の聖歌隊が賛美歌の一節を熱唱。その響きの中で光りを放ったのはやはりソフィ・シンクレリアの天使の歌声だった。

後日、ローズマリー・ヨハンソンはソフィの印象を、メイトリアールのソフィがいるかぎり、このローズマリーは夜も眠れない、と語るほどで、師であるミシェル・フィッチは、あの夜よりローズマリーの慢心はなくなったと、ソフィ・シンクレリアの影響を大いに語った、ですって」

シエラは新聞を胸に押しつけながら、天を仰ぎ見た。

「ああ！ わたし記事を読みながら、まるでその場にいたような興奮をおぼえたわ！ ソフィはすごい、すごすぎるわ！ きつといまに世界で活躍するようになるのね」

「でもソフィは、その後のレセプションにまったく顔を見せなかったそうだけだね。うちの庭を手入れするホアキン・タイラーのじいさんが、ぶつぶついいながら帰ってきたのを覚えているよ」

ジェニファアはいいかかわらず、ソフィに良い印象をもたなかった。「ああ、それにくらべてわたしはいまなにをやっているのかしら？ 歌のレッスンすら満足にうけられないなんて、恥ずかしくってソフィに会わせる顔がないわ、このエネルギーをどこへぶつけたらいいの？」

「あたしにだけはぶつけないでくれよ、ただでさえシエラはちからがあり余っているのだからね、昨夜なんていったいサイラとなん時まで起きていたんだい？ 仲がいいのは良いけど、何事にも限度つてもんがあるのさ」

「サイラはタフね、あれだけしゃべり続けて、つぎの日にはしゃんとして、寝ぼけるわたしを起こしにくるのだから、サイラもきつとエネルギーがあり余っているくちだわ」

シエラは帰りの馬車のなかで、あすはもっともつとジャネットさんに歌のレッスンをつけてくれるようねばってみようと決心をした。

居残りレッスン

「そうかい、じゃあ、中へお入り。ドローはもうとっくに席について待ってるよ」

ジャネットは明るい朝の玄関に出て、ドアを大きくひらいた。

「は？」

「は？ じゃないよ、はやくしな」

シエラは肩すかしをくつた顔をした。

「何してるんだい、はやくしなつたら」

「え？ だって、あら？ まさか先生、わたしに歌のレッスンをつけてくださるといふんじゃないでしょうね？」

「まったく、これで三度めだよ、はやく中に入りな！」

シエラはケツを叩かれるようにして、ガードナー家へ入っていった。

家の中は明るい木のおいがした。

廊下、階段、かしこに白い布のかぶされた荷物が置かれ、ジャネットはここラウスハットへ越してまだ間もないことが知れた。

「あんまりきよるきよるするんじゃないよ、歌のレッスンをする部屋は、あそこだよ」

シエラが通された部屋は、暖炉がある、こじんまりした部屋だった。そこにはすでに、すまし顔のドローの横顔があった。

「さあさあ、はやく席につきな、やることは山ほどあるんだからね」
シエラはあたえられた席にもつかず、ジャネットのそでにすがりつくように、いった。

「待って、待ってくださいな先生！ わたし急なことで、まるつきりついてゆけないわ。」

先生あれだけわたしのお願いを断っておきながら、今日になって急にさあ歌のレッスンをするよじゃあ、なにもかもいきなりすぎるわ！」

「あんたはメイトリアル教会の聖歌隊に入りたい、そういったらうね？ だから歌のレッスンを付けてくれるって。だからこうしてあたしは歌の先生になったのさ」

「先生になってくれるのはありがたいのだけれど、あまりに急だというんです。だって、わたし一ト月もレッスンを断られたあとなんですもの！」

「あら、わたしはふた月よ。はやく席について下さらない？ ガードナー先生がレッスンを始められなくて、困ってなるでしょう？」

静かな中にもイライラした口調で、ドーラはいった。

シエラは言葉につまって、判然としない顔をして席についた。

「さあさあ、レッスンを始めるよ。じゃあまず、これをやってみようかね」

ジャネットは、みずからやる気を出すように手もみをしながら、洋綴じを二人にくばった。

「まあ、なにかしらこれは？」

「かんたんな歌の問題さね。まず、あんたたちが歌のことをどれくらい知っているか、教えてもらおうよ」

ドーラは紙をひと目みるなり、すらすらとペンをはしらせ始めた。それを横目にシエラは、困った顔でいった。

「いけないわ先生、わたし勉強はにが手なの、本を読むのは良いけれど、計算式なんて、からっきしだわ。だって、数字って無機質じゃない？ まるで機関車の歯車のようなだわ、ぎしぎしって、まあつまらない！」

「あんた人の話をよく聞きな、あたしを誰だと思っているんだい、歌の先生なのだから、歌の問題にきまっているじゃないか」

「あら、そういえば、そうね。わたし歌の問題なら、なんとかかなりそうだわ。だって、歌って、きつと答えはじぶんの中にありそうなもの。自由に歌えると同じように、自由に答えられるわ」

「まったくうるさい子だねえ、いいからさっさとやっておしまい！」

シエラは、紙の半ぶんまでですすんだドーラの優秀さを意識しながら、ぽつら、ぽつら、ペンをうごかし始めた。

ジャネットは、ハアとため息をつきながら、懐中時計を手にとった。

ジャネット・ガードナーは、シエラにはじめて会った一ト月まえより、だいぶ変わっていた。

あの頃のジャネットは、けんか別れするように音楽大学の先生をやめて、ラウスハットへ越してきたばかりだった。もう歌のことなど忘れたように、この地で静かに暮らそうか？ そうも考えて、草むらにふて寝していた。

ところへシエラの下手くそな歌声がきこえてきた。それはジャネットがいままで耳にしたことがないほど、下手くそな歌声だった。けれどもそんな下手くそな歌声をきいて、ジャネットはハツとした。

なぜハツとしたのか、それがわかるまでジャネットは、一ト月かかった。

ジャネットはいまのシンガーたちに、大きな不満をもっていた。なぜもつと自由に歌わないのか、なぜそつがない歌い方しかできないのか。

近頃の音楽会に招かれて行っても、もの足らなさしか残らなかつた。

『ジャネット、歌つてのはな、にんげんが歌うんだ。喜んだり、怒ったり、哀しんだり、楽しんだりする、にんげんが歌うんだ、譜面どおり完ぺきに歌おうなんて、どだい無駄な話だ。にんげんなんてのはな、なんにでもはみ出しちまうもんなんだ。そこをおまえはわかったらん。こまっしやくくれた歌ばかり歌いやがって、なにが最優秀賞をとつただ』

これはジャネットの師のことばだった。

彼女はその意味を理解するまもなく、数年まえに師を失った。

その師のことばが、いまのジャネットにしっくりとわかるような

気がした。

音楽大学でけんかしたのも、それが原因だった。

『歌ってのはな、にんげんが歌うんだ』

ジャネットがシエラの歌声をきいて、ハツとしたのは、いまは亡き師のことばを思い出したからだだった。

2

「ドーラは92点、シエラは……おやまあ、20点。

シエラ、あんたドレミもわからないじゃないか。そんなのでよく、メイトリアル教会の聖歌隊へ入ろうと思うものだね、まああきれてものがいえないよ」

ドーラは得意そうな顔をして、ひと目シエラを見た。

「おかしいわ。歌うように、書いていったのよ？ みんな間違えたのかしら？」

するとジャネットは、問題用紙をゆびで弾いた。

「シエラ、歌にはちゃんと、ルールってもんがあるんだよ、自由に歌うのはそれからさ！」

「ええ、でもやっぱり、問題はにが手だわ。歌の方は、まちがえなく歌えてよ？」

シエラはすぐに、歌の方でもうまくゆかない現実を知った。

ジャネットはピアノにむかったまま、頭をかかえた。

「あなたの音痴はすじ金いりだよ」

「おかしいわ、こんなはずではなくってよ？ もっと歌えたはずなのに、へんね」

「へんなものかね、いまのがシエラのほんとうの実力さ。あんたはいままで歌のいろはも知らずにいたんだ。それはいいとして、きよ

うからみっちりとあんたをしこんでいくから、覚悟するんだね」

その日は一日、息つく暇もなくレッスンが行われた。

ドーラは先生の教えの通り、きっちりと歌いきった。ところがシエラが歌う番になると、必ずピアノの伴奏がやみ、いく度も、いく度も、同じところを歌わさせられた。

「あんたの息つきを見ていると、こっちまで息苦しくなっちまうよ、譜面を見ていない証拠さね」

ドーラが隣りでクスクス笑うなか、シエラはひっしに同じところを歌いつづけた。それは飛ぶことをはじめて知った鳥の羽ばたきのように、失敗し、失敗してはおぼえていった。

「はい、じゃあ今日のレッスンはここまでとするよ。レッスンは週に三回、つぎはあさつてにやるからね。それまで家で練習してきな気をつけて帰えるんだよ」

長いレッスンだったので、さすがのドーラも大きなため息をついて、席を立った。

つづいてシエラもテキストをまとめ、へとへとな顔をして席をはなれると、目のまえにジャネットが立ちふさがった。

「どこへ行くこうというんだい、シエラ？」

「ええ？ だって、レッスンは終わったのでしょ？」

「終わったのはドーラさ。あんたは居残りだよ、こんな下手くそを帰しては、偉大なるシューベルトに怒鳴られるってもんだ」

それから日が暮れて、部屋に明かりが灯るまで、ジャネットとシエラのレッスンはつづいた。

「歌を歌うって、こんなにむずかしいことだとは知らなかったわ。だって、思うままに歌うのはいけないんですもの」

シエラはピアノにつつぶしながら、いった。

「なんでもそうさ。友だちと楽しいおしゃべりをするのにも、正しく言葉をおぼえなくてはならない。でも正しく言葉をおぼえさえしてしまえば、どれだけ楽しいおしゃべりができるか、あんたはそこをよく知っているんじゃないかね？」

ふたたびレッスンに入り、しばらくした頃、シエラはジャネットの顔をまじまじと見つめた。

「まだ何かあるのかい？」

「いいえ、でも、どうしても一つ疑問に思うことがあるのだけれど、どうして先生は、一ト月もわたしに歌のレッスンをつけて下さらなかったの？ それはわたし、とてもつらい思いをしたわ」

するとジャネットは、またかという顔をして、いった。

「歌が下手くそなくせに、そんな細かいことを気にするんじゃないよ」

「あら、歌が下手かどうかなんて、このさい関係ないと思うわ。どうして？」

シエラがすぐるようになると、ジャネットはくつくつと腹の底から笑いだした。

「あらやだ、わたし真剣よ？ 笑いごとではないわ」

「シエラはまだわかっていないようだね。あんたいまあたしに『歌が下手くそ』といわれたんだよ？ なのにくろっとしてるじゃないかね？ おかしいじゃないか、一ト月まえのシエラなら、カンカンに怒って抗議しているところじゃないかね？」

「まあ！ ほんとうだわ！ わたし歌が下手くそっつていわれて、もうなにも感じないわ。いつもならもつと頭にくるところよ？」

「それが大切だったのさ。あんたはこれから歌を学び、人まえで歌ってゆくには、必ずそこを克服しなければならぬ。観客から下手くそと罵声をあびても、顔色ひとつ変えずに、胸をはって歌いきる、
図太さ、シエラにはこれが必要なのさ」

けれどもシエラは、どうにもふに落ちない点があった。

「でも、それはドーラにはおっしゃらなかったわ。あたしだけ下手くそ、下手くそでは、不公平すぎるわ」

「おやおや、妬いているのかい？ ドーラはあんたよりも歌はうまいさ。これは本当だよ。歌がうまいのだから、下手くそとはいえないだろう？ あんたの場合は必要だといったのさ。はいつくばった

って、メイトリアルに入らなければならぬのだから？」

「ええ、そうね。でも、じゃあドーラはわたしよりもずっと優秀なのね」

「そうさ。あの子は優秀さ。かのメイトリアルだって、入って入れないことはないと思うね。」

でも、いいたかないが、ドーラはそこまでさ。上品に歌って、歌がじょうずだねと、いわれて、今後もそれと変わらない歌手人生を歩むんだらう」

「？」

「あたしはね、そんな教え子をたくさん見てきたんだよ。ローズマリーだって、もうすこしまもだったけれど、つまらない思い上がりがあるばかりに」

「まあ！　ローズマリーって、あのローズマリー・ヨハンソンのことかしら！」

「へえ、歌のいろはも知らないシエラが、ローズマリーを知っていたかね。あの娘は、周囲の声にまどわされて、あたしの教えも、あたしのもとからも、去っていったのさ。」

まあ、こんな話、するべきではなかったね。とにかくドーラは、そこまでの娘ってことさ」

「わたしは？」

「そりゃわからんね。なんたってあんたは下手くそなんだから。いまのままではまったく人に相手にされないし、だけどひよっとしたら……まあ、そのへんは誰にもわからないさ」

ルイス・ハンターの願い

ガードナー家でのレッスンはじまって、はや一ト月がすぎた。季節はすっかり冬、シエラは森の中を息を白くはずませながら、元気にかよってきた。

ジャネットのレッスンは、気ままに歌うシエラを叱りつけるように、ドレミから始まって、ドレミに終わった。

それはしつけを知らない犬に、お手、お座りを教えるようなものだった。が、やがてそれは、ドーラも目を見ひらくほどのスピードをもって、シエラの上達をたすけた。

ところが一つだけ、シエラのあの耳ざわりな歌声だけは、はじめの頃とちつとも変わらないのだった。

「お月謝というものがあるらしいわね、先生？ わたしいくらお支払いましたらよろしいのかしら？」

あるレッスンの帰りぎわである。

「いまさらなにをいっているんだい、必要ならとくにせびっているよ。あんたから月謝はとれない、なにも期待しちゃあいないんだよ」

ジャネットはピアノに敷布をかけながら、そっけなくいった。

「まあ、それではわたしの気がすまないわ。わたしいまは居候の身だけれど、なんとかくめんして、払います。だって、これだけ熱心に歌のレッスンをしていたでいて、タダってわけにはゆかないもの。いくらでも食いさがらうとするシエラに、ジャネットは大きく腕をくんだ。

「それをなんとかさせる身にもなってみなよ、あたしは世間さまに笑われちまうよ。だってあんたにはドレミしか教えていないのだからね、そんなもの、こどものお遊びさね」

シエラはテキストを胸に抱いたまま、きかん気のように、なかなか帰ろうとはしなかった。

「そうだわ！ わたし先生のお手伝いをさせていただけないかしら？ なんでもいいわ、先生が楽ちんな気分になれる、よいお手伝いはないかしら！」

「じゃあこの家の一切のきりもりをしてもらおうかね？ そしたらあたしは楽ちんだ。こっちはいちにち草むらで寝ているからさ」

「わかったわ」

「まに受けないでくれよ。ただの冗談さね。そうだね、だったらうちの犬を散歩につれていってくれないかね？ あまりかまってやれないから、あの犬は寝てばかりさ」

「それ、いいわ！ わたしやるわ！」

ジャネットに歌のレッスンを頼みに来ていた一ト月と、レッスに通うようになってからの一ト月のあいだで、シエラとガードナー家の犬とは、こちらが手をふれば、あちらでしっぽをふり返す仲間になっていた。

「ちからがある犬だからね、引きずられないように、ふんばって歩くんだよ？ なんとたつてジヨンは、こどもを3人ひきずって帰ってきたこともあるんだからね」

2

十二月に入ると、ホースウエストの森はすっかり葉を落とした。

木々はすっ裸になって、寒い、寒いと悲鳴をあげているようだった。そんな見通しのいい森の中を、シエラとジヨンとは、午後の散歩に出ている。

3人のこどもを引きずるほどちからをもったジヨンは、けれどもシエラに服するように、静かにあとをついて歩いた。

シエラとジヨンは、ちょうどイーストスレッジタウンが目下に見える、見通しの良い丘へ出た。

すると風の中から、げんきなこどもたちの声が聞こえてきた。

見れば、したの斜面に5人のこどもたちが、好きずきにシエラのもとへ登ってくる。

「わたしとおなじくらいの歳かしら？」

シエラはジョンにお座りをさせ、ちよつと高いところでこどもらが登ってくるのを待った。

すると彼らは、ゆく先にシエラの姿をみとめ、意味ぶかげに口をつぐんだ。

男の子が3人、女の子が2人だった。

「こんにちは、きょうはとっても寒いわね」

シエラは好奇心から、相手が来るのを待ちきれない様子で、話しかけた。

彼らのうちでまず言葉を返したのは、気が強そうで、けんかつ早そうな男の子、マーク・アンダーソンだった。

「おまえ、なんでガードナー先生の犬を散歩しているんだ？」

「頼まれているのよ」

「じゃあひよつとして、ガードナー先生のふたりの教え子って、ひとりはきみのことかな？」

ちびっこく、大きなめがねをかけたロバート・クワトロは、シエラとジョンを見くらべながら、きいた。

「ええそうよ。わたしの先生は、ガードナーさんよ」

シエラは誇らしい気分から、胸をはるように、いった。

ところがそれを聞くなり、気の弱そうなジェシカ・ギブソンは、急に目に涙をためて、しゃがみ込んでしまった。

それをかばうように一しよにしゃがんだのが、金髪をみごとに結ったエズメ・テイラーだった。彼女はシエラをうらめしそうに、強い目をあげた。

「ひどい人！ ジェシカのまえでそんな自慢するなんて」

「自慢？」

「そうよ、自慢だわ。あなたゆづめいなガードナー先生に歌を教え

てもらって、いい気になっているのでしよう！」

ジェシカは今にも消え入りそうな声で、

「エズメ、もういいわ、あたしもうすっかりガードナー先生のことあきらめたんだもの」

「ほら見なさい、あんたのせいでジェシカはまた悲しみを思い出してしまったわ！」

ジェシカはね、なんともなんともガードナー先生に歌のレッスンを付けてくれるように頼みこんだのに、まったくあいてにされなかったのよ、わかる？ この悲しさ」

「まあ、ごめんなさい、わたしなにもかも知らなかったのよ、でもわたしだつて一ト月も先生にレッスンを断られたわ」

「ジェシカは一ト月と三日よ！」

そこを間違えなさんな、とばかりにエズメはいい返した。

「ところでおまえ、歳はいくつだ？ ここらで見かけない顔だよな？」

マークはいかにも気性があらそうに、手にした木の枝をぶんぶん振り回しながら、きいた。

「十三よ。この夏からこつちに来ているの、見かけないはずだわ」

「ぼくも十三さ。きみはひょつとして、ロード邸に来ているっていう子かい？」

いままで沈黙をまもっていたルイス・ハンターは、この5人の中ではじめて友好的な態度をつくり、シエラにあくしゅを求めてきた。「ええそうよ。わたしはいまロード邸にお世話になっているわ。あら、あなたとは仲良くなれそうね」

シエラはその手をとり、にっこりとほほ笑んだ。

ルイスは栗色のさらさらした髪を風にさらして、グレーのひとみを輝かせた。そのととのつた眉と鼻すじは、この中でもっとも賢そうに見えた。

「じゃあ、ジェニファー・ロードさんと、お知り合いなのかな？」

「ええ、とつても仲良しだわ」

そんな好意的な会話をもちだしたルイスは、ほかのみんなからうらぎりものに見えた。

「おいルイス！ この女とジェシカと、おまえどっちが大事なんだよ！」

「そうよ、そうよ！ この子はジェシカの夢と希望をうばった張本人よ！ 会話を楽しんでるばあいじゃないわ」

けんかつ早いマークと、おてんばなエズメは、ふたりそろってルイスの胸をこづいた。

「まあ、まあ、みんな落ち着きなよ。それこそジェシカがかわいそうじゃないか。そうだろう？ みんなはジェシカにさか恨みをさせる気かい？」

ねえジェシカ、きみはガードナーさんの教え子になれなかったのを、そのあとで何も知らないで教え子になった、罪のないこの少女のせいになっているのかい？ きみはそんな軽蔑される人間のひとりなのかい？」

ジェシカは、ルイスの巧妙な話術にはまって、まさかシエラにさか恨みをしているとは言えなくなった。

かくして気の弱いジェシカは、泣きやんだあとで、じぶんはまったくシエラのことをうらんでいないと、あくしゅをさせられた。

「さあ、うらみっこなしの仲なおりだ。ほら、エズメもいつまでムスツとした顔をしているんだい、はやくこの少女とあくしゅでもしたらどうだい？」

ルイスがみんなの背中をおすように、ひとりひとりシエラに自己紹介をうながした。

「わたしはシエラ・クロウよ。さあ、みんな仲良くしましょうね。わたしはまだこれといった友達がないから、ルイスもジェシカも、エズメもマークも、ロバートだって大歓迎よ！」

かれらは、ジェシカの悲しみさえ癒えてしまえば、のんきで無邪気な少年たちだった。午後のあいだはシエラの散歩についてまわり、その中でいろいろと話がうまれた。

「まあ、じゃあマークは、いままでけんかをした中で、一度だって負けたことがないの？」

「ああそうさ、腕つぶしは木こりの親父ゆずりだからな、いっつも勝っちゃうのさ」

「ジェシカはピアノの先生になりたいの？」

「ええ、あたし小さい頃から弾いているから、音楽の時間は先生にかわって伴奏するわ、大きくなったら小さな教室をひらけたらいいと思うわ」

「エズメはなにか、得意なことあって？」

「あたしは手さきが器用だから、髪の毛を結わせたらだれにも負けないわ。ほら、この髪だつてじぶんで結ったのよ」

「まあ素敵。ロバートは？」

「ぼくはギターさ。父さんはクラシックギターの演奏者だから、その影響をつけてね。いつか親子で舞台上に立てればいいなって、父さんの口ぐせさ」

そして話はドーラ・ブライスにおよんだ。

「あの娘はうちの学校でも嫌われているわ。だっていつも鼻さきをつんとあげて、人のこと見下しているんだもん、おすましさんだわ。あら、呼びましたこと？」

エズメはドーラのまねをして見せて、みんなを笑わせた。

木の影が大きくなった。

みんなの吐く息が急に白くなった。

山から見える空がいつか日没をむかえていた。

「ここに来ればシエラに会えるってわけね、わかったわ。じゃあまたいつでも来るわ、さようならシエラ」

エズメは金色の髪をゆさぶって、大きく手をふって帰っていった。ひとり、またひとりとシエラに別れをつけてゆくなか、さいごに残ったルイスは、まだ話たりないような顔をして、いつまでもジョンのあたまをなでていた。

「あの、シエラ、ひとつ頼みを聞いてほしいんだ」

「あら、なにかしら？」

「うん、きみはロード邸に来ているといったね？」

「ええ」

「ジェニファーさんと仲良しだとも」

「ええ、仲良しだわ」

ルイスは夕日に立ち上がって、シエラと目を合わせた。

「ぼくはこう見えても画家のはしくれなんだ。メイトリアル教会にも、ぼくの絵が飾ってある」

「まあ！ それってほんとう？」

「うん、画会に認められた一まいでね、父の薦めで寄付したのさ。

ぼくはおもに風景画がとくいなのだけねど、次の展示会に描く絵がまだどうにも決まらないんだ、そこでどうか、ロード邸に隠されたひみつの湖を描いてみたいと思ったんだ」

「まあ！ それはきつとソフィの湖のことだわ、すてきね、ぜひルイスに描いてほしいわ！」

「やっぱりきみは湖のことを知っていたんだね」

「ええ、わたしあそこが大好きなの」

「それはすごい！ ぜひ、ぼくもそこへ連れていってくれないかな！ なんせあの湖はジェニファーさんの持ちものだから、ぼくは一度もこの目で見ることがないんだ、ぜひ、この手で湖を描かせてくれないか？」

「いいわ」

シエラは二つ返事で答えた。

気まえの良いジェニファーさんのことだもの、きつと喜んでソフィの湖を描かせてくれるにちがいない、シエラは気を大きくして、そう思った。

目を輝かせたルイスと、かたいあくしゅを交わしたあと、シエラは鼻うたまじりにガードナー家へひき返していった。

シエラとルイスの失敗

「なにをいつているんだい？ あんた正気かい？」

いままで会話を楽しんでたジェニファーは、急に顔色を変えた。

ロード邸の食堂では、いままさに夕食がすんだところだった。

「ええ、正気ですとも。ルイスはとつてもいいお友達だわ、画家のはしくれなんですって。だからかれの願いどおり、ソフィの湖を描かせてあげたいの、だって、すてきなことだわ！ あの美しい湖が、芸術となつて、これからずっとわたしたちの目を楽しませるのだから！」

ジェニファーはゆっくりとカップをおいて、さらに声をしばっていった。

「シエラ、あんたはあたしとの約束を忘れたのかい？」

「約束？ あらなんだつたかしら」

「とぼけるんじゃないよ！ あんたがここで生活していることを、ラウスハットのにんげんに話すんじゃないと、あれだけ注意したじゃないか！」

バン！ とジェニファーはテーブルを叩いた。

その大きな物音と、怒鳴り声とに、シエラはあたまのてっぺんからつま先まで驚き、手にしたフォークを落とした。

じぶんの軽はずみな行動が、ジェニファー老婦をこれほど怒らせたことに、恐れ入り、また気がとがめ、みるみる青いひとみから大つぶの涙があふれてきた。

「わたし、ジェニファーさんがそこまでラウスハットの人たちを気にしてらっしゃるなんて、知らなかったんですもの、だってわたし、このロード邸がもっと明るくなればいいなって、思っていただけなの。」

だってジェニファーさんは陽気なんですもの、こんな人を閉め出したようなお城のなかで、ひとり静かにすごしているなんて、もっ

たいたい話だわ。

でもジェニファーさんがそこまでお怒りになって、注意なさるのなら、わたしのしたことは決して許されるものではないわ」

メイドたちは食器を片づけながら、シエラの話にふかく耳を傾けていた。

「ああ、わたしはなんて馬鹿で勝手だったのでしょうか。きっともうジェニファーさんはわたしの顔なんて見たくもないでしょうね。そしたらわたし、ヨロヨロと弱った小動物のように、ここを追い出されなくてはならないわ。わたしこれからどうしたらいいのかしら？ またあの草原の小岩さんのところへ行って、慰めてもらおうかしら」

いつかサイラをふくむメイドたちは、あわれなシエラの背中をとりかこんで、鬼を見るような目つきでジェニファーを見ていた。

「なんてことをいうんだい、あたしやそんな残酷なことはいらないよ！ まったく、あたしもすこし怒りすぎたようだね。でも、ルイスとかいう少年の願いは許さないよ。ラウスハットの連中は、なんぴとたりともこのロード邸の敷地は歩かせないからね」

ジェニファーは大きなため息とともに、ちよつと窓のほうへ体をむけて、遠い目をした。

それからシエラは、なんだか目覚めがわるく、明るい話題は口から出なくなつた。

ジェニファーにしても、後味のわるさを感じながらも、じぶんのいいぶんもあり、すすんで空気を変えようとしなかった。

2

それから数日がたった。

きびしい歌のレッスンがすんだシエラは、あまり気乗りしない足どりで、ジョンの散歩に出かけた。

サウスヒルから冬の森をぬけて、ホースウエストの山みちに出ると、さわやかなルイスの笑顔が待っていた。

「やあ、レツスンが終わったみたいだね？」

「ええ、終わってしまったわ」

シエラは気のぬけた笑顔をかえして、ルイスと散歩をともした。ルイスはきのうも、おとついても、シエラの散歩みちに立っていた。それが『ソフィの湖の件』を聞きたくて、シエラの散歩みちに立っていることは、いかな鈍感なシエラも、想像できた。

けれどもシエラは、良い返事を心待ちにしているルイスの笑顔に出会ってしまうと、どうしても、どうしても、ルイスの希望がジェニファーにとどかなかつたとは、いい出せなかつた。

ルイスのほうでも、みずから進んでソフィの湖の件がどうなったか、きいてくるそぶりはなかつた。

「きょうはお一人？」

「うん。みんな今頃は、教室のストープにあたっているところだよ。そうとう風が冷たいからね」

ルイスはシエラから、ジョンのたづなを受け取り、みずからジョンの散歩をかって出た。

シエラはそれを、ソフィの湖を描かせてもらう、ルイスなりのお礼ととって、また切ない気分になった。

とうとうシエラは、あまりの罪悪感から、白旗をかかげた。

「ああダメ、ダメだわ！ やっぱり早くにいわなければならぬわ、これ以上わたしたえられやしないもの。」

あのね、ルイス。怒らないで書いてちょうだい、すこしまえにわたし、ジェニファーさんにソフィの湖のことをお願いしてみたの。そしたらジェニファーさん、このことをお許しくださらなかったの。ほんとうにずいぶんお願いしたのよ？ でも、ダメだったわ。わたしのこと、腹が立って？」

ルイスはそれをきいて、ちよつと思ひ出したように、ああ、といった。

「ああそのことかい？ なに腹が立つかって？ とんでもない！
むしろうれしくらいさ。だってシエラはぼくのいったことを、ち
やんとジエニフアーさんをお願いしてくれたじゃないか。まあ結果
はダメだったけれども、ぼくはそんなこと気にしやしないさ。断ら
れるくらい、はじめから見当がついていたのさ、ジエニフアーさん
のうわさもあつたしね」

「いけないわ、ルイス！ うわさつて、ちつともあてにならないの
よ？ ジエニフアーさんはとってもいい人なの、だけどちよつと、
変わったところがあるだけ、きつとソフィの湖の件を断つたのも、
なにかふかい事情があるのよ。だからジエニフアーさんを誤解しな
いでね」

シエラはルイスのそでをひつ張るように、力説した。

「うん、誤解しないよ。ぼくが信頼をよせるシエラがそこまでいう
んだ、きつとジエニフアーさんはいい人にちがいない」

「ありがとう」

ルイスは、ジョンの耳とくびをくしゃくしゃになでまわしながら、
いった。

「おまえのご主人さまは、ほんとうに魅力的だな。もしもおまえの
ご主人さまが、ジエニフアーさんのことを悪くいうのだったら、ぼ
くはすこし幻滅をおぼえたにちがいない、なあジョン、きみもそう
思わないかい？」

「あら、わたしはジョンの散歩をしているだけで、ジョンのご主人
さまはジャネットさんよ？」

「ああ、そうだったね。これは失敗。ぼくはガードナーさんを魅力
的だといってしまったんだね？ ジョン、ちよつとご主人さまには
黙っててくれるかい？」

それからシエラとルイスは、雪でも降りそうな空の下を、枯れ枝
をふみ鳴らしながら、歩いた。

「ドーラ・ブライスのこと、どう思つて？」

シエラは、ルイスならばドーラのほんとうの姿を知っていそうに

思い、きいた。

「みんな、きどり屋っていうね」

「あなたの意見は？」

シエラはりょうてに温かい息をふきかけながら、きいた。

「ぼくの目には、ドーラはいつも強がっているようにしか見えないんだ。じぶんはほかの子とはちがう、育ちが良いんだと思っていないから、でもなぜ、じぶんはみんなから孤立してしまうのか、なぜこんな淋しい思いをしているのか、悩んでいるように見えるね」

「やっぱりあなたもそう思うのね！ ルイスは人を見る目があるわ。きっとそのうち、そのちからがあなたのためになる日が来るわ！」

シエラはひとり、飛ぶようによろこびながら、枯れ葉のうえを軽く歩いていった。

そんなふしぎな魅力をもった少女を、ルイスはいつまでも、いつまでも、強く見つめていた。

マミー・グレイのひみつ

ラウスハットに雪がふった。

夜になってふった雪は、あっという間にジエニファー・ロードの森を白くした。

シエラは窓から身をのり出して、りょうてを雪の中にひろげた。

「サイラ、まあ！ 見てごらんさいよ、雪だわ！ わたし雪がふるとじつとしていられないの。美しいわあ！ ほらあなたもここへ来て、手をのばしてごらんさいな」

サイラは寝るまでのあいだ、シエラの部屋でくつろぎのひとときをすごしていた。

「へえ。寒い、寒いと思ったら、ついにふったのね。いい降りだわ、きつとことしのクリスマスは、ホワイトクリスマスになりそうね」
クッキーをかじりながら、けれどもサイラは窓の雪に近づこうとしなかった。

「ねえ！ 明日はあさ早くに起きて、大きな雪だるまをつくりましょうよ！ そしてジエニファーさんを驚かせましょう？」

「いやよ、寒いわ」

サイラは目をほそめた。

「まあ、寒いのは最初だけ、じきからだがあつたまるわ！ あなたがいないと、楽しく雪だるまがつくれなくてよ？」

「やあねえ、そんなに誘わないでよ」

「雪がふったばかりのあさって、そりゃあ素敵よ？ わたし一年のなかでいちばん好きな季節だわ。あさがいいの。ちよつとでも日があたってしまつと、ダメね、銀世界が水っぽくなるもの。幻想的な世界が煮くずれする感じ？ ふりたての雪は、ぴんと張りつめていて、静かなの、木の枝から舞い落ちる雪の結晶は、ほとんどダイヤモンドだわ、きらきらして、ほおをかすめてあいさつするの、ああたまらないわ、胸がわくわくするもの、どう？ 寒さなんてぶきと

んじまつて？」

サイラはりょうてをあげた。

「わかった、わかった。そんなにいうのなら、いちどだまされたと
思って、手伝ってあげるわ」

「まあうれしい！ なにかをうんと楽しむのに、一人よりも、サイ
ラとふたりの方が、ずっと楽しいもの」

サイラはあくびをかみながら、立った。

「あした早いんでしょう？ あたしもう寝るわ」

「ええ、おやすみサイラ」

ひとりになるとシエラは、もういちど窓にそって、雪の夜を楽し
んだ。

シエラの育ったバーゲンダーツは、冬はきびしいばかりで、雪の
美しさを知るひまがなかった。

風が荒れくるう土地だから、毎夜のように吹雪きになった。むこ
うがすけて見えるほどすい毛布にくるまって、まいばんシエラは
こごえて眠った。

だからシエラは、ラウスハットのしんしんとふる雪のしとやかさ
に心はずんでしかたがなかった。

「ソフィだわ。こんな静かな雪を見ていると、なぜだかソフィを思
い出すのよ。親友をうらぎって、死なせてしまったというソフィの
うわさ。あれはほんとうなのかしら。あの冷たい目をするとき、ソ
フィはきつとこんな静かで冷たい心なのかしら？」

さいごまで灯っていたシエラの窓あかりは、やがて音もなく消え
た。

夜はふけて、ふさ、ふさという雪のつもる音ばかりが聞こえるよ
うになった。

シエラはすっかりベッドの中に入って、ふかい寝息を立てていた。
小さな少女に大きすぎるベッド、そのうえを廊下からかすかな明
かりがのびてきた。

どこかのすきま風に押されて、シエラの部屋のドアがひらいたか

と思えば、そうではなかった。

シエラは、あるかなきかの夢にうなつて、ベッドの中をうごいた。するとベッドのなかで、なにかとうごきがぶつかって、目がさめた。「??」

シエラはそれがなんであるか、はつきりとつかめないまま、けれども恐ろしい予感にうたれて、かけ布団をはらった。

「だれ？」

起きあがったところで世界は夜のもの、シエラはベッドのなかみを見ることが叶わなかった。けれどもベッドにはちゃんと誰かがいて、おののき、寝具をけ散らしながら、部屋を走り去っていった。

「どろぼっ！」

シエラはとっさに叫んだ。

「待ちなさい、どろぼっ！」

シエラがあとを追って廊下に出ると、ずっとさきの、雪あかりの廊下のむこうを、誰かが走った。

にげるものにとって、シエラの足の速さは驚異だった。ころがるように階段をかけおり、壁へつきあたり、つきあたり、するうちにシエラはすぐ背中まで迫って、そでをとられそうになった。

「そらつかまえたわ！ さあかんねんささい！ あなたきつとどろぼっねっ！」

とうとうシエラは、あいてのよこっ腹をひったくるように、つかみかかって、床にねじふせた。

「あなた！ まあ、メイド服を着ているわ？ それに、まあなんてこと、あなたマミーじゃないの、マミー・グレイ、ねえそうでしょうっ！」

するとマミーはからだのこわばりとき、呼吸をととのえ始めた。「ねえ、なんとかいってちょうだいよ！ わたしにはさっぱりわからないわ、わたしの記憶が確かならば、あなたはわたしのベッドでなにをしていたの？」

シエラも息をととのえながら、マミーの肩をひっしにゆすった。

「いっぽうマミーはといえば、ひざをくずしてすわったまま、いっこうに口をひらこうとしない。」

「ねえったら、ねえ、なんとかいってちょうだいよ！ マミーは遠くから、ずっとわたしのことを見ていたわ、なぜ？ どうしていつもにげるように、遠くから見ているの？ それを急にこんな妙なことをして」

「かわいかったの」

「はあ？」

「あなたかわいかったのよ、すっごく」

「マミーはひらきなあって、こんどはシエラの顔をなめるように見つめた。」

シエラの顔はこおりついた。

「ああ、あたしこんなことでしか、あいてに想いをつたえられないの。だって、わかるでしょう？ あたしおく手だし、あなたのようにかわいい人しか愛せないのだもの」

シエラは言葉をうしなつた。

「なんといってみようにも、なんともいえなかった。ただ青ざめてりょうてでくちをおおっていた。」

「ああ、シエラ、お願いよう！ このことはあたしとあなたのひみつにしてくださいさらない？ このことがもし、あのエスタ・スイートにでもバレたら、あたしこんどこそロード邸にいられなくなるわ！」

「マミーはじぶんの罪はさておき、もしシエラがことをバラしたら、最低な人だ、といわんばかりの口ぶりだった。」

「あたしはここでしか生きていられないのよ！ ここを追い出されたら、あたしきつとまた、汚いパプでひどいめにあいながら、ボロぞうきんのように生きてゆくしかないの。だからどうかこのことは、シエラの胸にしまっておいてくれない？ お願いよう！」

「マミーにひどいめにあわされたシエラは、けれどもこんなときにさえ、良心を燃やして、マミーの話に強くうなづいていた。」

「わかった、わかったわ！ わたしがこのことをだまっていさえず

れば、マミーはここを追放されずにすむのね？　いいわ、わたし誰にもこのことをいわないわ！

でもねマミー、二度とこんなことをしないって、わたしに約束してくれる？　わたしつぎにはきつと、たえられないわこんなこと。約束よ？」

「ええ、それはもう！」

シエラは、マミーとの約束のあくしゅに応じた。

この夜明けまえのひとまきは、あとにもさきにも、滑稽というほかなかつた。

「どうしたの、シエラ？」

シエラは大きな雪だるまに、にんじんの鼻をつつ込みながら、ちよつとぼんやりしていた。

「え？」

「え、じゃないわ、あなたさつきつから、へんよ？　さくやはあんなにはしやぎまわっていたのに、けさになったら、ぼつつとしちゃつて、なにかあった？」

サイラは毛糸の帽子をかぶり、ベージュのマント姿で、シエラの目の奥をのぞき込んだ。

木の枝から舞い落ちる雪の結晶は、シエラのいうとおり、ダイヤモンドのような輝きだった。

「あらなんでもないわ、ちよつと雪だるまの顔が気に入らなかつただけ、ほんとうになんでもないんだわ」

「そお？　ならいいけど」

シエラは、マミーのことを思うと、口がさけても、と決心するのだった。

「ほら、ジエニファーさんが起きてきなすつたわ、まあこつちを見ているわ、サイラ、腰をひくくして、かくれるわよ！」

起きぬけのジエニファーは、じぶんの森に雪が降ったのに驚いたばかりか、いつか大きな雪だるまが庭にできあがっているのに、ハツと胸をおさえた。

ルイスの絵をもとめて

シエラは、メイトリアル教会に寄付したというルイスの絵をもとめて、教会の廊下を歩いていった。

教会と小さなホールをむすぶ廊下には、クリスマスキャンドルがほのおをゆらしていた。

「ルイスはきのう、このあたりの壁にかざってあるって、教えてくれたわ」

シエラはうす暗い廊下にかげられた、絵画の一まい一まいを見てまわった。

聖母マリアの絵や、ひつじ飼いの絵など、ふるいがくぶちが暗やみにうかび上がっていた。

そのなかで一まいだけ、人物画ではない、大きな教会の絵がまざっていた。

「ああ、きつとこの絵にちがいないわ、ルイスのいったとおり、町なみから見たシャルトル大聖堂が描かれているもの！ わたしシャルトル大聖堂なんて見たことないけれど、きつとこんな美しい教会にちがいないわ！」

教会の聖堂では、いまもパラメヤリユーイッヒ、リリイたちが歌う、グレゴリアン・チャントが流れていた。

シエラは、しばらくはルイスの絵をまえに立ったまま、しずかな聖夜をすごした。

ぼんやりとかすみのように描かれたシャルトル大聖堂は、それを見たことのないシエラにも、なつかしい印象をあたえた。

「すてきだわ、これをおないどしのルイスが描いたなんて、とても信じられない。彼はきつと、将来ゆうめいな画家になるにちがいないわね。ああ、はやくなんとかジェニファーさんを説きふせて、ソフィの湖をかかせてあげたいわ」

シエラはこんや、ジェニファー老婦の馬車にのって、メイトリア

ール教会のミサにやって来た。

ジェニファーは、クリスマスの夜になるとまいとし、メイトリアル教会にお祈りに来ていた。

いつもは黒のコートに大きな帽子をかぶって、ひと目をぬすむようにお祈りにきたが、ことしはシエラにサイラまでひきつれて、にぎやかにやってきた。

「あんたらはまったく、クリスマスをパーティーかなんぞと勘ちがいでいるじゃあないかい？　まあ朝から浮き浮きして、うるさいったらありゃしない」

楽しそうに馬車から顔を出すシエラとサイラに、ジェニファーはひにくをいった。

クリスマスになると、メイトリアル教会はおもいとびらをひらいた。

まばらにやって来る信者たちは、手にキャンドルの火をともしながら、少女たちの美しい歌声が流れる聖堂を、いち列にあるいた。

「んまあ！　ルドヴィックだわ！　ほらシエラ、いちばんまえの席を見て！　あこがれのルドヴィックがあすこにすわっているわ！」

サイラは小さな声で、はしゃいだ。

シエラは、ちよつとルドヴィックのうしろ頭を見ただけで、つまらなそうに目をそらした。

「ええ、あれはきつとルドヴィックにちがいないわ。まったく、彼がいちばんまえの席でよかつたというものよ」

ほかにも知っている顔があつた。

リユーイツヒ、ヒルトン先生、キャンドルの火をとすすなかに、ラスタル駅のトーマス・マクレーンおじさん、イーストスレッジタウンのエズメ、ドーラのすまし顔なんかもあつた。

それはシエラがメイトリアル教会から飛び出して、過ぎ去つた、はん年の月日を思わせた。

けれどもシエラは、こんやいちばん期待していたソフィ・シンクレリアに会うことは叶わなかつた。

メイトリアル教会の聖歌隊が一堂に会して、美しい歌声を響かせるクリスマスイヴの夜に、ソフィの歌声はまざらなかつた。

「あなたのお気に入りは、どうやら出てこないようだねえ。せんかいのレセプションでも顔を見せなかつたっていうし、世界のソフィ・シンクレリアは、まったくおもて舞台からすがたを消しちまつたじやないか」

ジェニファー老婦は、年ねんわるくなる足をひきづりながら、いった。

クリスマスのお祈りがひと息ついて、あとは聖夜を楽しむばかりとなつた。シエラがもう一つの目的であるルイスの絵をもとめて、ひとり教会をあとにしたのは、このときだつた。

「ジョセフィン？」

ルイスの絵に夢中になっているシエラに、だれかが声をかけた。

「おお神さま、信じられないわ！ あなたジョセフィン・レタスじやない？」

シエラがその声にふりかえると、修道服すがたの小がらな女性が、ちよつと遠くから歩いて来るところだつた。

「まあ、わたしとしたことが。ジョセフィンが帰ってくるはずがないのに、こんやのわたし、どうかしているわ」

修道服の若い女性は、おどろいた胸をおさえながら、シエラに笑顔を見せた。

「あなた、どこのお嬢さんかしら？」

「わたしはシエラ、シエラ・クロウですわ。こんやはあの、ジェニファー・ロードさんといっしょに、クリスマスのお祈りにきました」

「まあ、ジェニファーさんの？ おめずらしい」

シエラは、あいての顔や表情がはつきり見えないので、おびえながらきいた。

「あのう、この廊下は、まあすてきな絵がたくさん飾つてあるのだけれど、知らないわたしなんか勝手に入ってはならなかつたかしら？ わたしこの、友人が描いた絵を見たくつて、ここまでやつて

来てしまったのだけれど、まさかそのことでこれからこっぴどく怒られてしまうのかしら？ それからあなたは、ヒルトン先生ですか？」

すると相手は、シエラのちぐはぐな言葉の意味をちょっと考えて、合点すると、すぐにまた笑った。

「わたしはスタンレー・リース。ヒルトン先生とおなじ、このメイトリアル教会の先生だけど、あんなムチをもって教えるおっかない先生ではないわ。わたしはこの少女たちに読み書きを教えているの」

シエラは相手がああ、泣く子もだまるヒルトン先生でないとわかって、ホッとした。

「あおう、先生にひとつお聞きしてよろしいかしら」
「？」

「ソフィ・シンクレリアのことです。こんやソフィはクリスマスのミサにおを出ないようですが、いまでもどうしていますのでしょうか？」

「ああ、ソフィのこと？ あの娘はこんや、ロタオールにいついて、ここにはいないわ」

「ロタオール？」

「ええ、ロタオールの音楽大学で、テスト中といったところね」

「テスト？ なんのテストかしら？」

「先生になるためのテストよ。ソフィはこんど、歌の先生になるらしいわね」

「まあ！ ソフィが歌の先生に？」

シエラはおどろいて、青い目を輝かせた。

リース先生は、そんなことどうにでもいいように、あとをつがないで、ふたたびシエラのすがたへ目をうごかした。

「それにしてもあなた、たいへんよく似ているわ」

「？」

「あなたジョセフィンにそっくりなのよ。じつはあなた、なまえは

シエラじゃなくって、ほんとうはジョセフィン・レタスというのじやなくて？」

リース先生は冗談まじりに、きいた。

「ジョセフィン？ いいえ、わたしは生まれていちどだって、そんなまえではありません。シエラ・クロウ、このなまえですわ」

「そうよね、そうにきまつているわね」

シエラはあんまり似ている似ているといわれて、だんだんそのことが気がりになった。

「あのう、ジョセフィンって、いったいだれのことでしょう？ そんなにわたし、ジョセフィン・レタスさんに似ているのかしら？」

リース先生は、ふつとわれに返るように、

「ああ、ごめんなさいね、こんなことをいってはならなかったわね。あなたも、死んだ少女に似ているっていわれるのは、あまりいい気がしないと思うわ」

「死んだ少女？ じゃあジョセフィンって」

「ええ、つまりジョセフィンは、もうだいぶまえに亡くなってしまったのよ。ふこうな事故でね」

リース先生は、シエラといっしょにシャルトル大聖堂の絵にむかしながら、つらい過去をむしかえした。

「ジョセフィンは、おさない頃からずっと、メイトリアル教会の聖歌隊でぞだった少女。わたしはずっとあの子の先生をしてきたから、あの子のことはなんでも知っていたわ。泣き虫で、おしゃべりで、とことん頑固。ふしぎな魅力をもった少女で、なにか発想がひととはちがっていたわ」

シエラはそれらの話を、ふしぎな顔をしてきいていた。

「いつもソフィといっしょにいてね、なんでもお互い話しあっていたわ。あのリユースヒでさえ、そのなかに入れなかったほどよ。

でもね、ある日ふこうが起きたの。それはわたしたち先生にも責任があったわ。そう、わたしにも責任があった。そして、ソフィにもね。だけどしかたがなかったのよ、こうなるよりほかしかたがな

かった。

そのふごうのせいで、ジョセフィンのもつすぐな想いや夢や希望が、一夜にしてこわれてしまったわ。

それからまもなくのことよ、悲しい事故がおきてしまったのは。

ジョセフィンはそれっきり、二度と帰らぬ人となった」

いつかりース先生は、ハンカチを目にあてていた。

「ソフィはそれを、いまでもすべてじぶんのせいだと思いこんでいるわ」

「ソフィが？」

「そうよ。ソフィはそれくらい、呪われたような日々をすごしているの、あなただって見たことあるでしょう、ソフィの氷のようなまなざしを。あれはすべてジョセフィン・レタスが死んでしまった日から、はじまったのよ」

シエラは、ルイスの絵をもとめて来て、思いもよらない話をきいてしまった。

「だからこんや、ジョセフィンにそっくりなあなたが、この廊下に立っていたものだから、わたしは聖夜に奇跡を見たように、大へんおどろいてしまったわ。だってこんやは、降誕祭じゃない？」

『じぶんが大切にしていた親友をうらぎって殺した』ジェニファー老婦はこうソフィをののしった。

いまリース先生からきいた話もやはり、おなじようなすじの話だった。

シエラは日に日に、ソフィのひみつに近づいていく気分だった。

ましてやじぶんは、ソフィの親友で死んでしまった少女に、そっくりだという。

シエラは帰りの馬車のなかで、きゆうに口かずの少ない少女となつて、窓に流れる雪をみつめていた。

ドーラ、口をひらく

新しい年になって、シエラは十四歳になった。

雪は朝から晩までふって、どっさりつもった。

ガードナー家があるサウスヒルも、ロード邸があるサニーエンドも、雪の中だった。

乗りものは馬車からそりにかわり、毛皮のオーバーを着こんだ男たちが雪の小みちを滑っていった。

そんな中、歌のレッスンはまえが見えない吹雪でもないかぎり、休みなくつづいた。

教室のストーブは、まっ赤に燃えさかって、やかんをしゅんしゅんふっとうさせた。

窓が白くくもって、ときおり水てきが流れおちた。

「さあ、第二楽章から、もう一度いくよ」

ジャンネットは腕まくりして、ピアノをひいた。

歌い出したのは、けれどもシエラひとりだった。

「おやまあ、どうしたんだいドーラ？ しっかりものあんたがぼんやりしているなんて、熱でもあるのかねえ？」

ジャンネットはピアノからふりかえり、あわてて譜面をひろい、顔を赤くしたドーラをながめた。

「ごめんなさい、すぐに歌います」

いつもと様子がおかしいドーラは、ふしぎそうな目をしたシエラにまともに見られた。

「ほら！ あんたまでよそ見するんじゃないよ！ ぼやぼやしているひまはないんだからね、時間がないんだよ時間が！」

「あら、時間ならたっぷりあるわ」

さいきん妙に時間を気にする先生に、シエラはささやかにいい返した。

「そっという意味じゃないよ！」

「じゃあ、どういう意味かしら？」

ジャネットは、シエラに食い下がられて、言葉につまった。

「さいきん先生おかしいわ？ レッスンがきびしいのははじめから変わらないのだけれど、なんだかいつもより、ひどくあせっている感じだわ」

ジャネットはピアノにひじをついて、かんねんしたという感じでいった。

「だまっておこうと思ったんだけどね。とくにあんたみたいな図にのりやすいタイプには。でもそれも、こんなに疑われちゃあ、しょうがない。あんまり期待をもたせるのもどうかと思うけど」

「なんなのかしら、はつきりおっしゃって？」

シエラはやきもきして、さらに食い下がった。

「ことしの夏、かねえ？ あんたら二人はメイトリアル教会に入るかもしれないんだよ。正式ではないんだけど、どうもぐう然にぐう然がかさなって、そうなりそうなんだよ」

「まあっ！」

シエラはとつ然の幸福に、りょうてを組み合わせたまま、しばらく感動にひたっていた。

「まあ！ それはほんとうのことかしら！ うそではないのね？

ああ、ゆめみたいだわ！ こんなにはやくメイトリアル教会に入れるなんて、わたし信じられない！」

有頂天によるこぶシエラを見て、ジャネットは、やはりメイトリアルのごとは隠しておくべきだったと、じぶんのあまさに腹が立った。

「なにをいってるんだい！ 話がぐう然よい方向にむかっただけさね！ あんたが浮かれるようなことはこれっぽっちもないんだよ！ まったくすぐに調子にのるんだからこの子は！ いいかい？ あんたはいまのままでは、恥ずかしくって、恥ずかしくって、メイトリアルに入れられないんだよ！」

「おお、そんな言い方ないわ！ わたしだってそりゃあまいにち努

力しているんだわ。譜面だって、いまではちよつと読めるようになってよ？」

「あたりまえさね！ 譜面くらい読めないであんた歌手をめざす方がおかしいんだよ！ まったく。」

「おやおや、ドーラったらほんとうにどうしたんだい？ さつきからポーっとしちゃって、ほんとうに熱でもあるんじゃないかね？」

「あわてて譜面をひろい、顔を赤くしたドーラのよこ顔を、シエラはまじまじとながめた。」

「あ、ごめんなさい、すぐに歌います」

「ほらほらシエラ、あんたもよそ見なんてしてないで、はやく第二楽章のあたまの譜面をひらきなよ！ ぼやぼやしていると、すぐに夏になっちまうんだからね！」

それからレッスンは、ストーブの火が弱まって、まきをつぎ足すまで、つづいた。

2

その日のレッスンは、ジャネットの都合で、お昼までだった。

それでもジャネットは、できるかぎりシエラにいのこりさせたがった。

「というのもシエラは、課題曲の第三楽章で、まったく息つきが合わなかったからだ。」

「あんたはなんべんいっても、じぶんの息がくるしくなるまで息つきをしない！ こんな頑固もの、あたしは見たことがないよまったく！」

「おかしいわ。だっておかしいものこの息つき、わたしはまだ息がつづくのに、なぜへんところで息をすうのかしら？」

「なぜもへつたくりもない！ 口ごたえしないで、いわれたとおり

に、しな！」

「譜面どおり完ぺきに歌おうなんて、どだい無駄な話だ。にんげんなんてのはな、なんにでもはみ出しちまうもんなんだ。そこをおまえはわかったらん」

ジャネットはシエラをしっかりとつけながらも、いつもあたまの中には亡き恩師がいた。

シエラには、こんなレッスンは合わない。けれどもこれができるければ、シエラはなににもならない。

ジャネットの心のかつとうは、いつそう激しさをました。

レッスンがすんだのはなんのことはない、3時のおやつがすぎたからだった。

「まあ、雪はすっかりやんでしまったようね」

シエラはガードナー家を出て、マフラーをまきなおした。

それはジェニファーからクリスマスプレゼントにもらった、まっ赤なマフラーだった。

ほかにもあつ手のコートと、毛糸の帽子も、ジェニファーから買ってもらった。

シエラはそれを大切に、大切に身につけて、雪みちをあるいた。サウスヒルの雪はふかく、シエラの身の丈ほどもつもっていた。

だから雪みちのさきにドーラがいたとしても、シエラはさけて通ることはできなかった。

「まあ、ドーラじゃない。どうしたの？ レッスンがおわって、ずっとここにいたの？」

ドーラは毛皮のついたコートをまとい、決まり悪そうに立っていた。

「べつに、あなたのことを待っていたわけじゃないわ。わたしはずっと、なんていうのかしら、もの思いにふけていたの。ごかいしないですよ」

「ごかいなんてしないわ。あなたはそりゃあ育ちがよくて、気品があるもの。わたしみたいなのよそ者を待っていたなんて、きつとある

はずがないわ、そうでしょう?」

シエラは目いっぱい下手に出て、ドーラのプライドをまもった。するとドーラは気をよくしたのか、かんねんしたのか、ちょっとだけシエラの方を見た。

「あら、よそ者だなんて、わたしそんなふうにあなたを見てなくてよ? まあついでだから、途中までいっしょに帰っても、いいわ」
プライドのかたまりだったドーラが、3ヶ月たってやっとクラスメイトに心をひらいた瞬間だった。

「さいきんのドーラは、様子がすこしへんだわ。なにか悩みごともあつて?」

シエラはドーラの背中を追うかたちで、ふかい雪みちを歩いた。
「ブライス家にはいちどだって、悩みらしい悩みごとがあつたためにはないわ。悩みではないの、ただちよつとだけシエラに、たずねたいことがあるの、それだけよ」

ドーラは、猫がまえ足で湯かげんをはかるように、おそろおそろ話をきり出した。

「たずねたいこと? あら、なにかしら?」
けれどもドーラは、いまだに迷いがあるのか、なかなか口をひらこうとしなかった。

雪みちは森に入り、枝にふりつもった雪が、はらり、はらりとふたりのあいだに落ちてきた。

「あの、あのねえ、シエラにはそのお、すきな男のひとかつて、いる?」

「すきな男のひと?」

シエラは思いがけない言葉をきいて、あっけにとられた。

ドーラは真剣そのものだった。

その一ことの勇気が、ドーラになにかをふつきらしたのか、こんどはいつきに口をわった。

「そうよ! あこがれでもなんでもいいわ! ラウスハットいがいでもいいの、もちろん結婚とかつて、考えないでいいの! ねえ、

そんなすきな男のひと、シエラにいるかしら？」

シエラはとまどいを隠せなかった。

けれどもきかれた質問には、きっぱりと答えた。

「いないわ」

「ほんとう？ あこがれている男のひとでもよ？ そうねえ、二つ歳うえて、このあいだのクリスマス夜、メイトリアル教会のなかに、いなかったかしら？ ルド……、ルドヴィ……、ルドヴィー……」

「ルドヴィック？ まあ失礼しちゃう！ あんなひと、ちっともあこがれなんかしないわ！」

するとドーラはぱあつと笑顔になって、シエラをふりかえった。

「よかったわあ。あなたにだったら、なんでも相談できそうよ？」

それからドーラといえは、すっかり心をいれかえてしまったように、シエラと笑いあった。

てのひらを返したような、そんなドーラの気やすさには、シエラもちょっとついていけないほどだった。

それでもシエラは、人なつつこいドーラのいちめんが見られたことで、心がスツとした。

「ルドヴィックって、すてきね」

が、ドーラのおぎの言葉をきいた瞬間、シエラはそのまま雪のなかへつつこんでしまいそうになった。

「もちろんシエラは知っているわよね？ ラスタルのルドヴィック・スピードだわ。わたし彼にてがみを出したいの、手渡しがいいわあ。けどわたししたら恋に小心ものだから、ひとりではとうてい彼に渡せないわ。もう恥ずかしくって。」

それはわたし彼にぞっこんなの。まいばん彼が夢に出てきて、わたしを悩ませるほどよ？ なんとしてもこの想いをルドヴィックにつたえたいわ。

けどわたしのまわりって、みんな彼に夢中なの。だからこんなこ

と誰にも頼めなかったわけ。ライバルが多すぎて、お話にならなかったの。

シエラなら、根が変わりものだし、ラウスハットに来たばかりだから、きつと恋の邪魔ものにはならないと、わたしはひらめいたのよ！」

シエラは、これはややこしいことになったと思った。

エズメ、駈ける！

シエラはドボンとお風呂に入った。

「ああ、なんてものを引き受けてしまったのよシエラ！ もしもルドヴィックにてがみを渡すはめになったらどうしよう！ どんな顔をして彼に会えっていうの？」

それからシエラは、ゆぶねにせずんで、ぶくぶくいった。

「でもせっつかくドーラと仲良くなれたのよ？ やっぱ彼女のちからにならなくちゃいけないわ。きつと、ドーラだって勇気をふりしぼってわたしに相談したと思うわ」

ドーラはシエラに気をゆるした。

これだけでもシエラには宝だった。

「ドーラがあんなにおしゃべりだったなんて、ほんとうに意外だったわ。おしゃべりのわたしがいうのだから、そうとうよ。でも、ほんとうにどうしましょう？ なんとかしてルドヴィックに会わない方法はないかしら？」

シエラはりょうてにお湯をすくいながら、ちょっとルドヴィックの顔を思い出そうとした。

『おお、君の髪はモップだね！』

りょうてをかざしながらおどけるルドヴィック、けれどもかんじんな顔は、ちっとも思い出せなかった。

「ルドヴィックかあ。あのとき足をふんづけたこと、まだ怒っているかな？」

そのときバスルームの戸があいて、サイラが入ってきた。

「まあシエラったらまだ入っていたの？ まっ赤な顔をして、あなたまるで恋でもしているようよ」

次の日、シエラはジョンのたづなをもって、高い雪みちを歩いていた。

するとキツネの毛皮をかぶったルイスが、雪の枝のすき間から顔

を出した。

「おおルイス、聞いてちょうだいよ！ 良いことと悪いことが、いっぺんに起こったの！」

ルイスは、いつもなにかにほんろつされているシエラに心ひかれた。

「今日はなに？」

「まずは良いこと、あのね、ドーラとわたし、とつぜん仲良くなっちゃったの！ 信じられる？ いままでろくすっぽ口をきいてくれなかったドーラが、うそのように話しかけてきたのよ？ そりゃあはじめはきまり悪そうにしていたけど、だんだん話しているうちに、わたしたちまったくうちとけてしまったわ！ すばらしいわ！ まえからそうなればいいと思っていたのよ！」

シエラは話しながら、どんどん興奮してきて、ジヨンのたづなを胸にあてた。

ルイスはほほ笑ましそうに、となりを歩いた。

「よかったね、ぼくはいつかこうなると思っていたよ、シエラは誰とだって、仲良くなれるからね」

「あらそうでもないわ」

ルドヴィックの顔が浮かんだ。

「悪いことは？」

「うっ、そうね。悪いことね、つまり、わたしルドヴィックに会いにゆかなければならないの」

ルイスは黙った。

「ドーラに頼まれちゃったのよ。彼女、ルドヴィックに夢中なんですって。やだ、こんなことかたんにいってはならなかったわね、でも、ルイスだと、なんでもいえてしまうのよ、ふしぎ」

そしてシエラは、きのうドーラに頼まれた手紙のことを話した。

ルイスはふに落ちなかった。

「それは悪いこと？」

「大悪おおわるだわ！ だって、ルイスは知らないでしょうけど、わたし一

回、ルドヴィックに熱くなったことがあるのよ!」

シエラはにがい顔をした。そしてルイスに、ルドヴィックのことを話そうか、どうか、迷ったが、あまりおもしろい話ではなかったなので、やめた。

「シエラはその、ルドヴィックに熱くなったの?」

「ええ、いま思えばわたしもこどもだったわ。あんな男に熱くなつたなんて」

ルイスは誤解した。

シエラはルドヴィックに『怒り』で熱くなったといった。

しかしルイスは、シエラがルドヴィックに『恋』して熱くなつたと勘違いしたのだ。

このときからルイスの様子がおかしくなった。

「ほんとうに、どうしてルドヴィックってあんなにモテるのかしらね? うちのサイラだって彼にメロメロよ? ドーラのまわりだって、彼にぞっこんな娘ばかりだっていうし、まったくどこがいいのかしら?」

「うん」

「それにしてもドーラだったら、ほんとうにいじらしいわ。ラブレターを一人で渡しに行けないなんて、じっさいキュートだわ。もしもわたしだったら、今にもすっ飛んでいって、てがみを彼の鼻さきに突きつけるわ。あなたのが好きだから、あなたはこれを読まなければならぬわって、そう胸をはっていうわわたし」

「うん」

「ねえちよつとルイス? さっきからあなたどうしたの? うんうん唸っちゃって」

「うん」

ルイスはシエラの話もうわの空で、何かにしたがうようにトボトボ歩いた。

「ねえ、ルイスったら。あなたは好きな女性とか、いるの? いたら、じぶんで手紙を渡せる?」

ルイスはぴたりと足をとめて、シエラをふり返った。

「シエラ、ぼくはきみをかん違いしていたらしい。きみはもつと、こうなんていうか、ほかの少女とちがっていると思っただ。だから魅力的な少女だなあと、しょうじき感心していたんだ。だけどきみは、ルドヴィックみたいないないきたりな男を気に入るなんて、ちよつと幻滅だよ。だつてそうじゃないか、それこそエズメや、ジエシカのように、平凡さ」

「はあ？」

「もういいんだ、ぼくはただ幻滅しただけさ」

そういつてルイスは、ひとり雪をけつて走つていつた。

ポカンとひとり残されたシエラに、雪がふつてきた。

「どうしたのかしら、ルイスつたらさよならもいわないで、さつさと帰つてしまつたわ。わたしなにか気にさわることをいつてしまつたかしら？ 鈍感だから、そのへんのことわたしちつともわからないのよね」

ジヨンはゆつくりとシエラをみあげた。

2

なん日かすぎた。

学校の大きな鐘が、夕がたのイーストスレッジタウンに響きわたつた。

しずかな美術室、そこにルイスはいた。

テーブルのりんごと、スケッチのりんごと、こつごに見くらべている。

ほかにはいつもの3人が、だまりがちにストーブにあたつていた。マークはもくもくと木彫りしているし、ジエシカはシヨパンの楽譜をゆびでなぞつている、その髪をエズメは器用に結びあげていた。

彼らはなんとなく教室にのこっていた。

「ねえ、ルイスったら」

エズメがちょっかいを出すときの声である。

「なんだい？」

「行かないの？ もうレッスンは終わった頃よ？」

「レッスンは？ なんのこと？」

ルイスはりんごをのぞき込んだ。

「とぼけちゃって、シエラにきまっているでしょう？ もう犬の散

歩のじかんよ、早く行ったら？」

ジェシカはちらりとルイスを見た。

「残念だけど、今日は行けないね。見てのとおりぼくはいま、りんごをかいているんだ。きみにもりんごの難しさがわかればいいけど」

「りんごなんてかんたんよ。それよりおかしいじゃない、ちよつと前までは、まいにちシエラの散歩につきあっていたのに、なんで急にやめちゃったの？ ルイスあなたケンカでもしたの？」

描きかけスケッチをやぶり、くしゃくしゃにしたあと、ルイスはまた一からりんごを描きはじめた。

「ケンカしたのね？」

「だれがケンカなんてするものか。ぼくはいそがしいんだよ、まいにち散歩なんか出られない」

「まあ！ あれだけシエラの散歩に顔を出しておいて、いそがしいはないんじゃない？ ねえ、どうしてシエラとケンカしたの？ ちよつとやさつとじゃあ、あのすつとろいシエラとケンカになんてならないわ」

「ケンカなんて、そんな子供じみたことはしないさ」

するとマークは小刀をうごかしながら、

「子供だろうと大人だろうと、ケンカはするぜ。ケンカは勝負だ、勝ったり負けたり、大人だって燃えるんだぜ」

「まあ、ケンカを勝負といえど、大人にもあるかもしれない、だったらぼくはケンカはしないで、絵の才能で勝負するさ」

「わたしはピアノの才能がほしいわ、先生になりたいの、たくさんの教え子をもちたいわあ」

ジェシカは夢見がちな目をあげた。

「あたしはなんの才能で勝負するのかなあ？ やっぱり髪を結うのが好きだわ。これは才能かしら？」

おつとと、うまく話をそらされたわ。ルイス、ほんとうにシエラとケンカしてないの？」

「ケンカなんて、そんな子供じみたことはしないさ」

エズメは、これはダメだと思った。

「ねえねえ」と急にジェシカが顔をあげた。

「わたし聞いたのだけど、ドーラとシエラ、急に仲良くなったんですってね、わたしのともだちが、ふたりが仲良く帰っていくのを見たんだって、楽しそうだったって、信じられないわあのおすましドーラが」

ジェシカは、いちばん何かいいそうなエズメを見たが、彼女は意外におとなしかった。

「いいんじゃない？ シエラとドーラはクラスメートなんだし、それにシエラがあんな調子だから、きつとドーラでも仲良くなれたのよ」

それにつづいてマークも、

「ほんとにな、シエラってふしぎなところがあるよ。信念があって考えがしっかりしているから、まちがっていたら、まちがっているって、おれにもいいやがる。だからつい信用しちまうんだよな。」

なんだよ、その目は」

マークはがらにもないことをいった。

それを聞いてルイスは、ちよつとりんごから目をはなした。

そうだ、とルイスも思った。

シエラには信念があって、ちゃんとじぶんの考えをもっている、だのになぜ、あんなルドヴィックのような人気者に気をひかれたのか、そこに得心いかなかった。

「ルイスがしゃべらないんなら、あたしちよくせつシエラに聞いてやあつかなあ」

エズメはいたずらしい顔をして、ルイスを見た。

「さつきから聞いていれば、いい加減にしるよエズメ、ルイスだって、さぐられたくないことがあるだろう！」

マークはエズメのまえに立って、おこった。

「わ、わかったわよ。あたしそんなこと絶対にしないわ！」

3

目をぎんぎんに輝かせながら、エズメはホースウエストマウンテンの雪みちを走った。

夕日はまだ残っていた。

息もきれぎれに、エズメのたどりついたさきには、シエラが犬の散歩をしていた。

「まあ、エズメじゃないの！ どうしたのかしらそんなに急いで？ シエラの髪は、夕映えに美しく輝いた。

「ああ疲れた、ちよつと休ませてちょうだい、まあシエラ、ぐう然ね」

「ぐう然？」

「ええ、ちよつとあたし、急に山を登りたい気分だったの。スカツとしたわ。やつぱり山って最高ね！」

「そお？」

「ところでシエラ、あなたドーラと仲良くなれたそうね？」

エズメはハンカチで汗をふきながら、あいさつをいった。

「まあ、誰から聞いたの？ そうよ。わたしドーラとはすっかり打ちつけたわ。それはドーラったらキュートなの。エズメたちも、きつと話したら彼女を好きになるわ」

「そのつもりよ。あれ？ おかしいわねえ、今日はルイスといっしょじゃないのね？ いつもシエラの散歩にはルイスがいたのに」

シエラは答えなかった。

「そういえば、彼ったら、さいきんなんだか元気がなかったわ。こんなことつてはじめてよ。なにかひどいこと、だれかにいわれたんじゃないかしら？ 心配だわあ、ねえシエラ、あなた心あたりない？」

シエラはジョンに顔をよせながら、やはり黙っていた。

「あら、あたしはべつに、あなたがルイスにひどいことをいったなんていってないわ。ただ、あれだけルイスと仲が良かったシエラだから、なにか知っていないかと思って」

「知らないこともないのだけれど」

エズメの目が光った。

「わたしもよくわからないのよ。なにかルイスの気にさわるようなことをわたしといったのかしら。だって、ルイスは急に顔を見せなくなってしまったんだもの」

「急に？ まあ、それは妙ね。ひょっとしてそれは、あなたルイスをふったんじゃないの？」

エズメは、水をえた魚のように声をはずませた。

「ふった？ ふったって、どういう意味？」

「ごまかさないで。あなたはルイスをふった、そうでしょう？ そうにちがいないわ。ほら、はくじょうなさい」

シエラはまばたきをしながら、つめよるエズメからいつぽ退いた。

「わからないわ、ちょっとエズメ、あなたなにをいつているの？」

わたしがルイスをふるって、さっぱり意味がわからないわ」

「もう鈍感ねえ！ ルイスはあなたに好きだといったの、それをあなたは断った、そうでしょう？」

「まあ！ そんなことは断じてないわ！ なんてことをいうのでしようエズメったら！ わたしとルイスは良いお友だち、おなじようにこころざしをもったお友だち、それいがい、なにもないわ。それ

にルイスがわたしを好きになるはずがないわ、わかるでしょうエズメ？ わたしはドーラのようにキュートでもないし、ソフィのように美しくもない、だれがわたしを好きになってくれるものですか」「いいえ、シエラは思っている以上に、魅力的だわ……………だから」「おお！ エズメったらなんていい人かしら？ こんなみじめなわたしをなくさめてくれるのね！」

シエラはぱあっと笑顔になって、エズメのりょうてをとった。

「だ、か、ら！ ルイスにそれとなくいわれたのじゃない？ きみが好きだとかなんとか！」

「だれがだれを好きだつて？」

よろこびにうちふるえるエズメ、その背なかでルイスは、ひとりんごをかじった。

「まあルイス……………。今日は会えたわね」

シエラとルイスは、なんとなく気まずそうな顔をあわせた。

それからルイスは、もうひと口りんごをかじって、じろりとエズメに目をむけた。

「あらルイス！ ぐう然ね、これはちがうのよ、どこまで聞いていたのかな？ とにかくシエラは魅力的よ！ ね、だからもつと胸をはつて。そうそのいきよ！ それじゃあ、あたし急ぐから、じゃあね！」

エズメは駈けていった。

「なにかいわれたかい、シエラ？」

ルイスはため息をおとして、なんとなくしゃがみながら、ジョンのあたまをなでた。

「べつになにも。エズメはたくさんしゃべっていたけれど、わたしとくにおぼえてないわ。おぼえているのは、エズメはこんなわたしをなくさめてくれたつてこと。彼女、いいひとね？」

このときルイスは、シエラの鈍感さに言葉をうしなった。

「ルイス……………わたし心配していたわ。あの日、さよならもいわずに急に帰ってしまうんだもの。それからちつとも顔を出さなくなっ

てしまつて、病氣にでもなつたか、わたしなにか氣にさわることを
いつてしまつたか、ほんとうに心配したわ」

シエラは純粹な顔でいつた。

その純粹さにルイスは、つよい葛藤かっとうをおぼえた。

ルイスが抱えている悩みが、ひどく不淨ふじょうなものに思えた。

男らしくないじゃないか！ きみはきみの思いどおりにならない
からつて、罪もないシエラを悩ませていいものかい？ もうすこし
冷静に、大人になりたまえルイス・ハンター。

「すまなかつたよ、シエラ。きみはなにも悪いことはいつてない。
ぼくの勝手だつたようだね。悩みはひとにあたつてはいけない、そ
うだね。もうだいじょうぶさ、ぼくの悩みは終わったよ。またいつ
ものように、ジョンの散歩に顔を出すよ」

「悩み？ ルイス悩みがあつたのね？ しかもそれがすんでしまつ
たのね？ わたし悩みがある人によく出会うわ。わたしに悩みなん
てあまりないからかしらね！」

氣持ちよく笑つたシエラは、夕での雪に輝いた。それをルイス
は、激しい感情をおさえて見まもるのだった。

ドーラのお泊まり

ドーラは地図をひらいた。

ロード邸の城門である。

彼女はこくびを傾げながら、いった。

「おかしいわ。シエラの家に来たつもりが、ジェニファー・ロードさんのお城に来てしまったわ。この地図まちがっているのかしら？」

ドーラは羽根のついた帽子をあげて、城門の柵をのぞいた。

すると長い長い整いしだたみのかなたから、見おぼえのある少女が走ってきた。

「ドーラ！ いま行くわ！ 来ていたのなら呼び鈴を鳴らしてくれれば良かったのに！」

シエラが城門をひき上げると、ドーラは信じられないといった顔で立っていた。

「どうしたの？ まさかわたしの顔を忘れちゃったってことはないでしょうね？」

シエラはいたずらっぽく笑った。

その笑顔を見てドーラは、やっとほほ笑むことができた。

「あなた本当に、シエラ・クロウなの？ ここはどなたのお城かわかっているの？」

「ええ、ジェニファーさんのお城だわ。びっくりしたでしょう？」

わたしはラウスハットに来てからずっと、ここにお世話になっているの」

ドーラはかりてきた猫のように、おとなしく城門をくぐった。

ブライス家は代々、お金に困ったことがなかった。

ドーラの父は貿易のしごとをしていて、館やかたも庭も大きかった。

ブライス家にまねかれた客は、りっぱな庭のつくりを見て、みんなうやましがって帰った。

ドーラはそれが誇りだった。

しかしロード邸の庭園は、ブライス家のちよつと広い庭など、天びんにもかけられなかった。

「なに？ この王国のように広いしき地は。ラウスハットに生まれ、ここへ入るのは初めてだけど、なにからなにまでスケールがちがうわ」

「あたりまえよ。ここは元ジム・ウィルコックス公爵のお城ですもの。それをジェニファーさんはまるごとお買いになったの。わたしもはじめてここへ来たときには、びっくりして腰をぬかしたわ」

頭にそびえるホースウエストマウンテンには、まだ白い雪が残っていた。

けれどもロード邸の花園は、春らんまんだった。

ここの庭師、ホアキン・タイラーはいそがしい時期をむかえていた。

彼はあちこちの土を掘りおこして、花のなえを植えてまわった。

シエラが大きく手をふるると、遠くで帽子をとった。

「ホアキンおじさんは、とつても無口なの、でもよく働くわ。この大きな庭を彼ひとりでやっているの」

ふたりはポプラなみ木の下を歩いた。

途中に女神のふん水があつて、水はもう水がめからあふれていた。あふれた水は、城内の小川となり、大庭園のすみずみまでゆきとどいた。

「ひどいわ。なぜこんなにっぱなお城にすんでいながら、ちつとも教えてくれなかったの？ これじゃわたしの庭の自慢話なんて、こっけいに聞こえなすつたでしょう？」

ドローラはうらめしそうに、シエラの服をひいた。

「いいえ、庭は大きさではないの、愛情よ。どれだけ小さな庭だつて、うんと愛情をそそいで育てれば、エデンの園にも負けやしないわ」

「でも同じ愛情をそそぐのなら、大きい方がいいわ」

ドローラはつまらなそうに、いった。

ふたりはうららかな春のこもれ日をつけながら、お城の入口までたどり着いた。

お城が高くて、入口が影に入った。白い石の階段が大きく広がっていた。

「おやまあ、よく来なすつたね。あんたがドーラ・ブライスさんかね。シエラから聞いてよく知っているよ、ほんとうにキュートな娘じゃないか」

「こ、光栄ですわ、ジェニファーさん！」

お城から出てきたジェニファー老婦は、正装をしていた。

ベールをおろして、表情はわからないが、言葉は明るかった。

「遠慮はしないでいいさ、シエラの友達だからね。さあさあ、風はまだ冷たいんだ、はやく上がりなさい」

ドーラは顔をこわばらせて、ジェニファーに失礼のないよう心がけた。

というのもジェニファー・ロードの悪名は、ドーラの耳にもとどいていたからだ。

ケチで陰険、気に入らない客人はすべて地下の牢獄へ閉じこめてしまう、ドーラの父も母も大まじめな顔をして話していた。

だからドーラは、そんな恐ろしい人と気軽に話すシエラを見て、まゆをよせた。

「あなた、いったい何者なの？」

2

ジェニファー老婦がロード邸に客人をゆるすなど、いままででは考えられなかった。

いぜんシエラは、ルイスをまねこうとして、失敗した。

あのとときのジェニファーの怒り方はすさまじかった。

けれどもこんや、ドーラ・ブライスだけはロード邸に泊まることをゆるされた。

これには理由があった。

「あなたは本当によくできた娘さね。こんなしつかりしたこどもをあたしは見たことがない」

こうジェニファーは口をきった。

暖炉の火をながめながらだった。

「掃除、洗濯、あと片づけまで、あなたは—いちうちのものの手伝いをするっていうじゃないか。誰にもいわれないで、よくそこまで働けるものさ。」

あなたは心にまつすぐな芯しんがあるのさ、どんな誘惑しんにも、欲にも負けない、はがねの芯がね」

「ジェニファーさん、それはいいすぎだわ。わたしのやっていることは、大したことではないの。それよりもここに住まわせてもらっている方が、どれだけありがたいか、それはわたし、わかりすぎるほどわかっているんですもの。その恩にわたし、ちっとも報むくいることができないわ」

「報むくいるだつて？ こどもがそんなもの、考えるものじゃないっていつているだろう？ とにかくシエラはよくやっているよ。歌の方だつて、下手クソがましになつたつて、ガードナー先生から聞きくし、あたしは嬉うれしくつて、なにかシエラの喜よろこぶことをしてやりたくなつたのさ。どうかね、いまなにか欲しいものはないかね？ 美しい指輪だつていいし、じぶん専用の馬車だつていい」

「欲しいものは、すべてそろつています。」

けれどももし、もし、ジェニファーさんが一つお許ゆるしになつてくださるといふのなら、ドーラをうちにまねきたいの、わたしいちどでいいから、仲良しのお友達といっしょにまくらをならべて、とりとめのない話をしてみたいわ」

ジェニファーはなんと答こたえなかつた。

けれどもルイスのときのように、怒鳴りちらしもしなかつた。

ただゆっくりとうなずいて、3日たったのち、ロード邸にドーラをまねくことを承知した。

それが一週間まえの話だった。

いつもは物音ひとつないロード邸の廊下、そこにこんや、シエラとドーラのはしゃぎ声が響いていた。

ふたりはベッドにねころんで、とりとめのない会話を楽しんでいた。

「まあ！　じゃあシエラはそのとき、ルドヴィックの足をふんづけちゃったのね？」

ドーラはぎゅっとまくらを抱きしめた。

「そうよ。わたしもあたまにきちゃってたから、あまりおぼえていないけど、とにかく思いっきりやったわ。ドーラはわたしのこと、腹が立って？」

シエラは腹ばいになって、ひざを曲げたり伸ばしたりした。

「これがほんとの恋がたきだわ。でもわたし、気にしない。もしもシエラがそのとき、怒りのあまり彼の口びるをうばったっていうのなら、話はべつだけどね」

「なら安心して。わたしにそんなロマンチックなクセはないから。でも、うれしいときには、つついキスしてしまいたくなるけどね」
そういつてシエラは、ドーラのほおにキスするマネをした。ドーラはくすぐったそうに、まくらを抱えながら、ちよっとシエラを見た。

「シエラは？　あなたほんとうに好きな男性はいないの？」

「いないわ」

「だって、ルイスとはまいにち会っているのでしょうか？」

シエラは黙った。

「彼はああ見えて、ルックスいいわ。ハンター家は代だい血すじが
良いの。ラウスハットにはない、異国人の血が流れているのよ。頭
も良いし、女性にやさしいし、うちのクラスでも、彼の評判がいい
わ」

「そう」

「ルイスの絵、メイトリアル教会にかざってあるの、知ってる？
すてきじゃない」

シエラはつまらなそうに、りょうてを伸ばした。

「ルイスは、よい友達だわ。それだけよ？ マークや、エズメや、
ジェシカとおなじ、よい友達」

「そう？ なら、友達ね。わたしったら、いつもシエラがルイスと
いっしょにいるものだから、つい考えすぎてしまったわ」

ノックの音がして、サイラが紅茶をはこんできた。

シエラはそれをつかまえて、3人でおしゃべりをしたがったが、
サイラはドーラを客人としてあつかって、とうとう心をひらかなか
った。

「ルドヴィックにわたす手紙、もう書けて？」

紅茶に息を吹きかけながら、シエラはきいた。

「それがまだなの。なんて書いたらいいか、ちつとも言葉が浮かん
でこなくて、ペンをもったまま、ずっと白紙にむかっているわ」

ドーラはほのかに頬をそめて、紅茶を一くちなめた。

「だって、いきなり『あなたが好きです』って書いて、あっさりふ
られてしまったら、あとがないもの。だけどそれをさけて書いてし
まったら、ちつともお近づきになれないし、それじゃあただのお手
紙だわ」

「手紙はどこで渡すの？」

「彼のしごと場よ」

「しごと場？」

「ええ、彼、ラスタルの麦屋で働いているの。そこへ行って、ちょ
くせつ渡すわ。でも、おお、シエラ、どうしましょう？ わたしに
はライバルが多すぎるわ。だって、みんなの話だと、彼のもとには
毎にち、4人の少女たちが手紙を渡しに行くそうよ？ 先月なんて
もつとひどくって、クラスメイトのエリンなんか、手紙をわたしに
行ったら、ずらっと順番まちですって。まあせつない」

ドーラは胸に手をあてて、そのまま気絶するふりでベッドにくずれた。

「ドーラならだいじょうぶ。わたしが行ったらそりゃ向こうもおつたまげるだろうけど、あなただったらきつとルドヴィックもまんざらではないと思うわ。だってドーラはとってもキュートなもの。わたしから見たって、かわいいんだもの、彼なんてイチコロだわ」

それを聞いてドーラは、すこし不安がやわらいだ顔をした。ベッドにひじについて身をおこし、涙を流しそうになりながら、シエラの顔を見た。

「シエラ、あなたほんとうにいい人だわ。なぜもつと早くに仲良くならなかったのかしら、わたししたらさいしょあなたにひどいことをいったわ。ごめんなさいね」

「気にしてないわ。わたし言われたことを一いち気にしていないの、繊細にできてないのね。つまり鈍感なの」

ドーラはいたずらっぽく、

「じゃあルドヴィックにいわれたことは？」

「気にしているわ。だって、ふしぎだわ、気にしているの。だからこんど会ったとき、また足をふんづけてしまいそうで、怖いわ」

3

夜はふけた。

ロード邸の窓に一つだけ、小さな灯がともっていた。

シエラとドーラはベッドをぬけ出し、ランプの明かりに向かってペンを走らせていた。

「ダメよ。ドーラはいつも、はつきり書きすぎるの。なんでもかんでもはつきりいってば、つまらないわ。もっとこう、謎にみちた感じにするの」

「謎？」

「そう。読んでいて、ふと疑問がのこるような、そういう手紙よ。疑問がのこれば、手紙の返事につながるかもしれないわ。気になるもの、謎があればつい聞きたくなるでしょう？」

「まあシエラったら、あなたほんとうにラブレターを書くのはじめて？ なんだかいつもラブレターを書いているようよ？」

しかしこの『謎』というのが、これからシエラとドーラを苦しめることになった。

「こんな感じでどうかしら？ ドーラ、あなたの手紙よ、目を通してみて」

ドーラはシエラから便箋びんせんをうけとって、すらすらと文字を目でおった。

「いいわ、これ、いい。まるで美しい詩をよんでいるようよ？ 謎だってちゃんとあるし、わたしこれをルドヴィックに渡すわ、ありがとうシエラ！」

「どういたしまして」

シエラは書き疲れた腕をのぼしながら、あくびを見せた。

「ああ、なんだかわたし、ルドヴィックのことがうまくいっても、いかにくつても、平気な気がしてきたわ。だってあなたがついているもの。わたしが傷つくことがあっても、あなたが慰めてくれる、これってなんてちから強い気分かしら」

ドーラはショートヘアをシーツに広げながら、手紙を胸に抱きしめた。

「いいえ、ドーラとルドヴィックが恋におちた方が、なおいいわ。それじゃあぜんは急げね、来月になったら、さっそくルドヴィックに手紙をわたしに行くのよ？」

「ええ、決心がにぶらないうちに、すませるわ！」

シエラとドーラはランプの火を消して、いっしょにふとんに入った。けれどもふたりは興奮が冷めなくて、なかなか目と同じなかつた。

ぼつりぼつり言葉をつないでいくうちに、話は意外な方向へむか
った。

シエラはまくらから起きあがって、声をあげた。

「それ、ほんとう？　なぜソフィがあんな悲しい目をしているのか、
あなたそれをぜんぶ知っているといるの？」

ドーラはしっかりと目をあげて、うなずいた。

ソフィの呪い

風がふいて、木の枝がカチカチ鳴った。

雲が流れるのか、月の窓が暗くなつた。

「わたし、すべて知っているわ。」

ソフィ・シンクレリアがなぜ呪われた歌姫といわれるのか、なぜ悲しい目をして毎晩ふかい祈りを捧げつづけるのか、それらすべてをね」

シエラの生つばを飲み込む音がした。

「うわさはうわさよ、人殺しだとか、牧師から金をもらっているとか、ソフィがあまりに美しくって、あまりに歌の才能があるから、みんなねたんで好きかってうわさするのよ。」

でもわたしが知っているのは、ほんとうの話。

だって、この話でいちばん重要な少女、ジョセフィン・レタスのお母さんからじっさいに聞いた話だもの」

ドーラはまくらに頭をつけたまま、じっと天井を見つめていた。

「ちよつと待って、待ってちよつだい。わたしいま、心のじゅんびをするから。こんな興奮する話ってないわ。だってわたしこれから、ソフィの身におこつた悲劇の真相を聞くんだもの、これはそんじやそこらの恋愛小説よりもスリリングにちがいないわ！」

シエラは興奮にちよつと顔を赤らめ、体に強いふるえを感じた。

髪をまとめなおし、居ずまいを正すようにまくらに頭をあてなおした。

「いいわ、話して」

ドーラはゆつくりと口をひらいた。

「ソフィ・シンクレリアがメイトリアル教会に入ったのは、いまからずつとまえ、彼女がまだほんの子どもの頃よ。」

ソフィは母親といっしょに教会に来たの。母親は見るからに生活に困つた様子で、教会に一ばん泊まつたあと、朝になってみたら、

母親の姿だけなかったらしいわ」

「まあ」

「ひどい話だわ。だからソフィは孤児のように教会に入れられたの。先生がたは最初、里親を探したらしいわ。だっていくらなんでも、メイトリアル教会は孤児院ではないもの。」

ソフィの里親はすぐに見つかつたそうよ。教会からちよつと西にいったところにある、コパという村の農家で、流行病はやりやまいでバタバタと子どもを失つた、かわいそうな夫婦にもらわれる予定だつたの。

でも、メアリー・ヒルトン先生が息をきらして飛んできて、ソフィをひき渡すすんでのところで、話をことわつたそうよ」

「ことわつた？」

「そう、つまりこう。」

ある日、ヒルトン先生が聖歌隊にレツスンをつけていたの。レセプションが近くつて、先生はレツスンに熱が入っていたのね。

すると小さなソフィが、ふらつと教会に顔をだして、ひまそうにイスにすわつたらしいの。ヒルトン先生はちらりとその姿を見つきり、まったく相手にしなかつたそうよ。

そしたらソフィ、聖歌隊の少女たちが歌う歌をすっかり覚えてしまつて、急に口ずさみはじめたらしいの。

その歌声を聞いた少女たちはびっくりして口をとぎすし、ヒルトン先生もハツとしてピアノの手をとめたつていうわ。

8歳かそこらのソフィの歌声は、ちせつはちせつだつたらしいけど、ヒルトン先生を飛び上がらせたつていうから、そうとうだつたようね」

「8歳の少女が、世界でも名高いメイトリアル教会の聖歌隊を驚かせたつていうの？」

「そうよ。ソフィはわたしたちふつうの人間とはまつたく別つてこと。ローズマリーつてなまいきな天才少女もいるけれど、ソフィの敵ではないわ。ソフィはほんとうに神にえらばれた少女だつたのよ。それからソフィは、正式にメイトリアル教会の聖歌隊に入った

わ。

歌はずば抜けていたけど、まだまだ子どもだったようね、いまからは想像もつかないほど、そうとうやんちゃだったらしいわ。先生のいうことも満足にきかないで、ひどいときには、牧師さんの帽子をかくしてしまったことがあったんですって」

「まあ牧師さんの！ リューイツヒって人がそうならわかるけど、あのしずかなソフィがやんちゃなんて、しっくり来ないわ」

「でもほんとうのことよ？ むかしのソフィはよく笑って、よく怒って、よく泣いて、それはそれは聖歌隊のお姉さんたちをまいにち困らせたって聞くわ。」

その頃からよ、友と呼べる友もなかったソフィに、ほんとうの親友ができたのは。

その親友がジョセフィン・レタス、ソフィと歳がおなじで、バリチエスタという都会からやって来たの」

「あなたも、死んだ少女に似ているっていわれるのは、あまりいい気がしないと思うわ」

シエラは突然、ミサの夜にいわれた言葉を思い出した。修道服を身にまとったスタンレー・リース先生、おどろいた胸をおさえながら、シエラに笑顔をみせた。

『ジョセフィンが帰ってくるはずがないのに、こんやのわたし、どうかしているわ』

「シエラ？」

「ううん、なんでもないわ。つづきをお願い」

ドーラはふしぎそうにシエラから目をもどして、つづけた。

「それでね、ソフィは、ジョセフィンという親友ができてから、ちよつとずつ変わっていったっていうわ。」

ダダをこねなくなっただし、いたずらもへったって話よ。

ダメなものはダメ、もつとあいての気持ちを考えなさい、ジョセフィンはソフィにはつきりそういって、泣かせたそうよ。

でも、その甲斐かいあってソフィは、親に捨てられたという後ろめた

さや、つらさから、だんだん心が救われていったらしいの。

それだけジョセフィンはソフィにとって、かけがえのない存在だったよね。

わたしはジョセフィンなんて、いちども見たことないけど、話を聞く限りでは、ずいぶん変わった少女だったらしいわ。

めっぽう気がつよくって、いつも言うことのスケールが大きくて、希望にみちた目をしていたって、ジョセフィンを知っていたひとはみんないうわ。

ケンカするし、お姉さんたちの悪いところも悪いって、はつきりいうし、それだからみんながみんなして彼女を良く思ったわけではなかったよね。じっさいジョセフィンを嫌う先生もいたみたいだし、聖歌隊のなかでも、敵が多かったようよ。

でもソフィとは、ひき離してもくつつくように仲が良くって、部屋もおなじだから、世界にただひとりのふたこの姉妹のように、いつもいっしょに寝ていたらしいわ

「いまのわたしたちといっしょね」

ドーラはちよっと笑って、つぶけた。

「でもね、ここでちよつとぐあいが悪いことが起きたの。それはジョセフィンに歌の才能がなかったってこと。つまりシエラのように歌が下手クソだったってことね」

2

「だからジョセフィンは、歌ではどんどんソフィにおいていかれたそうよ。」

ソフィが聖歌隊の一等のクラスにいるのに対して、ジョセフィンはいつまでも四等クラス、それだってあぶないくらい、ごまかし、ごまかし、なんとかメイトリアル教会にのこっていたのが現状だ

ったそうよ。

ジョセフィンがどんなに歌の練習をしても、ヒルトン先生に怒られてばかりで、だんだんソフィにかくれて泣く日がふえたってきくわ。

だってソフィは、べつに練習をしなくたって、もうメイトリアル教会の顔になってしまっていたのだから、ソフィが歌えば、歌うほど、その歌声は世界にひろがっていった。

それにひきかえ、ジョセフィンには苦しんだでしょうよ。いつまでもソフィといっしょにいたい、けれどもじぶんには歌の才能がまったくない、メイトリアル教会にいられなくなってしまいかもしれない、悩みはだんだん深刻になっていって、なんの悩みもなく平気な顔をして遊ぶソフィと、ときに激しいケンカをするようになったのも、この頃からよ」

シエラの頭には、見たこともないジョセフィンの、親友にかくれて泣きながら歌の練習をする姿が浮かんできた。

「きつとジョセフィンは、親友のまえでは何ごともなかったように、笑っていたのね」

シエラは、まるでじぶんのことのようにジョセフィンを悲しんだ。「そうね、切ないけれども、ジョセフィンにはもうあとがなかったの。」

そんなある日、ジョセフィンのお父さんが教会にやってきたの。

なんでも仕事の関係で、家族そろって欧州にうつり住むことになったらいいの。

だから歌にのぞみがないのなら、ジョセフィンもいっしょに、欧州につれていくって、はつきりいわれたそうよ。

ジョセフィンはお父さんに、わたしは行かない、歌にまだのぞみがあるって、そう話をつっぱねたらしいわ。そうして言葉たくみにメイトリアル教会はじぶんを必要としている、などとうそをついて、なんとかソフィのもとに残ろうとしたの。

だってもし、ジョセフィンが欧州に行ってしまったら、二度とソ

フィに会えなくなるって、彼女わかっていたの。いまだってそうだが、ここから欧州に行くなんて、どれだけ大金がかかると思って？だからジョセフィンはひっしだったの、なんとかソフィといっしょにいられるように、お父さんを涙で説得したらしいわ。

でもお父さんだって、ひっしだわ。娘をひとりおいて、遠くに行ってしまうなんて、こんどいつ娘に会えるかわかったものでもない。だからお父さんはこういったの、

次のレセプションで、おまえが教会の顔だということを証明しなさい、とね。

ジョセフィンは目の色を燃やして、いきおい承知したわ。でも、ほんとうは参^まりてしまったの。

だって、メイトリアル教会のレセプションといえば、遠くからたくさんの人たちが集まって来て、天使の歌声に耳を澄ませる、メイトリアル教会の最高の舞台だわ。そんな大切な席で、四等クラスもあぶないジョセフィンは歌えるはずもない、ジョセフィンは頭を抱えて悩んだそうよ。

でもそうでもしなかったら、じぶんはメイトリアル教会を去ることになる、ソフィとも二度と会えないかもしれない、そこでジョセフィンはなんでもやる気になって、奔走^{ほんそう}をはじめたわ。

かたつぱしから先生にぶつかって、どうかじぶんにレセプションの役をつとめさせてください、そう頼み込んだそうよ。

でもジョセフィンはしよせんジョセフィン、先生はみんな相手にしなかったらしいわ。

だけど一人だけ、スタンレー・リース先生だけは、ジョセフィンの話に耳を傾けたそうよ」

「リース先生……………」

「そうリース先生よ。きっと先生は、ジョセフィンをよくご存じだったのね。だから先生は、ほかの先生がたに歌手としての自主性を説いて、ジョセフィンの積極的な姿勢を強く押したの、さらには牧師さんとしてしっかりお話しになって、やっとのことで許可をもらった

の。ジョセフィンにレセプションの顔をつとめさせる、話は良い方向にむかったわ。

それからジョセフィンは、死ぬほど歌の練習をしたらしいわ。指導者のヒルトン先生も、これならばなんとか、メイトリアル教会の恥にならないくらいにまでなつたと、楽譜をとじたほどね。

そしてジョセフィンは、レセプションの席に父をむかえて、ひとり背水はいすいの陣で最高の舞台を待ったの」

シエラはりょう手をかたくにぎって、熱心にその先を待った。

「ところがレセプションの当日になって、ちよつとしたトラブルが起こつたの」

3

「それはことしのレセプションにかぎって、かの法王様がお忍びでお出でになつたつていうの。

それはもうメイトリアル教会は大騒ぎになつて、レセプションのプログラムは手落ちがないよう見直されたわ。

法王様はどうやら、ソフィ・シンクレリアのすばらしいわさをお聞きになつて、どうしても天使の歌声を聴きたいと、はるばるメイトリアル教会までお越しになつたらしいの。

そんな話をきいては、ソフィをメイトリアル教会の顔として出さないわけにゆかないわ。

だからヒルトン先生は、そとで遊んでいたソフィを至急しきゅう呼びになつたそうよ。

舞台つらで控えていたジョセフィンは、目のまえを笑顔ですりぬけていくソフィに会つて、信じられない顔をしたでしょうよ。

そしてソフィは最高の晴れ舞台に立つたの。

絶世の歌声はいつきに教会にひびき渡つたわ。わたし、小さい頃

ではつきりとは覚えてないけど、確かこのレセプションに出席していたの。

ほんとうにあのときのソフィは、神がかっていたわ。いまでもわたしの目や耳に焼きついているもの、歌のすごさを言葉で表現するのはむずかしいけど、なんていうのかしら、心をぐつとひきよせられる感じがしら。ほんとうに胸のあたりがグツとまえに出るの。わたしはソフィに憧れるようになったのも、このときからよ。

とにかくソフィは、最高の舞台で最高の拍手をあびたわ。ただ一人、ジョセフィンのお父さんの拍手をのぞいてね。

法王様からも絶賛されて、ソフィはいつしゅんで世界にその名を知らしめたの。それをソフィも喜んでるようだったわ。

でも、このときジョセフィンの夢や希望は、完全にうち砕かれたわ。

なにも知らないソフィは、歌を歌いきった気軽さで舞台を降りてきて、ぶるぶるとふるえるジョセフィンと会ったの。

ジョセフィンはすりつぶされたような苦しい顔をして、ただ涙をポロポロとつき落としていたそうよ。

そしてしずかにソフィに背中を向けて、歩いていったの。

それから間もなくよ、ジョセフィンがお父さんといっしょに、メイトリアル教会を去っていったのは「

「そんなことって………そんなことってないわ！　ねえ、それからどうなったの！　ソフィは！　ソフィは！」

シエラはまくらを叩いて、ドーラにつめよった。

「ソフィがすべてを知ったときには、もうなにもかも終わったあとだったの。」

ソフィはじぶんがしてしまったことを知って、泣き叫んだらしいわ。じぶんが親友を追いつめ、メイトリアル教会から追い出してしまった、そう叫んでいつまでも泣いたそうよ「

「それで？　それでどうなったの？　ソフィとジョセフィンは、そのあと会えて？　もう仲なおりできたの？」

「ああ、ごめんなさいね、こんなことをいってはならなかったわね。あなたも、死んだ少女に似ているっていわれるのは、あまりいい気がしないと思うわ」

シエラは聞こえそうになるリース先生の声をふりはらいながら、「だってこのままってわけにはゆかないわ！　だって、こんななもの！　ただの行きがちじゃない、ちゃんと話して、あやまればすむ話だわ、ねえ、ソフィはジョセフィンにもう会ったの？」

ドーラは黙った。

「ねえ、ドーラ、欧州って、そんなに遠いのかしら？　なんならわたし、ちよつと行ってきてもかまわないわ。ソフィのためならわたし、なんでもして行ってくるわ」

「ちがうの、シエラ、ちがうのよ。シエラがいくら欧州に行っただって、もうジョセフィンはどこにもいないの、つまりソフィとジョセフィンは、ほんとうに二度と会えなくなってしまったのよ」

「……………」

「ジョセフィンは、お父さんといっしょに欧州へ渡る途中、不幸な事故にあつて、ふたりとも亡くなってしまったの。安価な汽船会社で、船はろくな整備もしないで欠陥だらけだったって、あとで大きなニュースにもなったわ」

「そんな……………じゃあソフィは、ソフィはどうやってジョセフィンにあやまればいいの？　どうすればまたジョセフィンといっしょに笑いあえるの？　どうすれば」

「もうおそいの。死んでしまった人にあやまるなんて、死んでしまった人といっしょに笑いあうなんて、ぜったいに無理なのよ」

ドーラはなるべく気持ちをおさえて、いった。

「それからよ、ソフィがあんな悲しい目をするようになったのは。呪われた歌姫だって、みんな口ぐちにいいあつたわ」

シエラはまくらに顔を押しつけたまま、泣いている気配があつた。「泣いても、しかたないの。だってそうでしょう？　先生がたもいなくなつたわ、ふこうな事故なんだって。だからソフィは、いつか

立ち直らなければならぬのよ」

「そんなかんたんな話ではないわ！ あなたソフィにそんなふうにいえて？」

「……………」

「わたしが初めてソフィに会ったとき、ソフィはわたしを親友にしてくださいらなかったの。その理由がいまやっとわかったわ。とうぜんね、わたしは知らなかったにしろ、なんて失礼なことをお願いしたのかしら。ソフィにはもうかけがえのない親友がいたのだから、わたしなんか、そんなこというなんて、おこがましいっただらないわ。

でも、でもソフィはこうもいいなすったわ、わたしがもし、メイトリアル教会に入れてもしたら、わたしと親友になってくださるって」

ドーラは意外な顔をした。

「それ、ほんとう？　ねえシエラ、もしそれがほんとうだったら、すごいわあなた、あのソフィがそんなこというなんて、ぜったいありえないもの」

「それにね」とシエラはいいかけて、やめた。

『それにしてもあなた、たいへんよく似ているわ』

『あなたジヨセフィンにそっくりなのよ』

シエラは、じぶんがジヨセフィンに似ているといわれたことを思った。

ふしぎな気分だった。

あのスタンレー・リース先生がいうのだから、ほんとうに似ているのだろう。

「それに、なに？」

ドーラはまくらから頭をあげた。

「ううん、もう寝ましよう。わたし泣いて、泣いて、泣き疲れたわ」
シエラは鼻をすすりながら、いった。

「そうね、おやすみシエラ」

「おやすみドーラ」

シエラはふとんをかけ直しながら、なにかじぶんにすさまじい使命があたえられたような気がして、ならなかった。

ソフィの夢

シエラは夢を見た。

なんとかしてメイトリアル教会に入れた夢だ。

あこがれの教会にたどり着いたシエラは、笑顔いっぱいソフィに会いにいった。

ソフィはひとり部屋にいた。

ベッドのうえにうずくまって、泥まみれの顔をあげた。

「まあ、ソフィ、あなた泥だらけじゃないの！ せっかくのシルバ―髪も、美しい顔も、みんな泥まみれよ！ いったいぜんたいどうしたというの？」

「あら、お久しぶりねシエラ」

泥にうずくまったソフィは、しずかに笑った。

「ええ、ひさしぶりよまったく、それよりも泥がひどいわ。なぜ誰もふいてさしあげないのかしら、ほらほら顔くらいは、なんとかしなくちゃ」

シエラは飛んでいって、ソフィの顔の泥を手でよけはじめた。けれども泥をよければよけるほど、こんど泥はソフィの顔いっぱい広がって、目もあてられないありさまになった。

「まあ、おかしいわ！ わたしの手はきれいなはずなのに、どうしてこの泥がとりのぞけないのかしら？」

「これはわたしの呪いな、気にしなくていいわ」

ソフィの目には泣いたあとがあった。

ただ放心の目をシエラにむけた。

「呪いですって？ これはただの泥よ、みてなさい、きつとわたしがきれいさっぱりとりのぞいてさしあげるわ！」

「いいえ、これは呪い。あなただっいまわたしに、たくさん呪いをひろげているじゃない、あなたはわたしをたんまり汚しているのだわ、ひどい人ね」

「ちがうわ！ わたしはソフィを助けようとして、泥をとってさしあげているの、ほらご覧なさい、こんなに泥が落ちたわ！」

けれどもシエラの手は、これ以上ない泥であふれていた。ソフィの顔は、きれいになるところか、頭から泥を流したように汚れきっていた。

「まあ、あなたはひと倍わたしの顔に泥をぬってくださいること。でもいいの、わたしはちっとも気にしないから。みなさん、たくさんのひとがわたしに泥をぬってくださいるの。これは呪い、死ぬまでつづく呪い、わたしちっとも気にしないわ」

「わたしはちがうわ！ ほんとうにあなたの泥をとりのぞいてさし上げたいの！」

泥まみれになった手をさげて、シエラはわんわんと泣き始めた。

「おなじことよ」

ソフィは冷たい目をさげて、いった。

ストルナードのコンクール

シエラは汽車から顔を出して、流れてゆくストルナードの町を見た。

カフェテラスあり、帽子屋あり、かばん屋あり、歩道をゆく人びとの服はどれもおしゃれだった。

「シエラったら、あまりキョロキョロしないでくれる？ わたしたち田舎ものと思われてしまうわ」

ドーラは席にうづくまりながら、帽子の頭をさげた。

「あら、だつてすてきな町よ？ わたし田舎そだから、都会がとつてもめずらしいの。ドーラもいっしょに顔を出しましょうよ。すてきな街、わたしストルナードが好きになつたわ」

シエラは髪をなびかせながら、いった。

ストルナードは歴史が古い町で、そのおもむき深い町なみをこのんで、たくさんのお藝術家が住んだ。

「こんな町、わたし3回も来たことあるわ。ロタオールほど都会じゃないから、そんなにめずらしがることないもの、ほらシエラ、みんながこつちを見ているわ、早く窓を始めてちょうだい」

シエラはしぶしぶ窓をおろして、みだれた髪をまとめた。

そのうちにジャネット・ガードナーが汽車の廊下を歩いて来た。

「まったく。ラスタル駅で買ったキップは勘定ちがいさね。トーマスのじいさんは何年駅につとめているつてのさ」

ジャネットは大きなサイフをしまいながら、席についた。

「おやドーラ、どうしたんだいまっ赤じゃないか」

「だつてガードナー先生、シエラたらまったく田舎ものなんですもの、さつきから大声ではしゃぐは、窓から顔は出すはで、わたし恥ずかしくつて死にそうだわ」

ドーラは帽子のつばをつかんで、顔をかくした。

「シエラ！ あんたなに観光きどりているんだい、きょうは歌のコ

ンクールに来たんだよ、遊びにきたわけではないんだからね！ほんとうはもつと、あんたらの初舞台なんだから、うんと緊張していなければならぬんだよ」

「あら、緊張なら昨日ちゃんとしたわ、だって先生つたらいきなり、あすはみんなのまえで歌ってもらうからね、だなんて言うんですもの。そりゃわたし、びっくらこいたわ。わたし大勢のひとのまえで歌うの、これが初めてなんですもの」

言葉とはうらはらに、シエラは浮き浮きした顔を窓のけしきにむけた。

そのよこ顔を見ながら、ジャネットはうさんくさそうに、いった。「緊張した顔つてのは、そんなによるこび輝いているのかねえ？

ストルナードのどの店を見て回ろっかなあって、あんたの顔にちゃんと書いてあるよ」

シエラはりょうで顔をおおった。

「まあ、先生つたら、よくご存じだね。わたし歌のことはどうにでもよくなって、いまはストルナードのことで胸がいっぱいなの、歌のコンクールが終わったら、ちよつとは町を歩けて？」

「あんたはほんとうに、なんて娘だろうね。みんなのまえで歌うのが怖くないのかい？ 歌を審査されるのがおそろそくないのかい？ もし落選したら恥ずかしくはないのかい？ ドーラなんて見てみなよ、ゆびさがふるえているじゃないか」

「まあドーラ、あなただいたいじょうぶ？」

「平気よ、ちよつと緊張しているだけ、わたしだって大きな舞台上で歌うのはこれが初めてなのよ」

ドーラはふるえるゆび先を折りあって、祈るように下を向いた。「あんたたちはこの夏、メイトリアル教会に入れるかもしれないんだ。でもちよつとやそつとレッスンしたって、あの伝統ぶかいメイトリアル教会の聖歌隊でやっていかれるわけがない。あそこは1等クラスから4等クラスまでレベルわけしているそうだけど、あんたらはほんの子どもたちといっしょの4等クラスさ。シエラなん

て、4等クラスだつてあぶないね」

「まあ！ そりゃないわ」

「ほんとうのことさ。あんたは歌が下手クソなんだ、本来ならあんたは今回のメイトリアル教会入りはよしときたいくらいだよ。いくらあたしのレッスンをうけたつて、あんたなんてまだまだ下手くそシエラさ。でもメイトリアル教会に入るといふのだから、歌のコンクールにでも出て、賞の一つもとつておかないと、教会に申し訳ないじゃないか」

「賞？ わたしたち賞をとるためにコンクールに出るのかしら？」

シエラは意外な顔をして、きいた。

「賞のないコンクールなんて聞いたことがないよ。シエラは予選とつぱ、ドーラは最優秀賞が目標だよ、いいね？」

「あら、わたしだつて、なんなら最優秀賞を目標にしたいわ」

「バカバカしい！ あんたなんか、歌つたと勝手に審査員がひつくらかえつてしまうよ！ とにかくシエラは、音ははずさないで、歌いきることだよ。それくらい、なんとかやってみな」

シエラはつまらなそうな顔をして、流れゆくストルナードの町に目をやった。

2

ドーラはひや汗を流して、舞台に立った。

広い会場には、3人の審査員が座っていた。そのほかは予選審査とあつて、客席はまばらだった。

「8番、ドーラ・ブライスさん、どうぞ」

ドーラのうしろでピアノの演奏が始まった。

ひいているのはジャネットで、譜めくり役はシエラだった。

「よろしいです、次の方、どうぞ」

審査は、ごくごく短いもので、ひと樂章を歌いきらないうちに終わった。

ドーラは、緊張のあまり消え入りそうになりながら、舞台をおりていった。

「まあ、初めての舞台ってのは、こんなものかね。でもドーラは予選は問題ないね」

ジャネットがうしろからやってきて、ドーラの肩に手をおいた。

ドーラは控え室にもどると、コップの水をのみほした。

「わたし、ダメだわこつゆうの。大きな舞台に立つただけで、緊張して頭がまっ白になっちゃった。あれでよく歌いきれたとじぶんでも思っわ」

「でも、ドーラの歌声はすてきだわ。わたし歌が下手クソだから、あなたがうらやましいわ!」

きょうの歌のコンクールは、ストルナード市長主催しゆいのコンクールで、参加者はそこそこいた。

シエラ、ドーラをふくめ、24名の歌手が入賞をめざし、控え室に集まっていた。

「わたしをうらやましがるよりも、あの娘をうらやましがりなさい。ほら、ローズマリーよ?」

「ローズマリー?」

「ほらあすこ、鏡のまえでお化粧をしている娘よ」

シエラは、ドーラのゆび指すほうを見て、確かに鏡のまえで化粧してる娘を見つけた。

「プログラムになまえがあったから、わたしびっくりしたわ。これで最優秀賞は、彼女ひとりのものね」

ドーラは衣装のえりを楽にしながら、いった。

「まあ、わたしはじめてローズマリーを見たわ。ほんと小さいのね、まだほんのこどもじゃない」

「こどもだったって、あれでわたしたちとおなじ、十三歳なのよ?」

でもへんね。なぜロタオールで最優秀賞をとった、世界でも名の

あるローズマリー・ヨハンソンが、こんな小さなコンクールに参加しているのかしら？ ストルナードの歌のコンクールで1位になったって、彼女にとってなんのじまんにもならないでしょうにね」
シエラはそれをきいて、確かにへんだと思った。
そんなシエラのもとに、予選審査の案内が来た。

3

バレンタイン・ウッドは、会場のいちばん後ろにすわっていた。
遠い、明るい舞台のうえでは、黒髪の少女がいま歌い終わったところだった。

彼はあくびをかみ殺しながら、いった。

「なんだってローズマリーは、こんなちんけなコンクールに出たん
だ？ 賞金だって、大した額じゃあないし、名誉なんてないどころ
か、はんたいに恥ずかしいくらいさ。」

まだ予選のようだが、どれもこれもパツとしない田舎むすめばかりだな。こんなの中で、ぶつちぎりに優勝したって、なにが楽しいんだ？」

バレンタインはふところからチョコレートを取り出して、口の中にほうり込んだ。

彼のほか、会場には客がほとんどいなかった。

さいごの予選審査の少女が舞台にあがった。

「またへたっぴいな歌か？」

髪は美しい金髪で、顔には笑顔があふれていた。

「まあまあ、こんな小さなコンクールの予選で、なにがあんなに楽しいのかね？ どうせローズマリーがいるんだ、2位あらそいが関
の山々」

舞台にあがった少女は、ほかの娘たちとあきらかにちがった表情

をしていた。緊張がなかった。

会場のすみずみまで広く見わたしてから、発声のポーズをとった。それをバレンタインは、チヨコレートをかじりながらながめていた。

ピアノの伴奏が流れて、少女は口を大きくあけた。そのしゅんかんバレンタインは、少女の歌のあまりの下手クソさに、チヨコレートをのどにつまらせた。

「なんだなんだ、この音痴な娘は！　おいおい、こんなありがよ、ど頭から音がちがうじゃないか！」

バレンタインはイスを蹴るようにして、立ち上がった。

「おい！　この下手クソ！　ひっこめ！」

3人の審査員は、いっせいにふり返った。

まばらな客席から、くすくすと笑い声がおこった。

舞台上で歌っている少女は、けれども歌をやめず、さいごまで歌った。そして満面の笑みをうかべて、会場に一礼をした。

「ちっ、あの娘、おれのことを無視して歌いやがったな」

バレンタインはそっぽを向きながら、席にもどった。

「まあまあ、たいへんお行儀の良いこと。こんなちっぽけな歌の披露宴に顔を出すなんて、あなたなにをお考えかしらウッド先生？」

若い女性がいつの間にかバレンタインのとなりですわっていた。

「ミルドレッド……、なんであんたまでこんなところか？」

「ミルドレッド？」

「これはたいへん失礼、ミルドレッド・ホワイト先生、ご機嫌いかがかな」

バレンタインは一つせきばらいをして、いい直した。

彼らこそ、かのロタール音楽大学で声楽を教えている、バレンタイン・ウッド先生とミルドレッド・ホワイト先生だった。

「せっかくの休日よ？　こんなお遊戯会を楽しんでいいの？」

ミルドレッドはめがねをふきながら、きいた。

「そっちこそ、ストルナードになんの用だ？　おれはローズマリー

を観に来たんだ」

「おなじね」

バレンタインはコンクールのプログラムをひらいて、ミルドレッドにむけた。

「ローズマリーは、予選なしだ。まあ当然ってところだな。いまのところ、エマ・キャンベルか、ドーラ・ブライスカ、そのあたりで2位あらしいになりそうだ。それにしてもつまらないコンクールじゃないか。つまらないといえば、いまのど下手クソな娘だ！ 名前はなんていうだ」

バレンタインは長い髪をかきあげながら、いった。

「シエラ・クロウって、ここに書いてあるわ。聞いたことがない名ね、きつと田舎の娘だわ」

「ふん、あんたも聴いていただろう？ まったくひでえ歌だ」

「あら、あなたにはそうきこえて、ウッド先生？」

「なに」

バレンタインはチョコレート紙をまるめて、なげた。

「ここをご覧なさい、シエラ・クロウ、その師匠はなんて書いてあるかしら？」

「うん？ うん？ ジャネット・ガードナー？ ジャネット？ ジ

ヤネット……ああ！」

とバレンタインは大きく手をうって、

「ジャネット・ダグラスか！ 確か結婚したってきいたが、じゃあそうか、あのジャネット・ダグラス先生のことか！」

「ええそうよ。ダグラス先生、いつだったかしらね、あなたと大げんかして、大学とも大げんかして、ロタオール音楽大学をお辞めになったわね」

ミルドレッドはめがねをかけなおしながら、だれもない舞台に目をおろした。

「なるほどな、これはおもしろいじゃないか。あのダグラス先生の教え子がこのコンクールにね。」

もしかしたら、ローズマリーがこんなちんけなコンクールに参加したってのも、ダグラス先生が関係しているのかもしれない」
バレンタインはぶしょう髭をなでながら、いつか舞台へ興味の日をむけていた。

4

シエラはコンクールの予選に落ちた。

ジャネットはすぐにシエラの頭を一つたたいた。

「あんたはなんて歌が下手クソなんだろうね！ どうしてさいしょの音をまちがえるのさ！ あれだけ居残りレッスンをしておいて、まったくなんて醜態をさらすんだい！」

シエラは舞台の下の廊下で、うつむいていた。

「おかしいわ。なんだってあんな音がさいしょに出たのかしら？

わたしはちゃんと、ラの音を出したつもりだったのに」

「ラ？」

ジャネットは意外な顔をした。

「なにいつてるんだい、さいしょはソの音だろうね、ほら、譜面を見てみなよ」

「まあ、ほんとうだわ。でもわたしの譜面には、確かにラの音だわ、そら見てくださいな」

ジャネットは二まいの譜面を見くらべて、しばらく黙った。

「なんてことだい、あんたこの譜面、どこでひろったんだい？」

「ひろった？ さあ、わからないわ、とにかくわたしがつかった譜面は、この譜面だわ」

ジャネットはまたしばらく黙って、小さい声でいった。

「これはローズマリーの譜面だよ。たしかあの娘がきょう歌う曲も、あんたとおなじ曲だったからね」

「まあ、ローズマリーの？　つまり、どういふことかしら？」

「どういふことかしら、じゃないよまったく。調性がちがったのさ。つまりあんたは、ローズマリーのラの音ではじまる調性で歌いきってしまったのさ」

「まあ！　じゃあわたし、そもそもからまちがって歌ってしまったのね？」

「そういふことだね。このおっちょこちょいめ、なんで譜面がすり替わっているのに気がつかなかったのかね」

シエラは譜面をまちがったため、ストルナードの歌のコンクールに落選したのだった。

「ほら、あんたが間違ったんだ、ちゃんとこの譜面をローズマリーのもとに返してきな！」

「ええ！」

「ええ、じゃないよ。はやくしないと、ローズマリーもシエラの譜面で歌うことになってしまっじゃないか」

ジャネットから譜面を押しあてられて、シエラはこれはややこしいことになったと思った。

ロタオールのダグラス先生

シエラとローズマリーは、舞台そでの廊下でばったり会った。

舞台からは、ドーラのきれいな歌声が聞こえていた。

「なによあなたいきなり、この譜面がなに」

ローズマリーはちよつと怒ったふうに、シエラと譜面をこうごに見た。

「この譜面、あなたのもでしょう？」

シエラから譜面をうけとり、旋律を目でおったローズマリーは、ちよつと意外な顔をした。

「これ、あたしなのだわ。どうして見ず知らずのあなたがあたしの譜面をもっているのよ」

シエラはてみじかに事情を話した。

「たしかにへんね。あたしこの譜面をずって手にしていたつもりだったけど、いつすり替わったのかしら？ まさかあなた、あたしの譜面を盗み見たんじゃないでしょうね？」

ローズマリーは花のような衣装に腕をくんで、なめるようにシエラの顔を見た。

「とんでもないわ。だって、わたしこの譜面のとおりに歌ってしまつて、コンクールの予選に落ちたんだもの、どうせ盗み見るだけなら、そんなバカはしないわ」

ローズマリーは表情を変えた。

「あなたいま、なんていったの？」

舞台から拍手がわき起こつた。

さすがに本選となれば、たくさんの人が会場にいるらしかった。

「予選に落ちてしまつたつて、いったわ」

「そうじゃないわ、あなたいま、まちがってあたしの譜面のとおりに歌つたつて、そういつたわね？」

「ええ、伴奏はわたしの譜面のとおりで、歌はあなたの譜面のお

りだったから、作曲した人もひっくり返ってしまうほど、ちぐはぐな歌になってしまったわ」

ローズマリーはぐっと顔を近づけて、さらにいった。

「あたしが天才歌姫のローズマリー・ヨハンソンだって、あなた知っているわよね？」

「ええ、ロタオールで最年少の最優秀賞を受賞した、天才歌手だわ」シエラはすらっと答えた。

ローズマリーはまだ何かふに落ちない顔をして、立っていた。

「じゃあもう一度、あたしの譜面のとおりに歌ってきかせてよ、予選では、そうしたんでしょう？」

シエラはすこしためらったが、いわれたとおり、ローズマリーの譜面をちよっと歌った。

それをローズマリーは、一つ一つ音を数えるように、きいて、もういいと手をふった。

シエラは何が何やらわからず、不安な顔をして立っていた。

「あなたがいいたいことは、わたしにはわかっているわ。歌が下手クソだって、そうおっしゃりたいんでしょ？」

「そうね、あなた歌が下手クソね」

そこでシエラとローズマリーは譜面を渡し合った。

「ちよっとあなた、なまえはなんていうの？」

ローズマリーは、シエラの背中にむかっってきた。

「シエラ・クロウ？ あたしはローズマリー・ヨハンソン、あなたよりもずっとずっと歌がうまい、天才歌姫よ。あなたは、とつても歌が下手だわ。きょう歌った少女たちのなかでいちばん歌が下手」

シエラはちよっと肩をおとして、そうね、とつぶやいた。

「でもね、あなたを予選で落とした審査委員は、バカだわ」

ローズマリーは大きい大きい衣装をゆらして、とつとと舞台へあがっていった。

ストルナードの歌のコンクールは、ローズマリー・ヨハンソンのひとり勝ちで幕をとじた。

彼女が舞台に立ったとき、会場は人であふれていた。そのなかにはもちろん、バルンタインとミルドレッドの顔もあった。

バルンタインはいつになく真剣な目をして、ローズマリーの立ち姿を見ていた。

舞台すそにはシエラもドーラもいて、天才的なローズマリーの歌に耳をすませていた。

ふたりはじぶんたちの歌が恥ずかしくさえ思った。

ローズマリーはたしかに、ストルナードの歌のコンクールなど出るまでもなかった。

けれどもただ一人、ジャネット・ガードナーだけは、ふまんそんな顔をして、客席から歌をきいていた。

拍手もしなかった。

ただ一こと、譜面どおりさ、といい残し、興奮さめやらぬ会場をあとにしていった。

コンクールの2位は、エマ・キャンベルという背の高い少女だった。

エマは涙をみせて舞台にあがった。客席に親がいるらしく、大きく手をふっていた。

そして3位がドーラだった。

ドーラは賞状を手にして、いまはにぎやかなストルナードの町を歩いていた。

「ドーラはよくがんばったね。あれだけ大舞台で歌えて、しかも3位に入賞するのだから、もうメイトリアル教会にやったって、もうしぶんないね」

町の大きな石みちを歩きながら、シエラは急にふりかえった。

「わたしは？ 先生、予選おちのわたしは、メイトリアル教会に入れないかしら？」

ジャネットは懐中時計をとり出して見ながら、やれやれといった顔をした。

「あんたは来年さね、ことしはドーラだけメイトリアルに入れるとするよ」

「まあ、そりゃないわ先生！ わたしだってがんばって歌ったわ、予選で落ちようが、落ちまいが、せいっぱい歌ったわ！」

「下手クソな歌をね」

ドーラがくすくすと笑って、いった。

シエラは、目のまえを通りすぎた馬車にさそわれて、ちょっと足をとめた。

「まあ、シエラもがんばったさ。はじめての舞台で堂どうと胸をはって、下手クソな歌を歌いきったのだからね。その度胸はみとめるところさ。会場から大きな罵声があがったのを、あんたおぼえているだろうね？」

「ええ、ずいぶんりっぱな罵声だったわ。だけれどわたし、もう下手クソだなんて、すっかり耳なれてしまったから、ちっとも気にならなかったわ」

「そうさ、そのつよいハートさえあれば、ことしからメイトリアル教会に入っても、くじけずにやっていけるさ」

「まあ！」とシエラは飛び上がって、ジャネットのうでをひっぱった。

「じゃあ、わたしもことしから、メイトリアル教会に入れるのね？ 予選おちでは無理かと思っていただけけど、先生、いまのほんとうね！」

ジャネットはふり返って、浮かれるシエラになにかひとこといおうとしたが、その目はシエラをとおり越して、近くを歩く男のほうへむかった。

「ん？ ダグラス先生じゃないか」

男のほうでもこちらに気がついて、ジャネットを旧姓で呼んだ。
「あなたはバレンタイン……、なんでこんなところに」
ジャネットは、これはややこしいことになったと思った。

3

シエラとドーラは、夕ぐれのレストランを自由に歩きまわった。
花屋やぼつし屋、ジェラート屋など、メインストリートにはシエ
ラの目をよるこぼせる店ばかりが軒をつらねていた。

ジャネットから、汽車のじかんまでという条件つきで、ストルナ
ードめぐりを許されたのだった。

「わたしがこの町を案内してあげるわ、ブライス家がひいきにして
いるお店があるの」

ドーラはそういって、キョロキョロするシエラの手をひいていっ
た。

ふたりの教え子を見おくったジャネットは、さてといった顔をし
て、バレンタインをふり返った。

「いったいなんの用だいバレンタイン？　こんな落ちぶれたあたし
の姿を笑いにきたのかい？」

バレンタインは大きく手をひらいて、いった。

「まさか！　ダグラス先生は自分から辞職したんじゃないか、落ち
ぶれるだなんて、思ってもみない言葉だね」

ふたりのもと同僚は、むかしを懐かしむといったふうはなかった。
それよりか、けんか別れした相手がひさしぶりに会った、そんな雰
囲気だった。

「ともあれひさしぶりに会ったんだ、こんな歩道で立ち話もなんだ、
お茶でもごちそうしようじゃないか」

バレンタインはカフェテラスに入るなり、ボーイに珈琲をふたつ

頼んだ。

そしてジャネットにイスをひいてすすめ、じぶんは乱暴にすわった。

「おれはミルドレットのように、回りくどいやり方がきらいなんだ。だからそつちよくにきくぜ。」

ダグラス先生、あんたいったいなにを考えているんだ？」

ジャネットは、やれやれというふうに首をすくめた。

「なにも考えてないさ」

「とぼけるなつて。あんたはあの天才歌姫、ローズマリー・ヨハンソンを育てた。その次には大学と大げんかして、田舎へひっこんだ。これでロタオールも静かになったと思つたら、こんどは妙な教え子ふたりをつれて、ちいさなちいさな歌のコンクールに顔を出した。これはいったいなにを意味する？」

バレンタインはボーイから珈琲をうけとり、そのまま口へもつていった。

「あんた変わらないね」

「ああ変わらないさ」

「その調子じゃあ、ロタオールも変わらないね」

「ああ変わらないさ」

ジャネットは遠い目をして、珈琲のなかのスプーンをまわした。

「あたしはねえ、あんたとけんかして、大学ともけんかして、先生を辞めたとき、もう音楽をやめようと、本気でそう思つたのさ。田舎にひっこしたのもそう、音楽とはむえんの土地で、まったくちがつた暮らしをしようと思つたのさ」

「うわさは、ほんとうだったんだな」

「あんたと大げんかしたとき、あたしはいったらどう？ 夢いっぱいの少女たちに、ぶあつい譜面をおしつけるのがバカバカしくなつちまつたのさ」

「だってそれは、彼女らの歌手人生にとって、もつとも重要なことだぜ。泣いたつて、叫んだつて、おれは少女たちに譜面のすべてを

たたき込む」

カフェテラスのグランドピアノから、フォーレが流れだした。
ひいているのは、白髪しじがだらけの老人だった。

それに耳を傾けながら、ジャネットはいった。

「ピアノは誰がひくんだい？ 歌は誰が歌うんだい？」

「なに」

「あたしは歌なんてすっかり忘れて、ラウスハットのサウスヒルというところでのんびり暮らしていたさ。ほんとうにのんびりした暮らしさ。あそこは時間が止まった絵画の中で暮らすようなもんさ。

あたしの頭のなかから音楽がすっぽりなくなってしまった、そんな生活さね」

「ダグラス先生から音楽がねえ」

「ところがねえ、ところがそんなある日、あの娘の歌をきいてしまったのさ」

「あの娘？」

「あんたが客席から罵声をあげせた、あの歌の下手クソな娘さ」

「ああ、あの予選おちのやつか。そういえばローズマリーが妙なことをいっていたな」

「妙なこと？」

「ああ。ローズマリーはコンクールに出た少女たちの名はいっさい口にしなかったが、シエラ・クロウという名だけは、はっきりおぼえていたな。譜面がどうのといっていた。

その予選おちの娘が、なんだった？」

「あの娘はねえ、きよねんの夏ころ、高い木にのぼって、ひろい空を舞台に、思いっきり下手クソな歌を歌ったのさ。その顔はほんとうに輝いて、その歌声はほんとうに自由だった。美しいものばかり描いていた画家が、路傍みちづらの石の自然な美しさに気がついたようなもんさ。しかもその石は、そんじゃそらの石ではなかった。その歌声はあたしのなかに眠っていた、大切な言葉を思い出させたのさ」

『歌ってのはな、にんげんが歌うんだ』

ジャネットには、ひとりピアノにむかった亡き師のうしろ姿が見えるようだった。

「はあん、それでその下手っぴいの娘を育てようと、あんたはがんばっているってわけかい」

「そうさ」

「ものになるのかい？」

バレンタインは頭のうしろで大きく腕をくんだ。

「わからないね。もう一人、ドロー・ブライスって娘なら、はつきりいえるけどね」

「あれは使えるだろう、いきさきはどこだ？」

「メイトリアル教会」

「あんなふきだまり、やめておけ」

ジャネットは、あいかわらずなバレンタインの目のわるさに、失望をかくせなかった。

そして懐中時計の針を見て、ジャネットは席をたった。

「そら汽車のじかんさ。どうやらあんたとあたしは、まったくべつの道をあゆむ運命らしい」

バレンタインは長い髪をかき上げながら、笑った。

「同感だね。だがおれの道は確実な道だ、あんたみたいな道楽な道とはわけがちがう」

「道楽か。まったくさね」

ジャネットは、ストルナードの駅に待っているだろう、ふたりの教え子の笑顔を思った。

手紙のゆくえ

ドーラは家の門から出てきて、待っていた馬車にむかって走った。馬車にはシエラとホアキンおじさんが乗っていた。

ホアキンはふり返って、馬車にすわったドーラを見てから、馬にうちをくれた。

「服が決まらなくて、困ったわ」

ドーラは大人っぽい黒のボレロをまもっていた。

「その服、とってもよく似合っているわ」

服についた糸をとってあげながら、シエラは笑った。

「ありがとうシエラ」

古い馬車は、ホースウエストの山をはなれて、広い草原の中を走った。

「ああ、緊張してきた」

ドーラは手袋のゆびをくみあわせて、下をむいた。

「やっぱり手紙を渡すなんて、わたし無理な気がしてきたわ。だって、こんなに手がふるえているのも」

シエラはその手をつかんで、ドーラの顔をのぞき込んだ。

「緊張なんてしないでいいわ。だってきょうはドーラにとって、とってもすてきな一日になるんだもの。」

思いきってルドヴィックに手紙を渡したら、きつとすがすがしい気分になるわ。モヤモヤした思いがいつきに晴れるの」

「でも、良くない結果が待っているとしたら、もしもルドヴィックがわたしの手紙をうけとらなかつたとしたら」

「そしたら彼のあしをふんづけてやるといいわ！ ね？ さあ、背すじをピンとのばして、胸をはっていきましよう、そんなびくびくした顔をしていたら、ルドヴィックにあしもとを見られるわ」

ドーラはかすかにうなずいて、シエラに顔をあげて見せた。

ついにドーラたちは、ルドヴィックに手紙をわたす日をむかえた。

ラストルまでの馬車はホアキンに頼んだ。

話をきいたホアキンは、よろこんで馬車のしたくをした。

「わしもちかぢかラストルに行かなければならないと思っていたのさ。クワの歯が折れちまってね、ほかにもタネを仕入れなければならぬ」

「それからねおじさん、わたしたちのラストル行きは、ひみつにしてほしいの」

「ひみつ？ ああいいとも。もつともわしは、あまり誰とも口をきかないからね、おまえさん以外はね」

そして今日、シエラとドーラはホアキンの馬車にのって、ルドヴィックに会いにゆくのだった。

「きょうのドーラはとってもすてき、家から出てきたとき、わたしどこかの令嬢お嬢様があらわれたのかと思っただわ。そのベレー帽は、ストルナードで買ったものね？」

「ええ、わたしこれがとつてもお気に入りなの。ぜひきょうかぶっていこうと決めていたの」

「まったくドーラのきょうのかわいさといったら、ルドヴィックなんかにはもつたいたないくらいだわ」

シエラは心から親友をほめた。

しかし今日もつともひとの目をひいたのは、ドーラではなくて、シエラの方だった。

くちびるには紅をさし、頬べに、アイシャドウなど、それはドーラもあつと驚くほどのおめかしだった。

髪も流行のヘアスタイル、服も見たことのない白のシフォンワンピースだった。

いつもお下げ髪にきのう的な服装しか見せなかったシエラは、ホアキンじいさんの目まで驚かせた。

なぜシエラがこんなに女性をみがいてしまったかといえは、すべてサイラのおこないだった。

どうやってルドヴィックに会って手紙を渡そうか、そのことで頭

がいつぱいだったシエラに、サイラは鼻うたを歌いながら、おもしろいほどコーディネートをしてしまった。

だからシエラは、まさかじぶんがいたずらにめかし込んでいようとは、知りもしなかった。

ただ真剣に、ドーラの恋がうまくいくことだけに夢中になっていた。

ホアキンの馬車は、コトコトと車輪をきませながら、なにもない草原を走った。

2

ラストルはあいかわらずホコリっばい町だった。

駅のまえには飲食店があつて、たくさん労働者たちがいつぶくをしていた。

シエラとドーラは馬車を降りて、ホアキンを見あげた。

「わしはバーナバスという店にいるからね」

「バーナバス？」

シエラはこくびをかしげた。

「そら、あそこに見える大きい倉庫だ。わしのほしいものはすべてあそこにそろっている。おまえさんたちもひみつのようじが済んだら来るといい、ほんとうになんでもそろっているんだ」

ホアキンはパイプをくわえ直して、馬にむちをくれた。

シエラとドーラはくつついて、あらっばいラストルの町を歩いた。工場づとめの男たちや、あかごを背おった女たちが、シエラやドーラのめずらしい身なりに目をむけていた。

「ああ、なつかしいわ。はじめてこの町に来たとき、わたし泥まみれのひどい格好だったわ。服もぼろぼろ、お風呂だつてずっと入ってなかったの。」

ほら、あそこのドルニク亭ってお店で、わたし無銭飲食でお店のひとにつきとばされてしまったわ」

「あなたそんなことやったの？」

ドローラはびっくりしてシエラを見た。

「いいえ、バッグをぬすまれてしまったの。わたしのすべてがつまっていたポストンバックだったわ。だからわたし、ご飯を食べたあとでお金がすっからかんになってしまったの。お店のひとに話したけれど、お金を盗まれたなんて、ついに信じてもらえなかったわ」

話は、シエラとソフィの会ったきっかけにうつった。

「まあ！ それほんとう？ ソフィがあなたを助けたなんて、ちょっと信じられない話だわ。だってソフィって、冷たい女性にかわってしまったって聞くもの。そんな人が、見ず知らずの少女をたすけるかしら？」

「あら、ソフィはとってもやさしい人だったわ。ちゃんとわたしの話をきいてくださったし、わたしとあくしゅもしてくれたわ。いっしょにいたリユーイッヒってひとは、まさに冷たい女性って感じだったけれどね」

「シエラってほんと、はま波瀾万丈なみな人生をおくっているわ。わたしはお家にはかりいて、そんなスリリングな経験は一つもないわ」

「あら、ドローラだってこれからスリリングな経験をするのよ？ さあさあ、はやいところルドヴィックを見つけて手紙を渡しませようよ」

ドローラはルドヴィックという名をきいて、急に顔が青ざめた。

「ストルナードのコンクールもそうだったけれど、わたしこういうのほんとダメだわ。緊張して、緊張して、このまま消えてしまいうう」

「ほんとうね、いまのあなたを見ていると、そのうちにすうっと消えてしまいうう」

ドローラの記憶はあいまいだった。

ルドヴィックのしごきは麦屋。けれどもラスタルに麦屋は3軒

あった。さてどの麦屋だったか、ドーラはすべての麦屋を見て回った。

「恥ずかしい話だね。愛する人のしごと場がわからなくなってしまっただけだ」

ふたりはようやく、ルドヴィックのしごと場を見つけた。

その麦屋で彼は、秤はかりのまえに立って誰かと立ち話をしていた。

それをふたりは、小道をはさんだ遠くから、こそそと見ていた。「あれはルドヴィックにちがいないわ。まあ仕事中におしゃべりだなんて、ふまじめだね。ねえドーラ、まあドーラ！ どうしたのあなた、顔いろが悪いわ」

道ばたに息をひそめていたドーラは、いまは苦しそくに胸をおさえていた。

「ああ、ダメよ、わたし息ぐるしいわ。気分がわるいの、とってもじゃないけどルドヴィックに会えそうもないわ。ねえシエラ、きょうのところは帰りましょう？」

「帰るって、ダメよここまで来て。ほら見てごらんなさい、ルドヴィックがもうあすこにいるのよ？ ドーラはちゃんとして、この手紙を渡さなければならぬわ！」

シエラはいさましく、ドーラの腕をひっぱった。

しかしドーラはかたくなにうづくまって、立ち上がることをさえてきなかった。

「もう！ どうしちゃったのかしらドーラったら、これじゃあらちがあかないわ」

シエラは困りはてて麦屋を見た。

麦屋は小さかった。

店のなかとそとに、袋づめの麦を置いて、値札を立てた、ただそれだけの店だった。

客は一人しかいなかった。それをあいてにルドヴィックは大いに話し込んでいた。

「うーん、ここからではよく見えないわね、いったいルドヴィック

「だったら、だれとそんなに話をしているのかしら？ 見たところ女性
のようだけれど。ねえドーラ、わたしちょっと近くへ行つて、見て
くるわ」

「そうしてちょうだい。ほんと、そうしてちょうだい。まあシエラ
だったら、こんなとき頼りになるわ。手紙もいちおう、あなたがもつ
て行つてね」

「ええそうね、そうしましょう。わたしがもし彼に会ってしまった
ら、そのときついでに手紙を渡すわ」

シエラはドーラから手紙をうけとって、ゆっくりと小道をよこぎ
った。

麦屋はうら路地にあつて、あまり人が通らなかつた。

シエラは背すじをピンとのばし、大きく胸をはりながら、ガラス
越しに店のなかをうかがつた。

話し込む女性の背中が邪魔をして、ルドヴィックのくわしい顔は
わからなかつた。

ガラスはさらに、それをうかがうシエラの姿をもうつした。

「まあ」

ガラスにうつつたじぶんの姿を見て、シエラは誰かほかの人が目
のまえに立っているように思った。

それはサイラがほどこした化粧やヘアースタイル、服の感じが、
とてもじぶんのものに思えなかつたからだ。

シエラはちよつと手をあげて、髪をさわってみたりした。

ガラスはまた、小道のむこうで顔だけのばしたドーラをもうつし
た。

あなたなにをやっているの、というもどかしい顔をしていた。

シエラがもういちど店のなかをうかがうと、ルドヴィックの話あ
いてが横を向いた。

「まあ！ あれはリユーイツヒじゃない！ わたしのことをこじき
だとかなんとか、さんざ見下してくれたリユーイツヒ！ これはや
やこしいことになつたわ。もしあのひとに手紙を見つかったら、い

じわるしてびりびりにやぶかれてしまいそうだわ」

シエラは、やっかいなリユーイッヒから顔をそらして、麦をさぐすふりをした。

「ああ、いつまでもこうしているわけにはゆかないわ。どうかしてこの店からリユーイッヒを追い出せないかしら？」

そのとき一人の女性が、シエラの背中を通って、店のなかに入っ
ていった。

シエラは麦の袋にかくれて、それを目でおった。

顔はわからない。けれども歳が若くて、美しい金髪を肩にゆらし
ていた。

ルドヴィックはお客さんが来たとおって、リユーイッヒとの会話を
うちきり、金髪の女性に麦を見せて回った。

「ラスタルでは、あんなおしゃれをして麦を買うのかしら？」

そのうちに女性は、ふところから手紙を見せて、それをルドヴィ
ックにさしだした。

シエラはそれを見逃さなかった。

「まあ、だいたんなひと！ わたしもああ思いつきりやればいいのか
しら？」

ルドヴィックはさしだされた手紙をまえに、りょうてをあげて、
くびを横にふった。

金髪の女性はなおもしつこく彼に手紙をおしつけた。そのうちに
リユーイッヒがやってきて、女性になにかいった。ルドヴィックは
困ったふうに髪をかき上げた。しばらく女性どうしでやりとりがあ
った。リユーイッヒは横合いから手紙をとりあげて、それをびりび
りにやぶった。

「まあ！」

金髪の女性は怒るやら、泣くやら、大またで店を出て、シエラの
背中を走って行った。

女性はキレイな人だった。

「まあいけない、わたしとんでもないものを見てしまったわ！ あ

のリューイツヒの恐ろしさは思った以上だわ」

シエラは後じさって、うしろをふり返った。

小道のむこうでは、ドーラの祈るような切ない顔があった。

シエラは、ドーラの手紙を手に、足をふみとどまった。

「どうしましょう、どうしましょう、さっきのようなキレイな人でも、ダメなもの。わたしがいったって、大笑いされるだけだわ。でも、ドーラのあの顔はわたしを信じきっている顔だわ。わたしほんとうにどうしたらいいのかしら」

心ここにあらずといった様子で、シエラはそこにあつた麦をすくった。

「その麦はダメさ、値段のわりに粒があらいだ」

シエラはびっくりしてふり返った。

そこには店のエプロンにりょうてをつっこんだ、ルドヴィックの笑顔があつた。

手紙のありが

シエラは突然のルドヴィックに飛び上がった。
そのまま手紙をうしろにかくした。

「麦が好きなの？」

ルドヴィックはおなじように麦をすくった。

「麦？」

「そうさ。きみはずっとここで麦ばかり見ていたじゃないか」

「あ、えっと、そうね、そう、わたし麦がとっても好きだわ」

シエラは視線をさまよわせて、その場をとりつくろった。

このときシエラは、まともにルドヴィックを見た。

すらりと背がのびて、彼はまた一だんと美青年になったらしかった。

「ああ、すてきなお店、わたしつい見とれてしまったわ」

「そうかな。ありふれた店だよ」

「この麦だって、あら安い」

「うん？ このライ麦は、ここらでいちばん値がはっているけど」

「そうですね、はっていますとも」

シエラは落ち着かない目をあちこちに向けた。

そのうちにまっ赤になったドーラの目と目があった。

ドーラはものかげにありながら、手でくちをおさえていた。

「ん？」

ルドヴィックはふしぎに思い、シエラの視線をたどった。それをシエラはあわてて、りょううで彼の顔をはさんでじぶんにもき直させた。

「まあ！ ごめんなさいね！ なんでもないの、怒らないでね」

ルドヴィックは少女のてのひらのなかでおどろき、そのあと吹き出した。

「あははは、怒らないさ。いまのなに？」

シエラは笑っていた。

「きみは変わった娘だね、どこから来たの？」

「ラウスハットですわ」

「へえ、ずいぶん遠いところから来たんだね」

「ええ」

シエラはてきとうにいつて、ちらりと店のなかを見た。

リユーイットはこちらに目もくれず、ひとり店の鏡に立って、髪どめをいじっていた。

「さっきの女の人、どうして？」

「なに」

「さっき泣きながら走っていった……」

シエラは金髪の女性が走っていった方向をゆびでさした。

「ああ、きみも見ていたんだね」

ルドヴィックはきまり悪そうに、髪をかきあげた。

「ああいうお客さんはたくさんいるんだよ、ぼくに手紙をうけとってほしいって、毎日のように来るんだ。こっちはしごとをしているわけだし、ほかにもお客さんがいるから、すべて断ることに決めているんだ」

「まあ、手紙をうけとってあげないの？」

シエラは背中の手紙をぎゅっとにぎった。

「はじめはうけとっていたけど、ほんとうにきりがいいんだ。返事をもとめられて、泣くひともいたな、だからそんなことがないように、ずいぶんまえからきっぱり断るようになっているんだ」

「びりびりにやぶって？」

ルドヴィックは言葉につまって、麦にささった値札をまっすぐにしたりした。

「あれはリユーイットヒが勝手にやったのさ。」

でも、そのほうが彼女にとっては、良かったのかもしれない、どうせ手紙は彼女じしんの手でやぶられるのだからうからね」

それをきいてシエラは、ドーラの一途なよこ顔を思い出した。

「ダメよルドヴィック!」

「ルドヴィック?」

「それはあなた、逃げているというものよ! あなたが女性にんきがあるのは勝手だけれど、彼女たちの一生懸命な声を無視していいはずはないわ!」

ルドヴィックはシエラの青い目におどろいた。

「想いをつづつた手紙なんて、工場でどしどし印刷されるものではないの、一もじ一もじ心をこめて少女たちは書くの。それがあなたにはおわかり?」

そりゃあしつこいセールスマンの手紙なんかやぶつて捨てたつてかまわないわ、でも少女たちの大切な想いはしっかりとお読みになって、ていねいに返事をしてあげるの。いい? いいかげんなことをいってごまかしたら、わたしあなたの足をふんづけてやるわ!」

ルドヴィックは黙った。

シエラはハツとわれにかえって、あたふたした。

「あら、まあ、いけないわわたししたら、ずいぶん失礼なことをいってしまったわ? わたしついカッとなってしまっの」

「きみも青い目をしているんだね」

「え?」

シエラの青い目に見とれたあと、ルドヴィックはちょっと恥ずかしそうに顔をそらした。

「いや、いぜんきみとおなじで青い目をした少女がいたのだけれど、その娘もきみみたいに気がつよくって、ほら、この足を踏んづけていったのさ」

ルドヴィックはかた足をまえに出した。

「ま、まあ、それはらんぼうな娘だこと」

「きみのいったことは正しいね」

そういつてルドヴィックは、店のなかでおめかしをしているリュイッヒをひと目みた。

「ぼくはめんどろなことから逃げていた、そうだね?」

「そうね」

「ぼくは少女たちの大切な手紙を、セールスマンの手紙のようにやぶっていた、そうだね？」

ルドヴィックはさわやかに笑って、シエラにあくしゅをもとめた。シエラは愛らしくはにかんで、その手をとった。

「よし、これからぼくは、彼女たちの大切な言葉をしっかりとけとめるよ。そして一つ一ついいねいに返事をする、これで良いね？」

「ええ、それで良いわ」

「じゃあまず手はじめに、きみがうしろにかくしているその手紙から、よろこんで読ませてもらうよ」

シエラはハツと赤くなつて、ルドヴィックの顔を見あげた。

ルドヴィックはいたずらっぽく笑っていた。

「だつて君みたいなかわいい娘が、なんら目的もなくずっと麦屋にいるのはおかしいよ」

きまりが悪そうに、シエラは背中から手紙をとり出した。

「わかつていたのね、あなたいじわるだわ。」

「そうよ、わたしはこれをあなたに渡さなければならなかったの、あなたはこれを読んで、思うぞんぶんあいてのことに興味をもたなくてはならないわ。心をこめて書いたのよ？ きつと読んだあとには、甘いきもちになれると思うわ。」

「あら、こんなことを本人のまえでぺらぺらしゃべるものではないわね、でもほんとうのことよ？ とにかくルドヴィックはこの手紙をしつかり読んで、ていねいに、あなたのほんとうの気持ちをお返事してあげてね」

ルドヴィックはドーラの手紙を手にして、興味ぶかい目をあげた。

「返事を書けば、また君に会える？」

「わたし？」

シエラは思つてもみない顔をした。

「そう、君さ」

「さあ、会えないこともないけれど、それはあなたしだいだわ、あ

あなたの心しだい。

まあ！ リューイッヒがこっちを見ているわ、さよづなら

走ってゆくシエラに、ルドヴィックは叫んだ。

「なまえは！」

「ドーラ、ドーラ・ブライスよ！」

2

ホアキンの馬車は、夕照りのなかを走った。

シエラは疲れた顔をして、馬車のほろによりかかっていた。

「ああ、まだ信じられないわ。ルドヴィックがわたしの手紙をうけとってくれたなんて、どうしましょう？ きつといまごろは、麦屋を閉めて、しごと帰りに、わたしの手紙を読んでいるにちがいないわね？」

「そうね」

「だとすれば、お返事はいつごろかしら？ きょう読んで、あしたルドヴィックがお返事を書いたら、来週にはわたしの家にとどくかしら？ もっと早くにとどくかしら？」

ドーラは興奮をおさめようとせず、いつまでも馬車のうえではしゃいだ。

シエラはそれに相づちをうちながら、もうこれでルドヴィックに会うこともないだろうと、ホッと胸をなで下ろしていた。

「ねえシエラ、彼なんていって手紙をうけとったか、もう一度いつてくれない？」

「よろこんで読ませてもらうよって、いったわ」

ドーラは胸のまえで手をうち鳴らした。

「まあ、夢みたいだわ！ ほかに彼、なにかいっていなかった？」

「そうね……………」

シエラは、眠りにひきこまれるような意識のなかで、記憶をさぐった。

『返事を書けば、また君に会える?』

ルドヴィックは興味ぶかい目をあげた。

『なまえは!』

走ってゆくシエラに、ルドヴィックは叫んだ。

『きみも青い目をしているんだね』

シエラの青い目に見とれたあと、ルドヴィックはちょっと恥ずかしそうに顔をそらした。

シエラが思い出すルドヴィックは、どれもこれもじぶんにむかって話しかけていた。

「あたりまえね、わたしが会ったのだもの」

「え? なに」

「なんでもないわ、ちょっと疲れているだけ」

ホアキンは馬をあやつりながら、ちよつとふり返った。

「そうさな、シエラはずいぶんがんばった顔をしているな、ラウスハットまでまだちよつとある、すこし休むといい」

シエラはかすかにうなずくと、眠りにつきながら、いった。

「すべての人びとに、しあわせがおとずれますように」

馬車は静かな草原を走った。

その草原の遠いかなたには、メイトリアル教会の小さな十字架が、かすかに見えていた。

サウスヒルの森をぬけて

ルドヴィックの返事はすぐに来た。

ドーラはその手紙をかばんにつめて、歌のレッスンにやってきた。落ち着かない様子をしたドーラは、レッスンのあいまに手紙を出した。

シエラは目を見ひらいた。

「もう読んだ？」

ジャンネットにかくれて耳うちをした。

「ううん」

「どうして？ はやくどんなだか知りたくないの？」

「こわいのよ。もしも残念な手紙だったらと思うだけで、わたし封をきれないわ」

ジャンネットは、午後からメイトリアル教会にようじがあるとかで、昼まえにはピアノをとじた。

ふたりはそのままジョンの散歩に出た。

サウスヒルの森は、ひっそりとしていて、ひみつの話をするにはもってこいだった。

「そんなに思いつめることないわ！ きっとドーラにとって素敵なことが書いてあるのよ。」

だって、残念なことだったら、ルドヴィックは返事なんてよこさないんじゃない？」

シエラはりょうつでをジョンにひっぱられながら、笑顔でいった。「そうだといいのだけれど、でもやっぱりわたしこわいわ。これをあけてしまえば、わたしのすべてが終わってしまいそう。」

「そうだ！ ねえシエラ、あなたわたしのかわりに手紙を読んでくれない？」

「わたしが？」

シエラはびっくりして横をむいた。

「そうよ、もしもこれが残念な手紙だったら、それとなくくびをふって。その方が衝撃がすくなくっていいもの。じゃないとわたし、悲しみのあまり心臓が止まってしまっわ」

ドーラはせつない顔をして、胸のあたりをぎゅっとしぼった。

「ダメよ！ ルドヴィックはあなたに返事を書いたの、あなたが読まなくては意味がないわ。」

さあ、いま読んでおしまいなさい、もしもドーラの心臓が止まったら、そんなときはわたしが一命をとりとめてみせるわ」

ドーラはかた目をつむるようにして、ルドヴィックの手紙をひらいた。

はじめはおっかなびっくり読んでいたドーラも、しだいに大目をひらいて、すらすらと手紙を読みすすんだ。

「まあ！ 夢みたい！」

「なになに」

ドーラはもういちど手紙をひらいて、それを胸に押しあてた。

「ねえつてら、ねえ！」

ドーラは輝いた顔をシエラにむけた。

「彼、わたしに興味があるんですって！ まあうれしい！ ぜひまた手紙がほしいって、ここに書いてあるわ！ ここよ、ほらここ！」

シエラはそれをきいて、ドーラのりょうてをとって、飛び上がった。

おどろいた小鳥たちがこずえから飛び立った。

シエラの手からたづなが落ちて、ジョンが走った。

「わ！ こらジョン！ 待ちなさい、待ちなさいったら！」

シエラは犬を追いかけてひとり森の奥に消えた。

ひとりになったドーラは、ゆっくりときりかぶにすわって、これも日に手紙をひらいた。

森はふたたび静かになった。

だいぶたった頃、シエラは犬のたづなをしっかり腕にまいて、戻ってきた。

「あら？ ルイスじゃない」

ルイスは、きりかぶにすわったドーラから顔を返した。

「やあシエラ、ジョンとのかけっこはどうだった？」

「見てわからない？ わたしの勝ちよ」

そういつてシエラは、スカートについた土ぼこりをはたいた。

シエラ、ドーラ、ルイスの3人は、しめし合わせたように笑った。「いまドーラから手紙の話をきいたところだよ。すごいね、あのルドヴィック・スピードからいい返事がもらえたなんて、それこそ100人の娘たちのなかからえらばれたようなものだよ、エズメやジエシカがきいたら、あつとおどろくね。シエラはすぐ腕の恋のキューピットだよ」

「足の速いキューピットだわ」

シエラはジョンをなでながら、顔をあげた。

きりかぶに落ち着いていたドーラは、ルイスとシエラを見くらべて、ゆっくりと立ち上がった。

「それじゃあわたし、そろそろ帰るわね。シエラ？ ジョンの散歩はルイスとするのよ？」

「まあドーラ、あなたまだいいじゃない、せつかく良い日なのだから、みんなで楽しみましようよ」

「いいえ、わたし帰るわ、お邪魔しちゃいけないもの」

「？」

意味ありげな笑みをのこして、ドーラはひとり山をくだった。

「まあドーラったら急にどうしちゃったのかしら。まだまだ話したいことがあったのに」

ルイスはかしこそうなよこ顔をして、ドーラのうしろ姿を見おくった。

「きつとドーラは、このよろこびをひとりでじっくり味わいたいのだ」

「ぼくの早とちりだったようだね」

「早とちり？」

シエラはしゃがんで、ジョンの腹をなでた。

「シエラはルドヴィックに恋をしている、そうぼくは早とちりしたのさ」

「わたしがルドヴィックを？ まあ！」

シエラはびっくりして顔をあげた。

「さっきドーラの話を書いて、それが早とちりだとわかった」

「それはひどい早とちりだわ！ どうしてわたしがルドヴィックに恋をしなければならぬの？ あんな失礼なやつ、わたしはぜったいに好きにならないわ！」

「はじめにその言葉をきいていれば、あの子のぼくも早とちりしなかったんだけどね」

ルイスはグレーのひとみをおろして、いった。

「え？」

「もういいんだ、つまりはすべてぼくの早とちりだったんだからね。それからふたりは、静かな森の奥を歩いた。

シエラはジョンのたづなをふりながら、ストルナードのコンクールの話をした。

「へえ、ドーラは3位だったの？ さすがはガードナー先生の教え子といったところだね。シエラは？」

「わたしは予選落ち。ローズマリーって娘にもいわれたわ、きょう歌った少女たちのなかでいちばん下手だった」

「そうか。シエラは歌の方では、恋のキューピットのように、うまきはゆかないんだね」

「ええ、歌が下手クソなキューピット」

シエラは口をとがらせた。

「でも、この夏にはメイトリアル教会に入れるのだから、予選落ちでもいいわ」

「え？」

ルイスはびたりと足をとめた。

「あら、ルイスにいつてなかったかしら？ この夏からわたしたち、メイトリアル教会に入ることになったの。ジャネット先生がメイトリアル教会の先生を頼まれたから、わたしもドーラもそれに就いてゆくよ。でも先生ったら、わたしのことをまだまだメイトリアル教会には早いつて、おなげきになっているわ。」

「あら、どうしたのルイス？」
ひとりで歩いていることに気がついたシエラは、話をやめてふり返った。

「じゃあシエラは、もうじきここ、ラウスハットを去つていつてしまふのかい？」

ルイスはくらい顔をして、きいた。

「そうね、メイトリアル教会の聖歌隊に入れば、きっと教会での寮生活がはじまるわ。そうなつたら、そうそうラウスハットにもどつて来られないでしょうね」

「じゃあ、もうこんなふう気軽に会つて、話ができなくなつてしまふんだね」

ルイスは肩をおとして、ふたたび歩き出した。

「あら、いわれてみればそうね。ジョンの散歩だつて、もうできなくなつてしまふわ。なれ親しんだロード邸からも、出て行くことになるだろうし、そうなつたらジェニファーさん、きつとさみしがるわ」

シエラはたづなを胸にあてて、あれこれとこの先を案じた。

「シエラはみんなとの別れがつかくないの？ せつかく仲よくなれたのに、もうお別れさ」

「そりやつらいわ。だつて、ラウスハットの人たちはみんないい人たちばかりだもの。ジェニファーさんやサイラ、ホアキンおじさん、

マークやエズメ、ジェシカやロバート、それにルイスもね」

「も？　ぼくはおまけなの？」

ルイスはいたずららしく笑った。

「ちがうわ。ルイスはわたしにとって、ほんとうに良い友だちよ？　メイトリアル教会に行ったら、あなたの絵をあなただと思っ
てまいにち語りかけるわ」

サウスヒルの森は終わって、イーストスレッジタウンのはるか上
に出た。

ふたりはラウスハットの美しい大地を見て歩いた。

森があつて、川があつて、大きな牧場がいくつも見えた。

「そういえばルドヴィックの話だけど、彼に手紙を渡したの、シエ
ラなんだって？」

ルイスはさらさらと風に髪を吹かせて、ふり返った。

「そうよ」

ルイスはまた空を向いて、いった。

「もしかしたらルドヴィックは、君のことをドーラだと早とちりし
て、返事を書いたんじゃないかな」

シエラは風をうけながら、さらりと笑った。

「まさかあ」

おしゃべりなバレンタイン

ジャネットはピアノをとじて、いった。

「きょうのレッスンはここまで。さあさあ、ドーラはやく帰って宿題をやりな。シエラは、あんにちょっと話があるから、そのまま残りな」

シエラはふしぎそうな顔をして、ドーラの帰り支度をながめた。

「話つてなに、先生？」

ジャネットはため息をおとしてから、シエラにいった。

「あんに悪い知らせだよ」

「え？」

シエラはなにやらいやな予感がした。

「あたしがメイトリアル教会に呼ばれていった日のこと、シエラは覚えているかい？」

「ええ、3日まえのことだわ」

ルドヴィックから返事が来た日、ジャネットは教会にようじがあるとかでレッスンを早じまいした、そのことをシエラはいった。

「あたしはあの日、急きよメイトリアル教会から呼び出しをうけて、いそいで教会まで行ったのさ。なぜあたしが教会に呼ばれたと思うね、シエラ？」

「さあ」

シエラは一つも思いつかなかった。

「あんなのとき。あんなのことであたしは教会に呼び出されたのさ」

「わたし？」

シエラはイスから立ち上がった。

「そう。教会の歌の先生、メアリー・ヒルトン先生は、ストルナーの歌のコンクールのこと、あたしを呼んだのさ」

「！」

シエラのまゆはつり上がった。

「もうおわかりだね。ヒルトン先生は、あなたの予選落ちの話を知ってしまったのさ。」

「まずいことになったよ。ちよつと腕だめしにコンクールに出たつもりが、こんなところで足をひっぱることになるとは、思ってもみなかった」

「なぜ？ ヒルトン先生はなぜ遠い遠いストルナードのコンクールのことを知ってしまったの？」

とうぜんの疑問だった。

「バレンタイン・ウツドさ。コンクールであんたに罵声をあびせた、あのチヨコレート男さ。」

「あんちくしょうはわざわざメイトリアル教会にまでやって来て、余計なことをべらべらしゃべって帰ったのさ。ヒルトン先生は、ロタオール音楽大学の先生がいうことだからって、すべて鵜呑みに信じたんだよ」

「ジャネットの頭には、舌を出して笑っているバレンタインが浮かんだ。」

「じゃあわたし、どうなってしまうの？」

「どうもこうもないよ。ヒルトン先生は、ストルナードの歌のコンクールなどで予選おちする娘など、うちにふさわしくないと、こういったのさ」

「ジャネットはほおづえの顔を横にむけた。」

「先生、わたしよくわからないわ、ハッキリおっしゃって」

「シエラはやきもきして、ジャネットの服をひっぱった。」

「じゃあハッキリいうよ。あんたはメイトリアル教会に入れなくなっただよ」

「まあ！」

「シエラの頭の中はまっくらになって、すさまじいはずまが走った。」

「そりゃないわ先生！ だってわたし、もう聖歌隊に入れるものと

思つて、浮かれ気分になつていたのよ！ だのにこれじゃああんまりだわ！」

「ジャネットは耳をふさいだ。」

「わかつた、わかつた、あなたの気持ちはよくわかつているよ。あたしだつてあなたに教会入りを許してしまつたてまえ、決まりが悪かつたのさ。だからあたしは先生に、ずいぶん長いこと話をして、説得したさ。」

ところが大将、さいごはこうさ、ストルナードのコンクールで3位のドーラ・ブライスさんはぎりぎりよろしい、だけど予選さえ落ちるような娘はうちの教会にはいらないつて、はつきりいつたのさ」

「ジャネットは、ヒルトン先生のわからず屋なめがね顔を思い出して、しかめっ面をした。」

「だからシエラ、あなたはもうメイトリアル教会には入れないんだよ。あたしはドーラと一しょに教会へ行つて、教鞭をとるようになるからね、あなたにもうレッスンはつけられない。メイトリアル教会のことはきつぱりあきらめるんだね」

シエラは青い目をぎんぎんに燃やして、床をふみならした。

「冗談ではないわ！ わたしはそんなことで簡単にあきらめられないわ！ いいえ、あきらめませんとも！ コンクールの予選落ちが気に入らないのなら、わたしどこへでも飛んでいつて予選をとつぱするわ！ さあいますぐコンクールを出してちょうだい！」

「ジャネットは、燃えさかるシエラの闘志をよこ目に、くつくつと笑い、さいごは大笑いした。」

「あら、なにがおかしいの！」

「やれやれ、あなたのそのがむしゃらさを見てみると、あたしがバレンタインにいつてやつた『道楽』という2文字を思い出してしまつよ。あなたは確かに、あたしの道楽そのものさ」

「はあ？」

「いいんだよ、なんでもない。」

よし、あなたにそれだけ強い決意があるのなら、なんとかなるか

もしれないね、あたしに一つ考えがあるんだよ」

「ジャネットは、いかにも一つ考えがありそうな顔をして、立ち上がった。」

「考え？ まあ先生、どこへゆくのか？」

パミネのバルシア

「パミネの民は歌を愛した。

歌を愛する心は、歌をより美しく歌う娘に、最高の榮譽をさずけた。

それがパミネの光輝バルシアだった。

パミネのバルシアは、3年にいちどだけ、最高の歌姫にのみさずけられた。

パミネの宮殿には、パミネのバルシアになった歌姫が、美しい石像となつて、ならんだ。

その数102体、パミネのバルシアは、300年あまりの歴史をほこつた。

ちようどことしはパミネのバルシアの年にあたつた。

パミネの宮殿に、馬車が一だい、ひづめを鳴らして入つて来た。馬車から降りてきたのは、花のような衣装をまとつた、ローズマリー・ヨハンソンだった。

「先生、フィッチ先生、早く降りてきてちようだい、きつとあたしたちパミネにいちばん乗りだわ。見てよまだ誰の馬車もないわ！」朝の濃い霧の中に降りて、フィッチ夫人は高い宮殿を見あげた。

「きようこそあたし、ぜつたいにパミネのバルシアになるわ！3年も待つたのだから、こんどこそあたし、パミネの宮殿の美しい石像になるわ」

フィッチ夫人はやれやれといった顔をした。

「ローズマリー？ まああなた、ちよつと落ち着きなさい、そんな子供のようにしやぎ回つては、ロタオールを制した歌手としての威厳がないわ」

「威厳ですつて？ 威厳がなによ、すごい歌を歌えさえすれば、パミネの民も文句ないでしょう？」

あたしは3年まえ、ガードナー先生とここへ来て、ひどい屈辱を

味わったわ。その雪辱をきょう晴らすの。

まああのときのガードナー先生ときたら、あたしの歌の才能をろくすっぽお認めにならないで、ちっともあたしの歌いたいように、歌わせてくれなかったわ。きつと先生、あたしの歌の才能に嫉妬してらしたんだわ。あんたにはパミネは早い、そうおっしゃって、けつきよくつまらない選曲で、じみな歌を歌わさせられたわ。あたしそれがくやしくなって、フィッチ先生の家の門をたたいたのよ、先生はそのときのことをおぼえていて？」

「ええ、ええ、ローズマリーは泣きながら、わたしの家に飛び込んで来ましたね、でもローズマリー、ガードナー先生は、とてもすばらしい先生ですよ？ 3年まえ、あなたにパミネは早いとおっしゃったのも、ほんとうのことでしょうね」

ローズマリーはちよつと黙った。

そしてパミネの宮殿に入っていった。

つづいて馬車が2台、おなじように宮殿に入って来た。

バレンタインとミルドレッドの馬車だ。

ふたりは馬車を降りるなり、顔をあわせた。

「おや？ やけに早いじゃないかミルドレッド」

「ミルドレッド？」

めがねが光った。

「これはたいへん失礼、ミルドレッド・ホワイト先生、ご機嫌いかがかな？」

バレンタインの背中に、教え子のルビー・エンジェルが立った。

「あらあなたルビーじゃない？」

「は、はい、おはようございますホワイト先生」

ルビーは気まずい顔をして、ふかく頭をさげた。

「きょうはあなたが出るなんて、聞いていないわ」

「とつぜん呼ばれたものですから」

「そう」

ミルドレッドは無表情でいった。

「おいおいやめてくれよ。そんな言い方したら、ルビーがおびえるじゃないか」

バレンタインはルビーをかばって、ミルドレッドのまえに立った。ルビーは、わたしといっしょにパミネに出なさいというミルドレッドの誘いをことわっていたのだった。

「まあいいわ。こんかいはあのキャンベル・リアが修道院からもどって来たのだからね」

「キャンベル・リアだって？ 冗談はよせ！」

バレンタインはミルドレッドの馬車を見た。

「冗談ではないわ。彼女はみずからを悔いあらためて、もどってきたのよ？ さあキャンベル、はやく降りてらっしゃい」

馬車からおりてきたのは、黒髪が異様に長い、重苦しい雰囲気少女だった。

ルビーはさらにおびえて、いつぽ後ろにさがった。

「おひさしぶりですね、ウッド先生。わたくし、地獄の底から戻ってまいりましたわ」

バレンタインは、キャンベルの狂ったような目の色に、のどをつまらせた。

「ほら、この手首の傷も、すっかり良くなりましたわ。うふふふ。そういつて見せたひだり手首には、生々しい古傷がいくつも残っていた。」

「さ、キャンベル・リア。パミネのパルシアなんて、あなたにとつてなんでもない賞ね。はやく済ませて、あとはあなたの自由になさい」

「ええ、わたくしはこれから自由ですわ」

ミルドレッドとキャンベル・リアは、ただならぬ雰囲気を残して、宮殿のなかへと入っていった。

バレンタインはふたりの背中を見おくってから、いった。

「なあルビー、おまえはキャンベル・リアのことをどこまで知っている？」

「うわさだけは、知っています」

ルビー・エンジェルは、キャンベルの呪いを恐れるように、小さな声で答えた。

「うわさか。それがどんなうわさか知らないが、おそらくすべてはほんとうの話さ。」

ルビーはソフィ・シンクレリアを知っているか？

バレンタインはふところからチョコレートを取りだして、口の中になげた。

「ソフィ……。知っていますとも。メイトリアル教会のソフィ・シンクレリア。彼女がいま世界でいちばんの歌姫ですね」

「そうだ。そのソフィが光の歌姫だとすれば、キャンベル・リアは闇の歌姫だ。あいつはソフィほどの歌の才能をもちながら、闇の中で生きている」

「闇？」

ルビーは、むらさき色の目をあげた。

「キャンベル・リアに良心なんて、かけらもないんだ。修道院に入っつて、心を入れかえただとかなんとか、新聞に書いてあったが、じつさいあいつはなにをたくらんでいるかわからない。ルビーよ、気をつける。けっしてあいつに近づくんじゃないぞ」

そういつて二人は、朝の霧にかすむ宮殿の中へ入っていった。

そのちよつと離れたまる柱のかげに、見おぼえのあるふたつの顔が見えた。

「先生、ジャネット先生、わたしたちとんでもない場所に来てしまつていないかしら？」

シエラは下から、ジャネットの顔を見あげた。

「とんでもない場所だつて？ ああそうだよ、あんたはまったくとんでもない場所に来てしまつているんだよ。つまり場違いさ。パミネのバルシアをねらう奴らなんて、みんな化け物なんだよ。」

見たかい？ キャンベル・リアまで来ちゃったじゃないか。あれはほんとうに化け物さ。ソフィがぐうたらしている今日あつては、

キャンベルが世界でいちばんの歌姫かも知れないね。あのローズマリー・ヨハンソンだって、こんかいも苦しい戦いになるだろう。

そんなところに来て、あんたみたいなストルナードで予選さえ通れない下手くそな少女は、会場にだって入れやしない」

ジャネットは宮殿をにらみつけるように、大まじめでいった。

「まあ先生、それじゃあわたし何しにここまで来たのかしら？ 記念にパミネの宮殿を拝んで、神頼みに来たのかしら？」 記

「神頼みだなんてとんでもない！」

メイトリアル教会入りの話が白紙になって、あんたは絶対絶命なんだ。シエラはどうしてもメイトリアル教会に入らなければならぬのだろう？」

「そうよ」

「じゃあ、あたしの言う通りにするんだね……………」

あんたはパミネのバルシアに出るのさ」

「ええ！」

シエラは地球がひっくり返るほど驚いた。

ヴァルガンブ

パミネの宮殿は静かだった。

シエラは靴音を響かせながら、白い柱をぬけた。

歌姫たちの石像は、ひと気のない中庭に、ひっそりとならんでいた。

102体の歌姫は、どれも翼がはえて、ニケの彫像ウツクシみたいだった。300年まえのパミネの民は、歌姫たちを女神とあがめて、石を削った。

シエラは後ろ手にくんで、いまにも歌いだしそうな石像の、一たいを見てもわった。

とそこへ、同じように石像を見て歩く、ひとりの少女があった。

むらさき色の目をもつ、ルビー・エンジェルだった。

ルビーは、誰もいないと思って歩いていたところを、見たことのない少女に出会って、足をとめた。

シエラは歩いていって、ルビーを見た。

「こんにちは、わたしはシエラ、シエラ・クローウですわ。あなたもこの美しい歌姫たちを見に来たの？」

「ええ」

ルビーは小声で答えた。

「すてきよね、あなたもそう思わない？ この歌姫たちは、まるで神話みたい。もう何百年もまえに亡くなったひとたちだけど、そんな気がしないわ。きつといまも美しい歌を歌いつづけているのよ」

シエラはりょうてをくみあわせて、いった。

ルビーはなんとも答えなかった。

「わたしもいつか、こんな美しい石像につくっていたきたいものだわ。そうすれば、きつと永遠に歌いつづけられるような気がするもの。そして何百年もあとで、また誰かにそう思われたいわ、わたしもこんな石像になりたいって、こんどはわたしが歌姫を導くの」

シエラはうつとりと夢を見るように、いった。

ルビーは静かに口をひらいた。

「あなたもパミネのバルシアに出るの？」

シエラは急に暗い顔をした。

「ええ、そうなの。わたしパミネのバルシアに出なければならなくなったの。ほんとうはわたしなんか、こんなとんでもない歌の祭典に、顔すら出すのが恥ずかしいくらいなのに」

「恥ずかしい？ なぜ？」

ルビーはふしぎな顔をした。

「だってわたし、ストルナードの歌のコンクールで、予選にも落ちるほど歌が下手くそなんですもの」

「まあ！」

ルビーは大きく目をひらいた。

「歌が下手くそだなんて、あなた、師匠はどなた？」

「師匠？ ああ、ジャネット先生よ」

「ジャネット先生？ あ、ガードナー先生のことね。まあじゃああなたの先生は、もとローズマリーの先生じゃない？」

「そうらしいわ」

ルビーはだんだん、シエラが存在がふしぎに思えてきた。

「あなたシエラ・ク로우っていったわよね？ ちよっとくわしい話をきかせてくれない？」

ふたりは近くの台座にこしかけた。

そこでシエラはことのあらましを話した。

ルビーはむらさきの目をさげて、話をすべて聞いた。

「じゃああなた、メイトリアル教会に入るために、パミネのバルシアに出るのね？」

「ジャネット先生は、そうおっしゃったわ」

「メイトリアルといえば、ソフィ・シンクレリアのいるところね」

「あなたソフィをご存じなの？」

ひさびさにソフィの名をきいて、シエラはなんだかうれしくなっ

た。

「ご存じもなにも、みんな知っているわ。きっと彼女がいま、世界でいちばんの歌姫よ」

「まあ、ほんとう？ ではあなたは？」

ルビーは目をほそめた。

「わたしはローズマリーの下ね。こんかいはキャンベル・リアまで出てきちゃったから、パミネのバルシアなんて、わたしもう無理だわ」

「キャンベル・リア？ まあ、ぞくぞくと知らない名前が出てくるわね、キャンベル・リアって、どんなひと？」

ルビーは周囲を見てから、いった。

「怖い少女よ、ほんとうに怖い。みんな彼女におびえているわ。わたしの師匠のバレンタイン先生も、キャンベル・リアを見つけると、あわてて物かけにおかくなれるわ」

「まあ、あのバレンタイン・ウッド先生が？ なにがそんなに怖いの？ 顔が怖いのか？」

シエラはまじめな顔をして、きいた。

「顔？ 顔は、そうね、顔も怖いわ。きっと美人なのだろうけど、不気味なの。ひとの死を笑ったりするの、ほんとうに何を考えているかわからないわ。」

うわさでは、彼女の悪口をいった少女たちが、つきつぎにふしぎな死をとげているらしいの。ほかに、彼女とふつうに話をしていたら、急に発狂して、『殺してやる』っていわれた少女もいたらしいわ。とにかく、キャンベル・リアには近づかないほうが身のためだわ」

話をきいて、シエラはふかくうなづいた。

「ところであなた、きょうは何を歌うの？ 歌が下手くそっていうのだから、テーネ・テーネでも歌うの？」

ルビーはひざをのびしながら、気を変えて、いった。

「ヴァルガンプよ」

「ヴァルガンプ？ あらやだ、風が強くて、わたしの声が聞こえなかったかしら？ あなたきょうはなにを歌うの？」

ルビーはくすくす笑って、もういちどきいた。

「だから、ヴァルガンプよ」

シエラはもういちど答えた。

ルビーはちよつと黙った。

「あなた、シエラ・クロウっていったわよね？ それなんの冗談？ ヴァルガンプって、あなたどんな歌だか知っているの？」

「どんな歌って、ちよつと変わった歌ね」

ルビーは目をほそめた。

「ちよつと変わった歌ですって？ まさか、あなたほんとうにヴァルガンプを歌うつもり？ いいえ、あなたが歌えるはずはないわ。だって、そうでしょう？ あれはだれにも歌えない曲よ？」

「歌えない？ でもわたし、歌ったわ。ジャネット先生が歌えつていうから、歌ったの」

「うそよ！」

ルビーは強く、シエラを見た。

「いい？ ヴァルガンプって、いまではタブーな歌なの。それはそうよ、だって誰ひとりとしてこの曲を歌いこなせる少女がいないんだもの。ローズマリーもダメだったわ。むずかしすぎるのよ。過去にパミネのバルシアでこの曲に挑戦した少女がいたわ。でもとてもきけたものではなかったって話よ」

ジャネットは、シエラにそんなことを一つも教えなかった。ただ、つぎの課題曲だといって、譜面を見せた。それがヴァルガンプだった。

「ああ、わたし悪い夢でも見ているようだわ。こんな不幸な少女に会ってしまふなんて。」

シエラ・クロウといったわよね？ あなた、きつとガードナー先生に嫌われているのよ。でなかったら、どうしてそんな理不尽りふじんなしうちをするかしら。わたしだったら、泣いて先生のもとを去るわ。

いくら先生にヴァルガンプを歌えって押しつけられても、わたしはお断りよ！ パミネのバルシアで大恥をかくだけだもの！」

シエラはぼかんとしていた。

「ヴァルガンプを歌うことが、そんなにいけないことだったなんて、わたし知らなかったわ。それじゃあわたし、どうすればいいのかしら？」

ルビーはゆびを立てて、シエラにいった。

「悪いことはいわないわ、断りなさい。もしもガードナー先生がどうしても歌えというのなら、あなた先生をかえなさい。ガードナー先生はローズマリーを育てた優秀な先生だけれども、ロタオールで問題を起こしたっていう、悪いうわさもあるわ」

シエラは青い目をあげた。

「うわさなんて、あてにならないわ。ジャネット先生は良い先生よ？ あなたの忠告はありがたいけれど、わたしは先生にしたがうわだってどうせわたしなんか、あとがないのだから、パミネのバルシアで大恥をかこうが、なにしようが、わたしには失うものがないんだもの」

それをきいてルビーは、言葉がなかった。

「そう。なら、好きにするといいわ。あなたがそこまで先生を信じているのなら、わたしは邪魔はしないわ。でも、ヴァルガンプは無理よ。あんなの歌うものではないわ。のどをつぶしてしまっても知らない。」

もしもこれを歌える少女が世の中にいるとすれば、キャンベル・リアしかいないわ」

それをきいてシエラは、かばんのなかに手を入れた。

取り出したのは、きょうパミネの舞台に立つ歌手のリストだった。ルビーはハツとして、いっしょに歌手の名簿を目でおった。

「たいへん！」

そこにキャンベル・リアという名があり、下に、ヴァルガンプとあった。

「これはいち大事よ！ あなたキャンベル・リアと同じ曲を歌おう
としているの！ それもヴァルガンブ、ぜったいにやめなさい、や
めなさい、いますぐガードナー先生のところに行って、歌う曲をか
えてもらいなさい！」

シエラは、これはややこしいことになったと思った。

静かな舞台のうえで

ジャネットはひとり舞台にあがった。

彼女はむかし、パミネのバルシアで歌ったことがあった。

すさまじい声量せいりょうのもちぬしで、とうじのパミネを圧倒した。

ジャネット・ダグラス、その名はまたたく間に世界に知れわたった。

はくしゅかつさい喝采した会場、それがいまでは一人もいない。

「若かつたねえ。こわいものなんてなにもなかった。パミネのバルシアはあたしのもの、そう信じきっていたのさ」

ジャネットは遠い目をして、いった。

そのとき舞台すそから、聞き覚えのある声がした。

「これはこれはダグラス先生、まさかあなたをパミネの舞台で見かけるとは思わなかった」

タキシードを着たバレンティンだった。

「むかしのことを思い出していたって顔をしているな」

ジャネットは空席を見つめていた。

「ダグラス先生はそのむかし、パミネのバルシアにもっとも近い少女だった」

バレンティンははずけずけと舞台を歩いて、ピアノにすわった。

「先生は、いまでいうローズマリーのようなそんざいだった」

「あんたがまだ生まれていない頃の話だよ」

鼻で笑った。

「ジャネット・ダグラスの栄光と奇跡、図書館の古い新聞に、まだそんな記事が残っている。そしてとつぜんおこった悲劇」

「あんた」

ジャネットは強くふりかえった。

「ジャネット・ダグラスはまちがいなくパミネのバルシアのうつわをもっていた。ローズマリーを育てたのだって、ぐう然じゃあない、

ローズマリーはダグラス先生に出会わなければ、これほど歌の才能を開花しなかっただろう。いったい先生はどんなレッスンをしているのだから、おれもいちど受けてみたいもんだ」

バレンタインは横柄おうへいにりょう足をのばした。

「あたしにだつて教え子をえらぶ権利はあるさ、あんたはごめんだよ、あたしはひねくれたやつにはレッスンしないんだ」

「ずいぶん嫌われているようだ。おれがメイトリアル教会に行つて、ストルナードのことをしゃべったことが、そんなに気に入らなかつたかい？」

ジャネットは腰に手をあてた。

「あたりまえさ。あんたはどうしてそうあたしの邪魔ばかりするんだい。まったく、おかげであたしはこんなところまで来るはめになつたじゃないか」

バレンタインはパンフレットをひろいあげた。

「このパミネのパンフレットに、ダグラス先生のなまえがどこにもない、先生はきょう、パミネのパルシアに出るんだらう？ どういうわけだ」

「どうもこうもないよ、パミネのパルシアをぎりぎりで申し込んだのさ、もうパンフは刷り終わったあとだったよ」

バレンタインはタキシードのうちポケットから、一枚のチョコレートをとりました。

「あんたはどつからでもチョコを出してくるね」

「いるかい？」

「いらないよ」

そのとき舞台そでにうるさい足音がして、息を切らしたシエラがあがつて来た。

「まあ、こんなところにいなすつたわ！」

バレンタインは意外な顔をした。

「先生、ジャネット先生、わたしきょうヴァルガンブは歌わないわ。ちよつと都合わるいの、ほかの曲にかえてもらえないかしら！」

バレンタインはチョコを吹き出しそうになった。

ジャネットの顔色が変わった。

「シエラや、ちよつとあつちへいっといで、話はあとで聞くから
おいつめられたシエラは、とまらなかつた。

「ルビー・エンジェルがいいなすつたの、キャンベル・リアと同じ
ヴァルガンブを歌うと、あなたは彼女に殺されるって、わたし歌を
歌っただけで殺されるなんてごめんだわ」

「いいから！ あつちへお行き！」

バレンタインは思わずピアノから立ち上がった。

「おい小娘、ヴァルガンブがなんだって？ ちよつと話をきかせて
もらおうか」

ジャネットは、これはややこしいことになったと思った。

バレンタインは真剣な顔をして、ピアノをひいた。

その伴奏はあまりに不規則で、投げやりふきそくに弾いているようだった。
狂人が髪をかきみだして、ピアノにむかっている、そんな感じだ
つた。

「これがヴァルガンブだ」

バレンタインは鍵盤をたたきながら、いった。

「こんな恐ろしい曲は世界にふたつとない。まったく身の毛のよだ
つ曲だ。

だがなんて魅力のある曲か。

音と音に調和はない、しかし激しい雨のように、不協和音はおれ
の胸を打ちつけて、悲しみや怒りをよびさます」

さいごにバレンタインはみぎ手を落として、曲をひきおわった。

「作曲者であるロレンツォ・ヒツポは、短命で、こんな無理難題な

曲を残して、死んだ。

彼はけつきよく、じぶんの曲を歌える歌手に出会えなかった。とうぜんだ、こんな曲を歌うなんて、馬鹿げている。

まず譜面にブレスの位置がない、ブレスができない、歌手を殺す気か？ それに複雑な旋律なのに、伴奏がそれをしつこく邪魔をする、しつこく、しつこく、邪魔をし続ける。とうぜん歌い手は混乱する、不安になる、正しく歌っているのに、正しい気がしない、ふざけた話だ。どんな優秀な歌手だって、気色の悪い気分を味わう、はずかしめられる、さらにまだ大きな問題がたくさんある。

しかし、おれはこいつを歌わせたくって、なん人も優秀な教え子たちを泣かせた。シンシア、ベティ、レスリー、なんとかこいつを歌ってほしかった。このすさまじい伴奏に美しい歌声がのったとき、ヴァルガンブのほんとうの意味がわかりそうな気がして、おれは教え子たちを地獄に引きずり込んだ」

「かわいそうな話だね」

ジャネットは腰に手をあてた。

「そうだ、まったくかわいそうなことをした。おかげでおれの教え子たちはみんな逃げていったのさ。レスリーなんて、ノイローゼになって病院に入ってしまった。そして誰ひとりとしてヴァルガンブを歌えた少女はいなかった」

シエラの顔に汗が流れた。

「それをこんな歌の下手くそな小娘が歌えるというのか！ 信じられん、信じられるはずがない！」

バレンタインはシエラのむらぐらをつかむように、さげんだ。

「シエラや、あんたはヴァルガンブなんて歌ったことがあるかい？」

ジャネットは、シエラにだけわかるようにかた目をつむって、きいた。

「いいえ、わたしそんな曲ちつとも歌ったことないわ」

「じゃあさつきあんたがいったことは？」

シエラはちよつと考えて、いった。

「冗談だわ、わたし冗談をいつたの」

「そらごらんバレンタイン、あんたはこどもの冗談を真に受けたのさ。あんたのいうように、ヴァルガンブが歌える少女がこの世にいるはずがない、それもこんな歌の下手くそなシエラが逆立ちしたって歌えっこないよ」

バレンタインは、ジャネットとシエラの顔をこつこに見て、あごに手をあてた。

「きょうシエラが歌う曲は、やさしいテーネ・テーネさ。下手くそなシエラにはぴったりの曲だよ」

バレンタインは舌打ちをして、シエラを見た。

「冗談か。ふん、たちのわるい冗談だ。おい小娘、おまえがパミネのバルシアに出るなんて、100年はやいんだよ、あっちへ行っている」

シエラは大きく目をひらいて、舞台からおりて行った。

3

「キャンベル・リアを見たかい？」

シエラが立ち去ってから、ジャネットがいった。

「ああ、今朝さっそく会った。ずっと修道院でおとなしくしていたと思っていたのに、なんでまた急に出て来たんだ。おかげでルビーは、パミネのバルシアという希望を失っちまった。ローズマリーにしてもそうだろう、キャンベル・リアにかなうやつは、いまこの世界に一人もいない」

ジャネットはちよつと考えて、いった。

「ソフィ・シンクレリアがいるさ」

「ソフィ？」

バレンタインはピアノに足をくんだ。

「そういえば、ソフィはどうしているんだ、教会にこもって祈ってばかりで、ちっともおもて舞台に出て来ないじゃないか」

「まだふさぎこんでいるのさ」

「ジャネットは感慨かんがいぶかい顔をした。

「呪われた歌姫、ソフィ・シンクレリアか。おしいな、ほんとうにおいしい存在だ。

ソフィは難なく、ローズマリーを完敗させた、おれはその話を聞いて、わが耳をうたぐったよ。

どうすればあのこうまんちきで、才能あふれるローズマリーを感服させられるというんだ？」

「次元がちがうのさ。あたしら音楽家はすぐに天才だ、天才歌姫があらわれた、などと叫んでしまう、だけどほんとうの天才は、世界にひとりさ」

「それがソフィ・シンクレリアというのか？」

「そうだよ。でもまれに、おかしなこともあるもんで、いまは世界にふたりも歌の天才がいる、それがキャンベル・リアなんだよ」

ふたりはちよつと黙った。

「たしかにキャンベル・リアにかなうやつは、ソフィ・シンクレリアしかないようだな。

だが、教会にひきこもっている以上、話にならない。美しい花だつて、しみつたれた空き家に飾られていたら、だれも香りをほめてくれる人はいないだろう？」

「あんだローズマリーとおなじことをいうね」

「なに」

バレンタインは2枚目のチョコレートを取りだした。

「何まいチョコをもっているんだい」

「これでさいごだ」

バレンタインは、ポケットのうらじをつまんで見せた。

「まあとにかく、こんかいのパミネのバルシアは、キャンベル・リアに決まりさね。それもヴァルガンプを歌うというのだから、肝が

すわっているじゃないか、あの娘にブランクなんて関係ないのかね」
バレンタインの目は光った。

「いや、そこだ。そこにつけているスキがあるんだ。

いくらキャンベル・リアだって、ヴァルガンブを完璧には歌えない、あんな曲を歌える少女はいないんだからな。無理をしているのさ、キャンベル・リアは無理をしてヴァルガンブを歌んだ、減点は必ずある、だからルビーにも、ローズマリーにも、まだ勝機があるのさ」

「シエラにもね」

「なに」

「なんでもないよ」

ジャネットはちよつと笑った。

そのとき高窓からホールにかけて、強い日の光がさし込んだ。

むてっぼうが小鳥を殺す

宮殿の庭園は、まるで草原のようだった。

森がちよつとあつて、輝く湖もある。

ぼつり、ぼつりと馬にまたがって、乗馬を楽しむ人が見えた。

そんな中、シエラはこずえの下にひざを抱えていた。

「メイトリアル教会に入る話が、とんでもないことになってしまったわ」

顔をあげて、遠い湖をながめた。

「わたしはきつとこんなところにはいけないのよ。あのバレンタイン・ウッドという人もいつていたわ、わたしにパミネは100年はやいって。ほんとそうだわ」

近くの森の中から、身分の高そうな少女らが、馬にまたがってあらわれた。

「ああ、はやくわたしのラウスハットに帰りたいわ。ドーラの恋はどうなったのかしら？ ルイスはいまなにを描いているかしら？

サイラの編み物はできあがったかしら？」

そこでシエラは、ルドヴィックの顔がうかんだ。

あわてて頭をふった。

「ダメね、わたしほんとにまいつているわ。ソフィとの約束を果たすためにも、どうしてもメイトリアル教会に入らなければならぬの、それにはきょうを精いっぱい戦わなくてはならないわ。

たとえ相手がどんな怪物だとしてもね」

シエラはひざにあごをおいて、ちよつと草原をながめた。

そこで目がとまった。

「あら？」

宮殿からまっすぐこちらへ歩く一人の少女が見えた。

その少女は、黒髪くろがみが異様に長かった。

さらに黒のマントに身をつつんでいた。

シエラはハツとした。

「まさか！」

草原のうえを歩いて来る少女は、キャンベル・リアだった。

近くを3人の少女たちが通りがかった。少女たちはキャンベル・リアに道をゆずると、いつせいに逃げていった。

「たいへん！ あれはルビーがいつていた、キャンベル・リアにちがいないわ！ どうしましょう、こっちに来るわ！」

シエラは大いそぎでおしりをあげて、スカートについた草をはらった。

そして近くの森へ逃げこんだ。

『うわさでは、彼女の悪口をいった少女たちが、つきつぎにふしぎな死をとげているらしいの』

森はブナの木でいっぱいだった。

『これはいち大事よ！ あなたキャンベル・リアと同じ曲を歌おうとしているの！ ぜったいにやめなさい、やめなさい！』

シエラは木にぶつかりそうになりながら、ひっしに走った。

どんだん森の奥に入った。

そして木のうらに背中を押しつけて、かくれた。

シエラは肩で息をした。

「まさか、ここまで追っては来ないわよね？ それにしても、キャンベル・リアって、なんて恐ろしい目をしているのかしら」

息をととのえて、そつといま来た道をのぞいた。

しずかな森が見えた。

シエラはホッと胸をなで下ろした。

そしてふり返って、目をあげたとき、シエラは飛び上がった。

「わっ！」

目のまえにキャンベル・リアが立っていたのだった。

シエラはいきおい尻もちをついた。

「あら、なにをそんなに驚いているの？ まあすっかりおびえきった顔をして、痛かったでしょう？」

キャンベル・リアはふてきな笑みをうかべて、シエラを見おろした。

その目は残酷だった。

「いつまで尻もちをついているの？ さあ、おつかまりなさい」

キャンベル・リアはマントの中から手をさしのべた。

シエラはその手を見つめた。

「さあ！」

ゆびさきをふるえさせながら、シエラはその手をとった。

冷たい手だった。

手くびに大きな傷があった。

「わたくしが誰だか、おわかりね」

シエラはこくりとうなづいた。

「わたくしも、あなたのことを知っているわ、シエラ・クロウさん」

シエラは目を大きく見ひらいた。

どうしてキャンベル・リアがじぶんの名を知っているのか、ちょっとわからなかった。

「あなた、歌がとっても下手くそだそうね、ストルナードのコンク

ールで、予選さえ落ちるほど、下手くそだそうね。」

「あら？ どうしてそんなことを知っているのって、顔をしている

わ」

「

シエラは、そんな顔をしていた。

「わたくし、あなたのことなんでも知っているの、きょう、あなた

がヴァルガンブを歌おうとしていることも、知っているわ」

ぎくりとした。

恐ろしさのあまり、シエラは後じさって、木に背中をつけた。

「まあ、そんなにおどろかなくても、いいわ。うふふふ」

キャンベル・リアはひだり手に鳥かごを持っていた。なかで小鳥

がさわいだ。

「あなたとダグラス先生が、なにをたくらんでいるのか知らないけれど、やめておきなさい。ヴァルガンブはわたくしが歌うの、わた

くしがヴァルガンブをはじめて歌えた歌姫となつて、きょうパミネのバルシアになるの、そんな記念すべき日に、あなた余計なマネはしないでほしいの」

キャンベル・リアは鳥かごの小鳥を見ながら、いった。

「わたし、ヴァルガンブなんて歌えないわ」

シエラはかぶりをふった。

「いいえ、あなたはヴァルガンブを歌えるわ、わたくしをあざむこうなんて、100年はやいわ。」

わたくしはあなたに、ヴァルガンブを歌うなと忠告したのよ?」

キャンベル・リアの目に、笑みがなくなった。

シエラは気味が悪くなった。

ルビー・エンジェルが心からおびえ、バレンタイン・ウッドが逃げかくれするわけが、いまわかった。

「さあ、いますぐ誓いなさい、わたしはヴァルガンブを歌いませんと」

キャンベル・リアの黒髪は、怒りでしげんに広がるようだった。

「わ、わかつたわ。誓うわ。わたしきょう、ヴァルガンブを歌いません」

キャンベル・リアは呪いでもかけるように、シエラの目を見た。

「ぜったいに?」

「ぜったいに」

シエラはいま、キャンベル・リアのてのひらの中にある気がした。

「誓いをやぶつたら、あなたどうなるかわかり?」

そういつてキャンベル・リアは、鳥かごから小鳥をつかんで、とり出した。

小鳥はシエラの目のまえで、まばたきをくり返した。

「こつよ」

キャンベル・リアはほほ笑んだ。

その手にちからが入った。

小鳥はふくれるように苦しんだ。

「な、なにをするの！」

「うふふふ」

キャンベル・リアは心からうれしそうだった。

「やめてちょうだい！ そんなことをしたら、小鳥が！ 小鳥が！ シエラはびっくりして、あいてのうでにつかみかかった。

キャンベル・リアは背が高くて、シエラは小鳥に届かなかった。

「歌わないから、ぜったいに歌わないから、やめてちょうだいっ
ら！」

小鳥は、キャンベル・リアに高くつきあげられながら、のどをしぼって鳴いた。

「おわかり？」

「わかったわ！」

「ほんとうにおわかり？」

「ほんとうにわかったから！ 小鳥をはなしてちょうだい！」

キャンベル・リアは表情をなくして、むぞうさに小鳥を落とした。小鳥は草のうえに落ちて、かた方のつばさを広げた。

シエラは飛びかかるように、瀕死ひんじの小鳥をすくいあげた。

「あなたがいけないの、あなたがヴァルガンブなんて歌おうとするから、こうなるの。」

好奇心が猫を殺すって言葉があるけれど、あなたのばあい、むてつぽうが小鳥を殺してしまったわ。うふふふ」

シエラは涙をうかべて、小鳥を胸にあてた。

小鳥はかすかに息をした。

「その小鳥はあなたそのものよ」

キャンベル・リアは黒のマントをひるがえして、森のなかへ消えた。

パラメ・ドレイクの憂鬱

パミネの宮殿に、馬車が一だい、おくれて入ってきた。

馬車には、メイトリアル教会のしるしが見えた。

「まあ、ずいぶん遅れてしまったわ。マクラーレンおじさんときたら、3度も道をまちがえるのだもの、私はてっきり、パミネのパルシアに間に合わないものかと思っただわ」

あわただしく馬車をおりたのは、修道服すがたのメアリー・ヒルトン先生だった。

「さあパラメ、パラメ・ドレイクや。はやく受付をすませて、発声練習に入るわよ？ もう会場では、パミネのパルシアの予選がはじまっている頃だわ」

馬車のなかでは、パラメ・ドレイクが青い顔をして、すわっていた。

「せ、先生、待って、待ってください」

「なに？」

パラメのひざは、ふるえていた。

「あのう、あたし、どうしても出なければいけませんか？ ソフィが不在なのですから、こんかいのパミネのパルシアは、お見送りになったほうが懸命かと」

ヒルトン先生は、大きく目をひらいた。

「いいえ、そんなわけにはゆかないわ。メイトリアル教会から、パミネのパルシアに、だれも出ないとあつては、教会の威信いしんにかかわるわ。」

世界一の聖歌隊があるにもかかわらず、いまだかつてメイトリアル教会から、まだ誰もパミネのパルシアが出ていないのよ。これは不名誉なことだわ。せひともこんかいこそ、教会からパミネのパルシアを出さなければならぬわ」

パラメはまっすぐ前をむいたまま、

「で、ですが、あの、あたしなんかでは、パミネのプルシアはまだ早いと、思うのです」

「早い？ なにが早いというの？ あなたはわが聖歌隊のリーダーなのよ。それが早いだなんて」

パラメはびくつきながら、パミネのプルシアのパンフレットをひらいた。

そこにはローズマリー・ヨハンソン、ルビー・エンジェル、それからあの、キャンベル・リアの名があった。

「先生はあたしに、この化け物たちと肩をならべて歌えと、正気ですか？ あたし、メイトリアル教会の恥をさらしてしまいます」

「いまや教会の顔でもあるパラメ・ドレイクが、まさかパミネのプルシアを目のまえに、逃げ出したとあつては、それは教会の恥でしょうけど、ちゃんと歌いきれば、なにも問題はないわ。さあ大きく胸をはりなさい」

パラメは心のなかで、またまたソフィ・シンクレリアをのろった。『あの小娘め、なんでこんな大舞台を辞退したのよ！ おかげであたしにお声がかかってしまったじゃない！ おぼえておきなさい、こんど会ったらただじゃおかないわ！』

「さあモタモタしないで、早くしないとほんとうに受付におくれてしまうわ」

ヒルトン先生は、いやいやをやるパラメのうでをひっぱって、無理やりパミネの宮殿にむかっていった。

するとちょうど、宮殿の中から同じように少女のうでをひっぱった、婦人が出てきた。

「さあシエラ、逃げるんだよ、あんたはやっちまったのさ、ややこしいことになるまえに、さっさとズラかるってもんさ！」

少女のうでをひっぱって出て来たのは、ジャネット・ガードナーだった。

「まあ！ ガードナー先生ではありませんか！」

ヒルトン先生は意外な顔をした。

「あらヒルトン先生、ごきげんよう。
やっぱリメイトリアル教会からだれも出ないなんて、いかない
ようですね」

ジャネットはパラメの青い顔を見た。

「それよりもガードナー先生、あなたどうなすったんです？ そんなにお急ぎになって。パミネのパルシアはこれからですよ？」

ジャネットは腹のなかで、あんたのせいでこうなったんだよと舌うちをした。

「ちよつと事情がありましてね、お先に失礼しますよ。あたしたちはもう、用がすみましたのでね」

シエラはジャネットにかくれて、ヒルトン先生の顔をぬすみ見た。ヒルトン先生は、シエラになど興味がない様子で、

「まあそうですか、それは残念ですね。どうせならこのパラメ・ドレイクの歌声でもきいていきなすったら良かったのに。ねえパラメ」
パラメは緊張のあまり、放心にあった。

それをジャネットは鼻で笑うように、

「ええ、それはほんとうに残念、きつとこんかいのパミネのパルシアは見物だったでしょうに。ではお先に」

ジャネットはシエラをつれて、近くにあった馬車にのりこんだ。すると宮殿の中から、こんどは記者のような男たちが、カメラを手に出てきた。

ジャネットはすぐに馬車を出した。

馬車は宮殿を出て、パミネの街路樹に消えた。

「ふう、これであんたのパミネのパルシアの予選とつばはまちがいないね。審査員たちのあのおどろいた顔といたら、なかつたよ」

ジャネットは帽子をひざにおいて、肩の荷がおりた顔をした。

「おやあんた、なにをもっているんだい？」

シエラは胸のなかから、小鳥をとりだした。

「なんだい、それは？」

「わたしなの、この小鳥はわたしそのものなの」

小鳥はつばさを怪我して、うす目をあけていた。

「ひどいありさまじゃないか、小鳥はそうなっちゃあ、終わりだよ」
シエラは、パミネのバルシアの予選審査で、ヴァルガンプを歌った。

あれだけキャンベル・リアにおどされて、ヴァルガンプを歌いきったのには、わけがあった。

シエラはキャンベル・リアにおどされたあの後、すぐにジャネットに曲の変更をねだった。

ジャネットはいい顔をしなかった。

歌が下手くそなシエラが、パミネのバルシアの予選をとつぱするには、ヴァルガンプを歌う必要があった。

ほかの曲では落選確実だと、シエラはひとさしゆびを突きつけた。

それでもシエラは、キャンベル・リアのあの恐ろしい目を思い出して、ジャネットにすがった。

「あんたがどうして急にそんな怖じ気づいたことをいうのか知らないけど、ダメだよ。もしあんたがほんとうに曲を変えろというのなら、あたしはまっすぐサウスヒルに帰えるよ」

そのときシエラのふところから、かすかに小鳥の鳴き声が聞こえた。

瀕死の体でひっしにあえぐような、命の声だった。

『その小鳥はあなたそのものよ』

キャンベル・リアはふてきな笑みを浮かべた。

「わたしそのもの」

このときシエラは、この小鳥が死なないかぎり、じぶんも死なない気がしてきた。

じぶんはこの小鳥と同じ。痛めつけられても、ひっしに鳴こうとする、下手くそシエラ。

青い目が光った。

「ジャネット先生、あたしやっぱり、ヴァルガンブを歌うわ。わたしに失うものなんて、なにもないのだもの！」

ジャネットは腰に手をあてながら、シエラのあたまをひとなでした。

「なにを迷っていたかしらないが、それでこそ、あたしの道楽だよ」そしてシエラのヴァルガンブが、審査員の度肝を抜いたことは、いうまでもなかった。

厳しい3人の審査員は、一口も声を出さずに、会場をあとにしていった。

「しかしまあ、こんかいのパミネのバルシアは、キャンベル・リアにまちがいないね。通りすがりにちょっと発声練習をきいたけど、あたしは身の毛がよだつたよ。ローズマリーだって、あかこの手をひねるように、かたんに負けてしまうね。メイトリアル教会のパラメダかパラパラだか知らないけれど、かわいそうなもんさ、遠路はるばる教会の恥をさらしに来たのさ」

ジャネットはあくびをかみながら、馬車によっかかった。

シエラは小鳥をなでながら、流れてゆく窓に目をむけた。

馬車はパミネでいちばん大きな石橋に入った。

石橋のまん中に、ぽつんと少女が立っていた。

シエラの顔は青ざめた。

少女は黒いローブを身にまとっていた。

異様に長い黒髪が風になびいた。

石橋に立っていたのは、キャンベル・リアだった。

『うわさでは、彼女の悪口をいった少女たちが、つきつぎにふしぎな死をとげているらしいの』

馬車はしだいに、キャンベル・リアの横をとおりがかった。

『これはいち大事よ！ あなたキャンベル・リアと同じ曲を歌おうとしているの！ ぜったいにやめなさい、やめなさい！』

シエラはてのひらをにぎった。

『誓いをやぶったら、あなたどうなるかわかり？』

キャンベル・リアの黒髪は、怒りでしげんに広がるようだった。

『こつよ』

表情をなくして、むぞうさに小鳥を落とした。

馬車はなにごともなく、キャンベル・リアのまえを走った。

そのときキャンベル・リアは、絶世ぜっせいの笑顔をつかべて、シエラを見ている。

ヒルトン先生の心がわり

パミネのバルシアが終わって、数日がすぎた。

ジャネットは馬車を走らせて、メイトリアル教会に出かけて行った。

そしてヒルトン先生の部屋に入るなり、あいさつもそこそこにいった。

「ヒルトン先生、あなたはあたしの教え子が、ストルナードの予選に落ちたと聞いて、そんな少女はうちにはいらないと、おっしゃいましたね？」

ヒルトン先生はゆっくりとメガネをはずした。

「ええ。ストルナードの予選にさえ落ちる少女は、うちにはいません。」

いくらガードナーさんの教え子だって、歌の下手くそな少女が、名高きメイトリアル教会に入ってよいはずはありません」

ヒルトン先生はあいかかわらずだった。

「そうですね、そうですね」
ジャネットはもってきた新聞をなげた。

「その歌の下手くそな教え子が、パミネのバルシアの予選をとっぱしましたよ。ストルナードの予選に落ちた少女が、世界一のパミネのバルシアの予選をとっぱしたのです。これでもヒルトン先生は、うちの教え子が、メイトリアル教会にふさわしくないとおっしゃいますか？」

「なんですって」

ヒルトン先生はあわてて新聞をひらいた。

「よくごらんなさい、あたしの教え子は、シエラ・クロウというなまえで、新聞にのっていますよ」

新聞は一面をつかって、パミネのバルシアのもようを伝えていた。予選審査の結果の欄らんに、77人の少女たちの名があった。

すなわち77人もの少女らがパミネの予選をうけた。

そして見事に予選をとっぱしたのは、シエラ・クロウとロベルタ・アトウッドの2人だけだった。

「おお、神さま！」

ヒルトン先生はおどろきの声をあげた。

「ストルナードの予選に落ちた少女が、世界最高峰のパミネの予選を通ったですって？ こんなことって、ありえせんわ！」

「ありえないですって？ ヒルトン先生はこれが奇跡だと思いですか？ いいえ奇跡じゃございません。シエラはじぶんの歌声をつかって、パミネの審査員をうならせたんです。そしてみごとに予選をとっぱしたのです。」

こちらの聖歌隊で、はたして1人でも、パミネの予選をとっぱできる少女がいますでしょうかねえ」

ジャンネットは、パラメ・ドレイクの記事を見おろて、わざわざいった。

緊張しきったパラメは、パミネのパルシアの舞台で大恥をかいだ。そのもようが大きく書き出されていた。

これがメイトリアル教会の真のちから、などと新聞は教会をこき下ろしていた。

ヒルトン先生はかんねんしたように、新聞をとじた。

「ガードナー先生の教え子が、パミネの予選を通過したのは、大へんすばらしいことです。」

ですが、じきに棄権きけんなさっていますね、どういうことでしょうか？」
ジャンネットはゆっくりと新聞をうけとった。

「どうもこうもありませんよ、シエラのほんとうの目的は、パミネのパルシアではなく、ここメイトリアル教会に入ること。じぶんが教会にふさわしいことを証明するために、わざわざパミネの予選をとっぱしてみせたのです。あとはパミネのパルシアなんてどうにでもよろしかったんですよ」

ヒルトン先生はちよっと黙った。

「ざんねんでしたわ」

窓のけしきに目をやった。

「ガードナー先生もご存じのとおり、こんかいのパミネのバルシアは、グランプリが出なかつたんです。

もしもガードナー先生の教え子が、とちゅう棄権などしないで、ローズマリーやキャンベル・リアにまつこう立ち向かつていたのなら、もしかグランプリのゆくえはわからなかつたかもしれません」

新聞の大きな見出しに、『キャンベル・リア、ヴァルガンブに泣く』とかかれていた。

「きつとキャンベル・リアがヴァルガンブなんて不可能な歌にいだまないで、いつもの曲を歌っていたら、グランプリは彼女のものだったでしょう、ガードナーさんもそうお思いではありませんか？」

ジャンネットは、ちよつとふくざつな顔をした。

シエラはヴァルガンブをかんぺきに歌いきつた。

その後、王者キャンベル・リアは、ヴァルガンブのむずかしさにあつて、あつけなく落選した。

「ヒルトン先生、これでもあたしの教え子、シエラ・クロウは、メイトリアル教会に必要なとおっしゃいますか？」

ジャンネットは腕をくんで、きいた。

するとヒルトン先生は窓辺に立つて、背中で答えた。

「うちの教会をひっぱってきたソフィ・シンクレリアは、いまはあのとおりですし、パラメ・ドレイクもパミネのバルシアで大恥をさらしてしまつて、いまやメイトリアル教会の評判は地に落ちたも同然です。

ここは新しい歌手が必要なときなのかもしれませんね。

よろしい。ガードナーさんの教え子はとっても優秀なようですから、ぜひともうちの教会に入っていたいただきましょう。

私もバレンタイン・ウツド先生の話を書いて、ちよつとあなたを誤解してしまつたようですね」

ヒルトン先生はふり返つて、ちよつとさみしい笑顔を見せた。

ジャネットが馬車にのって、馬を出そうとすると、小道から見おぼえのある馬車がやってきた。

馬車は、バレンタイン・ウツドのものだった。

ジャネットは舌うちをして、馬を出した。

「おいおいおい！ おれだよおれ！」

バレンタインはジャネットを見のがさなかった。

ジャネットはまっすぐまえを向いたまま、馬をとめた。

「なんだい」

「なんだいはないだろう。せつかくこうして会ったんだ、ちょっとはいい顔をしろよ」

バレンタインは馬車から顔を出して、いった。

「いい顔？ あんたにいい顔をして、なんの得になるんだい、チョコレートがもらえるくらいじゃないか」

「ち、あいかわらず可愛くないねえ。チョコレートがほしいなら、ほしいといえはいいじゃないか」

「いらないよ」

教会から鐘の音が響いた。

ふたりは馬車をおりて、立ち話をはじめた。

「こんかいのパミネのパルシアは、さんざんだったな。キャンベル・リアが落選して、こんどこそルビーがいけると思ったら、グランプリはなしだ。あの審査員は、鼻毛だね！」

バレンタインは馬車にもたれて、毒をはいた。

「そうかい？ あたしは、よくぞつまらないグランプリを出さなかつたと、感心していたところさ。これで妥協たきようのグランプリを出したら、パミネのパルシアは地に落ちたさ」

「ヘン！ そりゃあんたはいいさ、じぶんの教え子がパミネの予選とつぱしたんだからな」

バレンタインはあつと思い出して、ジャネットにつめよった。

「そのことで一つ、どうしてもダグラス先生に聞きたいことがある、おれが聞いたうわさでは、先生の教え子は、パミネの予選でヴァル

ガンプを歌ったそうじゃないか。それはほんとうの話か!」

ジャネットはやれやれといった顔をした。

「あんたもバカだねえ、そんなうわさ、うそに決まってるじゃないか。」

あのキャンベル・リアでさえ歌えなかったヴァルガンプだよ、もはやだれも歌えやしない。このソフィ・シンクレリアだって、きつと歌えないだろうね」

それを聞いたバレンタインは、メイトリアル教会をふり返った。「ソフィ・シンクレリアでさえ、歌えない、か」

「あんたのヴァルガンプへのしゅうねんは、感心しないね。あんたはまさか、ソフィにヴァルガンプを歌わせようだなんて、思っていないだろうね」

バレンタインはりょうてをひろげた。

「そのまさかさ。いまやキャンベル・リアでさえ歌えないヴァルガンプだ。それをソフィ・シンクレリアが歌ったとしたら、どうなる?」

「ゆかいな話だね」

「おいおい、まじめに聞いてくれよ。つぎのパミネのバルシアは、おれとソフィ・シンクレリアでつかむのさ。伝説のヴァルガンプを歌ってな。きょうはその名案を伝えに、はるばるメイトリアル教会までやってきたのさ。もうおれにはソフィしかないんだ!」

「あんたはソフィ・シンクレリアまでつぶす気がい? まったく、あきれてるものも言えない。あたしや帰るよ」

ジャネットはうんざりして、馬車にのった。

そして馬を走らせるまえに、いった。

「一つだけ、あんたに忠告しておくよ。」

いいかい、ヴァルガンプなんて、ぜったいに手を出してはいけないよ。あれは歌ってはいけない。歌ってしまえば、思いもよらないわざわいがおきるからね」

ジャネットはしげんにのどを押さえた。

それをバレンタインは見のがさなかった。

ドーラ・ブライスの叫び

パミネの空は、雲ひとつなかった。

それがラウスハットに入ったとたん、ひどい雨になった。

雨は、夏のものとは思えない、冷たい雨だった。

シエラはロード邸から出られず、ひとり窓の雨をながめていた。けさ、ジャネットから手紙がとどいた。

それはシエラとドーラが、正式に、メイトリアル教会に入れるという知らせだった。

シエラはその手紙を読んで、安心した。

「ああ、ジャネット先生のレッスンも、残すところあとわずかとなったわ。わたしの歌はきつと、ちよつとは成長したにちがいないわ。でも先生は、まだまだといいなさるわ。あなたの歌声は、まあ音程はまずまずといったところだけれど、へんなガラつきがとれないって、うなつてなつたわ。いつもドーラににがい顔をされるのも、そのせいね。でもこればかりは、わたしどうしようもないわ。これでよく、パミネのパルシアの予選をとっぱしたものだわ」

そうため息をついて、シエラは雨に耳をすませた。

「メイトリアル教会かあ。もうすぐソフィとの約束を果たせるのね」

シエラは窓辺にほおづえをついて、ソフィの美しいよこ顔を思った。

「ソフィ……。やつとあなたに会える日が来るのね。でも、いまのわたしにいったいなにができるのかしら？　いつかの悪い夢のように、あなたの呪いを深く傷つけてしまうかもしれない。いいえ、ぜつたいにそんなことにはならないわ。わたしはソフィを立ちなおらせてさしあげるの」

雨は窓を、冷たく、冷たく流れていた。

あの夜、ソフィの悲劇の話をきいてしまつてから、シエラは強い

使命を感じるようになった。

『ソフィはじぶんがしてしまったことを知って、泣き叫んだらしいわ。じぶんが親友を追いつめ、メイトリアル教会から追い出してしまった、そう叫んでいつまでも泣いたそうよ』

ドローラは暗い天井に目をあげて、いった。

かけがえのない親友をうらぎって、殺してしまった、ソフィはそう思って、まいにち懺悔をしている。

『泣いても、しかたないの。だってそうでしょう？ 先生がたもいいなすったわ、ふこうな事故なんだって。だからソフィは、いつか立ち直らなければならぬのよ』

「そんなかんたんな話じゃない、あなたそんなふうにいえて？」

目に涙があふれた。

『それにしてもあなた、たいへんよく似ているわ』

いつかりース先生は、目にハンカチをあてた。

『あなたも、死んだ少女に似ているっていわれるのは、あまりいい気がしないと思うわ』

ミサの夜だった。

シエラはじぶんが、いたずらにジョセフィン・レタスに似ているはずがないと思った。

きつとじぶんには使命があつて、ジョセフィンに似ているのだ。

「シエラお嬢さん」

ホアキンじいさんの声がした。

シエラはあわてて涙をふいた。

「あらホアキンおじさん。わたしの部屋に来るなんて、めずらしいわね。あら？ どうなすったの雨にぬれて」

ホアキンはひどくうろたえていた。

そしてシエラに助けを求めるように、

「ブライスさんとお嬢さんが……ブライスさんとお嬢さんが……門のまえで傘もささずにぶぬれになって……ブライスさんとお嬢さんが」

シエラはそれをきいて、立ち上がった。

「ドローラが？ まあ！ どうしたの！」

「とにかくわしでは話にならないんでさあ」

シエラはホアキンを押しつけるようにして、部屋を飛び出した。

廊下をぬけて、階段を飛ぶと、ロード邸から雨の中を走った。

「シエラお嬢さん、傘を、傘を！」

ホアキンは傘をあげて、うしろに消えていった。

シエラは^{いしたみ}勢の雨をばしゃばしゃ蹴って、城門の柵まで来た。

「ドローラ！ ドローラ！」

柵のむこうに、ホアキンのいったとおりのドローラが、雨にぬれて立っていた。

ちからなくうつむいて、目に涙をうかべていた。

それがほおをつたう雨といっしょになって、大きく流れた。

「まあいけない！ あなた傘もささないで、風邪をひいてしまおうわ！」

シエラは大急ぎで城門の柵をひらいた。

そして雨の中で肩で息をするドローラに手をかけようとした、そのとき、

「さわらないで！」

ドローラは悲鳴にも似た声をあげた。

そして激しく、シエラから目をそらした。

シエラはあまりのことに、かたまってしまった。

「さわらないでよ」

ドローラはくちびるをかみしめて、いった。

雨はざあざあふっていた。

「ねえドローラ、せめて、せめてわけをいってちょうだい。わたしにはなにがなにやら、さっぱりだわ。いったいどうしたというの？

わたし、なにかあなたを怒らせるようなことでもしたの？」

ホアキンはいつあらわれたか、ふたりに傘をさして立っていた。

「あなたのせいじゃないって、わかっているわ。でも、悪いわたし

が、あなたを憎みなさいって、そういつているの」

「ドローラ」

ドローラはこぶしをにぎって、すさまじい殺気を放ったかと思うと、こんどはちからを失って、さめざめと泣きはじめた。

シエラはその肩を抱いてなくさめたかったが、手がでなかった。

「シエラを憎んでしまいたい、憎んで、憎んで、この悲しみ消してしまいたい、でも、でも、それもつらいの。あなたを憎んだって、なににもならないの」

「わたしを憎むって。ねえドローラ、それどういうこと？ わたしは

ドローラに憎まれることなんて、ひとつしていないわ」

それをきいたドローラは、雨をはじくように、くつと顔をあげた。

そして雨の中にこう叫んだ。

「ルドヴィックは！ ルドヴィックは！ さいしょからあなたを愛していたのよ！」

7通の手紙

サイラ・クーパーはふたりにココアをくばった。

そのときドーラのよこ顔を見た。

すこし落ち着いたようすのドーラは、ぬれた髪にタオルをかぶせていた。

部屋は雨で暗かった。

シエラはココアを手にとって、タオルで髪を乾かしながら、いった。

「ねえドーラ、さっきあなたがいったこと、なにかの間違いじゃないの？　だってルドヴィックとドーラは、もうだいたい仲がいいんでしょう？」

サイラは胸にトレイをあてて、そうそうに部屋をあとにした。

ドーラは顔さえあげなかった。

かわりにバッグから、手紙を取りだした。

手紙は7通あった。

「なに」

「これを読んでみるといいわ。ルドヴィックからの手紙よ」

ドーラは7通の手紙の中から、一つ手にとって、シエラに手渡した。

シエラはなかなか手紙をひらけなかった。

ひとの恋文を読むのを、ためらった。

「でも」

「いいから、はやく読んでしまっ」

シエラはしぶしぶ、ルドヴィックの手紙に目をとおした。

『親愛なるドーラ・ブライスへ

こんやもあなたのすずしい声、美しいよこ顔を想いながら、ひとり手紙を書いています。

10マイルも離れて住んでいる僕とあなたですが、あなたの手紙

を読み返すとき、ほとんどあなたがとなり座っているような、美しい気分になります。

ラウスハットは雨の日がつづいているようですね。どうぞお体には注意してください。もうあなたひとりの身ではないのですから。

あなたがもしも熱を出すことがあれば、僕は馬を走らせて、向かいます。寝ずに看病します。

もうじきメイトリアル教会にお入りになるのですね。そうすればいまのような恋文だけではなく、ちよくせつあなたにお目にかかれることでしょう。あそこには僕の知った人がたくさんいます。安心して歌に専念してください。

ああ、あなたに初めてお会いしたことを、僕はきのうのようにおぼえています。あなたの美しい青い目の輝きは、いつまでも僕の心を輝かせます。

ドーラ・ブライス、ああ、なんとなくるわしき名の少女が

近い将来、あなたが僕のためにほほ笑みかけてくださらんことを祈って。

あなたの卑しきしもべ、ルドヴィック・スピードより』

「そんな、まさか」

シエラの手から手紙がすべり落ちた。

『あなたの美しい青い目の輝き』

ルドヴィックの手紙には、確かにそう書いてあった。

シエラはがく然とした。

ドーラ・ブライスの目は、鳶色とびいろだった。

青い目をしているのは、シエラの方だった。

つまりルドヴィックは、シエラの顔をおもい浮かべて、ドーラにラブレターを書いていたのだった。

言葉にならなかった。

「わたしは、なんてぶざまなんでしょうね。なんて滑稽なんでしょうね。わたしはあなたのかわりに、せつせとルドヴィックにラブレターを書いていたんだもの。いいピエロだわ」

ドーラは肩をふるわせて、泣いた。
あまりに嗚咽がひどくて、お腹をかかえて笑っているようにも見え
た。

「わたしがいけないんだわ。わたしがルドヴィックに手紙を渡して
しまったから、いけなかつたんだわ。」

でもだって、ルドヴィックはつきり、わたしがシエラ・クロウ
だって、知っているものとはかり」

シエラはあたふた、いった。
ドーラはずっと泣いていた。

「まちがえた相手が、シエラじゃなかったら、わたしはそいつを心
底に憎んだわ。憎んで、憎んで、一生うらんだわ。もしかこの手で
殺していたかもしれない。」

でも、あなたじゃあ、シエラじゃあそれができないのよ。だって
あなたはいい人だもの。わたしのためにとでも尽くしてくれたわ。
だから、だからつらいの！」

雨は風によつて、窓にぶつかった。

「どうしてあなただったの？ なぜあなたじゃなきゃいけないかつた
の？ シエラはルドヴィックのなにを知っているというの？ ルド
ヴィックのために、あなた眠れない夜があつたともいうの！」

ドーラは髪の毛を乱して、あいての肩をふった。

シエラはいく度も、いく度も、ゆすぶられた。

「ごめんね」

「あやまらないで！ あやまつたら、もつとみじめになつてしまつ

！ とにかくこの7通の手紙は、あなたのものよ、さあ、うけとつ

て！ さあさあ！」

ドーラは手紙をすくい上げて、シエラにむかつて投げた。

7通の手紙は、思い思いに舞い上がった。

「さようなら」

ドーラはそういつて、雨の中に消えていった。

その窓にむかつて、シエラはつつぶした。

しずかなロード邸に、雨が響いた。
遠くで雷がした。

戸のすき間から、サイラの小さな声がした。

「シエラ、泣いているの？」

シエラは鼻をすすって、顔をあげた。

サイラは後ろ手に戸をしめて、部屋に入った。

「サイラ、わたしとんでもないことをしてしまったわ。ドーラの恋をぶちこわしたの。ああ、もうとりかえしがつかないわ」

シエラはボロボロと泣きながら、ことのあらましを話した。

「それ、ほんとうの話？」

サイラのまゆはあがった。

「だってそんな大それた話、信じろったって、信じられないわ」

「うそだったら、いいわ。なにもかも冗談だったら、どんなにいいでしょう。ルドヴィックははじめから誰をも愛さなかった、ドーラも、わたしも、それならよかったわ」

サイラはそんなシエラを見て、なんだか笑ってしまった。

「サイラ？」

「うふふふ、もしもそれがほんとうの話だったらって思ってたね。だってあたしも失恋してしまっただってことだもの。なんたってこのあたしは、ルドヴィック・スピードに片思い中なのだから」

シエラはハツとした。

「確かめてみるってものね、ほんにんに直接。泣くのはそれからよ」
サイラはやさしくシエラの頭をなでた。

ルドヴィック・スピードの驚き

雨が上がり、日がさした。

緑の草原がいつせいに輝いた。

そのうえをホアキンの馬車がゆっくり横ぎってゆく。

馬車の荷台には、お化粧をしたシエラが、だまってすわっていた。きのうの歌のレッスンに、ドーラの姿はなかった。

ドーラはいちどもレッスンを休んだことがなかった。

だからジャネットは、ひとつ空いたつくえを見おろして、いった。「どうしたんだろうね、風邪でもひいたのかね、シエラはなにか知っっているかい？」

「わたしが悪いの！」

シエラは叫んだ。

「びつくりしたね、なんだいまたあんたが悪いのかい」

「みんなわたしが悪いの。わたしがドーラの心を傷つけてしまったの」

「ケンカかい？」

ジャネットは大きくうでをくんだ。

シエラはそれ以上は言えなかった。

「まったく、こんな大事なときに、なんてことだよ、メイトリアー
ル教会はもう目前だよ？」

シエラは2冊のノートを取り出して、いった。

「わたし、きょうのレッスンの内容をノートにとって、帰りにドーラに渡すわ。だから先生は、怒らないで、すぐにもこのようになるわ」

「ふん、怒らないさ。でもたかがケンカの一つや二つで、レッスンに出てこないなんて、あきれたよ」

「先生、たかがケンカではないの。ドーラはいま、絶望のまっただ中にあるの。察してくださいさらない？」

ジャネットはピアノに向かいながら、

「どうせ失恋でもしたんだろうね」

レックスが終わって、シエラはブライス邸の門をたたいた。

すぐにドーラの母が顔を出した。

シエラはレックスのノートを渡しながら、ドーラの様子をうかがった。

「うちの娘ときたら、食事もろくにとらないで、ずっと部屋にとじこもっているわ。シエラ？ あなたなにか娘から聞いていない？」

シエラは切なそうに首をふった。

「ドーラ、ごめんね」

そしてきょう、シエラはホアキンの馬車にゆられて、ひとりラスタルに向かっていた。

つまりルドヴィックと話をつけるためだった。

あのとときとおなじ化粧に、美しい衣装で、いまにも涙があふれそうな顔を横にむけた。

「シエラお嬢さん」

ホアキンは馬をあやつりながら、パイプをくわえた。

「したを向いてはいけないよ。後ろを向いてはいけないよ。未来はいつでもまえからやって来るのだからね」

シエラはハツとして、くびをねじむけた。

ホアキンは楽しい鼻うたを歌っていた。

馬がいなくて、ラスタルに入った。

シエラはルドヴィックの麦屋をのぞいた。

ルドヴィックは、せっせと店の奥から麦ぶくろを運んでいた。

その横に、槍のように背が高いピーター・ペンハローが、レジに

腰をかけていた。

ふたりは話に夢中だった。

ピーターはときおり、大きく釣り竿をあげるそぶりを見せて、オーバーに笑った。

ルドヴィックは麦ぶくろを床において、手をはたきながらショールウィンドウに目をむけた。

その目がとまった。

「びっくりしたよ!」

ルドヴィックは足ばやに店から出た。

「きょう来るとは聞いてなかったけど、ん? どうしたんだい?

そんな悲しい顔をして、泣いていたのかいドーラ?」

店の中では、ピーターが背伸びをして、シエラを見ていた。

「泣いていますとも、ドーラはいまでも泣いているでしょう。つらくて、くるしくって、ああ、あなたの顔を見ると、わたしまで胸がくるしくなるわ」

シエラはぎゅっと胸をしぼった。

「なに? ぼくはなにか、きみを悲しませることをしただろうか?」

「まあとぼけて!」

シエラはルドヴィックの顔をにらみつけた。

けれどもすぐにしぼんだ。

「ごめんなさいね、あなたにはなにも罪はないですものね。きっとルドヴィックはこの上なく人が良いのでしょう。でも、いやみの一つでもいわずにはおれないわ」

ルドヴィックはピーターの強い視線を感じた。

「そうだ。いまからどこか散歩に出ないかい? こんな麦屋はちょっとしめたって、だれも困らないからね。きみもなにか大切な話がありそうだから」

「ええ、そうしましょう。あまり人には聞かれたくない話なんですから」

シエラは、窓にはりついているピーターを見て、小声でいった。

ラスタルの駅のうらに、大きな林があった。
モミの木の密林で、奥にすずかな沼が広がっていた。
ふたりは沼のほとりを歩いた。

「ここでよく釣りをやるんだ、しずかでね、糸をたらしたまま寝てしまつと、よく竿だけなくなっているんだ」

ルドヴィックは楽しそうに歩いた。

シエラは沼の光に顔を照らされながら、

「ああ、はやくあなたにほんとうのことを話してしまうわ。あなたわたしのことをドーラ・ブライスだと思つて？」

ルドヴィックは足をとめてふり返つた。

「あたりまえじゃないか。きみはドーラ・ブライス、手紙にだつてそう書いてあるじゃないか」

「ええ、そうね。でもわたしはドーラ・ブライスではないの。おわかり？」

シエラはルドヴィックのととのつた顔を見あげた。

「君はドーラじゃない？」

「そお、あなたはわたしを勘ちがいなすつたの。大きな勘ちがいをね」

シエラは沼にしゃがんで、真実を話した。

沼の魚は忘れた頃に水の音をたてた。

「なんてことだ！　じゃあ僕が出した手紙は……」

シエラは手さげから7通の手紙を取り出した。

「ええ、すべてはほんもののドーラ・ブライスに届いたわ。あなたがこの青い目のことを手紙に書いたから、まちがいがわかつたの。」

ドーラは悲しんだわ。いまも泣きふせているわ」

ルドヴィックは沼を強く見つめた。

沼には水草がしずんでいた。

ルドヴィックは小石をひろつて、沼の上になげた。

「なぜあるとき君は、ドーラ・ブライスと一しょに来なかつたんだい？　きみがドーラの手紙を渡してしまつたら、誰だつて君のこと

をドーラ・ブライスだと思ってしまっよ」

シエラは下をむいて、うなった。

「そうね、そう、わたしがいけなかったの、馬鹿だったわ。わたし恋のキューピットだなんていって、笑ってしまうわ。

でもあのときわたしは、ひどくあわててしまったんだもの、ドーラだってそうだわ。それに……」

「それに？」

ルドヴィックは沼から顔をあげた。

「それに、あなたはわたしのことを覚えているものとはかり思っていたのよ。でも覚えていなかった、あんなに強く足をふんづけたのにね」

「足を？」

シエラは立ち上がって、ルドヴィックの靴をふみつけるマネをした。

『僕はルドヴィック、ルドヴィック・スピード。君は、なんとってそんな汚いなりをしているんだい？』

ルドヴィックは、シエラのホコリをすりこませたような黒ずんだ髪を手にとった。

『おお、君の髪はまるでモップだね！ぐるりと地球を掃きまわった美しき色よ！』

ルドヴィックはいつ後ろに下がった。

「君は、君は、あのシエラ・クロウなのか？これは驚いた、驚かずにいられるか！ああ、なんてことだ！君はこんなに僕のそばにいたのか！」

密林からたくさんの野鳥が飛びたった。

ルドヴィックの恋心

「僕は君のことをずっと探していたんだ」

ルドヴィックは活き活きとして、いった。

シエラは目をまるくした。

「わたしを？」

「そう、君をだ。君の故郷がバーゲンダーツだと聞いて、僕はそこまで出かけた」

「まあ！ バーゲンダーツだなんて、あんな遠いところまで行ったの？ なぜわたしなんか探したの？ 足を踏んづけられたのがさうとうくやしくって？」

ルドヴィックは笑った。

「かもしれないね、僕の足をあんなに踏みつけたのは後にも先にも君がはじめてさ。」

ソフィが君のことを心配していたんだ。ソフィは君に会いたがっていた

「ソフィが？ わたしに？」

シエラはりょうてを組み合わせた。

「わたしはてつきりソフィに嫌われたものと思っていたのに」

ルドヴィックは意外な顔をした。

「嫌われただつて？」

「そう、1年まえ、わたしソフィに親友になってくださるようお願いしたのに、ソフィったら急にふきげんになって、親友になってくださらなかったの、だから」

ルドヴィックはああと得心した。

「シエラ、それはソフィに嫌われたんじゃないよ。君はソフィを知らないんだ。ソフィは誰とだつて親友にはならない。そういう決まりのようなものが彼女にはあるんだ。いつもまとわりついているリユーイッヒでさえ、心をひらくことはない。ソフィ・シンクレリ

アとはそういう女性なんだ。

だから君はなにも気にすることはない。むしろソフィが君に会いたがっているんだ、それはよろこぶべきことだろう?」

シエラはルドヴィックの笑顔を見あげて、ひと安心した。

そしてふたりは沼のほとりに立って、この1年、シエラがどうしてすごしたか、話した。

ルドヴィックはときに驚き、ときにうなずいて、シエラの冒険話を聞いた。

風が吹いて林が鳴った。

「そうか、君は、ずっとラウスハットにいたのか、あれからメイトリールにいちども顔を出さないから、もうバーゲンダーツに帰ったものとはかりぼくは思っていたのだけれど」

「バーゲンダーツへは戻らないわ。ジャネット先生がいいなすつたとおり、わたしはあきらめの悪い女なの」

「どうやらそのようだね」

ふたりは笑った。

気持ちよく笑ったあとで、シエラは、急にドーラの泣き顔を思い出して、口をおおった。

「いけない。わたしはドーラを絶望のどん底につき落としした罪人なの、だのにこんな明るい顔をしてはならなかったわ」

「そうさ。君は罪ぶかい娘さ、けれどもぼくの恋心をうばった美しい娘さ」

シエラは悪い冗談にあつて、ちよつと怒ったふうにルドヴィックを見あげた。

まじめな顔があつた。

シエラは目をおよがせて、話題を変えた。

「あの、あのねえ、ソフィには、このこと黙っていてくださらない?」

「え、なぜ? 君はソフィに会いたくないのかい?」

「会いたいわ。今すぐにもね」

「だったら」

シエラは沼にしずんだ水草を見た。

「約束があるの」

『いいわ。シエラはぜったいにここへは入れっこないもの。それでもあなたがもし、世界で名高いメイトリアル教会の聖歌隊に入れたというのなら、わたしはよろこんであなたと親友になるわ。これはおたがい、根くらべというところね』

ソフィは、ローソクの火がもれる教会に向かって、背中をむけた。シエラはぱつと目をあげて、

「ソフィをびつくりさせたいの。そうね、ふたりの再会は、わたしがメイトリアル教会の修道服を着て、会いたいものだわ」

「そうか、シエラはこの夏から教会に入るんだったね。ああ、君はほんとうにたくましい。いちど断られたメイトリアル教会に入るなんて、ぼくはそんな少女は聞いたことがない。まだ14歳だよ
ね？」

それに君はなんてキレイになったんだ、ピーターなんて君の美しさを見て、ひどくぼくをうらやんでいたくらいだよ」

「まあキレイだなんて、それはサイラがぬったお化粧のせいよ。これが泥だらけになってみなさい、あなたはわたしのことまたモツプ頭だなんて笑うわ」

シエラは顔をそむけて、いった。

「そうだね、ぼくはまた君のことをからかうだろうね、だって君ともっと仲良くなりたいと心から願うだろうからね」

そういつてルドヴィックはシエラの手をとった。

シエラはハツとして、手をうしろにひっこめた。

「まあ！ だいぶ長いこと話してしまっただわ。きつとホアキンが待ちくたびれていることでしょう、わたし帰るわね、ではルドヴィック、ごきげんよう」

シエラはスカートの汚れを払って、沼のほとりをいそいだ。

「シエラ！ 手紙を書いてもいいかい？」

ルドヴィックはうしろから大声を出した。

シエラはいちどふり返って、いった。

「もちろんよ！ ちゃんとあなたの言葉で、ドーラ・ブライスをなぐさめてあげるのよ！」

あやしい影

ルドヴィック・スピードは麦屋にもどった。

店をあげながら、エプロンをかけた。

午後になって、麦をもとめる客は、ほとんどなかった。

ルドヴィックはレジにすわって、さつきシエラに会ったことを反芻^{すう}した。

じぶんがドーラ・ブライスと思って恋をした相手が、あのモツプ頭のシエラ・クロウだった。

これにはルドヴィックも驚いた。

しかしもつともといえば、もつともな話だった。

ルドヴィックは1年まえ、シエラをおちよくって、足をふまれて以来、彼女が気になっていた。

野花をたずさえて、教会までシエラにあやまりに行ったのも、その一つだった。

ソフィは意外な顔をした。

それはルドヴィックにとって、どんな感情からすることなのか、彼自身わからなかった。

ただ、シエラ・クロウのような独創的なタイプの少女は、このラスタルにも、メイトリアル教会にも、どこにもいなかった。

とつぜん極彩色ゆたかな鳥のいち羽が、彼の目さきを横切って、森に消えた感じだった。

ルドヴィックはいつまでもその美しい変わった鳥のゆくえに、心さそわれていた。

その少女が知らずに恋した相手と同一の少女だった。

もつともといえば、もつともな話だった。

彼はここに強い運命を感じた。

ルドヴィックはさつそく、紙とペンをとりだした。

そのとき、リユーイツヒ・ポールターが店にやって来た。

とつぜんうるさいひばりが舞い込んだようなものだった。

「まあルドヴィック、ごきげんいかが？ さつきも来たのだけれど、お店がしまっていたから、どうしたのかしらって、心配したわ」

リユーイツヒは修道服すがたで、ごうかに髪を結っていた。

ルドヴィックは紙とペンをかくした。

「また教会を抜け出して来たの？」

「あら人聞きの悪い、ちゃんと用事があって、ラスタルに来たのよ？」

リユーイツヒは、ルドヴィックに会う以外はラスタルに用事などなかった。

たまに客があつて、麦を売ったが、ルドヴィックの相手はほとんどリユーイツヒ一人だった。

「そういえば」とルドヴィックははじめて自ら口をきいた。

「そういえばこの夏、メイトリアル教会に新しい人が入るって、きいた？」

リユーイツヒは大きな目をした。

「知らないわ。それ、誰から聞いたの？」

「いや、ちよつとうわさを耳にしたものでね、そうか、リユーイツヒも知らないのか」

「ねえねえ、誰が入るの？ 名前は？ どの人？ 誰から聞いたの？」

野次馬らしいリユーイツヒの態度を見て、ルドヴィックはそれ以上を語らなかつた。

それから間もなくして、店のドアがひらいた。

リユーイツヒは舌うちをやるように、入って来た客を見た。

その顔が引きつった。

麦屋に入つて来たのは、リユーイツヒと同じくらいの歳の少女だった。

黒髪が異様に長く、黒いマントを合わせていた。

キャンベル・リアだった。

『うわさでは、彼女の悪口をいった少女たちが、つきつきにふしぎな死をとげているらしいの。キャンベル・リアには近づかないほうが身のためだわ』

こんなうわさはリユーイツヒが知らないはずがなかった。

『なんで！ キャンベル・リアがなんでこんなところへ！』

リユーイツヒはあわててあさつての方を向いた。

キャンベル・リアに顔を覚えられてはならなかった。

「やあ、いらっしやい」

ルドヴィックはなんの気もなく声をかけた。

彼はキャンベル・リアなど知らなかった。

キャンベル・リアがどれほど冷血な女かを知らなかった。

「見ない顔だね、遠くから来たの？」

「うふふふ、そうね、だいぶ遠くから参りましたわ」

キャンベル・リアはふてきに笑った。

リユーイツヒは背中を見せて、しだいしだいに遠ざかった。

「あら？ そのあなた、その修道服」

キャンベル・リアは黒髪のスき間から、リユーイツヒを目でおっ

た。

リユーイツヒはぎくりとした。

「その修道服は、なんと教会のものだったかしらねえ」

「あ、この修道服ですか？ これはしがない教会のもので、有名な聖歌隊などない、しがない教会の修道服です」

背中が答えた。

「そう、ならいいわ。わたくしはてつきり、パミネのパルシアで大恥をかいた、どこかの教会のものかと思ってみたのだけれども。うふふふ、まあいいわ、あなた、席をはずしてくださいさる？ わたくし、この方にお話があるの」

リユーイツヒはくちびるをかねで、店を飛び出して行った。

そのやりとりをルドヴィックは見ていた。

「あなた、ルドヴィック・スピードさんね？」

ふたりきりになると、キャンベル・リアはいった。

「ぼくを知っているのかい？」

「ええ、わたくしはなんでも知っているわ。いまいたリユーイツヒ・ポールターのことね、うふふふ」

ルドヴィックはふしぎな顔をして、キャンベル・リアを見た。

キャンベル・リアはあやしい美しさがあつた。

世界一の歌姫という威厳とオーラがあつた。

その黒い瞳を見ているうちに、ルドヴィックはへんな気分になりそつだつた。

「あなた、シエラ・クrouって少女をご存じ？」

ルドヴィックは知らない少女から親しい名を聞いて、ちよつと気が明るくなった。

「シエラかい？ もちろん知っているさ、ほんのさつき会つたばかりだよ。君は、シエラの友達かなにかかい？」

キャンベル・リアは鳥かごをもっていた。

「ええ、わたくしシエラ・クrouのお友達ですわ。これから彼女に会いにゆく途中だけれど、なにかお渡ししたいものでもあれば、おあずかりしますわ」

キャンベル・リアはゆたかに笑つた。

「そうか、君はシエラの友達か、そつだな、じゃあシエラに手紙を渡してほしい。頼めるかい？」

「ええ、よろこんで」

「じゃあちよつと待っていてくれるかい、いまざつと書いてしまつから」

ルドヴィックはこれはいい機会だと、さつそく店の奥に消えた。

「あなたがいけないの、あなたがヴァルガンブなんて歌うから、あなたがわたくしとの約束を破るから、うふふふ」

キャンベル・リアはてのひらに麦をすくいながら、絶世の笑みを浮かべた。

幽霊さがし

「幽霊？」

ルイス・ハンターはまゆをよせた。

「ほんとうよ！ ホースウエストの山小屋に幽霊が出たの！」

ジェシカは身ぶるいを一つして、いった。

「君が見たの？」

「あたし？ ううん、イーストスレッジタウンの子どもたちが見たのよ、あの窓のところの白い少女の幽霊が立っていたらしいの」

ルイスとシエラは同時にふり返った。

山小屋は夕やみに沈んでいた。

ひどく気味の悪いけしきだった。

山小屋は廃墟。

屋根も壁も柱もくさって、やぶれたカーテンが窓にゆれていた。そこにゆうべ、幽霊が立っていたとジェシカは言うのだった。

「見まちがいじゃないの？」

ルイスはシエラの顔を見た。

シエラはなんとも答えなかった。

マークはいらいらして、いった。

「見まちがいじゃないぜルイス。いまやあの山小屋の幽霊話はゆうめいなんだ。じっさいに山小屋に入って、見たやつもいるんだ。なんでも黒い髪を風に吹かせて、すすけた白いワンピースを着た、少女の幽霊らしいぜ」

「おおいやだ！ 具体的にいわないでよマーク！ あたし幽霊が苦手なのよもう！」

ジェシカは大きく耳をふさいだ。

「とにかく、あの山小屋に幽霊のうわさがあるってのはほんとうみただね」

ルイスはつとめて冷静にいった。

「それで？」

「それでだとルイス？ まったくおまえはのんきだぜ。これからおれたちがやることは一つだ、幽霊の正体をつきとめること！ 幽霊つてのがどんななのか、とっつかまえてやるのさ」

マークはふとい腕をまくって、いった。

となりのエズメも腕をくんだ。

「そうね、山小屋に幽霊がいるのかわからないのか、ここらではつきりさせましようよ。もっともこれだけの人数がいれば、幽霊が出たって平気よ」

「ちよつと待つて、なぜぼくらがそこまでしなくてはならないのさ。幽霊が出るというのなら、ぼくらはあの山小屋に近づかなければ良いだけのことだろう？ さわらぬ神に祟りなしてやつさ」

ルイスはあわてて、マークとエズメのまえに立った。

「おや？ もしかして、ルイス、おまえ幽霊がかわいいのか？」

マークはニタニタして、エズメを見た。

「な、なんてことをいうんだ！」

ルイスはちらりとシエラを見た。

「ぼくは幽霊がかわいいのこわくないの話をしているんじゃない、なんでぼくらがわざわざ幽霊さがしをしなくてはならないか、ふに落ちないっていつているのさ！」

「ふに落ちない？ そうよね、ルイスは幽霊がかわいいのだから、わざわざそんなこわい思いはしたくないものね、ルイス坊ちゃん」

エズメはてがら顔をして、ルイスの鼻をゆびではじいた。

「ふん、これじゃちがあかないね。」

「じゃあこうしよう、幽霊さがしをするかしないか、多数決できめよう」

「また多数決か！」

マークはこぶしを叩いた。

「幽霊さがしをしたい人は手をあげて」

マークとエズメはすんなり手をあげた。

すこし遅れてシエラが手をあげた。

「シエラ！」

ジエシカはびっくりして、シエラにすがった。

「いい機会だと思わない？ 幽霊さがしやりましょう？ じつはわたしも、犬のさんぽをしていて、あの窓から少女の幽霊を見たの、つい気になっていたところよ」

「なに、シエラも幽霊を見ていたのか。それは話が早い、どうだルイス、3対2で幽霊さがしに決まりだな」

マークはシエラの肩をだいて、勝ちほこった。

ルイスはうらぎられたような顔をして、シエラを見た。

シエラはいきいきとした顔をして、山小屋を見あげていた。

これからとんでもない事件に巻き込まれるとは知らずに。

2

シエラは、ジエニファー老婦にだまって家を出た。

人の目をぬすんで、窓から外に出たとき、シエラはスリリングな気分をあじわった。

夜の小道をいそぐなど、いけない興奮があった。

「まあルイス、わたし逃亡者のようよ？」

ルイスは、みんなよりも早くシエラと落ち合った。

集合場所はホースウエストの山のうえだった。

「シエラがそんなゆうかな女性だとは思わなかったね。幽霊がこわくないのかい？」

「幽霊？ こわいわ」

ポンと答えた。

「じゃあ、どうして」

ルイスはシエラの小走りについていった。

「もしあの山小屋に幽霊というものがいたら、それはきつとこわいわ。でも幽霊じゃないかもしれないじゃない？」

「それは、そうだけどね。だけど幽霊じゃないとしたら？」

「それをこれから確かめるのよ」

シエラはなれた足どりで山みちに入った。

暗い森のすき間からたくさんの星が見えた。

ルイスは夜の森のトンネルを走って、シエラの背中を追いながら、このまましばらく二人きりになればと思った。

シエラをひとりじめにしたいと思った。

そう思っても口に出す勇気がなかった。

そのうちにふたりはみんなと合流した。

ルイスはこのとき、みんながじゃまものに思えた。

「おうルイス、逃げないでちゃんと来たな」

マークは大きく腕をくんで待っていた。

ほかにエズメ、それにしがみついてジェシカの姿もあった。

その向こうにまつ暗な山小屋があった。

幽霊が出てもおかしくなくらい、恐ろしいけしきだった。

「ねえ、ジェシカはどうするの？ このぶんじゃあ、中に入るのは無理ね」

エズメはじぶんにしがみついたジェシカを見おろした。

「ち、しょうがねえな。ジェシカは外でお留守番とするか」

「ひとりはいや」

ジェシカはエズメの服をしぼった。

エズメは困った顔をして、みんなを見わたした。

「ざんねんだけど、あたしもお留守番ね」

結局、ジェシカとエズメが外で待ち、マーク、シエラ、ルイスの3人が山小屋に入って、幽霊をさがすことになった。

先頭をきつたのは、やはりマークだった。

つぎに不安そうなるルイス、さいごがなにくわぬ顔のシエラだった。入口のドアはくさって、ななめに外れていた。

それを手でよけるように、3人は山小屋に入った。

「この家、いまにもくずれ落ちそうだぜ」

山小屋に入ると、目の前が急にまっ暗になった。もって来たランプの灯をともした。

テーブルやイスが廊下に散乱して、山小屋は荒れほうだいだった。「気をつける、このさき床がぬけ落ちていゑるぞ」

マークはランプを方々に向けて、じっくり家の奥の方へとすすんだ。

誰かのツバをのみこむ音が聞こえた。

ぴたん、ぴたんとしずくのたれる音が聞こえた。

息がつまるような沈黙があつた。

「おいルイス、黙ってないで、なにかしゃべれよ」

「う、うん、わかつてる。ひどい荒れようだね。だれかが中に入つて荒らしたんだね。おっと、柱がたおれている、あたま気をつけて」

山小屋のいちばん奥は台所だった。

ぜんぶ床が抜けおちて、なぜかベッドが落ちていた。

「幽霊なんて、いないぜ」

「うん、いないようだね」

「おいシエラ、おまえなにか見たか？」

マークはランプの光を動かした。

「おいシエラ、答えろよ」

ランプの光は、ルイスしか照らさなかつた。

「シエラ？ あれシエラ？」

ルイスはマークからランプをうばい、くまなく周囲を照らした。けれどもランプの光に浮かぶものは、廃虚ばかりだった。

「シエラ！ シエラ！ どこにいるシエラ！」

マークは大声をはり上げた。

どこにも返事がなかつた。

「シエラが消えた？ おいルイス、シエラはいつまでおまえのうしろにいた？」

「そんなのわからないよ、なんたってこの暗さだからね。確かに山小屋に入ったところまでは覚えているよ」
いやな汗が出た。

と、ふたりのうしろからゴトリと物音がした。

「シエラ？」

ルイスは音のした方へランプを向けた。

そこに黒い髪がひろがった少女が、白いボロボロのワンピースをゆらして、浮かんでいた。

それはいかにも幽霊らしかった。

「でででで、出たあ！」

マークとルイスは、ころんだり、起きあがったりしながら、ドタドタと山小屋から逃げに行った。

シエラのゆくえ

「いま、なにか聞こえなかった？」

ジェシカは、エズメの背中から顔をだした。

「ええ？ あたしにはなにも。風じゃない？」

山小屋は闇に浮かんでいた。

枯れた木が、夜のかげに、きしよく悪くなびいた。

「ううん。確かに人の声、マークの声だったような」

「マーク？ じゃあ、中で何かあったのかも」

ふたりが話あっていると、山小屋のドアがいきおいよくあいた。

ジェシカは口をおおって叫んだ。

ルイスとマークは、なにかに追われるように、外へのがれてきた。

「ルイス！ どうしたの！」

エズメは、後ろをふりかえり、ふりかえりするルイスをつかまえて、きいた。

「出たんだ！」

「なにが？」

「幽霊だよ幽霊！ うわさどおりの黒い髪をした、少女の幽霊だよ！」

ジェシカは頭をかかえて、また叫んだ。

「シエラは？ シエラはどこ？」

エズメは、山小屋からふたりしか出て来ないので、つぎにマークをつかまえて、きいた。

「わからない、シエラが消えたんだ、大声で呼んだけど、返事もなかった。おいエズメ、おれたちが山小屋に入ってから、シエラは出て来なかったか？」

こんどはマークがエズメの肩をゆすった。

「出て来ないわよ、あたしたちずっとここで待っていたのだから！ たいへん、じゃあきつとシエラは幽霊にさらわれたんだわ！」

ジェシカはずっと悲鳴をあげていた。

「とにかくぼくらは手におえない、イーストスレッジタウンにもどって、エズメのお父さんや、マークのおやじさんに、助けをもとめよう！」

こうして4人は、夜のイーストスレッジタウンへ走っていった。娘の話をきいた、エズメのお父さんは、急いでうわぎを着た。

「このおてんば娘め！　なんてことをしてくれたんだ！」

エズメのお父さんは、町の男たちをあつめて、山小屋に向かった。マークのおやじさんも、おなじように息子を叱りながら、山をのぼって来た。

そうして山小屋の中へ、たくさんの男たちが入って行った。

もちろんマークも、ルイスも、いっしょにシエラ探しにあたった。恐ろしい山小屋は、あちこちに明かりがたかれ、一夜にしてにぎやかになった。

もとより、中で遊ぶ子どもが出たり、幽霊の悪いうわさが立ったというので、町の話し合いで山小屋の取り壊しが決まったところだった。

だから男たちは、山小屋の窓や、家具を壊しながら、シエラ探しにあたった。

山小屋はじきに、空っぱの空き家になった。

1階もすっからかん、2階もすっからかんになって、一目で山小屋が見渡せるようになった。

それでもシエラの姿は、どこにもなかった。

はじめからシエラ・クロウなんて少女は、存在しないかのようにエズメのお父さんは、ひとり山小屋から出てきて、エズメにきいた。

「おいエズメ、シエラという友だちは、どこの家の娘だ？」

エズメはおろおろしながら、答えた。

「シエラは、いまはロード邸にすんでいるってきいたわ。ねえルイス、そうよね？」

「うん。シエラはいま、ジェニファーさんのところにやつかいになつていて聞いてます」

「ジェニファー？ あの気むずかし屋のジェニファー・ロードか？ こりやまいった、これはいよいよやこしいことになった」

エズメのお父さんは、ひとり、ふたりと人をあつめて、話をした。みんな暗い顔をして、ロード邸のお城をながめた。

ルイスは、そんな大人たちの中に入つていった。

「ぼくが行きます、ぼくがロード邸にいつて、ジェニファーさんにちよくせつ事情を話してきます」

2

ジェニファー老婦は、夜の城門にあらわれた。

あたまにネットをかぶつたままだった。

「シエラがいなくなつたつて、どういふ事だい、はじめからちゃんと話してもらおうかね」

ルイスをにらみつけながら、低い声がいった。

あからさまに機嫌が悪かった。

ルイスは城門の鉄越しに、事情を話した。

「幽霊さがしとはおそれいったね。だれがそんな馬鹿げたことを思いついたんだい？ あんたかい？」

ジェニファーは杖で鉄柵をうった。

ルイスはできるかぎり丁寧に、しょうじきに、ありのままを話した。

「まあこどもじみたことを！ それでシエラは山小屋のどこにも見あたらないのかい！」

城門がひらいた。

「はい。もう山小屋は探すところがありません。シエラをさいごに

見たのは、ぼくたちといっしょに山小屋に入るところまでです。それからどこへ行ったかわかりません」

ジェニファアは足を引きずって行って、ルイスのむなぐらをつかんだ。

「あなた、あの娘があたしにとってどれだけ大切かわかるかい？ シエラはあたしの身内も同然、それをどこへ行ったかわからないだつてえ？」

ルイスはむなぐらをつかまれながら、いった。

「お叱りはごもつともです。すべてはぼくたちの、いいえ、ぼくの責任です。罰はつけます。」

ですがいまはシエラを探す方が先です。シエラがジェニファアさんにとつてどれだけ大切かはわかります。ですがぼくたちにとつてもシエラはとても大切な少女なのです。

ジェニファアさん、ぼくたちといっしょにシエラを探して下さい」
ジェニファアは鼻のあなをふくらませて、まだなにかいいたそうだった。

「お願いします」

ルイスはふかく頭を下げた。

ホアキンが何かいいたそうに1歩まえに出た。

老婦はそれを杖でとめた。

「わかったよ、あなたを叱るのは後だ、罰も後だ、あたしらもすぐに山小屋へ向かう。」

ホアキン、馬車の用意をしておくれ。それからメイドたちを全員玄関に呼んどくれ」

ジェニファアは足を引きずって、お城へ引き返して行った。

ジェニファア・ロードは、ラウスハットの人間が大嫌いだった。

その昔、ジェニファアは、ロード邸の土地の一部をめぐって、ラウスハットの人びととあらそった。

つまらないあらそいだった。

ラウスハットの人びとは、ロード邸の土地の一部を、もとはラウ

スハットの持ちものだから、返してくれとってきた。

それをうけてジェニファーは、じぶんが金で買った土地を、権利を、ただでは返せないといった。

どちらのいい分も、正しいように思えた。

あらそいは長びいた。

じきに誰かがお城にむかってケチと叫んだ。

2人、3人、4人と、しだいに大ぜいの人びとが、お城にむかって、ケチで意地悪と叫んだ。

ジェニファーはまっ赤になって怒った。

これがジェニファー・ロードがラウスハットの人間を嫌う理由だった。

だからジェニファーにとって、いまやラウスハットの人びとがたくさんいる、ホースウエスト山に出向くというのは、勇気が必要だった。

3

ホースウエスト山の山小屋で、シエラ探しにあたっていた男たちは、大きな馬車であらわれた、ジェニファー・ロードの姿を見て、その手を休めた。

なかには、はじめてジェニファー老婦を見る者さえあった。

イーストスレッジタウンの町長は、みんなを代表して、ジェニファーの馬車を迎えた。

ジェニファーは杖をついて、いまいましそうにいった。

「もう死ぬまで会うことはないと思っただけだね」

「あいさつだな、こちらも同感だよ」

白髭の町長は、シエラのゆくえのまだつかめない事を報告した。

「まったく、うちのシエラが迷惑をかけてすまないね」

「迷惑？ 迷惑はないさ。それよりもこどもたちだよ。あのふまじめなマークやエズメらが、必死になってシエラを探しているんだ。よっぽど大切な友だちなんだろうな」

ジェニフアーは黙った。

みんなのシエラ探しは、しだいに山小屋をはなれ、ホースウエスト山全域にわたった。

草の根をわけてでも探し出すとはこのことだった。

「まったくあの娘ときたら、歌の練習もしないで、どこをほつつき歩いているんだか！」

ジャネットはこの話を聞きつけて、犬を夜山に放った。

しだいに空が明るくなった。

山のすき間から、日が輝いた。

シエラが見つからないまま、朝になった。

イーストスレッジタウンの男たちは、シエラ探しをいったんうち切り、おのおの家にもどった。

ホアキンや、ロード邸のメイドたちも、いったんお城にもどった。そんなころルイスは、ひとり山をうろついていた。

もうシエラ探しがすんだところを、行ったり来たりしていた。

「おい、真剣に探せよ」

見かねたマークが、ルイスの肩をこづいた。

「ぼくはいつだって真剣だよ。これは、ちょっとぼくなりには確かめたいことがあるだけさ」

ルイスはまた、探し終わったはずの山の斜面をうろつきはじめた。

マークはふに落ちない顔をして、エズメのところへもどってきた。

「ルイスはなにをしているの？」

「あれでシエラを探しているんだと」

午後になって、男たちが山に帰って来た。

もうホースウエスト山は探しつくした感があった。

「いったいどうなっているんだ？ これだけしらみつぶしに探しても、シエラという少女はどこにもいない」

「あの子たちの言っていることは正しいのかね？」

「幽霊つてのがほんとうにいて、少女をさらったんじゃないか」

「バカいえ、山小屋には幽霊なんかいなかったよ」

「少女は山を下りたんじゃないかね、だとすればわれわれの手では探しきれない」

男たちは、テントにあつまってきたのは、こんなふうには話し合った。日が暮れた。

役目を終えた男たちが、ぼつり、ぼつりと、またテントにあつまってきた。

みんなでラウスハットの地図をかこい、さかんにゆびをさした。

「もうこの山にはいないな、ほかをあたろう」

「ほかだったって、なんの手がかりもないんだ、この広いラウスハットをどうやって探すかね、やみくもかね？」

「おい、あれを見る」

テントの中で、誰かが山へ向かってゆびをさした。

そこには、ゆっくりと山をくだって来るルイスの姿があった。その腕のなかには、泥だらけのシエラが抱きかかえられていた。

ホアキンと、見たこともない少女もいっしょだった。

シエラは、ルイスに抱きかかえられながら、恥ずかしいのか、ちよつとほおを赤らめていた。

ジャーニス

ルビー・エンジェルはむらさき色の目をして、シエラの部屋に入った。

シエラはベッドに横になって、片足に包帯をまいていた。

高い所から落ちて、足を痛めたといった。

「まさかルビーがわたしをたずねて来るなんて、夢にも思わなかったわ」

シエラは立ちたくても立てない、もどかしい気分であった。

「ついでだったの。」

バレンタイン先生がガードナー先生に用がおりになって、サウスヒルまでいっしょに馬車にゆられて来たの。

そしたらガードナー先生、シエラが大ケガをしてつまらなそうにしているから、おみまいにでも行ってきなさいって。わたしもちょっとシエラのこと気がかかっていたところだったから、ひとりぶらぶらとやって来たわ」

ルビーはむぎわら帽子をひざにおいて、すわった。

「そうだったの。でもわたしびっくりしたわ。だってパミネのパルシアでちょっと会ったくらいで、まさかおみまいに来てくださるなんて思わないじゃない？ ホアキンから来客のなまえをきいて、わたし胸がいっぱいになったわ」

シエラはりょうてをくみ合わせて、熱っぽくルビーを見つめた。

そのときちょっと動いて、足のケガにさわったのか、顔をしかめて、包帯に手をあてた。

「ねえ、そのケガはどうしたの？ なんだかふかい事情がありそうね」

ルビーは窓辺におかれた、鳥かごをちょっと見て、いった。

鳥かごはまっ黒で、鳥はなかった。

「このケガは、わたしがバカだったの。きつとバチがあたったのね。」

悪いことはするものではないわ」

ルビーは目をほそめた。

「悪いこと？ あなたまさか、キャンベル・リアにやられたんじゃないでしょうね？」

「キャンベル・リア？」

シエラは目を大きくした。

「ちがうわ、ちがうの。これはわたしがちょっとみんなにイタズラをやったの、そしたら、大きな穴ほこに落ちてしまって、

いいわ、ちよつと恥ずかしい話だけれど、すべてを話すわね」

ちよつどそのとき、サイラが紅茶をいれて、部屋に入ってきた。

うしろには、小さい女の子がいつしよだった。黒い、長い髪の毛をふって、サイラのスカートから、ルビーの方をにらんでいた。

ルビーは目をあげて、こくびをかしげた。

小さい女の子は、ぷいっつとそっぽをむいた。

「こらジャニス、こちらはお客様よ？ ちゃんとあいさつをしなさい」

シエラはベッドからいった。

ジャニスは、サイラのスカートにかくれた。

「誰なの？」

ルビーは顔をよせた。

「ジャニスよ。あの子のことも、これから話すわね。ちよつと長くなるかもしれないけれど」

「いいわ。バレンタイン先生は、ちよつと話が長くなるからゆっくりしてこいって、おっしまったもの」

シエラは、紅茶のカップに口をつけてから、先日のじぶんの失敗談を語った。

「わたしが足をケガしたのは、いまから4日前の話よ。

あの日はわたし、ラウスハットのともだちと、幽霊さがしに夢中になっていたの。

ほら、この窓からも見えるでしょう？ ホースウエスト山、あそこに古い山小屋があつて、幽霊が出るつてうわさがあつたの。

だからわたしたち、幽霊の正体をつきとめようと、こっそり夜の山小屋にしのびこんだのよ」

ルビーは窓をのぞき込んで、大きな山を見た。

「わたしをふくめて、3人で山小屋の中に入ったわ。でもわたしはすぐにみんなとはなれて、ひとり2階にあがつたの。2階で物音がしたのよ。

そこでわたし、さっそく幽霊にあつたわ。黒い髪を長くのばした、ちいさな幽霊」

ルビーはジャニスを見た。

ジャニスはドアのすき間から、いまもルビーをにらんでいた。

「そう、幽霊の正体は、そこにいるジャニスだったの。ジャニスは急にわたしにあつて、あわてておどかしにかかつたわ。でもわたしは、ちつとも幽霊を見た気がしなかつたわ。だって、幽霊があわてふためくなんて、おかしい話じゃない。ジャニスはとうとう怒って逃げなさいよ！ っすわりこんだわ。

つまりこういうこと、ジャニスは宿なしの少女で、こっそり山小屋にすみついていたの。だから勝手に山小屋に入って来る人をきらつて、じぶんが幽霊になつてみんなをおどかしていたの。こどもの考えることだわ。白いシーツをすっぽりかぶつて、ふるえた声でおどかすと、みんなおもしろいように逃げていったそうよ。

でもまったく逃げないわたしに出会つて、ジャニスはとうとう観念したわ。さいきんでは、あまりに山小屋に人が入つて来るので、やりきれなかつたんだつて。

そこまでは良かったの、でもそこからのわたしはいけなかつたわ。

急にわたし、あるイタズラを思いついたの。ちょっとみんなをからかってやれってね。

わたしとジャニスは、ほかの2人をおどかすために、ふたりでシートをかぶって、1階において行ったわ。

そうしたらどう？　あとの2人は飛び上がって、山小屋から飛び出して行ったわ。その様子のおかしいことといったら、なかったわ。わたしたちはおなかを抱えて笑ったの。

山小屋を出て、シートをから顔を出すと、みんながイーストスレツグタウンへ逃げて行くのが見えたわ。

それからわたしとジャニスは、ぶらぶらと夜の山をくだったわ。

ジャニスはこれからどこに行ったらいいか、わからないって、途方にくれていたわ。

話によるとジャニスは、ドルバンにある孤児院から脱走して来たらしいの。なんでもひどい孤児院で、いつも頭やお尻を叩かれて、泣きやむひまがないんですって。だからあんな孤児院に戻りたくないって、思い出して泣いてしまったわ。

それからちよつと歩いたとき、ジャニスは悲鳴をあげて、目のまえから消えたの。あれはほんとうに消えたって感じだったわ。

わたしはあわてて夜の山に目をこらしたわ。そしたら地面にこんな、こんなよ？　小さな穴があいていて、どうもその中からジャニスの泣き声が聞こえてくるの。

わたしはわけがわからないなりに、ジャニスを助けようと、穴の中に手をのばしたわ。手のさきにジャニスの頭でもあたるかと思っただけで、ずいぶんと深い穴で、なにもつかめなかったわ。

泣いてばかりいるジャニスに声をかけて、この手につかまるように、いったわ。そしたらジャニスもわたしの手に気がついて、ジャンプしてつかまったの。わたしもほとんど穴の中に体を入れて手をのばしていたから、ふんばりがきかなかったのね、こんどはわたしまで穴の中に落ちてしまったわ。そのときこの足を傷めたの」

シエラは包帯の足をさすった。

「地面にあいた穴の中は、ちょうど壺の内側のようになっていたわ。考えてみて、もしもルビーが大きな大きな壺のなかに落ちてしまったら、あなたどうなるかしら？　ぜったいにのぼれないわ。あたまのうえに穴は見えるのだけど、そこまでどうしたって足がかりがないの。」

はじめのうちはわたし、土かべを確かめて、よじのぼったりしたけど、ただ手や服を汚すばかりだったわ。

とうとうわたしも、ジャニスも観念して、誰か助けに来るのを待ったわ。ふたりで穴の底にうずくまって、ずっと待ったの。

でも誰も来なかったわ。

わたしたち、このまま死んでしまっじゃないかしらって、ほんとうに思ったわ。ジャニスなんか泣いて、泣いて、泣きつかれて、わたしの肩によりかかって眠っちゃった。

じきに日があたって、朝になったわ。たまに人の声が聞こえて、わたしの名を呼んでいるの。きっとわたしを探してくれているんだって思っ、こっちも大声をはりあげたわ。でもダメ。いくら大きな声をはりあげても、音は穴の中で響くばかり、ちっとも外へは聞こえないの。ほんとこんな小さな穴でしかないもの。

それからわたしとジャニスは、人の声が聞こえるたびにこちらも叫んで、聞こえなくなるとだまって座り込むのをくり返したわ」

ドアのすき間からのぞいていたジャニスは、大きく頭を出すようになった。

「ほら、おいで、ジャニス。ルビーお姉さんは、とつてもやさしいひとよ？　ここに来てちゃんとあいさつをしなさい」

ルビーはむらさき色の目をあげて、ちよつと笑顔をつくった。またドアのすき間にかくれた。

ルビーは目をほそめた。

「あの子」

「ええ、人間不信なの。きつと孤児院でひどい目にあったのね」

「あの子に嫌われているのかしら」

「ううん。ルビーはぜんぜんましょ？ 初対面でジャニスがこんな
にのぞいてくるなんて、ないもの。あとで話に出てくるけど、ルイ
スなんて、ひどいわ。どうしてそんなに彼のことを嫌うかってくら
い、いやいやをやるの。もうほんとうに困ってしまいわ」

ルビーは目をもどした。

「それで？ どうやって穴から出られたの？」

「ああ、そうね、話のつづきね」

3

「穴のなかでも、だんだん日が暮れてきたのがわかったわ。もうわ
たしたち助からないって、そう思ったの。きつと何十年かあとに、
わたしたちの骨が出てきて、誰かをおどろかせるのが関の山だって、
絶望したわ。」

じっさい悲しかったわ。あらゆる死に方のなかで、これほど悲し
くて、さみしい死に方って、ないもの。ほんといま思っても、よく
助かったなって、思うわ。」

ルイスつてもだちが、わたしたちのことを見つけてくれたの。
ルイスの声を聞いたとき、わたし幻聴だと思ったわ。だって死ぬと
きつて、よく幻聴がきこえるって聞くじゃない？

でもルイスの声は幻聴ではなかったわ。くたくたになつた顔をう
えに向けると、穴のうえから手がのびているのだもの。わたし涙が
とまらなかつたわ。でもその手につかまるまえに、いったわ。ホア
キンおじさんを連れてきてって。きつとあのままルイスの手につか
まっていたら、ルイスまで穴に落ちていたにちがいないもの」

「じゃあシエラはその、ルイスって少年に命を助けられたのね？

ステキ」

「ステキ？」

シエラはこくびをかしげた。

「だって、ロマンチックじゃない」

ルビーは胸に手をあてた。

「まあ、どうかしら」

「わたしがシエラだったら、彼のこと好きになってしまっわ。だってそうでしょう？ ルイスはあなたにとって英雄だもの」

シエラは、ルイスに抱きかかえられて山をくだった、あの日のことを思い出した。

恥ずかしさから顔が赤くなった。

けれどもそれ以外に、なんの感情も起こらなかった。

「まあとにかく、わたしはこうして無事に助かったわ。この足のケガをのぞいてはね」

「だいぶ痛そうね。じきに治りそう？」

ルビーは目をほそめて、いった。

「こんなもの、すぐに治してみせるわ。わたし、体のじょうぶさがとりえだもの。レッスンだって、そうそうお休みするわけにもゆかないわ」

ルビーはまた、窓辺の鳥かごを見た。

「ねえシエラ、これはどうしたの？」

「鳥かご？」

「そうよ。小鳥のいない鳥かごなんて、へんだわ」

シエラはちよつと黙った。

ルビーにあの話話を話すかどうか、迷った。

ルビーはいった。

「シエラ、あまりこんなこといいたくないけれど、この鳥かご、キヤンベル・リアのものだわ」

「！」

「鳥かごのあみの部分がすべて黒いもの。キヤンベル・リアはなんでも黒く塗ってしまうの。だからわたし、そう思ったの」

シエラはやっぱりそうかと思った。

「この鳥かごは、わたしがケガをして、部屋に戻ってきたら、いつの間にかここに置いてあったの。誰がこんな黒い鳥かごを窓辺に置いたか、ロード邸の人にきいても、みんな知らないっていうし、ちよつとふしぎに思っていたところなの」

「まずいわ。あなた完全にキャンベル・リアに目をつけられてしまったわ。うわさでは彼女、宣戦布告のために、あいてに黒い鳥かごを送るらしいの。こわいわ。そしてこの鳥かごには、恐ろしい呪いがかかっているって話よ」

シエラは言葉をうしなつた。

ルビーの話がほんとうだとすると、キャンベル・リアはこの部屋に来て、鳥かごをここに置いたことになる。

『誓いをやぶつたら、あなたどうなるかわかり?』

それからシエラは、ルビーにはいえないことが一つあった。

それはその鳥かごのなかに、ルドヴィックの手紙が入っていたということだった。

変わりゆく人びと

シエラはひとり、手紙をひらいた。

手紙は、黒い鳥かごのなかに入っていた、ルドヴィックからのものだ。

手紙に目を通すと、シエラは目をあげた。

そこにはソフィの湖があった。

夏の日ざしをうけて、キラキラと水が光った。

シエラはちよつと息をぬいて、手紙をしまった。

ルドヴィックの手紙が、気にくわなかった。

きみにもういちど会いたい、ルドヴィックは熱心に想いをつづっていた。

「なぜこんなことを？」

シエラは不愉快だった。

この手紙は筆跡からして、ルドヴィック本人が書いたものとみてまちがいがなかった。

内容も、ふたりにしかわからない事にまで、及んでいた。

それがなぜ、キャンベル・リアの手によって、じぶんに届けられたのか、不気味だった。

怖かった。

『わたくし、あなたのことはなんでも知っているの、きょう、あなたがヴァルガンプを歌おうとしていることも、知っているわ』

『誓いをやぶつたら、あなたどうなるかおわかり？』

あの日いらいシエラは、いつもキャンベル・リアのてのひらにあるような気がして、ならなかった。

まさかあの幽霊の一件で、大穴に落ちたのでさえ、彼女のしわざに思えて、気味がわるかった。

「まさかね。あれはわたしがドジだったのよ」

シエラは歩けるまで良くなった足で、湖の砂のうえを歩いた。

と、むこうからルイス・ハンターも歩いてきた。

「やあシエラ、だいぶ歩けるようになったね」

ルイスの笑顔は輝いて見えた。

「まあルイス、絵はもう描けて？」

「まださ。こんな美しい湖だからね、もつと歩いて1番良いながめを探さなくてはならないよ」

ルイスは、あの幽霊の一件で、消えたシエラを見つけ出したとあって、ジエニファー・ロードから格別の感謝をうけた。

「あんたはかしこい子さね。たくさんの大人たちが見落とした、あんな小さな地面の穴を見つけたんだからね。なに？ 当然のことをしたまでだって？ まあそのあたりも恐れ入ったよ。あんたはうちのシエラの命をすくったんだ、なんとかお礼をさせておくれよ」

ルイスはかしこそうな目をして、いった。

「ではジエニファーさん、ぼくにロード邸にある幻の湖を描かせてください」

ジエニファーは大笑いして、いった。

「この小さな画伯ときたら、そうとうあきらめが悪いじゃないか」

シエラはスカートをあげて、水に入った。

「ジエニファーさんは変わったわ。さいきんとっても明るい。あすこを見て」

ルイスはお城の手まえにある、森の丘を見た。

「ジエニファーさんはいま、ラウスハットの人たちをまねいて、お茶会をひらいているところよ」

ルイスは首にかけていた双眼鏡でのぞいた。

「あの白髭はイーストスレッジタウンの町長だね。ほかにも知れた顔がそろっている。きつと寄付のお礼だよ」

「寄付？」

シエラは顔をあげた。

「おや、シエラは知らなかったかい？」

ジエニファーさんは、ラウスハットに多大な寄付をしたのさ。

つまりこうさ。ラウスハットの人たちは、ラウスハットに駅がなくて、たいへん困っていたんだ。なんとたつてもよりの駅は、はるばるラスタルまで行かなくてはならない。

資金あつめも思うようにゆかなくてね。計画だけはあつても、何十年も駅はたたなかつたのさ」

「まあ」

「そこへつい先日、ジェニファーさんがラウスハットに多大なる寄付をしたってわけさ。」

市長はよろこんでね、これでラウスハットに駅がつくれるって、ジェニファーさんに感謝の意を表したのさ。そう新聞に書いてある。

あそこにあつまっている人たちは、ラウスハットの代表だよ」

ルイスは、水であそぶシエラの足の動きを見ながら、いった。

「ステキだわ。これでラウスハットの人たちは、ジェニファーさんのことを好きになるんじゃないかしら？ まちがつて前みたいにくetchiで意地悪だなんて、お城にむかつて叫ばないでしょうね」

「それもこれも、みんなシエラのおかげさ」

「わたし？」

シエラは水から顔をあげた。

「そう、君さ。シエラはジェニファー・ロードを変え、ラウスハットまで変えたのさ」

シエラはぷーっと吹き出した。

「ルイスったら大げさだわ。わたしなんにもしていないもの。ただ無一文でロード邸にころがりこんただけよ？」

ルイスはひとさし指を動かした。

「シエラはわかってないね。ジェニファーさんとラウスハットの人たちが歩みよつたことは、ぼくらラウスハットの間人間にとって歴史的な大事件なんだ。」

ロード邸はいわば、ラウスハットにあつてラウスハットにあらずだったんだ。これだけ広大な大地をもちながら、ラウスハットから独立して、一国をなしていた。ジェニファーさんはラウスハットか

らの交渉にまつたく応じなかった。つまりラウスハットは下半身をうしなつた状態だった。

それが今回、シエラの一件でジェニファーさんとうまく渡り合えるようになったんだ。

ロード邸は、ラウスハットの宝になるのさ。

もしももつとジェニファーさんが気をよくして、お城のとびらを開けば、ラウスハットは世界に名だたる名所にもなりうる。またロード邸の森や、このソフィの湖だって、たくさんの人の憩いの場にもなりうるんだ」

ルイスは真剣な顔をして、いった。

シエラは、鼻歌を歌うように空を見あげた。

「わたしこまかいことはあまりよくわからないわ。でも、きつとうまくいっているのね？ 良かったあ」

ルイスは小石のうえにすわった。

「ところであの子はどうなるんだい？ ぼくのことをやぶにらみする子」

「ジャンス？」

「そう。ジェニファーさんと話をついたの？」

シエラは水からあがって、ルイスのとなりにすわった。

「さあ、やるだけのことはやったわ。あとはジェニファーさんの考え一つね」

2

二日前のこと。

ジェニファー・ロードは午後の書齋にすわって、本をめくっていた。

見あげる本棚は、本がぎっしりつまって、暗い奥の方へと続いて

いる。

シエラはジャニスをつれて、ジェニファアの背中に立った。老婦はめがねをさげて、うわ目づかいをした。

「あたしの耳はどうかしちやったのかねえ？ あんたいま、ジャニスをここにひきとつてくれと、そういわなかつたかい？」

「ええそうだったわ。ジェニファーさん、この子はゆくあてがないの。孤児院にもどしたって、また体罰をうけて、どこかへ逃げ出すのでしょう。だったらここにひきとつてくださらない？」

ジェニファーは本をめくった。

「それだけの理由で子供をひきとつていたら、ここはあつという間に孤児院さね。あたしはそこまでお人好しじゃない。だいいち、子供はうるさくてかなわない」

「あら、わたしだってうるさい子供だわ。夜中になんべん怒られたか知れないわ」

「シエラは別さ。あんたほど愉快な子供はいないからね。もしもシエラが小さなシエラをつれてきたっていうのなら、あたしもここに置いてやってもいいけどね」

シエラは、きょうのジェニファーさんは手ごわいなと感じた。

「ほら、ジャニス。あなたからもお願いして」

シエラに背中をおされて、ジャニスは1歩まえに出た。

ジェニファーは本を置き、ふりかえった。

「あたしはシエラ姉ちゃんといっしょにいたいから、ここに置いて「まあ！ そんな頼み方つてあるかしら！ ほらジャニス、さつきわたしが教えたとおりに、お願いしなさい」

ジャニスは、シエラに肩をゆすられても、なにされても、ジェニファー老婦をにらんでいた。

「その目はなんだい？ あんたの方が、あたしを品定めしているようだね」

ジェニファーはあきれていった。

「あたしは大人を信じていないの。大人なんて、みんな嘘つきなの。

だからこうしてにらむの」

うしろでは、シエラが顔をおおっていた。

ジャニスはシエラと似て、まゆ毛がきりりと逆だっていた。いかにも頑固そうな、四角い顔をしていた。

ジェニファアは肩で息をして、いった。

「どうだい、あんたから見て、あたしも嘘つきかい？」

「わからない。ノラ・ウエスコットのようになんか平気でひとをぶつタイプにも、孤児院のメイトロンのように会うたびにひとのお尻をつねるタイプにも見えない。ひよっとしたら、あんたは悪くない大人かもしれない」

「光荣だね」

ジェニファアはばんざいをした。

「あたしにむかってそれだけ言えれば、上等だよ。どうやら嘘はつかない子供らしいね」

「そうなのよ、この子はほんとうに素直で」

「シエラは黙っておいで。ジャニスや。あんたはシエラを危ない目にあわせたんだよ。わかるかい？ あんたがいなかったらシエラは穴に落ちてケガなんかしないですんだんだ。あんたがここにいないのだから、孤児院から逃げて来ただけの事じゃないか。それは勇気でもなんでもない、ただ嫌なことから逃げてきただけさ。ブタや犬と一緒だよ。もしあたしが子供をひきとるとしたら、つらい孤児院でじつとたえ忍んだ、根性のある子供にするよ。えらそうにいつでもジャニス、あんたは臆病者さね」

シエラは目を大きくした。

ジェニファアはてのひらを出して、シエラに合図を出した。

どうやらジェニファアは、わざとジャニスにきつくあたっているらしい。

ジャニスはみるみる顔が赤くなった。

火山が噴火するみたいに、どっと叫んだ。

「くやしいわ！」

「それだけかい？」

ジェニファーは背中を見せて、本をひらいた。

「あんななんか！ ふごふごふごふご！」

とっさにシエラはジャンスの口をふさいだ。

ジャンスはまえ髪をふって、ボロボロと涙をつきおとした。

「そうかも知れないわ。臆病かもしれないわ。きつとあんたのいつていることは正しいわ。でも臆病者っていわれるのは、くやしいくやしい！」

ジャンスはわあつと行って、書斎を飛び出していった。

シエラはそれを追うつもりの足をちよつととめた。

「なんだい、なにかあたしのやり方に文句でもあるのかい？」

ジェニファーはめがねをはずした。

「いいえ。うれしいの」

「うれしい？ なにがどうすればジャンスが泣いてうれしくなるんだい？」

シエラはあごにゆびをおいて、

「だってジェニファーさんは、あの子に興味をおもちだもの。その目を見れば誰でもわかるわ」

そう笑って、シエラは廊下を走っていった。

ジェニファーは近くの手鏡をもって、じぶんの目を見た。そして馬鹿らしいとばかりに、鏡を投げた。

「まったく、シエラはあたしにこれ以上どうしろというんだい。もう叩いたってなにも出やしないよ」

いいながらもジェニファーは、さっきのジャンスの口ぶりを思い出さずにはいられなかった。

「あの子はあんなにまっ赤に怒りながら、それでもじぶんを臆病者だって、認めていたねえ」

エズメの仕返し

サイラは4人ぶんの紅茶をトレーにのせて、部屋に入った。

1つはエズメに、1つはジェシカに、1つはチャティ・ハルミトンのまえにおいて、さいごはシエラに手渡した。

エズメはダージリンのやさしい香りに目をとじた。

「シエラはいつも地味な服ばかり着ているから、こんなお姫さまのような生活をしていたなんて、想像すらしなかったわ」

ジェシカはひざに手をおいて、すてきな部屋を見まわした。

「ほんと、わたしあのベッドで寝られたら、いったいどんなステキな夢が見られるかって、いま考えていたところよ。だって、天がい付きよ？ 美しいレースにつつまれて眠るって、どんな心地かしら？」

ルイスはこの部屋に来たことがあるの？」

エズメは目をあけた。

チャティ・ハルミトンは、じぶんの紅茶に口をつけて、答えを待った。

「ないわ」

シエラは、サイラに手をふってから、みんなに顔をもどした。

「ルイスはソフィの湖を描くために、ロード邸に来ているの。ジェニファーさんとそういう約束をしているの。だからお城の中には入らないわ」

チャティに、ふくよかな笑顔がもどった。

「シエラは、もうメイトリアル教会に入ってしまったのでしょうか？
せっかく仲良くなれたのに、さみしい気がするわ」

「まあチャティ、わたし暇さえあれば、ちよくちよくラウスハットに顔を出すつもりよ？ だからチャティとも、これからよく会おうと思っわ」

4人は、シエラの部屋にすわって、午後の紅茶を楽しんだ。

シエラとチャティは、きょう会ったばかり。

エズメが、学校の友だちだといって、急にチャティをつれて来た。チャティはぽっちやりして、笑うと歯ぐきが出る、見た目のわるい少女だった。

けれどもシエラは、いつものあたたかい笑顔で彼女をむかえ、かたい握手を交わした。

「そう、それでね、あたしルースに気づかれないように、そつと頭に消しゴムをおいたの、そしたらどうなったと思う？ 1時間後にも頭に消しゴムがのっていたのよ」

「まあ！」

エズメは学校でイタズラばかりをやっていた。

「みんないいわ、わたしなんて学校にいてないから、そんな愉快なことに出会えないわ」

シエラはほんとうに羨ましそうに、みんなを見た。

「いいじゃないシエラ、あなたはあのメイトリアル教会に入れるんだから。わたしの方こそシエラがうらやましいわ」

ジェシカは口をとがらせた。

「そうよそうよ。あたしの姉さんなんて、とびきり歌が上手だったのに、4年かかって、教会に入れてもらえなかったのだから」

チャティはため息をついた。

「まあ4年！ もしかして、断りつづけたのは、メアリー・ヒルトン先生じゃなくって？」

「あらよくご存じね。そうよ。だから姉さん、ヒルトン先生が嫌いなの。ほかに、ヒルトン先生が嫌いな少女がおおいわ」

「わたしばかりじゃなかったのね」

シエラはふかく腕をくんだ。

エズメは話の流れを見て、いった。

「ところでさ、さいきんドローラの様子がおかしいと思わない？ 暗いのよ。きつとルドヴィックとなにかあったにちがいないわね。だってルドヴィックとうまくいっていたときのドローラったら、いつも笑っていたもの。」

シエラなにかきいていない？」

シエラはドキツとして、目をおよがせた。

「わたしきいてないわ」

「うそおっしゃい。ルドヴィックに手紙を渡したの、シエラだってきいているわ。なにも知らないわけじゃない。白状しなさいよ」

エズメは身をのりだして、いった。

「知らないものは、知らないわ」

シエラは下をむいた。

エズメはぐぬぬといった調子で、こぶしをつくった。

エズメは確信していた。

ドーラとルドヴィックの恋のゆくえに、シエラが大きく関わっているということ。

シエラがおめかしをして、ラスタルに向かう馬車を見た少女がいるのだ。

だのにシエラはシラを切って、口をわらわない。

これは野次馬そのもののようなエズメにとって、がまんならなかつた。

『どんくさいシエラのぶんざいで、このエズメ様に隠し事をするなんて、見てなさい』

エズメはふてきに笑って、チャティをひじでつついた。

「ねえチャティ。ちようどいい機会だわ。シエラにあのことを相談しなさいよ」

「ええ？」

「ほら、あなたずっと気にしていたじゃない、ルイスのことよ。チャティは赤くなった。

「わ、わかつたわ。ねえシエラ、あなたルイスのこと、どう思ってる？」

シエラは目を大きくした。

「つまり、その、シエラとルイスは、いつもいっしょに犬のさんぽをしているのでしょうか？ 彼のことをどう思っているの？」

チャティはじぶんの髪をいじりながら、きいた。

「どうって、どういうこと？」

「どんくさいわね！ シエラとルイスは好きあっているかって、きているのよ！」

エズメはテーブルを叩いた。

「好きあつて！ まあひどい！ わたし、そんなこといちども！

まあひどい！」

シエラは胸をおさえて、叫んだ。

「まあ良かった！ あたしっいたらてつきり、シエラとルイスは恋人同士かと！」

チャティは大きく手をうって、歓喜をあげた。

ジェシカもいっしょになって喜んで、チャティの肩をだいた。

「ほらねチャティ、あなたまだ望みがあるのよ！ 手紙を出しなさい、はやく出しておしまいなさい」

身をよせて喜ぶふたりと、したり顔のエズメを見くらべて、シエラは言葉をうしなつた。

「そうだわチャティ。このさいだからあなた、ラブレターをシエラからルイスに渡してもらいましょうよ。なんとってシエラは、ドーラとルドヴィックをくつつけた、奇跡の恋のキューピットなんだから。ねえそうしなさい」

エズメはいかにも思いついた顔をして、いった。

「いけないわ！ いけないの！ また悲劇がくり返されてしまうわ！」

シエラは思わず立ち上がった。

エズメの目が光った。

「悲劇？ あら、悲劇ってなんのこと？ ひよっとしてドーラとルドヴィックの間にも、なにかとんでもない悲劇が起こったっていうの？」

ジェシカはシエラを見あげた。

シエラはりょうてで口をふさいだ。

「どうなの？ ドーラとルドヴィックについて、あなたなにか知っているの？」

エズメはテーブルに両ひじをついて、じろり見た。

「わ、わかったわ。チャティの手紙をルイスに渡せば、それでいいのね？ わたしそれをやるわ」

シエラはひきつった笑顔で、イスにすわった。

「へえ、決まりね。じゃあチャティ、ルイスに渡す手紙をいま書いてしましましょう？ だいじょうぶ、あたしのいうとおり、お書きなさい」

エズメはチャティに顔をよせて、便せんとペンを取り出した。

チャティはふるえる手で、ペンを受けとった。

ジエシカははしゃいで、イスを動かした。

『なんてこと！』

シエラはみんなに見えないように、眉間にシワをよせた。

シエラはルイスに、チャティのラブレターを手渡さなければならなくなった。

光の歌姫、闇の歌姫

ロタオールは音楽家であふれた。

たくさんの若者が、たくさんの希望を胸に、ロタオール音楽大学の門をくぐった。

むらさきの目をしたルビー・エンジェルも、その一人だった。

ルビーは赤煉瓦の門をくぐって、広いキャンパスの森を歩いた。

夏の大学は、休暇中とあって、ひとが少なかった。

ルビーは庭つづきの廊下に出た。

廊下には大きな石柱がならんだ。

通りがかった教室から、バレンタイン・ウッド先生がちょうど顔を出した。

「おや？ ルビーじゃないか。もう国に帰ったんじゃないのか？」

バレンタインは長い髪をかき上げて、いった。

ルビーは、この間のパミネのバルシアがくやしかった。

だから休暇中にも大学に来て、レッスンをうけたかった。

その思いをうちあげた。

「まあそんなに思いつめるな。今回のパミネのバルシアは、あのキャンベル・リアだって落選したんだ」

ルビーは、あのキャンベル・リアよりも歌がうまくなりたいと、またうちあげた。

バレンタインは意外な顔をした。

「ルビーがそんなに野心家だったなんて、ちょっと驚きだな。キャンベル・リアに勝ちたいか。まあその気持ちは大事だが……無理な話だ」

「無理？」

「ルビーは、キャンベル・リアのヴァルガンプを聴いていないのか？ あれは確かに失敗だった。パミネのバルシアで歌う曲ではなか

った。

しかしな、永遠に歌えない曲、ヴァルガンプをあそこまで仕上げたキャンベル・リアは、やはり天才だよ。あれはオレの理想にかなり近かった。もう一息だった。オレはあまりに興奮して、りょうてをあげていた。

ルビーは、ここまでできるか？ たとえ失敗しても、ヴァルガンプを最後まで歌いきれるか？」

ルビーはこのとき、くやしいという気持ちのほかに、シエラ・クロウというふしぎな少女を思い出した。

パミネで出会ったシエラ・クロウは、平気な顔をしてヴァルガンプを歌うといった。

ガードナー先生が歌えというから、歌うのだといった。

そしてシエラは、パミネのバルシアの予選をとっぱして、消えた。ヴァルガンプを歌いきった少女がいたらしい、そういううわさを残して。

バレンタインはなに気なく廊下のさきを見た。

遠くからふたりの女性が歩いて来るところだった。

ひとりにはメガネをかけたミルドレッド・ホワイト先生、もうひとりには黒いマントをゆらしていた。

バレンタインはギョツとして、石柱のかけに逃げ込んだ。

ミルドレッドのとなりを歩くのは、キャンベル・リアだった。

ルビーはふかく頭をさげて、ふたりに道をゆずった。

ミルドレッドはメガネに手をかけて、

「おや、ルビーじゃない？ 休暇中もレッスンとは、ご熱心ね」

キャンベル・リアは、重苦しい雰囲気を漂わせて、前をむいていた。

「ルビー、いまあなた、誰かとお話しをしていなかったかしら？」

ミルドレッドは、わざとらしく周囲を見た。

「さあ」

「そう？ ならいいけど。」

気をつけなさいルビー。この大学には、学生に手を出す教師がいるらしいのよ？ あなたなんてとくにぼんやりしているから、なにかあつたら、大声を出すのよ？」

舌うちが聞こえた。

「あら？ どなたかいらつしやるの？」

ミルドレッドはまた、わざとらしく周囲を見た。

ふたりはルビーを残して、立ち去った。

ルビーはなるべく、キャンベル・リアに顔をおぼえられないよう、下をむいていた。

キャンベル・リアは、ひと言もしゃべらなかつた。

かえつて不気味だつた。

バレンタインは石柱から顔を出した。

「なんでキャンベル・リアが口タオールにいるんだ？ あいつら、なにをたくらんでいる？」

「バレンタイン先生は、なぜそうキャンベル・リアからお逃げになるんですか？ それは恐ろしい少女ですけれども、あまりに必死にお逃げになるわ」

ルビーはまえから気になっていた事をきいた。

バレンタインは長い髪をかき上げて、廊下のさきを見た。

「ちよつと因縁があるのさ」

ルビーはそれ以上をきけなかつた。

2

バレンタインは夜の教室にいた。

ルビーにレッスンをつけ、教え子の譜面のチェックを済ませ、時を忘れてピアノにすわっていると、いつか夜だつた。

バレンタインは上着を肩にのせて、暗い廊下に出た。

その背中を誰かが抱きついた。

「ウッド先生」

バレンタインは悲鳴をあげそうになった。

「なんのマネだ」

抱きついてきたのは、キャンベル・リアだった。

バレンタインは身をもがいて、キャンベル・リアから逃げようとした。

「うふふふ。今日こそは逃がしませんわ」

キャンベル・リアはじょうずに体をつかって、ぴったりと背中によこ顔をつけた。

バレンタインはかんねんしたように、

「なにしに来たんだ」

「まあひとを邪魔ものあつかいなさって、わたくしはただこうやってウッド先生に会いにきたのですわ」

キャンベル・リアはうるんだ声をつかった。

濃いアイシャドウ、くつきりした口紅、流れるような黒髪は、こんやキャンベル・リアをあやしく、美しく見せた。

「先生は、わたくしのことが恐ろしいかしら？」

「あたりまえだ。おまえはほんとうになにを考えているかわからん。うわさもひどいもんだ。修道院で心をいれかえたのじゃなかったのか」

「修道院？」

高らかに笑った。

「ウソですわ、あんなの。うふふふ。わたくしが修道院でおとなしくしていると、まさか先生ほん気でそう思ってたの？ まあかわいい」

バレンタインは一つ身をもがいた。

「わたくしの歌声、きいて下さいましたかしら？ パミネのパールシアですわ」

「ああきいたさ」

ロタオール音楽大学の門はすでに閉ざされて、静かだった。

「どうお思いになりました？」

「ふん。あいかわらずだ。おまえは天才だよ。あのローズマリーだつて、まったく相手にならない」

「でも、ヴァルガンプなんて歌ってしまつて、落選ですわ」

「そうだな。でもおまえの野心は、評価に値する」

「うふふふ。先生？」

「なんだ」

「シエラ・ク로우ってご存じかしら？」

キャンベル・リアは、バレンタインの背中を放した。

「シエラ・ク로우？」

よろめきながら、ふりかえつた。

「そう、ガードナー先生の教え子ですわ。パミネのバルシアの予選をとつぱした少女。」

彼女、パミネの舞台上でヴァルガンプを歌つたんですわ」

「バカナ！ あれは根も葉もないいわさ」

「いいえ、シエラ・クROWは、わたくしでも歌えなかったヴァルガンプを歌いきつた、それも完璧にね」

キャンベル・リアはふてきに笑つた。

バレンタインはあごに手をおいて、

「もしそれがほんとうだとすると、ダグラスめ、オレをだましやがつたな」

キャンベル・リアは遊ぶように歩きながら、

「でも、あれはダメですわ。歌が下手くそでは、お話になりませんもの。この夏からメイトリアル教会に入るらしいけど、すぐに消えるわ。なんらかの不幸によって、いなくなってしまうでしょう」

バレンタインは鋭い目をあげた。

「それより先生？ ソフィは元気になっているかしら？」

「なに」

「先生さいきん、メイトリアル教会によく行かれるらしいわ。ソ

「ファイ・シンクレリアに会いに行かれるのでしょうか？」

「こいつなんでも知っているな、とバレンタインはポケットに手をつっこんだ。」

「まあ、そうだ。だがな、ソフィはなかなかオレと会ってはくれない。いまだにふさぎこんでいるのさ」

「ソフィ・シンクレリアはおやめなさい先生」

「なに」

「ソフィはそおっとしておくんですね。あの娘は、もう飛べないんですもの。わたくしとはちがってね」

「どういう意味だ」

キャンベル・リアは絶世の笑みをうかべて、

「ソフィとわたくしの関係について、先生はお考えになったことはありませんか？ ソフィは光で、わたくしは闇、ふたりはもともと一心同体なんですわ」

バレンタインはハツとして、キャンベル・リアを見た。

このときキャンベル・リアの顔と、ソフィ・シンクレリアの顔がかさなつて見えた。

「ウソだろ」

次の日、バレンタインはルビーをつれて、ダグラス先生の家に向かった。

つまらない曲

ジャネットは紅茶をいれて、バレンタイン・ウツドのまえに置いた。

「あんたがまさか、あたしの家に来るとは思わなかったよ」

バレンタインは神妙な顔をして、カップに口をつけた。

「茶葉が少ない」

「文句をいうんじゃないよ」

ジャネットは手ふきをもち、イスにすわった。

「で、用件はなんだい？ あんたがねらいもなくあたしの家に来るはずがない」

バレンタインは一つ笑った。

「用件は二つある。一つは、シエラ・クロウだ」

ジャネットはやれやれと天井を見た。

「シエラ・クロウはパミネの舞台で、ヴァルガンブを歌ったそうだがそれも完璧に。なぜ隠した」

バレンタインはテーブルに両ひじをついて、手をくみ合わせた。

「誰から聞いたんだい？」

「キャンベル・リアさ」

ジャネットは意外な顔をした。

「キャンベル・リアともあろう大ものが、わざわざあの子の予選を見に来たというのかい？」

「そうだ」

「はっ！ 恐れ入ったよ。あんな歌が下手くそなシエラを、なぜそんなに注目したがるのかね。ローズマリーでさえ、シエラを意識しているじゃないか」

「そうだ、そして今度はこのバレンタイン・ウツド様が、シエラ・クロウを注目しているのさ」

ジャネットは目を回した。

「バカバカしい。シエラは歌が下手くそさ。今回メイトリアル教会に入れたのだって、ほとんど奇跡みたいなもんさ。いまだに息つきは間違えるし、のどをガラつかせるし、じっと目をつむってきいてられないよ。」

あんたシエラを注目するんだったら、ドーラ・ブライスの方を注目しな。あの娘の方が、まだ歌がましさ」

「とぼけるな」

バレンタインはテーブルをたたいた。

「オレが注目したのは、シエラ・クロウがヴァルガンブを歌ったという事実だ。歌が下手か上手かはこのさいどうでもいい」

ジャネットは紅茶の中からレモンをとった。

「あんたにとって、そんなにあの曲が大切かい？ 目をさましなよ」
「なに」

「ヴァルガンブを歌ったって、なにも変わりはない。せいぜいパミネのパルシアの予選をとっばできるくらいなものさね」

バレンタインは紅茶をいっきに飲みほした。

「ダグラス先生はむかし、パミネのパルシアの舞台でヴァルガンブを歌った。そして失敗してのどをつぶした。そのことをまだ引きずっているか」

ジャネットのまゆが動いた。

「調べたのかい」

「調べたさ。オレにとってヴァルガンブが因縁の曲であると同時に、ダグラス先生にとってもヴァルガンブは因縁の曲だった。」

「なんたってダグラス先生は、無理をしてヴァルガンブなんて不可能な曲を歌ったために、のどをつぶして、これからの歌手人生を終わらせてしまったのだからね」

ジャネットはのどをつかんだ。

「ジャネット！」

遠くから師匠が走ってきた。

ジャネットはのどをおさえて、舞台にしずんだ。

客席がざわついた。

「バカ野郎、やつぱりやつちまったじゃねえか！ あれだけいったのに、かくれて練習しやがったな！」

正装をした男たちがジャネットのまわりに集まってきた。

「ヴァルガンブなんて、歌うんじゃなかった。あたしは毎にち病院のベッドで泣いたよ。のぼせあがっていたのさ。誰も歌えない曲なら、あたしが歌ってみんなを驚かせてやるんだ、とね。とうじ声量ではあたしが1番だったから、自信があつたのさ。まったくバカなことをしたよ」

ジャネットは遠い目をした。

「そんな恐ろしい曲をなぜシエラ・クロウに歌わせたんだ？ もし、シエラが同じように、のどをつぶしたとしたら先生、あんたどうするつもりだったんだ」

バレンタインは険しい表情をした。

ジャネットはカップの中でスプーンを回した。

「おい」

「なんだい」

「どうなんだ？ シエラのはどはつぶれてしまってもかまわなかったということか？」

「バカいうんじゃないよ。そんな残酷な師匠がどこにいるつてのさ。ちがうんだよ、シエラが勝手にじぶんで歌ってしまったのさ。」

ちよつと教室をそうじしていてね、シエラに手伝わせていたら、どこからかヴァルガンブの譜面を見つけてね、夕日のなかひとりで歌っていたのさ」

「なんだって？」

「あたしはゾツとしたよ。そしてシエラを叱りつけた。この歌を歌つてはならない、のどをつぶしてしまうって。シエラはケロツとして、なにがなにやらわからない顔をしていたよ」

バレンタインの髪の毛がひろがった。

「ぶざけるな！ ついうつかりヴァルガンブを歌ってしまっただと

？ ありえるか！ そんなことありえるはずがない！ あのキャンベル・リアでさえ歌えなかったヴァルガンプを！ オレの教え子たちを地獄へ叩き落としたヴァルガンプを！」

「なに怒ってるのさ。つまりヴァルガンプなんて、しょせんその程度の曲さ。あの歌が下手くそなシエラ・クロウでさえ歌えてしまっ、ほんとつまらない曲なのさ」

ジャネットはスプーンのしずくをきって、テーブルに置いた。

二つの用件

「で、もう一つの用件はなんだい？」

ジャネットはカップを洗いながら、キッチンの小窓をのぞいた。小窓にはサウスヒルの森が見え、その間からお城の屋根が見える。お城はシエラの住む、ロード邸だった。

シエラは今ごろ、ルビーの思いがけないお見舞いに飛び上がって喜んでいることだろう。

バレンタインはゆびでコインを弾いた。

「この間、キャンベル・リアに会ったんだ」
ジャネットはふり返った。

「へえ、あれだけあの娘から逃げまわっていたのに、どういふ風の吹きまわしだい？」

「会ったといつたところが、つかまっちまったのさ。今回はかりは逃げ切れなかった。

まあそれはそうと、そのときあいつ、へんなことを口にしていたんだ」

「へんなこと？ いつものことじゃないか」
ジャネットはくびをすくめた。

「これがいつものつまらないウソでもなさそうなんだ。ちょっとひっかかってね。それが気になってわざわざおれはこんな田舎のダグラス先生の家まで来たってわけさ」

「ど田舎でわるかったねえ。ただ気になっただけでこんな遠くまで馬車を走らせるあなたの方がどうかしているよ」

ジャネットは戸棚の戸をお尻でしめた。

「ダグラス先生、あなたはソフィについてどこまでご存じかな」
バレンタインは真剣な目をつくった。

「ソフィ？ いまあなたが惚れ込んでいる、あのソフィ・シンクレリアのことかね？」

「そうだ」

お菓子を皿にもりながら、くびを横にふった。

「あなたの方が熱心で、熱狂的で、よく知っているんじゃないかね」
「彼女の親は？」

「さあね」

「出身は？」

「さあね」

バレンタインはふざけてコインをかた目にはめた。

「それさ、みんな同じ答えしか返ってこない。知らない、聞いたこともない、メイトリアル教会に行つて、あれこれ修道服を追いかけて、同じ質問をしても、誰もなにもわからない」

ジャネットのまゆがあがった。

「あなたそんなことしたのかい」

「ヒルトン先生はしらんぷりするし、ましてやソフィ本人にちよくせつ会つて聞けもしない」

ジャネットは腰に手をあてた。

「どうだつていいじゃないか、教会にいる以上、余計なせん索はしないことさね」

バレンタインはかた目にコインをいれたまま、一つ身を乗り出して、

「ダグラス先生は、ソフィとキャンベル・リアを見て、なにかふしぎに思ったことはないか？」

ひとさし指をあごにあてて、

「まあ二人とも歌の天才だね、顔だつて悪くない」

「歌もそうだが先生、そうだよ顔だよ顔、二人とも性格や雰囲気は対照的だが、顔だけとつて比べてみたまえ、ソフィとキャンベル・リア、顔はうり二つの美しさじゃないかね？」

「なんだいそれは」

「つまりこうさ、ソフィとキャンベル・リア、一見ふたりは別人のような雰囲気だが、じつはふたりは双子の姉妹なんじゃないかとい

っているのさ」

ジャネットはテーブルにもどつて、お菓子をおいた。

「キャンベル・リアがそういったのかい」

「いや、いったというよりか、そら、あいつのことだから、思わせぶりにいったのさ。『ソフィは光で、わたくしは闇、ふたりはもと一心団体なんですわ』とかなんとか、目が本気だったな」

バレンタインはかた目からコインを落として、手でキャッチした。それを見たジャネットは、ふかいたため息をついた。

「あんた、いい歳して小娘にからかわれているのがわからないのかい？ キャンベル・リアがどういう人間か、あんた身をもつて知っていると思うけどな。あの心中事件だって、あんたあの娘にまんまとだまされて」

「いや、まて、まてまて、もうひとつ聞いてくれ。」

キャンベル・リアはじつはシルバーの髪だったとうわさを聞いたことがある。おれは見たことがないが、なんでもほんの子供の頃の話だ。

それをいまではまっ黒に染めている。毎夜毎夜、儀式のように染めているらしい。なぜだ？ なぜそうする必要がある？ 黒が好きだから？ いやこうさ。

キャンベル・リアは、ソフィとじぶんを別にする必要があったのさ。それはあいつ自身いつているんだ、ソフィは光で、じぶんは闇、こうやってキャンベル・リアは双子のきずなを断ち切っているんじゃないか？

そらどうだ、おもしろいだろう。考えれば考えるほど、キャンベル・リアとソフィ、ふたりは双子だという話が現実をおびてこないか？

ジャネットはあきれてくびを横にふった。

「さあさあつまらない話そこまで。ほら、ルビーがロード邸から帰つて来たよ、今回のことではいちばん良かったのはシエラにちがいないね。あとでシエラからあんたにお礼の手紙を書かせるよ」

チャティの手紙

ガードナー家の歌のレックスも、あとわずかとなった。

犬のさんぽも、あとわずか。

シエラは涼しそうななりをして、犬のジョンと、明るい森を歩いていた。

「ああ、ジョンのさんぽも、あとどれくらいできるかしら？」

あなたわかつているの？ もうじきわたし、メイトリアル教会へ行ってしまうのよ？ そしたらあなた、いまみたいに毎日いっしょにさんぽできなくなってしまふのよ？」

ジョンは声に耳を動かしながら、木の匂いをかいでいた。

「聞いているの？」

ジョンは道のさきに顔を向けた。

道のさきにはベレー帽をゆびで回す、ルイス・ハンターの姿があった。

ルイスは鼻歌まじりにやって来た。

「やあシエラ、足のケガはもう良いの？」

「良いも悪いも、いまからジョンをお放しなさい、そしたらわたしすぐにジョンの首根っこつかんで戻ってくるわ」

シエラはぴょんと跳んだ。

ルイスは話しながら、シエラのつま先から頭のとっぺんまでを見た。

ルイスとシエラが出会ってから一年がたった。

この一年でシエラは娘らしくなった。

もの想う目つきをするようになった。

しぐさに目がいくようになった。

ルイスはときにぼんやりとシエラをながめるようになった。

「あとのくらい？」

ルイスは名残おしそくにシエラを見た。

「え？」

「もうじきメイトリアル教会へ行ってしまうんでしょう？ いつ行くんだい？」

「そうね、来週か、再来週のことかしら。」

はつきりしないの。ジャネット先生があまりはつきり日をおつしやらないものだから、ジェニファーさんはさもやきもきしているわ」
シエラはしゃがんで犬の頭をなでた。

ルイスは木のこずえを見あげて、あらたまった口調でいった。

「シエラにちょっと聞いてほしいことがあるんだ」

「？」

「ぼくはちょっとまえに、ソフィの湖を絵に描いた。それは覚えて
いるね？」

「覚えているわ」

「その絵がロタオールの絵画コンクールで賞をとったんだ」

「まあすてき！」

シエラの顔が輝いた。

「ぼくも驚いたよ、なんとって少年の部じゃない、大人たちにまざ
っての絵画コンクールだからね。」

トロフィーをもらったぼくに、ドヴィー・ジョンソン先生がこう
話しかけてきたんだ、うちに来て絵の勉強をしてみないかってね」

「ドヴィー・ジョンソン先生？」

「有名な画家さ。」

彼の絵は目玉がとびでるくらいの高値で売買されているんだ。色
彩の妖術、明るい色づかいで暗い表情を描ける天才画家なんだ」

「ルイスはそんな有名な画家の下で絵の勉強ができるのね？」

「うん、学校はやめて、すぐにも先生のところへ行こうと思ってい
るんだ」

「すごいわ！ ルイスだったらほんとうにすごい！

わたしなんて歌が下手くそなのに、ぐうぜん良い話にめぐりあえ
てやっとメイトリアル教会に入れたというのに、ルイスだったらじ

ぶんのちから一つで夢をつかんだのね」

「シエラのおかげさ」

くすくすと笑った。

「わたし？」

「そう、この賞はじつはシエラのおかげなのさ。」

ソフィの湖の絵は、ぼくは風景画として描いたつもりだけど、じつは水辺にシエラを描いたのさ。

湖を見つめる少女、こう題をうったのも、最初はちょっとしたイタズラ心だったんだ。

だけどドヴィー先生の中にはそこがおもしろくうつたらしくてね、君は湖を描きたいのか、少女を描きたいのか、そう質問されてぼくはこの少女を描きたかったのですといったら、頭をかかえてお笑いになったんだ。そしたらこの大きな賞さ」

シエラはぼかんとした。

「ひどいわルイス。わたしを絵に描いたなんて一言もいわなかったじゃない。描くんなら描くで、わたし立派なレディーとして、イスにすわってモデルをやりたかったわ」

ルイスが笑い、つられてシエラも笑った。

さてとシエラが立ち上がると、うごいた服のポケットからひらひらと、一まいの手紙が落ちた。

それはチャティの手紙だった。

シエラはエズメたちから、この手紙をルイスに渡すよう頼まれていたのだった。

ルイスはふしぎそうに手紙をひろって、シエラに見せた。

「だれかの手紙かい？」

「え、ええ」

シエラはしまったと思いつつ、しかしそれを取り返そうともしなかった。

「これはぼく宛ての手紙じゃないか」

「そ、そうよルイス。あなた宛てなの。チャティ・ハルミトンって

少女、ルイスは知っているかしら？」

ルイスはいぶかしげに手紙をみつめた。

「うちの学校にいるね。話したことはないけど」

シエラはわざとらしくああと手をうって、

「チャティ・ハルミトンからあなたについて、わたし手紙をあずかっていたのすっかり忘れていたわ」

それからなんども確認するように、

「確かに渡したわ、チャティ・ハルミトンですからね？　チャティ・ハルミトン、お間違えなく」

ルドヴィックの件もあり、シエラはチャティのところを強調していった。

ルイスの顔はくもった。

それはチャティの手紙が恋文そのものだったからだ。

「どうしてシエラがチャティの手紙をあずかっているんだい？」

「べ、べつに深い意味はないわ。ただ、あずかっていたの」

シエラはおおくを語りくれないので、ちよつと足早に歩きはじめた。待って、シエラ、ちよつと待って。

チャティのラブレターをぼくに渡して、きみはなんとも思わないの？」

ルイスはあわてて走って、シエラと肩をならべた。それを嫌がるように、シエラはすたすた歩いた。

「なんともって、なに？　わたしはエズメに頼まれたとおり、あなたに手紙を渡したの、それだけよ？」

シエラはぎこちなくいった。

「待ってたら。ぼくはずっときみのことを近くで見ってきたんだ。それなのにシエラはぼくの気持ちをひとつもわかっていないの？」

シエラはルイスの気持ちを知っていた。

ルイスの熱い視線はときにシエラの目に入った。

けれどもふたりの関係がぎくしゃくしないよう、シエラは細心の注意を払っていた。

それがいま、崩れようとしていた。

「わたしたちは仲のいいお友達よ？ ルイスはわたしにうんと良くしてくださったわ。この恩はけっして忘れないつもりよ？」

「そういう事をいつているんじゃない。

シエラがチャティのラブレターを平気な顔をしてぼくに渡せるということは、ぼくのことをなんとも思っていないってことなのかい？」

シエラの顔はみるみる青くなった。

こんなときなんとルイスにいつていいかわからなかった。

ただ、ルイスがもとのルイスにもどつてくれるよう祈るしかなかった。

森の出口に馬車が一だい、馬を休めていた。

馬車のわきにジャネットの姿もあった。

ジャネットはつまらない顔をして、馬を蹴るように、馬車を送り出した。

「まあ！ またバレンタイン先生のお出ましょ？ さいきん先生ときたらよくいらっしやること」

シエラはこれを助けに思い、大きな声をあげてジャネットのもとに走っていった。

ルイスはひとり森に極まって、チャティの手紙と、去っていくシエラとを見くらべ、深いため息をついた。

ローラ・エバーツ

サウスヒルから森をくだって、城壁につづく小道があった。小道には小川があつて、夏草のなかを水が涼しげに流れた。

シエラは城門まで来て立ち止まった。

知らない少女が立っていたからだ。

「まあ、どちら様かしら？　ここに来てまる１年、初めて見る顔だわ」

少女は白いにぎやかなワンピースに、おしゃれなパナマハットをかぶっていた。

ちよつとつま先立って、鉄柵につかまりながら中をのぞいていた。「ジェニファーさんのご親戚かしら？　それだったら呼び鈴を押せばいいのに」

シエラはこくびを傾げながら、少女のすぐ背中まで歩いた。

「どちら様？」

少女はハツとして、柵に背中をうちつけた。

その驚いた顔はキレイだった。

シエラと同じくらいの歳なのに、お化粧が見ちがえて見えた。

シエラはちよつと少女に見とれて、やつと口をひらいた。

「おの、ジェニファーさんにご用かしら？　ここでだれかを待つているようだけど」

「待つていますつてえ！」

目が大きくなった。

「冗談じゃないわ！　まるでこちらから負けをみとめているようだわ！　失礼しちゃう！　あたしがそんなに卑屈にお見えになったの？」

見た目とちがった少女の印象に、シエラは言葉をうしなつた。

「なによ、なによなによ、あなたなぜ何も言わないの？　わかつたわ、きつとあなたあたしのこと蔑んでらっしゃるのでしょうか。わか

るわその目、みんなそう、そうやって人のことを蔑むだけ蔑めばよろしいわ！」

少女はおこつて大きく腕をくんだ。

「ちよつと、蔑む蔑まないって、あなたなにか勘ちがいなすっているわ。」

わたしはただあなたの様子を見て、誰かを待っているのかしらって、そう思っただけよ？」

シエラはやつと言った。

「待っていただなんて、ぐう然よ！ いい？ あたしはここへぐう然通りかかったの。あたしがだれかを待っているだなんて、それはあなたの勝手な思い上がりよ！ なにか文句おありかしら？」

シエラはあわててくびをふった。

「ふん。どうやら物わかりは良さそうね。ひとまず安心したわ、シエラ・クロウさん」

「まあ！ わたしのことを知っているのね？」

シエラは目を輝かせた。

「知っていますとも。」

だって、いまやイーストスレッジタウンはあなたとドーラ・ブライスがメイトリアル教会に行くって話でもちきりですもの」

「まあ！」

シエラは恥ずかしさとうれしさで顔がほころんだ。

「あ、いまあなた笑ったわね？ あたしがあなたにあこがれてここまでやって来たとお考えになったのでしょうか！ ええ、もちろんですとも、お考えになるのは自由ですものねえ、だけどあたしにとつては屈辱だわ！」

シエラは大きく息をすって、できるだけ丁寧に、失礼のないように、いった。

「あの、もしお時間がよろしければ、わたしの家に寄って行きませんか？ いいえ、けっしてあなたを暇人といっているではありませんから」

「まあ！ あなたもメイトリアル教会に行くのね？」

紅茶を置くサイラの手がとまった。

少女はローラ・エバーツといって、シエラと同じ歌手の卵だった。ローラはゆっくりと間をおいてうなずいた。

「でも、なぜ？ あなたもジャネット先生の教え子？」

紅茶のスプーンをきって、ローラは笑った。

「まさか。あたしはロタオールから越してきたのよ。親の事情ってやつだわ。歌の都、ロタオールにすんでいたのだから、歌のレッスンはこどもの頃からつんであるの。」

先生はミルドレッド・ホワイト先生、ど田舎に引越しても歌をつづけるようになって、先生がメイトリアル教会を紹介してくださいましたの。」

シエラはまじまじと相手の顔を見た。

「まあローラ、あなたはなんてスマートにメイトリアル教会にお入りになるのかしら。わたしなんか泣いたり笑ったり、とんだりはねたり、やっとメイトリアル教会に入れるものを、あなたはまあ紹介ひとつであの格式高い教会の一員になるのね。」

そりゃあドーラもスマートの口だったわ。あなたドーラにあったことあるかしら？ ドーラはわたしとちがって都会的でとても歌が上手なの。ストルナードのコンクールで3位に入賞するほどだわ。わたしは予選落ち、ほんとうにわたし歌が下手で困っているところなの。」

舌の休まる暇なくしゃべるシエラに、ローラは持っていた紅茶も忘れて、

「あなた、おしゃべりね。」

「ええ、ええ、そうよ。わたしのおしゃべりはサイラが頭を抱えるほどよ？ とくに最近そうかしら？ つらいことがあったの。人生って本当つらいことの連続だわ。あなたもそう思わない？」

「そ、そうね」

シエラはテーブルの上でローラの手をつかんだ。

「わたしたち、気が合うわ！ そう思わない？ なんだかわたしピンときたの、城門のまえだわ、ローラはキレイだし、まつ毛だっとながくって、わたしマツチ棒が3本のつてしまうまつ毛がほしかったの、それはすてきなまつ毛のあかしなの、あなたきつとそれがのつてしまっわ。まあすてき！」

これからわたしたちメイトリアル教会に行ったら緊張と試練の連続よ！ そこを助け合える友が必要じゃなくって？」

シエラはハツと口をおさえた。

「ねえあなた、まさかだれか好きな人がいるとかいわないでしょうね？ まさかわたしにラブレターを渡してほしいとかいわないでしょうね？」

ローラはまゆをよせた。

「ちがうのならいいの、気にしないでいいわ。

ああうれしいわ！ 神様はきつとわたしのことをずっと見てらして、孤独になつたわたしのためにローラをよこしてくださいっただわ！」

手を組み合わせて喜ぶシエラに、ローラは冷ややかに口をひらいた。

「あなた、変わっているわ」

「あなたもね」

シエラは一つウインクをした。

エバーツ家のひみつ

ローラ・エバーツはお城を出た。

城壁の窓の一つから、うれしそうに手をふるシエラが見えた。

ローラは帽子をつかんで、あいさつをした。

その影が夕暮れの小道に伸びた。

ローラはサニーエンドをさらに東に歩いて、もう一度ロード邸をふりかえった。

お城は城壁をいっぱいに広げて、その先は遠いかすみに消えた。

ローラはシエラとの懇談が思いのほか楽しかった。

けれども一人になると、笑顔が消えた。

ローラの言うところ、シエラ・ク로우という少女は、高慢ちきなお金持ちのお嬢さまではなかった。

おしゃべりで人なつっこい少女だった。

その点でいえば、ドーラ・ブライスの方がずいぶん気むずかしいお嬢さまだった。

ローラは、がっかりと肩を落としてブライス家をあとにしたのを思い出した。

「ドーラ・ブライスの態度を見たとき、あたしのメイトリアル教会での生活がどうなるか心配だったけど、シエラ・ク로우のようなおしゃべりな娘がいれば、なんとか話あいてには困らなそうだわ」

夕照りに顔を染めながら、ちょっと立ち止まった。

「でも」

シエラが許せない。

ローラはシエラの笑顔が思い出されて、ちょっと許してあげようと気を変えても、すぐにまた許せない気持ちでいっぱいになった。

「シエラ・ク로우、あたしの恋がたきの女」

胸から一まいの写真を取り出した。

ぐっと唇をかんで見つめる。

「ああ、ルドヴィック・スピード様！ なぜ、なぜあのようなドレスをお選びになられたのですか？ このローラ・エバーツはあなたの心とともにあります！ どうか、どうか早くお目をお覚ましになってー！」

ローラはひざをくずしそうになりながら、深い祈りを捧げた。じきに家に着いた。

辺りはすっかり暗い。

ローラの家はサニーエンドの東、シエラの住むロード邸の目の鼻の先だった。

家の窓からはいつもお城の旗が見えた。

「ただいま……」

ローラは鍵のないドアをあけて、家に入った。

帽子を脱いで壁にかけても、家の中はロウソクの火さえ灯らなかつた。

エバーツ家は、4年まえに父親が家族を捨て、母親も住み込みで働いたから、爪に火をともしような貧乏生活を送っていた。

「姉ちゃんだ！」

2階から子供たちが走ってきた。

「姉ちゃん、姉ちゃん、どこ行ってたんだよ！」

「ねえねえトーマスが窓ガラスを割ったのよ」

「お腹がすいたすいた」

子供たちはみなローラの兄弟たちだった。

ローラは胸もとから白い布きれを取り出した。

それはお城のお菓子、パンケーキとクッキーだった。

シエラが席を立ったすきに、ローラは恥をしのいで、テーブルのお菓子を持って来たのだった。

「なんだこれっぽつち、ぜんぜんたらないや」

「ねえちゃん肉、肉が食べたい！」

「わかつたわ、わかつたから、汚い手で服にさわらないで！」

泣きわめく弟たちに囲まれて、ローラは悲鳴に近い声をあげた。

「おお、あたしはなんて不幸な娘なの！ あんまりつぱなお城で紅茶を楽しむシエラ・クロウとは大ちがいよ！　これが卑屈にならずにいられますか！」

テーブルの食器からハエが飛んだ。

エスタ・スイートのなげき

エスタ・スイートは、冷酷そうな顔をして、お城のなかを歩いた。彼女はジェニファー・ロードからの信頼があつく、もつとも古くからロード家につかえた。

その几帳面な性格と、きかん気の強い性質から、ロード邸のお金を管理した。

彼女は今やひとり身の老女となって、よりいっそうお城の管理に力をそそいだ。

その一つとして、エスタはよくお城のなかを歩いた。

教師がはくようなロングスカートに、ムチをうしろ手にくんで、お城のなかを歩いた。

エスタがお城のなかを歩けば、メイドたちは連絡をとりあつて、息をひそめた。

ひとたびエスタに捕まれば、メイドたちは何をいって怒られるか知れたものではなかった。

過去に、夜のお城をぬけ出して、貧しい兄弟たちに食べ物を与えていたネブ・ポリーというメイドがあつた。

エスタ・スイートは、こそこそお城をぬけ出すネブの姿を夜の窓から見ていた。

よく日、城門はかたく閉ざされた。

ネブの荷物はすべて門のそとに出された。

荷物を出したのはエスタ・スイートだった。

ネブ・ポリーは閉ざされた鉄柵をつかんで、涙してから、お城を去った。

それをメイドたちはお城の窓から見ていた。

サイラ・クーパーはよく、エスタ・スイートに呼び出された。

「あなたはあのシエラ・クロウという客人とたいへん仲がよろしいようですね。あなたの笑い声でわたくし夜も眠られないくらいです

よ。

サイラ・クーパー、あなたはじぶんの職務をなんと心得ていますか？ あなたはロード邸の客人ではないのです、ただの奉公人です。ですからしっかりとロード家に奉公していただいただけなくては困りますね」

このようにサイラは、あごをひっ張られた。

サイラは、ほかのメイドたちとおなじようにエスタ・スイートが嫌いだった。

反逆的な目をした。

そのときエスタのムチがしなった。

サイラは、ムチの入った手を袖のなかにかくして、またなに食わぬ顔でシエラの部屋に向かった。

「あの娘だわ、シエラ・クロウとかいうどこの馬の骨とも知れない小娘がこのお城に来てから、ロード邸のすべてが狂ってしまった。

あの小娘はジェニファー様に魔法をかけてしまったんだわ。あんなにお変わりになって、いまではジャニスとかいう孤児までこのお城にお引き取りなされるなんて、ああなげかわしい、なげかわしい」

そういつてエスタは、ムチで床を叩いた。

そんなある日、エスタ・スイートはいつものとおりお城のなかを歩いた。

いつにもまして、冷酷な顔をさげていた。

そのとき、はしゃぎきったジャニスが、元気よく廊下の角を曲がってきた。

「どいてどいて！」

「まあ！」

ジャニスとエスタは激しくぶつかった。

衝撃でふたりは尻もちをついた。

「ジャニス、どうしたのジャニス、まあたいへん！」

遅れてやってきたシエラは、ふたりの痛がる様子を見て、口を手でおおった。

エステの険悪な顔と見たら、なかつた。

「ごめんなさい、エスタ・スイートさん、お怪我はありませんか！」
シエラは走って、エステの身を起こした。
手はふりはらわれた。

「あなたたちはまあなんて野蛮なんでしょう！　ひとにぶつからないと立ち止まれないのですか！」

「急いでいたので、ごめんなさい。ほら、ジャニスも頭をさげて謝りなさい」

ジャニスはぴよんと立って、小さく頭を下げた。

エステはスカートのほこりをはらいながら、ゆっくりと立ち上がった。

「あやまってすむ問題ですか？　廊下は運動の場ではありません、こんど走ったら、これですからね」

エステは太いムチを見せた。

そのムチを見て、ジャニスの顔色が変わった。

ジャニスは、ドルバンの孤児院でひどい体罰を受けた、それを思い出した。

「まあ、なんて目をしてにらむ子供でしょう？　こんな野蛮な子供は見たことがありません。

聞いたところによれば孤児だという話ですし、今までしつけというものをいっさい受けていないようですね」

『しつけ』というところで、エステはムチをひっ張った。

「エスタさん、子供というものは、走れば必ずどこかにぶつかるものだわ」

シエラはいつて、ジャニスのまえに立った。

「まあ大人に口ごたえするつもりですか？　いいえ、子供というものはきちんとしつけがなされていれば、ひとにぶつからずすむものです」

「そんな子供なんて、きつとつまらない大人にしかならないわ。

子供は小さな芽のようなもの、ちょっとでも重石をのせてしまえ

ば、すぐに芽は曲がって伸びてしまうの」

青い目はいった。

「生意気な口をきくではありません！」

いいですか、しつけられた子供というものはみんな、物わかりが良くて反抗もない、規律正しい大人になるのです！ このわたくしのようにです！」

シエラはうす目をした。

「あら、じゃあしつけられた子供はみんな嫌われもので、だれも優しい言葉をかけて下さらなくなるのね？」

「子供のくせに偉そうなことをいうんじゃないよ！ あたしら大人がいなかったら、あんたら子供はどうして生きていけると思うんだい！ 子供はすなおに大人の言うことを聞いていればいいんだよ！」
髪を乱して、言葉を乱して、激しく床にムチをうった。

青い目が光った。

「いいえ、子供というものは大人のもので、社会のものでない、永遠にわたしたち子供のものだから！」

それは愛されるぶんには親のものであってもかまわないけれども、ジヤニスのように虐待をうけた子供や、いきすぎたしつけは、ゆがんだ大人たちが無抵抗な子供たちから幸福な未来を奪ってしまうのよ！ いたずらからだつて多くのことを学び、人にぶつかつてから、たくさんを知ることができるのよ！」

廊下のさきから、サイラ・クーパーがあらわれた。

ほかにもたくさんさんのメイドたちがシエラのうしろに立った。

「な、なんだいあなたたちは！ その目はなんだい！ あたしに反抗しようつていうのかい！ あたしはこのお城でいちばんのさ！ あたしに逆らつたら、このお城から出ていってもらうよ！ それでもいいのかい！ そら、サイラ、まずはあなたから荷物をまとめるんだ、まったくおまえときたらいつもいつもあたしに反抗ばかりして、それからおまえも、おまえも、そらそら早く荷物をまとめてこのお城から出て行くんだよ！ みんな出て行くんだよ！」

「荷物をまとめるのはあんだだよ、エスタ・スイート」

肩で息をするエスタは、思いもよらない声を聞いて、ふり返った。

「ジエ、ジエニファー様！」

エスタのうしろには、杖をついたジエニファー老婦と、それにつかえるネブ・ポリーリの姿があった。

「ネブ！ あんた、どうしてここに？」

エスタは、じぶんが追い出したはずのネブがここにいるのに、恐れをなした。

「エスタや、あんたいつからこの主人になったんだい？ そんなにうちのメイドたちを解雇されては、あたしは困るのだがね」

シエラとジャニスは、いったいなに事が起こったのか、すぐにはのみこめなかった。

そんなシエラに、サイラはかた目をつむって、1歩まえに出た。

「ネブ・ポリーリは、わたくしが呼び戻しました。」

ジエニファー様にきちんとお話をして、納得して頂いたうえで、ネブはこのお城に帰ることが許されました。

またネブの方でも、ジエニファー様のありがたいお言葉を受けて、やっとお城に帰ることを決心しました、一つの条件つきで「

サイラは反逆的な目をエスタにむけた。

「エスタ・スイート様、あなたのお荷物は、すべて城門の外に出してあります。これがネブがお城に戻る条件です。さあ、お城のそとまでわたくしたちがご案内いたしましょう」

エスタは、口をはぐはぐいって、言葉をうしなった。

「ネブには悪いことをしたねえ。」

あたしはすっかりエスタの言葉を信じきってしまったのだよ。

あんたが恋人と駆け落ちしたって、お城のお金を盗んで逃げたって、聞かされて、確かめもしないであたしは怒ったのさ。

ただどあとになってサイラから本当の事を聞いて、あたしはびっくりしたよ。

あんたは兄弟思いのやさしい娘さね」

ネブは目に涙をためて、ふかく頭をさげた。

「さあエスタ・スイート様、城門の外までご案内いたしましょう。
世の中しつけの足りない者ばかりでございますから、こちらをお持ち下さい」

サイラは綺麗なえくぼをつくって、ムチをさし出した。

旅立ちの日

ロード邸の庭に、メイトリアル教会ゆきの馬車が入った。

馬車の客室には、ドーラ・ブライスがまえを向いてすわっていた。

「ジャニス！ ほら出てらっしゃいジャニス！ もうお迎えの馬車が来たわ！」

シエラは困ったふうに、なんどもドアを叩いた。

ドアには鍵がかけられていた。

「もうどうしてしまったというのジャニス、きのうはあんなにいい子にわたしのメイトリアル教会行きをよろこんでくれたじゃない、2度と会えないわけじゃないのだから、はやくここから出てきてわたしを見送ってちょうだいな！」

金色の髪にヘアバンドをし、水色のチュニックをかぶり、りょうわきに大きなボストンバックを置いたシエラは、またドアをたたいた。

お城の長い廊下から、スカートのすそをつかんだサイラが走って現れた。

「シエラ！ シエラ！ あなたなにをモタモタやっているの！ さつきからジェニファーさまがお待ちかねよ！」

困った顔がふり返った。

「だって、さいごにジャニスの顔を見なければ、わたしメイトリアル教会にゆかれないわ！」

「ジャニスなんて放っておきなさい！ あの娘は朝からイジけてイジけて、どんなに呼んだって出てこないわ」

サイラはシエラの腕をつかみ、強引にひっぱった。

「待って」

その手をきつて、いま一度ドアにはりついた。

「ジャニス、聞いている？」

わたしたちもう会えないってわけじゃないわ。わたしはいつも教

会にいるの、ここから歩いてだつてゆけるメイトリアル教会よ？
日曜日にお祈りにくれば、きつとわたしはいるわ。ジャンスがその気になればすぐにだつて会えるの。だからそんなに悲しまないで、じゃあわたし行くけど、いい？ ジェニファーさんをあまり困らせるのじゃないわよ？ わかった？」

長い廊下のさきでホアキンが大きく手まねきをした。

シエラは合図を返して、もう一度じぶんの部屋に顔を出した。

1年間、この部屋でいろいろあった。

ジャンネット・ガードナー先生にレッスンを断られて落ち込んだ日もあった。

サイラ・クーパーと夜ふけまで笑いころげた日もあった。

ルビー・エンジェルがお見舞いに来てくれてうれしくて涙が出た日もあった。

ソフィ・シンクレリアの悲しい話をきいて、枕をぬらした日もあった。

ドーラ・ブライスに泣きながら手紙を投げられた日もあった。

シエラはゆっくりと体をまわした。

「さようなら、愛しきわたしのお部屋、あなたのことは一生忘れな
いわ」

サイラとシエラは廊下を走っていった。

足音が聞こえなくなると、ジャンスの部屋のドアがすこし開いた。

夏の空はすっきりと晴れて、ホースウエストの山がみどり色に輝いた。

シエラはホアキンに荷物を渡して、馬車の中に入った。

「いったい何をのんびりしていたんだいシエラ！ 約束の時間に遅れてしまうじゃないか」

ジェニファー・ロードはお尻を叩くように、シエラを奥の席にや
った。

前の席でドーラは、ハットのつばをさげてあいさつをした。

「おはようドーラ、今日はわたしたちの門出にふさわしいお天気じ

やなくて？ もしこれがどしゃぶりの雨だったらわたし、きつと泣きながら馬車に乗ってきたでしょう」

「ええ、そうね。でもわたし、じつは天気なんてよくわからないわ。シエラ、あなた緊張しない？」

「緊張？」

とんきような声が返った。

「そうよ。だってこれからあの格式高いメイトリアル教会での生活が始まるのよ？ なにがどうなるのかさっぱり予想がつかないわわたし怖くって」

「まあドローったら心ぼそいことをいつて。

これからさっぱり予想がつかないからスリリングなんじゃない。

ドローがいま読んでいる小説だってそう、まったく予想がついてしまつたら、きつとたいへんつまらないものになってしまうわ」

ジャンネットが懐中時計を見ながらふり返った。

「はっ！ シエラのいうとおりさね。これからどんどん世界にチャレンジしていかねりゃならないのに、こんなことくらいで青い顔をしていては、まったく心ぼそい話だよ。まあシエラはもうちょっと緊張したくらいがかわいい気があるがね、さ、出発するよ」

馭者は合図をつけて、馬にムチをくれた。

馬車のまわりに、ジェニファー老婦、ホアキン、サイラ・クーパー、ネブ・ポリーらメイドたちが見送りに立った。

シエラは大きく窓から顔を出して、手をふった。

その目が驚いた。

ジャンスがスカートをけって、馬車を追いかけて来た。

「止めて、ちよつと馬車を止めて！」

シエラは馭者の服をつかんだ。

馭者はあわてて手綱をひいた。

シエラは走る馬車からおてんばに飛び降りた。

ドローは手で口をおおった。

ジェニファーは胸を押さえた。

「シエラ姉ちゃん！」

ジャニスには黒髪をふって、まっすぐシエラの胸に飛び込んだ。いきおいあまってふたり草むらに倒れた。

シエラは青空を見た。

「ジャニス、やっと出て来てくれたわね。あなたの元気な見送り姿がないとわたし、さっぱりとした気持ちで旅立ちができないわ！」

青空に決意の目があらわれた。

「わたしも行く！」

「はあ？」

「わたしもメイトリアル教会に行くの！」

肩をゆすられた。

「まあなに言い出すのかしらこのお馬鹿さんは。ジャニスはロード邸に残ってジエニファーさんの手助けをするの、昨日そう誓ったでしょう？」

「行くの！」

シエラのみけんにシワがよった。

ためにジャニスの腕をほどこうとした。

ところが、いちど噛みついたら雷が鳴るまで放さないスツポンのように、ジャニスは抱きついたらそのまま放れなかった。

ジャネットが馬車から降りてきた。

「先生、この通りなのよ、どうしたものかしら？」

まゆ毛がつり上がった。

「どうしたものかしらってあなた、なに悠長なことをいつてるんだい！ とっくに出発時間は遅れているんだよ！ メアリー・ヒルトン先生があんたたちの事を待ってらっしゃるんだから、はやくジャニスから離れなさい」

「ジャニスがその目をしたらダメだよ、あたしやシエラが何をいつたって聞きやしない」

やれやれといった調子で、ジエニファーは杖をついて来た。

「先生そういう事よ、ジャニスを連れて行く方が話が早いわ」

馬車は大きな車輪をまわして、夏草の中を走った。

テリー川を渡ったところで、遠くに銀色の輝きが見えた。

ソフィの湖の輝きだった。

「シエラ姉ちゃん、ねえソフィの湖！」

シエラとドーラの間ですわって、ジャニスは大はしゃぎだった。

イーストスレッジタウンをそれて、大きな川について馬車は走った。

そのときシエラを呼ぶ声が聞こえた。

目をあげると、マーク、エズメ、ジェシカ、ロバートがみんな小舟にのって、手をふっていた。

シエラは、ジャネットが服をつかむほど窓から体をつき出して、手をふり返した。

「シエラはたくさんの人に見送られて、わたしうらやましいと思うわ」

ハットをふかくかぶっていたドーラが、いった。

「でも、お見送りの人の中に、ルイス・ハンターの顔がなかったわね。おかしいわ、シエラとルイスはいつもーしょにいたように思ってたけれど」

つばをあげて、ドーラはシエラのよこ顔を見た。

黒い手紙

ルイス・ハンターは、大きな石のうえに座った。

石はホースウエスト山のでっぺんにあった。

つまりラウスハットでいちばん高いところにルイスは座った。

風が強かった。

白シャツや、シルクのようにしなやかな髪が、バタバタとおどつた。

賢そうなグレーの瞳が、曲がりくねったテリー川に向いた。

シエラ・クロウを乗せた馬車が、小さく小さく動いて見えそうだった。

今日、シエラたちがメイトリール教会に行くといっていたので、見えても不思議はなかった。

グレーの瞳は、そのままラウスハットの美しい大地に向いた。

森があつて、川があつて、その上をガンのむれが飛んだ。

「ルイス！ おまえ冷たい男だな！」

マークにこづかれた胸を押さえた。

ルイスは昨日、小舟に乗ってみんなでシエラを見送るという誘いを断った。

「やめなさいマーク、ルイスにはルイスの事情つてものがあるの。

無理にさそつてはいけないわ」

「事情つてなんだ」

エズメの手をはらった。

「事情でいったら事情よ。ねえルイス、あなたシエラの見送りなんて、やっぱり行けないわよねえ」

エズメは同情たつぷりに、ルイスの肩に手を置いた。

ルイスは確かにシエラの見送りなど行けるはずがなかった。それをなぜエズメが知っているのかふしぎだった。

2日前、ルイスはシエラを呼び出した。

夕でのリースウエスト山で、思い出を味わうような様子で、シエラはやってきた。

「あらリース」

三つ編みにした髪をふって、おどろいてふり返った。

「やあ。いよいよ旅立ちはあさってだってね」

高い石の上から飛びおりて、ならんで歩いた。

「そうよ。ジャネット先生のご都合で、予定よりすこし早くなってしまったわ。」

ああ、いまね、初めてホースウエストの山に来たときのことを思い出していたの。ここからさらに山をのぼった所に、ほんとうに人かすんでいるなんて、あのときは信じられなかったわ」

足もとに見えるイーストスレッジタウン、それから頭上のサウスヒルの森へと順番に目で追った。

その青い目に、リースはうつらなかった。

「シエラ？」

「なに」

背中が答えた。

「シエラ、あのね、今日はちゃんと聞いてほしいことがあって、わざわざ君を呼んだんだ。ぼくの気持ちを聞いてほしくって」

シエラは背中を向けながら、イーストスレッジタウンの町灯りに座った。

「ぼくはチャティの申し出を断ったよ」

おなじように町を見下ろして、いった。

「まあ、それは残念。あれだけ期待していたチャティだから、悲しみも深かったでしょう」

心がこもっていなかった。

「ぼくはある人のために、チャティの申し出を断ったんだ。そのあの人とは君のことだよシエラ。」

ぼくはシエラが好きだ。

はじめて会った日からずっと君に惹かれていたんだ。シエラには

ふしぎな魅力がある。人を動かすふしぎな魅力。ほかの少女たちにはない勇気。きつとあの気むずかしいジェニファーさんだって、君の魅力に惹かれていなかったら、君をお城におきやしなかったと思う」

背中では答えなかった。

「ねえシエラ、聞いているのかい？ ぼくらはじきに離ればなれになっちゃおう。君はメイトリアル教会、ぼくはドヴィー先生のもと、だからこれがふたりにとって会うのが最後になっちゃおうかもしれない」

イーストスレッジタウンに霧がかかって、ガス灯の光が紫色や緑色に輝いた。

「ねえシエラ、ぼくら恋人になれないかい？

離ればなれでも手紙があるし、シエラという恋人がいるということが、これから孤独に絵を学ぶぼくにとってどれだけ励みになるかもしれない。きつとぼくらうまくゆくと思うんだ」

背中ではすぐには答えなくて、こういった。

「ねえルイス、幽霊騒動のこと覚えている？ みんなでポロポロのお化け屋敷に入って、幽霊の正体をつきとめようと、ほんとうにスリリングな体験だったわ。ジャニスとわたしがけったくしてみんなをびっくりさせたとき、ルイスの顔ったら」

「シエラ！」

ルイスは土をふんだ。

背中がゆっくりふり返って、泣き顔があらわれた。

「おお、ルイス、ダメだわ、はつきりいえないわ、いえると思っていただけで、どうしてもいえないのよ。」

あなたはわたしにとってほんとうに大切な人よ？ でも恋人にはなれない気がするの。ほんとうよ？ 恋人は無理なの。だって、でも、どうしてかハッキリうまくいえないわ」

ルイスはきびしい目をあげた。

「ぼくたち恋人にはなれないんだね」

「ええ、そうね、そういうことね、でも、いままでのまま、ともだちのままではいけないの？ 手紙だってちょうだいな、わたしもメイトリアル教会できっとさみしい思いをしようと思うの。だからルイスの手紙がとても励みになると思うのよ」

ルイスはこぶしをにぎって、顔をそらした。

「これを受け取ってほしい」

「？」

「もしもぼくの願いが叶わないときに、君に渡そうと思ってもって来たんだ。君がメイトリアル教会について、ひとりになったときに、あけて読んでほしい」

「まあなにかしら？」

すんすんと鼻をすすって、封筒を渡し合った。

「いいかい、君がメイトリアル教会について、ひとりになったときにあけるんだよ」

ルイスはベレー帽をかぶりなおした。

「じゃあ、これで最後だね。さようならシエラ、幸運を祈っている」
「ルイス！」

シエラは石から立ち上がって、ルイスのあとを追おうとした。ところが次から次から涙があふれてきて、すぐにルイスを見失った。

「どうしてこんなに涙がとまらないの？ 泣きたいのはきつとルイスの方よ。ルイスの方がいまだれだけつらい思いをしているかしら。しっかりしなさいシエラ・クロウ、あなたはなにも間ちがったこととはしていない！ これは仕方がないことなの！」

ひじや腕のうらで涙をぬぐいながら、とうとうその場にしゃがみ込んだ。

「仕方ないことなのに、どうしてこんなに涙があふれるのかしら」
そんなシエラの姿を、遠くから盗み見している人物があった。

「やった！ とうとうしつぽをつかんだわ！」

エズメの鼻いきは荒かった。

「まさかこんな大スクープに出会えるなんて、最後の最後でこのエ

ズメ・テイラー、大てがらだわ！

やっぱりあの二人はあやしかったのよ！ あたしに隠れてかげでコソコソと会ったりして！ どうしていまシエラが泣いているのかまでは知らないけれど、いい気味だわ！ きつとルイスにフララでもしたんでしょう。結局、すべてはこの黒い手紙に書いてあった通りになったわ」

そういつてエズメは、黒い手紙をひらいた。

それは黒紙に、黒いペンで、こう綴られていた。

『ホースウエストの山、闇せまりし刻、シエラ・ク로우という名の子ひつじは、最も近き男によって、最もたえがたき涙をつき落とす』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0293h/>

歌え！シエラ・クロウ

2011年1月29日19時40分発行